

教 育 研 究 業 績 書		
令和8年 5月 1日		
氏名 服部 律子		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
母性看護学・助産学	親準備性。青年期の健康支援、母子の健康支援	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 (1) 周産期の看護過程学習におけるロールプレイ形式での演習の導入	2021年 7月～ 2023年 7月	奈良学園大学保健医療学部看護学科「母性看護援助論演習」(3年次配当、半期、必修科目、1単位)において、実践的な技術の習得と周産期の女性の心身の特性の理解を深めることを目的に、学生同士でロールプレイ形式での総合演習を導入した。 学生は事前に示された褥婦の看護診断となる褥婦を演じる褥婦役と、看護師役にわかれ、看護師役はコミュニケーション技術とフィジカルアセスメント技術を統合させながら場面に即した観察を行う。役割を交代しながら演習することや相互フィードバックなどから、看護師としての態度も含めた褥婦の観察などの学びにつながっている。
(2) 観察に基づく理論の学習の試み	2015年 9月～ 2025年 7月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」(2年次配当、半期、必修科目、2単位)において、母性看護学の基本となる理論の理解を促すため、日常生活場面で母子の観察結果をグループ・個人で理論に基づいて分析しながら理論の理解と看護場面への理論の活用方法の理解を促す取り組みを行った。実際に自分が観察してきた具体的な場面と理論が結びつくことにより理解が深まっていた。
(3) ジグソー法やペアワーク、グループワークの導入	2017年 9月～ 2026年 1月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」(2年次配当、半期、必修科目、2単位)ならびに「母性看護援助論」(2年次、半期、必修科目、1単位)の担当回の授業において、学生たちの能動的な学習を促し、学習内容の理解を深めたり、多様な考えに触れ多角的な理解を促すことを目的として、ジグソー法やシンク・ペア・シェア、ペアワークやグループワーク等アクティブラーニングの手法を取り入れた。
(4) 課題評価へのルーブリックの導入	2017年 9月～ 2026年 3月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」(2年次配当、半期、必修科目、2単位)の課題評価にルーブリックを導入した。作成したルーブリックを課題提示時から学生と共有することにより、学生自身が取り組むべき課題を具体的に理解すると共に、求められている水準も理解できたことで低い評価のレポートが減少した。 「母性看護学実習」(3年次配当、半期、必修科目、2単位)の評価にルーブリックを導入した。複数の教員で評価するため、ルーブリックでより評価基準を具体化することで教員間での評価の違いが少なくなり、調整が容易になった。
(5) 配布シラバスの活用	2018年 9月～ 2026年 3月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」(2年次配当、半期、必修科目、2単位)で15回の授業計画、各授業の事前・事後課題、評価方法、レポート課題の詳細と採点基準(ルーブリック)、受講生へのメッセージなどを記載した配布用シラバスを導入した。学生たちからは全体像を示されたことで計画的に準備ができたなどの反応があり、主体的に取り組めるようになっていた。2023年度からは「母性看護援助論」(2年次配当、半期、必修科目、1単位)、「リプロダクティブヘルス学」(3年次配当、半期、選択科目、2単位)でも導入し、母性看護学領域の科目間の関連などについての説明も加え、学生の主体的な学習行動を促した。

2 作成した教科書, 教材 (1) 母性看護技術のVTR (2) eラーニングコンテンツの作成 (3) 看護系教員研修用動画	2015 年 4 月～ 2015 年 7 月 2020年4月～ 2020年7月 2022 年 3 月	反転授業用に、授業内容に沿った技術のVTRを作成した。要点はキャプチャーを入れるなど、授業と連動する内容とした。学生からは「眠くならない」「実習前の復習にも使え思い出しやすい」などの評価を得た。 コロナ禍で対面授業が制限されたことに伴い、奈良学園大学「母性看護学概論」(2年次配当、半期、必修科看護系教員向けの研修動画「講義の学習指導案作成」「リアリティのある教材を活用する」「実技テストを設
3 教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 学生による授業評価	2016年7月～ 2018年7月 2020年7月 2021年7 月 2022年7月 2023年7月 2024年7月	相山女学園大学「ピアサポート理論と実践」(非常勤)の授業アンケートの結果「総合的にみてこの科目は充実していた」で、「その通りである」63.2 ～ 54.5% 「どちらかといえばその通りである」40.9 ～ 26.3% であった。 奈良学園大学保健医療学部看護学科「母性看護学概論」の授業評価アンケートで、各項目の平均点が5点満点中4.41 ～ 4.79、「総合的にみて満足 of いくものだった」で4.58 であった。 奈良学園大学授業評価アンケートにおいて、保健医療学部看護学科「母性看護学概論」では各項目の平均が5点満点中4.27 ～ 4.69、「総合的にみて満足 of いくものだった」では4.57であった。「母性看護援助論演習」では各項目の平均が4.18 ～4.59、「総合的にみて満足 of いくものだった」では各クラス4.26、4.35 と全体平均の4.07 を上回る結果となっていた。 奈良学園大学授業評価アンケートにおいて、保健医療学部看護学科「母性看護学概論」では「総合的にみて満足 of いくものだった」では5点満点中3.95(全体平均3.93)で概ね平均的に満足しているという結果であった。この年から授業時間外学習に関する項目が加えられた。全体では約14%が「していない」と回答していたが、この科目では、授業時間外学習をしていない学生はなかった。 奈良学園大学授業評価アンケートにおいて、保健医療学部看護学科「母性看護学概論」では「総合的にみて満足 of いくものだった」では5点満点中3.94で概ね平均的に満足しているという結果であった。授業への参加の積極性は4.50と高く、座席をくじで決めてグループワークを行う授業形式を評価する自由記述が多く、アクティブラーニングの導入により学生の積極的受講に繋がっていると評価した。授業の要点の明確さが4.28、授業のわかりやすさが4.09、聞き取りやすさが4.34と高いのに対し、資料のわかりやすさが3.91と低くなっており、覚える要点は色を変えて欲しいなどの記述があり、思考を促す資料の意図が伝わっていなかったところが今後の課題であった。 奈良学園大学授業評価アンケートにおいて、「母性看護学概論」(2年次配当、半期、必修科目)の結果が次のようであった。回答数が32と受講者の4割程度の回答結果であったため、参考程度の結果となった。授業に積極的に参加できたかでは全体の平均4.27に対して4.50と積極的な参加を促す授業となっていたと考えられた。授業の要点の明確さは平均4.08に対して4.28、説明のわかりやすさは平均4.04に対して4.09、授業の聞き取りやすさは平均4.10に対して4.34と授業自体のわかりやすさは評価が得られていたが、事前事後の課題の理解は平均3.06に対して3.01、授業資料は平均4.07に対して3.91と低くなっており、自由記述では「試験前に大事なところがわかるよう穴埋めの資料にして欲しい」などの回答があった。

	2025年7月	奈良学園大学授業評価アンケートにおいて、「母性看護学概論」（２年次配当、半期、必修科目）の結果が次のようであった。講義内容・方法は全体の平均を上回り、わかりやすいと評価されていたが、学生自身の受講姿勢で目標の理解や事前事後学習への取り組みで全体平均を下回っていた。毎回の授業での目標の説明なども行なっているものの、看護系の必修科目で「(単位)を落とさない」ために「目の前のことをこなす」状況になっていた可能性が考えられた。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 特記すべき事項無し		
5 その他 (1) 修士論文指導 (2) 修士論文・課題研究審査 (3) 奈良県看護教員継続研修 (4) 奈良県臨地実習指導者講習会講師	2018年4月～ 2025年3月 2020年1月～ 2026年1月 2020年12月 2021年8月～ 2025年8月	奈良学園大学大学院看護学研究科修士課程において、主指導教員として修士論文の指導を行った。 [修了生の修士論文] 「肯定的な出産体験を構成する要因の解明」（2020 年 3 月修了） 「妊産婦のエンパワメントに影響を及ぼす要因」（2023 年 3月修了） 奈良学園大学大学院看護学研究科修士課程において、次の修士論文および CNS コースの課題研究の主査を務めた。 [修士論文] 「助産師の災害実践能力としての準備力に関する調査研究」「発達に特徴のある中高生の自己効力感と未来展望の関係」 「病院から在宅移行支援する効果的な連携のあり方」 「在宅療養者の意思決定を尊重した遺族におけるアドバンス・ケア・プランニングの意義」 [課題研究] 「トラウマ・インフォームドケアからみた急性期の状態にある複雑で解決困難な統合失調症患者への看護師の関わり」 「長期入院統合失調症患者へトラウマインフォームドケアの理念を用いたエンゲイジメントすることの効果検証」 令和 2 年度奈良県看護教員継続研修において「今、改めて問い直す授業設計と評価」のテーマで 1 日(5 時間)の研修会を担当した。 2021、2022 年度は「教育評価」(1 単位, 15 時間)の講師を、 2023～2025 年度は「実習指導方法論」の中の[統合実習、カンファレンス](3 時間)と[実習評価の実際](3 時間)の講師を務めた。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許 (1) 看護師免許 (2) 助産師免許 (3) アドバンス助産師	1988年6月15日 1989年4月28日 2015年12月24日 2021年12月20日	看護師免許取得(登録番号第642045号) 助産師免許取得(登録番号第91302号) 日本助産評価機構アドバンス助産師認証取得 同上更新
2 特許等 該当なし		

3 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 病院での研究指導 (2) 思春期の健康教育講師等 (3) 思春期ピアカウンセラーの養成と活動 (4) ピア・サポーター養成 (5) 女性やセクシュアリティへの健康支援活動	2016年4月～ 2020年8月 2024年11月～ 2025年11月 2015年4月～ 2026年1月 2016年7月～ 2017年2月 2023年2月～ 2025年7月 2016年4月～ 2025年3月	2000年から担当している愛知県厚生連稲沢厚生病院において、院内看護研修の一環として行われている看護研究の研修会(クリニクラダーレベル2並びに3)の講師を務め、クリニカルラダーケンゴ研究指導を行うとともに、院内でじっしされている看護研究の指導を行なった。 高井病院(奈良県)において院内研修の一環として実施されている事例研究の指導を行なった。 ノートルダム女学院中学校(2003年から継続中)、奈良県葛城市立北新庄小学校などにおいて、男女のからだのしくみや妊娠・出産のしくみ、性行動と性感染症など、性と生殖に関する内容を中心に、思春期の健康教育の講師を務めている。 2010年度より、栃木県における思春期ピアカウンセラー養成に携わっている。2013年度からは椋山女学園大学において、主になって思春期ピアカウンセラー養成と活動支援を行った。 奈良学園大学において、大学生活への移行を支援するピア・サポーターの養成を行っている。2023年度前期は、新入生の履修登録支援や学生生活での疑問などに養成したピア・サポーターが支援する活動を支援した。 2012年度から2017年度まで週末に愛知県助産師会女性の健康なんでも相談、思春期電話相談の相談員としての活動を行った。2016年1月からはSANE-J(日本フォレンジック看護学会認定性暴力被害者支援看護師)の認定を取得し、名古屋第二赤十字病院性暴力救援センターで被害者支援の実践活動に携わっている。
4 その他 (1) 県看護協会における理事・委員会活動 (2) 奈良県看護学教育協議会(仮称)設立準備 (3) 奈良県看護学教育協議会理事・委員会活動 (4) 病院での研修会 講師 (5) 県看護協会における研修会講師 (5) 性暴力被害者支援看護師養成講座 講師	2016年4月～ 2018年6月 2019年4月～ 2021年3月 2021年4月～ 2026年3月 2022年6月、 2023年7月 2024年11月～ 2025年10月 2022年12月～ 2025年12月	2012年度から愛知県看護協会において教育委員、2014年度からは教育委員長、2016年6月から教育委員長・理事として、主に県内の看護職を対象とした教育計画の立案、研修会の企画・運営を行った。 理事としては県看護協会の運営に参画し、主に、クリニカルラダーに沿った卒後教育の整備に携わった。 2018年4月から会長を務める奈良県看護師等学校教務主任協議会(大学、短期大学、専門学校の全ての学校種が加盟)において看護教育機関と行政機関や看護関連団体が連携して看護教育を行うための「奈良県看護学教育協議会(仮称)」の設立準備に携わった。 奈良県看護学教育協議会理事・副会長として2025年5月まで会の運営に携わると共に、その後も継続して研修委員会委員として看護学教育に携わる看護職のための研修会の企画と運営に携わると共に、看護教員を対象とした研究指導の講師を務めている。 2025年5月から研修委員会委員長を務めている。 奈良県大和高田市立病院において、師長、副師長及び主任を対象とした、現任教育における職員の評価と評価に基づく支援に関する研修会で講師を務めた。 奈良県看護協会周産期看護職者職能集会で講師を務めた。タイトル「女性に対する暴力予防の支援」(2024年度)「性暴力被害を経験した女性の出産支援」(2025年度)(CLoCMip®Ⅲ認証申請のための必須研修及び選択研修) 日本福祉大学社会福祉総合研修センター主催の「性暴力被害者支援看護師(SANE)養成プログラム2023」において、「若者の生と性を考える」の講師を務めた。

(6) 他大学のFD研修会等の講師		2024年8月～ 2024年12月	愛媛大学カリキュラム・コーディネーター養成講座（テーマ「カリキュラムルーブリックによって評価する」）、岐阜聖徳学年大学看護学部FD研修会（テーマ「看護学生の学びを保障する教授方法」）の講師を務めた。	
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 看護教育実践シリーズ 3 授業方法の基礎	共著	2017年7月	医学書院	看護学教育において、1回の授業をどう組み立てるかやアクティブラーニングを導入した授業の方法などについて解説した本である。第11章「授業時間外の学習を促す」を共著し、授業時間外の学習の重要性や課題の出し方などについて解説した。 A5 版全 184 頁 本人担当部分：総頁数 143 頁中 12 頁（11章）を共著者と共に担当 中井俊樹・小林忠資編、中井俊樹、小林忠資、清水栄子、内藤佐知子、根岸千悠、根本淳子、服部律子、森千鶴
2. 看護教育実践シリーズ 2 授業設計と教育評価	共著	2018年3月	医学書院	看護教育における授業設計から、評価、授業の改善方法までを解説した本である。全体に編者として関わり、10章「評価基準を可視化する」を担当して執筆した。担当部分では、評価基準を可視化し学生と共有することの必要性やルーブリックなどの評価指標の作成について解説した。A5 版全 184 頁本人担当部分：編集・総ページ数 184 頁中 13 頁（10章）中井俊樹・服部律子編、中井俊樹、服部律子、岡田聡志、加地真弥、小林忠資、嶋崎和代、高植幸子、中島英博、肥田武
3. 看護のための授業づくり ガイド	共著	2024年4月	医学書院	初めて看護学の授業を担当する教員むけに、講義、演習、実習の授業設計、授業方法、実習や演習の指導方法、評価方法などについてQ&A方式で解説した本である。A5版、全138頁。 本人担当部分：書籍の構成の企画を共同で行い、全体の執筆を担当した（Q30個中22個を単著、8個を共著。コラム10個中7個を単著、3個を共著）。加えて付録の動画やコンテンツの作成を担当した。 共同執筆：服部律子、任和子
(学術論文) 1. 高校生の対人関係への認識と性に関連する悩み (査読付論文)	共著	2018年9月	日本性感染症学会誌 29 巻 1 号	高校生の日常生活での対人関係への認識と性に関連する悩み、及び性交経験者と未経験者の認識の違いを明らかにし、思春期の母性保健の向上に効果的な保健指導・性教育のありかたを検討することを目的に分析を行った。無記名式自記式質問紙調査に回答された 7,739 名を分析対象とし、その結果、約 7 割が「友達の数が多い」「今幸せ」と認識し、9割が「今の家族の中で育って良かった」と認識していた。性交経験者は 5.3%であり、未経験者に比べて「今幸せ」「今の家族の中で育って良かった」と回答した者が有意に多い一方で、「一人ぼっちと感じる」と回答した者も有意に多かった。思春期は自立し社会に巣立つ準備期であり、自己肯定感を高めつつ、他人との関係性・コミュニケーション能力を高める教育が必要であることが示唆された。 論文掲載：pp43-52 本人担当部分：研究計画立案、調査票作成、調査の実施、結果の考察を担当した。 共同執筆者：◎野々山未希子, 永光信一郎, 服部律子

2.Estimation of Pregnant Women Possibly Left Behind Tsunami Predicted Areas of Nagoya City A Simulation for Rescue Planning (査読付論文)	共著	2020年3月	Disaster Medicine and Public Health Preparedness https://doi.org/10.1017/dmp.2019.164	機 械 学 習 と GIS(Graphic information system)を用いて愛知県名古屋市における東南海地震発生時の津波浸水域の妊婦数を算出し、河川情報なども含めて避難可能な方向性から避難した妊婦の集中する地域を推定し、医療体制整備を提案した。 論文掲載： https://doi.org/10.1017/dmp.2019.164 本人担当部分：機械学習のための分析モデルの検討、考察、論文執筆 共同執筆者：◎服部律子, 宮川祥子, 服部兼敏
3.Prevalence and Associated factors of Suicidality in Japanese Adolescents: Results from A Population-based Questionnaire Survey. (査読付論文)	共著	2020年10月	BMC Pediatrics, https://doi.org/10.1186/s12887-020-02362-9	13 歳から 18 歳の 22,419 人を対象に調査を実施し、自殺傾向に関連する要因を特定するために多項ロジスティック回帰分析を行った。自殺念慮を抱いたことがある者は男子 21.6%、女子 28.5%で、家族関係に関するストレスといじめが自殺傾向と強い関連が認められた。その他関連していた要因は性別、友人との関係についてのストレス、ジェンダーアイデンティティなどであった。相談に活用されるリソースで最も多かったものはインターネットであった。 DOI: https://doi.org/10.1186/s12887-020-02362-9 本人担当部分：研究の計画、質問票の作成、データ収集、結果の考察 共同執筆者：◎NAGAMITSU S., MIMAKI M., KOYANAGI K., TOKITA N., KOBAYASHI J., HATTORI R., ISHII T., MATSUOKA M., YAMASHITA Y., YAMAGATA Z.
4.Estimation of Pregnant Women Possibly Left Behind in Tsunami Predicted Areas of Nagoya City: A Simulation for Rescue Planning, Disaster Medicine and Public Health Preparedness (査読付論文)	共著	2022年3月	Disaster Medicine and Public Health Preparedness https://doi.org/10.1017/dmp.2022.189	名古屋市をモデルにして、東南海地震で津波到達予測時間までに、徒歩での避難を基本にして避難が不可能な地域に居住する妊婦の避難方法を検討するため、general-purpose geographic information system を用い、道路中心線で算出された避難距離を用いて実際の避難時間に近づけるとともに、小学校区単位で分析を行った。その結果、今回のシミュレーションモデルで小学校区単位での避難リスクが判定できる事が明らかになった。しかし、建物の分布に差がある地域ではリスクが高く評価されることが示唆された。 DOI: https://doi.org/10.1017/dmp.2022.189 本人担当部分：研究の計画、分析のためのデータの選択、結果の考察 共同執筆者：◎S. Miyagawa, R. Hattori, K. Hattori
(その他) 一報告書 1. より効果的な妊娠出産包括支援事業としての産後ケアのあり方に関する研究	共著	2016年3月	公益社団法人日本助産師会 平成 27 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業報告書	厚生労働省の補助金を得て産後ケアの実態について調査し、今後のあり方について提言した。 論文掲載：pp59～90 本人担当部分：「有床助産所ならびに病院・診療所で行っている産後ケアならびに産後ケア事業に係わる実地調査」を分担研究し、その結果を主になってまとめた。 共著者：島田真理恵, 佐藤香, 安達久美子, 稲田千晴, 服部律子, 葛西圭子, 相良有紀, 市川香織, 國分真佐代

2. 本学看護学部におけるクリッカー導入の評価	共著	2016年3月	梶山女学園大学看護学研究 8 巻	アクティブラーニングの一貫として新たに導入したクリッカーの効果について、学生の質問紙調査とグループインタビューの結果から分析した。その結果クリッカーの使用による「ライブ感」が学生の授業への積極的参加を促している、他学生との類似点や相違点を見出したことが学習への動機づけとなっているという効果が明らかとなった。 論文掲載：pp47～55 本人担当部分：評価の計画、データ収集、分析、まとめの全般を主になって実施した。共著者：◎服部律子、和田貴子、佐原弘子、竹井留美、又吉忍、後藤宗理
3. 健やか親子 21(第 2 次)を推進するための思春期の母性保健の向上を目的とした効果的な保健指導のあり方についての調査研究	共著	2017年3月	厚生労働省平成 28 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業報告書	厚生労働省の補助金を得て、思春期の母性保健の向上を目的とした効果的な保健指導のあり方について提言し、研究結果に基づき保健指導媒体として「Adolescence わからないことがここにある」を作成した。 本人担当部分：研究計画、調査用紙の作成、4校におけるデータ収集、考察を共に担当し、「性の自己受容(多様性)・gender identity に対する保健指導」について文献レビューを行った(pp127-129 に掲載)。保健指導媒体では、「からだの性、こころの性～これって変?～(p18)を執筆した。 共著者：永光信一郎、安達久美子、石井隆 大、内山有子、岡明、岡永真由美、葛西圭子、片岡弥恵子、川名敬、熊谷智子、小林順子、小柳憲司、齋藤伸治、鵜田夏子、永山美千子、二宮啓子、野々山未希子、服部律子、松岡美智子、松崎くみ子、三牧正和、村上佳津美
4. チームビルディングを基盤とした全学合同新入生研修の試み	共著	2023年3月	奈良学園大学紀要 第 15 集	2022 年度のキャンパス統合を機に初めて全学合同で実施した新入生研修の企画や運営のプロセスと実施後の評価について報告した。実施後の学生へのアンケートに自由記述で回答された内容をテキスト・マイニングにより分析した結果、他学科の学生と一緒にチームビルディングを基盤とした謎解きゲームに取り組んだことで、新入生は「楽しい」体験とともに4年間を頑張ろうという気持ちになっていることが生じていることが明らかとなり、チームビルディングを基盤とした新入生研修はその目的を達成し、効果があったことが明らかとなった。 論文掲載：pp225-232 本人担当部分：研修の企画、運営を統括して行い、アンケート結果の分析と紀要への報告の執筆を担当した。 共同執筆者：◎服部律子、松岡克典、阿波邦彦、安東雅訓、川端咲子、松浦尚子、荻布優子、嶋田理博、高橋寿奈、坪内善仁、辻井直幸
5. カリキュラム改正に伴う本学保健医療学部看護学科の新カリキュラム構築のプロセス	共著	2023年3月	奈良学園大学紀要 第 15 集	カリキュラム改正に伴い、3 ポリシーの見直しからはじめ、新しいカリキュラム構築に取り組んだプロセスをまとめ、報告した。 論文掲載：pp233-238 本人担当部分：カリキュラム構築のプロセスを主になって進め、紀要への執筆を担当した。 共同執筆者：◎服部律子、吉村雅世、西菌貞子、三浦康代、嶋田理博、小林由里、佐藤郁代、西出順子、溝口みちる

6. 初年次学生の学習への動機づけを目的とした地域住民との交流の試み	共著	2025年3月	奈良学園大学紀要 第 17 集	看護学科において2年次での学生の学習への意欲が低下している現状から、その対応策として、1年次終了時点で2年次に向けての目標を考える機会として、令和4年度に開催した地域住民向けの「健康フェスティバル」について報告した。実施後のアンケートから学生たちにとっては、地域住民との交流から楽しさや喜びを感じ、学生同士ではない実践からの学びになったり、自己の成長を実感する機会などになったりしており、主体的な学びを誘発する一助となっていることが示唆された。また、教員にとっても学生を理解する機会となっていたことが示され、この取り組みが一定の効果をもたらしていることが確認された。 論文掲載：pp295-299 共同執筆：◎服部律子、吉村雅世 本人担当部分：実施後評価の計画、アンケートの実施、データ分析、まとめを担当した。また、健康フェスティバルの計画と運営にも携わった。
一学会発表一 1. 看護専門学校の教員が抱く仕事上の困難感	共同	2024年8月	日本看護学教育学会第34回学術集会	教員の研修や支援のあり方について検討するため、教員の困難感の実態を明らかにすることを目的に、縁故法によって協力への同意が得られた看護専門学校の教員309人を対象に質問紙調査を実施した。156人から回答があり、有効回答の得られた146人を対象に分析した結果を発表した。 教員は【科目の担当】【上長、同僚との関係構築や調整】【学生・保護者対応】【実習施設との調整】【パソコンを使用した文書作成】に困難感を抱いていた。【上長、同僚との関係】や【教員としての経験や能力不足】【責任ある仕事、仕事の量、内容の重圧】がその原因となっていた。さらにSense of Coherenceが【パソコンを使用した文書作成】以外の困難さと関連していることが明らかとなった。 共同発表者：◎松浦尚子、服部律子、森西弘、大沼住江 本人担当部分：研究の計画、データの分析、考察の過程に主となって関わり、発表の準備を支援した。
2. 学生自身が事例を作成する演習の効果	共同	2025年8月	日本看護学教育学会第35回学術集会	褥婦のアセスメントに必要な情報の理解を促すことを目的とした新たな演習を導入した。本研究の目的はその学習効果を明らかにすることである。対象は研究期間の母性看護援助論演習を受講した75人。研究への協力で同意した学生から提供された振り返りシートに記載された内容を質的記述的に分析しカテゴリーを抽出した。 [情報を統合したアセスメントの必要性への気づき] [情報を統合した具体的なアセスメントの進め方への理解]のほか、自身が演じる事例を作成したことで[褥婦の心理状態への理解や共感] [褥婦の個性とは何かへの気づき]に至っていた。そこから看護者として[ノンバーバルな情報にも着目することの重要性への気づき]が得られたり、[自身の知識不足への気づき]や[アセスメントに必要な知識習得の必要性への気づき] [褥婦の観察ポイントの理解] [生理的変化の復習の機会]などにもなっていた。 共同発表者：◎服部律子、平山久枝、宮本雅子、西川美樹、山本真樹子 本人担当部分：研究の計画、データ収集、分析、考察、まとめの全てのプロセスを中心になって実施した。

教 育 研 究 業 績 書		
令和 7 年 5 月 1 日		
氏名 岩本 淳子		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
看護学・保健学・疫学	臨床看護、看護教育、看護管理、保健管理学研究、生活環境、病室環境、病床の明るさ、サーカディアンリズム、病院内転倒、在院日数、入院医療費、ヘルスプロモーション、健康教育	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
・ 論理的思考能力の育成を目指した学習指導方法の活用	昭和63年4月～ ～令和3年まで毎年更新	ことばが持つ意味や内容をこれまでに学生が形成していた言語一経験の重層構造に組み入れ、すでに解釈している枠を超えて新たな内容を理解できるように支援したところ、授業評価アンケートでは、「わかりやすい」「すっきりと繋がった」「意味が理解できたことによって対象者のみかた、範囲、判断の指標が明確になった」「個人の病い体験を看護の視点からみる意味が明確になった」「自己の思考活動の成長によって学習成果に対する満足感が得られた」という学習効果が得られた。
・ 考える基盤を形成するための教授活動	平成3年4月～ ～令和3年まで毎年更新	問題を設定し論議するための枠組みとして、概念や理論を必要に応じて紹介し、実践の場で活用できるように事例をふんだんに使って、問題を解決する実践的知識・技術の修得を支援した。特に統合するプロセスを丁寧にたどれるよう支援した。 授業評価アンケートでは「全体を見失わずに部分を検討することができた」「部分から全体、全体から部分へと行き来する思考過程をたどることができた」という意見が記されていた。これは、これまでの学習経験に新たな学習の構造が加わり、内容の広がりや深化していく前提の枠組みを形成したことを示唆するものである。
・ 講義内容の提示	平成7年4月～ ～令和3年まで毎年更新	講義内容はシラバスに分かりやすい言葉で示し、時事を反映して毎年更新している。
・ 専門職業人としての職業的自律性を支援する教授活動	平成7年4月～ ～令和3年まで毎年更新	入学時より学生の社会的・職業的自律を図るために必要なキャリアガイダンスを行っている。具体的には授業科目の選択等の履修指導や相談、その他の助言、情報提供を学生個々の希望に応じて行っている。また、臨地実習では、専門家としてのイニシアチブをとり、対象者の擁護、権利を尊重し、対象者の希望を実現するケアとは何かをディスカッションできる機会を設けている。最も対象者の近くにいる看護職は、対象者のニーズアセスメントと状況への対応能力を備える責任を持つと学生は理解した。
・ 授業前後の学習課題の提示	平成7年5月～ ～令和3年まで毎年更新	1回の授業前に事前・事後学習課題を提示し、教育内容は配布資料でも入手できるようにしている。対面授業のほとんどは対話中心の授業を行う場合が多い。
・ 成人看護学概論、成人保健活動論	平成7年5月～ ～令和2年まで毎年更新	成人期の対象の発達段階の特徴や役割、成人期の健康課題と健康の維持増進のための援助の考え方や仕組みづくり、成人看護で活用する理論や概念、看護診断を活用した看護過程、等について教授している。

・成人看護学援助論 (慢性状況にある患者の看護、がん看護学)	平成7年5月～ ～令和3年まで毎年更新	慢性疾患の対象、慢性疾患で療養する対象の特徴とセルフケアを支える看護について教授している。看護に活用できる概念として、慢性疾患の鍵(キー)となる概念、病みの軌跡 保健行動、保健信念モデル、ローカス・オブ・コントロール、不確かさ理論、自己効力理論、エンパワメント、アンドラゴジー等を解説している。慢性期の看護問題や看護の考え方の理解を深めるために看護診断を活用した看護過程の演習を2事例展開している。ゴードンの機能的健康パターンの中の11 領域の視点から慢性期にある人の反応を整理し、セルフケアに関連する看護問題を診断し看護計画を立案するまでを授業・演習の課題とし、臨地実習では実際に展開するというつながりを持たせている。
・成人看護学援助論 (終末期にある患者の看護)	平成7年6月～ ～令和3年まで毎年更新	がんサバイバー、終末期、緩和ケアの対象の心身の特徴、治療と有害事象、看護に活用できる概念や理論を教授し、がん患者の痛みやその他の苦痛を伴う身体症状のマネジメント、心理・スピリチュアルな問題に対する看護ケア、家族ケアについて解説し、対象者がその人らしさを保ち、また幸福感や人生への満足感を感じつつ、死が訪れるまで積極的に生きていけるように支援するという、がん患者や終末期の看護の考え方が理解できるように授業・演習を行っている。事例学習を通して在宅の見取りをどのように支援していくかを臨床の立場から考え、がん看護の就労や就労支援に関する現状を教材としてガンサバイバーに対して看護がどのような支援ができるかを考えられるような学習を導入している。
・看護研究方法論、看護研究方法論演習	平成7年～ ～令和3年まで	学士課程の集大成となる看護研究方法論は創造的に専門性を深めるための基盤を形成する。看護事象を解明するための研究手法を初回氏、実践場面で活用できる制度の高い研究計画書の作成や文献研究ができることを目的に研究指導を行っている。
・学生からの質問の受け方、授業の振り返り	平成14年4月～ ～令和3年まで	授業終了後のリアクションペーパーで質問を受け、質問に対する回答はA4サイズ用紙1枚程度にまとめ(授業通信という)、次の講義時間の導入前に学生全員へ配布し、解説を行う。場合によっては学生の意見交換を優先し、後に解説を行う。
・地域における看護活動の基本的知識と考え方に關する教授活動	平成21年4月～ ～令和3年まで	成人看護学概論では健康の概念に関する歴史的な経緯をふまえ、QOLの概念を用いて人々の健康と健康生活をどのようにアセスメントしていくかを考究できるよう教授している。各論では学生が対象者を生活の視点と系統的な視点からアセスメントできる知識と方法を学び、健康上の問題を総合的に判断できるような成果が観察されている。
・臨地実習 (慢性期にある患者の看護)	平成22年9月～ ～令和3年まで毎年更新	慢性期にある成人のセルフケアを支援する実習を計画し実践を支援している。慢性期にある患者の健康問題に対する反応の特徴を理解し、様々な健康障害について、病態を理解した上で、科学的根拠に基づいた看護を実践できること、慢性期にある患者および家族が体験する心理・社会的な問題およびその看護が実践できることアウトカムとしている。
・臨地実習 (終末期にある患者の看護)	平成22年9月～ ～令和3年まで毎年更新	終末期にある成人・老人の患者の全人的苦痛とターミナル期におけるセルフマネジメントについて体験することを目的に実習を計画し、実践している。また、また終末期の対象者と看護援助について理解を深めるために、指導者及びリーダ研修を修了した看護師に自らの終末期の看護体験を話してもらうような機会を設けている。スピーチする側の看護師にとっては看護の省察の機会となり、臨床講義を拝聴した学生は急性期病院で実践する終末期看護の限界と課題を論議する学習に繋がっている。更に、最後の住処を自宅で迎える人の退院支援・退院調整や緩和ケアの意味を考察するために緩和ケア病棟の実習を組み込んでいる。

・臨地実習（急性期にある患者の看護）	平成28年9月～ ～令和4年まで毎年更新	終末期にある成人・老人の命の危機に直面している患者や、手術が必要な患者を対象に、治療から症状が安定してくるまでの看護を体験することを目的に実習を計画し、実践している。特に急激な身体の変化によって、不安や恐怖などの心理面や日常の社会生活にも影響を受けることや患者の家族も同様に看護の対象となること、変化した生活から適応に向かうよう入院期間の短縮や退院後の生活について意図的に介入するための能力や技術が求められることを学べるようにしている。
・臨地実習（危機状況にある患者の看護）	平成7年5月～ 平成16年3月	一次・二次救命救急活動における危機介入の実際を学習できるよう、救急車の同乗体験と救命救急センターで実習を行った。救急車同乗実習は消防署の協力を得て学生は指令発動から救急患者が収容されるまでの時間と搬入までの実際を体験し、救命率の向上に寄与する看護師の役割を学ぶと共に救命救急センターでは危機モデルを活用した危機介入の実際を学習できるように支援した。
・看護師が行う健康教育の企画と実践のスキル修得を目指す教授活動	平成25年後期～ 令和元年3月まで	天理医療大学4年生の後期選択科目「健康支援方法論」では、学生が大学周辺の地域包括支援センターが管轄する地域在住高齢者を対象にインタビュー調査を行い、プリシードプロシードモデルを用いて健康寿命延伸の課題を明らかにし、健康教育の企画・実施・評価の過程ができるように支援している。これまでに学生が実践した健康教育のテーマは、「高齢者の肺炎予防と口腔ケア」「生活活動量の低下と健康の関連」「呼吸法と健康」「スポーツ吹矢体験」等で、看護の教育的能力をあらゆる人々の健康生活の自立能力の育成や向上に役立てることが専門職の使命であることを学んでいる。
・反転授業を活用した教授活動	平成26年4月～ 令和4年3月まで	成人看護学実践論（慢性期の看護）の科目にアクティブラーニングの手法の一つとして「反転授業」を導入している。反転授業は病態生理などの既習学習の知識を15分程度にまとめたオンライン上のオリジナルの予習動画を作成し、自宅で予習し、講義では事例検討等の応用課題を学生と教員が対話的に学ぶ講義形式である。予習動画は指定図書や文献を読んで学習するように仕掛け、対面授業では事例学習をおこない、情報を活用する能力を習得できるように支援している。既存の知識を活用し、課題解決の過程を他者と協調しながら展開する対面講義のブレンド型学習と併用することにより、知識の獲得とコンピテンシーの目標達成が反転授業導入前と比べて容易となった。
・協同学習の技法を組み込んだアクティブラーニングの授業実践	平成26年10月～ 令和4年3月まで	看護演習科目にアクティブラーニングを積極的に取り入れている。協同学習の成果は知識の受容にあるのではなく、既習知識を活用して成果を導くことにある。最初の一部の学生がリーダーシップをとりグループワークが進行していくが、次第にグループメンバーに依存する学生は否定的とみなされ、メンバーそれぞれの役割と責任を果たし共同して課題解決に向かうグループが増えてくる。貢献ができない学生は授業を欠席しその環境から逃避する傾向があるが、学習に対する個人の責任とグループメンバーの責任を考えるようになっていく。
・総合実習の指導	平成26年～ 令和4年3月まで	総合実習は(1)一人の患者への看護を実践する(2)早朝あるいは夕方の看護ケアを体験する(3)同時発生的な複数課題に取り組む(4)看護のチーム活動を理解する(5)多職種チームにおける看護の専門性を理解するの4つの要素で構成している。臨床における看護実践への移行を視野に入れ、既習の知識や技術を統合して患者や家族への看護をよりスピーディに実施し、看護を円滑かつ効率的に実施するためのチーム活動や管理の実際を学び、看護実践に必要な基礎的能力を高めることを目的とし、実習場所へ出向いて直接の指導を実施している。

・学生による授業評価	平成24年～令和4年3月まで	すべての授業が終了した後学生から授業に対する評価を受けている。おおむねどの科目も5段階の平均は4.0前後である。特に学生が参加できる授業環境であることや事例をふんだんに使って概念の理解を容易にする授業方法について高評価を得ている。
・大学は主体的に学ぶところであることを共有するための保護者会活動の実施	平成27年～令和4年3月まで	学生、保護者、関係者を対象に入学式終了後のオリエンテーションを行い、「大学は学生が主体的に学ぶところである」という原点に立ち返り、主体的学習の意義と大学での授業の受け方、問いの立て方、推論するということなどを話題に大学での勉強の仕方を指導している。
2 作成した教科書、教材 ・「看護過程」演習用カルテ	平成16年4月～令和3年まで毎年更新	学生が臨床で遭遇しやすい患者の紙上患者事例を作成した。「代謝疾患」「循環器疾患」「呼吸器疾患」「脳血管疾患」等を成人看護演習の看護診断を活用した看護過程の学習教材として使用した。
・「成人看護学看護過程演習の手引き」	平成16年4月～令和3年まで毎年更新	ヘルスケア、看護ケアを必要としている患者や病人に、その人に可能な限り最良で、最善のケアを提供するためにどのような計画、介入援助が望ましいかと考え主体的にグループワークに参加できる演習のサブ教材を作成した。看護過程はゴードン11の機能的パターン・看護診断を活用した方法を指導している。特にアセスメントの結果を統合し、優先順位を考えながら看護問題を抽出し、看護診断ができることに重点を置いている。
・「成人看護学実習指導要領」	平成16年4月～令和3年まで毎年更新	多数の教員が実習担当を行うにあたり、科目責任者として実習指導の考え方を示した。実習指導要領は、本実習の特徴、本実習のゴール、実習単位と実習期間、実習のスケジュール、実習時間、実習施設と実習部署、実習開始前の教員の準備（実習内容、実習病棟の理解、実習指導者との打ち合わせ）、オリエンテーション、実習の展開方法と指導のポイント、看護診断を用いた看護過程展開方法、評価面談、実習評価及び単位認定等の項目で構成される。
・Panasonic ノンリニアAVワークステーションによりビデオを編集	平成16年8月	「手術室入室～麻酔導入までの経過」「患者教育の実際」の自作教材用ビデオ等。
・「国家試験の手引き」	平成17年4月	受験資格、受験の流れ、模擬試験対策などの大学の国家試験サポート体制について、学生が主体的・かつ計画的に国家試験受験対策を講じることができるようマニュアルを作成した。
・「成人看護学看護記録マニュアル」	平成17年4月～令和3年まで毎年更新	看護記録の書き方には、理論的にはいくつかの方法があるが、看護学生が活用しやすいヘンダーソンやゴードンなどの理論に基づいた看護過程の展開の仕方と記録の書き方についてマニュアルを作成した。
・「就職・進学の手引き」	平成17年6月～令和3年まで毎年更新	就職・進学にあたっての心構え、大学の就職・進学活動のサポート体制、就職・進学情報室の利用できる資料の作成・整理、応募方法など、学生が「主体的に就職・進学活動ができるマニュアルを作成した。
・「国家試験の手引き」 修正版	平成18年4月～令和3年まで毎年更新	過去10年間の国家試験問題を編集し、領域別に問題集を作成した。回答までのプロセスを提示し、学生が主体的に国家試験準備を行えるようにした。

・リモート授業を行うための教材作成	令和2年4月～令和4年3月まで毎年更新	新型コロナウイルスの感染によりリモート授業を実施するためのシステム作りに参加した。リモート授業様式の教材作成に尽力した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
・採用決定の際等における評価内容 大学設置・学校法人審議会の教員組織審査結果	平成16年 10月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において、奈良県立医科大学医学部看護学科講師（専任）として、「成人看護概論」「成人看護学援助論Ⅱ（慢性期）」「成人看護学実習Ⅱ（慢性期）」「総合実習」「ヘルスアセスメント」「健康教育」「看護学特論」「卒業研究」担当可の判定を受ける。
	平成19年 10月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において、奈良県立医科大学大学院医学研究科修士課程講師（専任）として、「合」判定、「成人療養支援学」の担当可と判定される。
	平成21年 2月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において、四日市看護医療大学看護学部看護学科准教授（専任）として、「成人看護概論」「成人看護学Ⅰ（急性期・回復期）」「成人看護学Ⅱ（慢性期・終末期）」「成人看護学実習Ⅰ（慢性期）Ⅱ（急性期）Ⅲ（回復期）Ⅳ（終末期）」「地域看護学実習」「基礎セミナー（基礎）」「基礎セミナー（応用）」「看護研究方法論」「看護研究演習Ⅰ（看護研究クリティック）」「看護研究演習Ⅱ（卒業研究）」の担当可の判定を受ける。
	平成22年 10月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において、四日市看護医療大学大学院（修士課程）准教授（専任）として、「合」判定
	平成23年4月～平成24年3月	「慢性看護学特論」「慢性看護学演習Ⅰ」「慢性看護学演習Ⅱ」「慢性看護学実習」をオムニバスで担当した。
	平成24年6月～11月	特別研究指導教員の指示を受け、約半年にわたり院生の研究テーマに沿ってデータ解析（修正版グラウンデッドセオリー・アプローチ：M-GTAを用いた質的記述的研究方法）と結果の解釈について指導した。 ・流下ゆかり氏「腹膜透析療養者のセルフケアに影響を及ぼす家族の支えの内容」
	平成25年7月～10月	約半年にわたり院生の研究テーマに沿ってデータ解析（SPSSソフトウェアを使用して記述統計、平均値・分散・相関分析、ロジスティック回帰分析、・因子分析などの多変量解析）と結果の解釈について指導した。 ・田所直子氏「産業看護職のビジネスパーソンとしての能力に影響する要因」 ・伊藤恭子氏「Aグループ病院における夜勤・交代制勤務に従事する看護師のワーク・エンゲイジメントに影響する要因」
	平成23年 10月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において、天理医療大学医学部看護学科教授（専任）として、「フレッシュマンセミナー」「共通基盤看護学概論Ⅱ（発達段階の特徴と看護）」「共通基盤看護学実践論Ⅲ（セルフケアを支える看護）」「広域発展看護概論」「広域発展看護学実践論Ⅰ（地域に生きる人々と看護連携）」「広域発展看護学実践論Ⅱ（地域連携と社会システム）」「広域発展看護学実践論Ⅲ（在宅療養を支える看護）」「広域発展看護学実習Ⅰ（療養生活と看護の実際）」「広域発展看護学実習Ⅱ（在宅療養を支える看護の実際）」「健康支援方法論」「看護研究方法論」「看護研究演習Ⅰ・Ⅱ」「看護実践能力の探求」「総合実習」の担当として「可」と判定される。

	平成29年10月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において、名古屋学芸大学看護学部教授（専任）として、「看護の基礎」「看護研究1」「看護研究2」「ヘルスアセスメント」「成人看護学概論」「成人保健活動論」「成人看護学実践論1（急性期の看護）」「成人看護学実践論2（回復期の看護）」「成人看護学実践論3（慢性期の看護）」「成人看護学実践論4（終末期の看護）」「成人看護学実習1（急性期看護実習）」「成人看護学実習2（回復期の看護実習）」「成人看護学実習3（慢性期・終末期の看護実習）」「老年看護学概論」「老年看護学実践論」「統合実習2」「統合実習3」の担当として「可」と判定される。
・自己点検に対する学科長評価 奈良県立医科大学看護学科長	平成16年4月	平成16年4月4日、当時の看護学科長より大学当局へ次のような報告が行われた。「成人看護学を対象とした看護の基礎教育を担当し、日頃から熱心な教育実践と研究活動に専念されている。修士論文では、地域住民の生活習慣、健康づくりの実態調査より、壮年期死亡の減少及び医療費抑制のための健康教育の意義について論じられた。今後、研究をさらに深められ、その成果を日々の教育の中で生かされることが大いに期待される。
・天理医療大学設立準備委員会による評価	平成23年3月	当該教員は、北野病院、奈良県立医科大学附属病院で、混合外科、心臓血管外科、ICU、内科病棟において、主に成人の急性期から慢性期にある患者を対象とした看護を6年間体験していることから、高い看護実践能力を有した人材と評価する。また、奈良県立医科大学看護短期大学成人看護学領域の専任講師として9年、奈良県立医科大学医学部看護学科成人急性期・慢性期講師として5年、四日市看護医療大学看護学部看護学科准教授として2年の教育経験に加えて、奈良県立医科大学大学院医学研究科専攻「成人療養支援学」修士課程教育担当資格を認められ、大学院での教育にも携わっている。また、奈良県立医科大学寄附講座住居医学講座専任・兼任教員として、住居環境と健康、高齢者のQOLと住居環境の関連性に関する研究において成果をあげ、ストレスと生活習慣病の関係、禁煙指導、食事指導など、一貫して健康生活とセルフケアに焦点化した研究を継続している。これらの成果は修士論文「ヘルスプロモーションに基づいた効果的な地域介入に関する研究」に結実し、看護師の機能として一層の強化が求められる健康教育、セルフケアを高める看護の教育において優れた教育実践能力を有するほか、「看護診断を活用した看護過程」は多くの病院から研修会講師として招聘され、奈良県の看護診断の普及に貢献している。さらに公的競争的研究費を獲得した多数の研究業績があり、本学において予定している授業科目を担当するに十分な教育上の能力を有していると評価する。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 ・奈良県看護功労者知事表彰受賞	平成27年5月	「長年にわたり看護教育に携わり、1800名の学生を看護師国家試験の合格までを支援した。また卒業後も就職先の病院の卒後教育に携わり、看護職員の生涯学習を支援した実績を評価する。また、学際的に開かれた共同研究体制を構築し、医学・工学・栄養学等の専門家と活発に議論しながら研究を進めており、真理を追究する研究姿勢を評価する。 主な研究として、病床の光環境と入院中の転倒頻度、入院期間や医療費との関係が挙げられ、平成27年度文部科学省科学研究費助成 基盤C(一般)へ積極的に応募し、本格的な調査を始めようとしている。最適な病床環境の条件が明らかになれば学術領域に大きな研究成果を生み出すことが期待できることから、教育・社会貢献・研究面で優れた能力を持っていると判断し、知事表彰の対象とした。」
5 その他 なし		

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許		
1. 看護師免許	昭和54年5月	第363638号
2. 看護婦等学校看護教員資格	昭和61年3月	千葉大学看護実践センター
3. 学士(教育学)	平成10年3月	第47473号 佛教大学教育学部教育学科初等教育 論文題目「生死に対する自己教育力とその要因に関する研究」
4. 実践健康教育士	平成15年8月	第20号 日本健康教育学会健康教育士養成機構
5. 日本公衆衛生学会認定専門家	平成23年4月	第764号 日本公衆衛生学会
6. 専門健康教育士	平成24年6月	第15号 日本健康教育学会健康教育士養成機構
7. APRIN e-learningプログラム (CITI Japan)	平成27年9月22日	一般財団法人公正研究推進協会 (APRIN) 提供、研究倫理教育eラーニング終了証
8. eL CoRE 研究倫理e-learning プログラム	令和2年9月27日	日本学術振興会「eL CoRE 研究倫理e-learning」受講終了証
2 特許等		
なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
・看護学生の臨地実習指導の受け入れ(年間80名)	昭和56年4月～ 昭和61年3月	看護学生の臨地実習指導の受け入れ(年間80名) 看護教育における臨地実習の中で、指導者の学生に対する働きかけは、学生の考えや経験を支持することであることを念頭に学生指導に携わった。
・奈良県立医科大学看護短期大学部公開講座	平成10年4月～ 平成6年3月まで	公開講座と学習会を開催 (中高年者の健康管理編 運動・栄養・ストレスと健康教育のすすめ) 岩本淳子 保健師・健康教育に携わる専門家を対象に、生活習慣病予備群の確実な抽出と保健指導の徹底、科学的根拠に基づく健診・保健指導の方法、健診・保健指導の具体的な戦略やプログラムについて解説した。
・奈良県実習指導者講習会講師	平成10年10月～ 現在に至る	専門職対象 実習指導者研修で5年目以上の臨床看護師80名/年を対象に「看護過程の実際」16時間の講義演習を担当している。講義内容は、NANDA看護診断の基礎的知識、看護加入や看護成果で、学生の学習教材としている事例を受講生とともに展開することを通して、看護診断、看護介入、看護成果に関する学生の思考過程を理解し、学生指導に生かすことを目標としている。
・奈良県放射線技師会生涯学習セミナー「看護学」講師	平成17年12月	放射線技師会主催のセミナーで放射線技師役240名を対象に放射線治療や放射線検査を受ける際の対象者の反応を概説した。また放射線治療や治療の副作用に対して、どのような看護ケアを実践しているかを解説した。放射線治療および検査を受ける対象の不安や有害事象を緩和するために実施している看護ケアを放射線治療室の医師や技師が共有することにより、治療の場が変わっても個別的な医療を継続して行うことができることを受講者と共有することができた。
・奈良県天理市 健康サロンの講師	平成27年6月～平成31年3月まで	奈良県天理市地域包括ケアの各地区で健康サロンの講師を隔月に一回程度務めている テーマは「口腔機能と嚥下障害」「効果的な呼吸法としての吹矢教室」等で、吹矢は講演会の後に自主的に練習を希望される高齢者と同好会を作り、活動を継続している。

・研究助成金関連事項

平成13年4月～ 平成14年3月	国民健康保健事業財団 橿原市総合健康指導事業 老人保健法に基づく基本健康診査等受診対象者数の推定に関する調査 研究助成金270万円 主任研究者：車谷典男 分担者：岩本淳子、岡本希、松村喜世子
平成14年4月～ 平成15年3月	国民健康保健事業財団 橿原市総合健康指導事業 奈良県橿原市の地域住民を対象とした生活習慣・健康状態・健康づくりに関する調査 研究助成金320万円 主任研究者：車谷典男 分担者：岩本淳子、岡本希
平成14年4月～ 平成15年3月	国民健康保険事業財団 橿原市高齢者健康指導事業 高齢者の健康・生きがい調査 研究助成金210万円 主任研究者：車谷典男 分担者：松村喜世子、岩本淳子、岡本希
平成15年4月～ 平成16年3月	国民健康保険事業財団 橿原市総合健康指導事業 運動習慣の定着化に向けて 研究助成金549万円 主任研究者：車谷典男 分担者：尾形希、岩本淳子、中谷敏昭
平成15年8月	奈良県立医科大学看護短期大学部公開講座 看護専門職対象「看護実践における健康教育の課題」 岩本淳子
平成16年4月～ 平成17年3月	国民健康保険事業財団 奈良県橿原市総合保健指導事業 生活習慣が医療費や健診成績に及ぼす影響 研究助成金269万円 主任研究者：車谷典男 分担者：岩本淳子、尾形希
平成18年4月～ 平成19年3月	奈良医大寄附講座 住居医学講座「住居医学研究」研究助成 高齢者のQOLと住居環境に関するコホート研究－藤原京スタディー 研究助成金415万円 主任研究者：車谷典男 分担者：岡本希、岩本淳子、森川将之、岸本年史、原納明博、羽崎完、天野信子、柳元和
平成19年4月～ 平成20年3月	奈良医大寄附講座 住居医学講座「住居医学研究」研究助成 高齢者のQOLと住居環境に関するコホート研究－藤原京スタディー 研究助成金780万円 主任研究者：車谷典男 分担者：岡本希、岩本淳子、森川将之、岸本年史、原納明博、羽崎完、天野信子、柳元和
平成20年4月～ 平成21年3月	奈良医大寄附講座 住居医学講座「住居医学研究」研究助成 高齢者のQOLと住居環境に関するコホート研究－藤原京スタディー 研究助成金400万円 主任研究者：車谷典男 分担者：岡本希、岩本淳子、森川将之、岸本年史、原納明博、羽崎完、天野信子、柳元和

平成20年4月～ 平成21年3月	奈良医大寄附講座 住居医学講座「病室環境研究」研究 助成 外来化学療法室における細菌の分布 助成金200万円 主任研究者：木村道子 分担者：岩本淳子、御守里絵
平成20年4月～ 平成21年3月	明治安田厚生事業団 体力医学研究所 第24回研究助成 高齢者の1日歩数と身体機能および健康関連QOLに関する 横断研究－適正歩数の設定の試み－助成金100万円 主任研究者：富岡公子 分担者：羽崎完、岩本淳子
平成21年4月～ 平成22年3月	奈良医大寄附講座 住居医学講座「住居医学研究」研究 助成 高齢者のQOLと住居環境に関するコホート研究－藤 原京スタディー 研究助成金450万円 主任研究者：車谷典男 分担者：岡本希、岩本淳子、森川将之、岸本年史、原納 明博、羽崎完、天野信子、柳元和
平成21年4月～ 平成22年3月	大阪ガス助成金研究 高齢者のQOLと住居環境に関するコ ホート研究－藤原京スタディー研究 助成金90万円 主任研究者：岩本淳子 分担者：富岡公子、森川将之
平成21年4月～ 平成22年3月	奈良医大寄附講座 住居医学講座「住居医学研究」研究 助成 室内温度による早朝血圧への影響に関する研究 助成金200万円 主任研究者：佐伯圭吾 分担者：岩本淳子
平成21年4月～ 平成22年3月	奈良医大病室環境 研究助成 照明の色温度が起床後の 唾液中メラトニン濃度に及ぼす影響に関する研究 助成金190万円 研究代表者：岩本淳子、 実施責任者：筏義人 分担者：佐伯圭吾、高沢伸、福田映子、田中紀之
平成21年4月～ 平成22年3月	奈良医大寄附講座 住居医学講座「住居医学研究」研究 助成 幼児期の家庭内受動喫煙による室内空気汚染環境 に関する研究 助成金130万円 研究代表者：坂東春美 分担者：岩本淳子、濱田薫、吉田亨
平成22年4月～ 平成23年3月	奈良医大寄附講座 住居医学講座「住居医学研究」研究 助成 高齢者のQOLと住居環境に関するコホート研究－ 藤原京スタディー研究助成金450万円 主任研究者：車谷典男 分担者：岡本希、岩本淳子、森川将之、岸本年史、原納 明博、羽崎完、天野信子、柳元和
平成22年4月～ 平成23年3月	奈良医大寄附講座 住居医学講座「住居医学研究」研究 助成 室内温度による早朝血圧への影響に関する研究 助成金200万円 主任研究者：佐伯圭吾 分担者：岩本淳子

4 その他 ・大学委員会	平成22年4月～ 平成23年3月	奈良医大病室環境 研究助成 照明の色温度が起床後の 唾液メラトニン濃度に及ぼす影響に関する研究 助成金190万円 研究代表者：岩本淳子 実施責任者：筏義人分担者：佐伯圭吾、高沢伸、福田映 子、田中紀之
	平成22年4月～ 平成23年3月	奈良医大寄附講座 住居医学講座「住居医学研究」研究 助成 幼児期の家庭内受動喫煙による室内空気汚染環境 に関する研究 助成金130万円 研究代表者：坂東春美 分担者：岩本淳子、濱田薫、吉田亨
	平成25年6月13日 ～平成26年3月	三井住友海上福祉財団研究助成 光曝露量が認知症に及 ぼす影響：高齢者1200名の大規模前向きコホート研究 ベースライン横断解析 助成金200万円 研究代表者：大林賢史 分担者：岩本淳子
	平成27年4月～ 平成30年3月	科学研究費助成 基盤C(一般) 病床の明るさが高齢者の 病院内転倒に及ぼす影響に関する前向きコホート研究 助成金494万円 研究代表者：岩本淳子 研究分担者：大林賢史 佐伯圭
	平成27年4月～ 平成29年3月	科学研究費助成 挑戦的萌芽研究 医療者教育における 反転授業を活用したアクティブ・ラーニングの実践と評 価 助成金417万円 研究代表者：西屋克己 研究分担者：岩本淳子 岡田宏基
	平成31年4月～令 和5年3月	科学研究費助成 基盤C(一般) 窓側病床への入院が院内 転倒予防に及ぼす要因：他施設前向きコホート研究 助成金410万円 研究代表者：岩本淳子 研究分担者：大林賢史 山上優紀
	平成20年4月～ 平成21年3月	四日市看護医療大学委員会委員：紀要委員会 教務委員 会 図書委員 実習委員FD委員会
	平成21年～ 平成23年3月	四日市看護医療大学大学委員会委員：研究倫理委員会 紀要委員会 教務委員会 FD委員会
	平成24年4月～ 平成25年3月	天理医療大学 研究委員会 安全管理委員会 セキュリ ティ委員会 大学入試センター試験実施委員会
	平成25年4月～平 成31年3月	天理医療大学 教育研究審議会、点検・評価審議会、予 算委員会、教員・教育組織能力開発委員会、教務委員 会、安全管理委員会、看護学科実習調整委員会、研究委 員会、入試管理委員会、大学入試センター試験実施委員 会 自己点検評価委員会、教育研究審議会、自己点検評 価審議会
	平成31年4月～ 平成4年3月	名古屋学芸大学 運営委員会、教授会、実習委員会(委 員長)、教務委員会、看護学科実習連絡会議委員、研究 倫理委員会、図書館委員(学部図書質委員)、入試教授 会委員

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 2006年メディカコンクール メディカコンクール委員会編	共 著	平成18年10月	メディカ出版	2006年、看護師国家試験の予想問題を出題した。 本人担当部分：呼吸器系（COPD）、循環器系（狭心症、心筋梗塞、心不全）、脳神経系（脳梗塞）の一般問題及び状況設定問題を7題し、解剖生理、病態生理、検査、治療、予後、主な看護を解説した。A5版 全235頁 共著者：小河育恵、岩本淳子、杉崎一美、大塚眞代他
2. 2007年メディカコンクール メディカコンクール委員会編	共 著	平成19年11月	メディカ出版	2007年、看護師国家試験の予想問題を出題した。 本人担当部分：呼吸器系（肺炎）、循環器系（狭心症、心筋梗塞、心不全）、脳神経系（脳出血）の一般問題及び状況設定問題の出題と解剖生理、病態生理、検査、治療、予後、主な看護を解説した。A5版 全202頁 共著者：岩本淳子 他
3. 住居医学（Ⅲ）	共 著	平成21年8月	米田出版	病気やストレスなどの視点のみでなく、快適さなども含めて、「住む」を医学的にとらえて研究した成果の書 本人担当部分：第5章 高齢者の老いと住まいの要素 高齢者の生きがいと規定する要因を踏まえた住まいづくりを考案する必要性を提案した。A5版 全219頁 共著者：筏義人、吉田修、青島均、久野覚、安枝浩、高野康夫、岩本淳子、今井正次、田中紀之
4. 新しい健康教育 ー理論と事例から学ぶ健康教育への道ー	共 著	平成23年4月	保健同人社 p. 209-215	健康教育を学ぶ学生のテキストとして、健康教育を実践する人々を対象とした書である。 本人担当部分：第4章 5. 患者教育 患者教育と患者教育支援システム、実践健康教育士及び専門健康教育士の活動と患者教育について解説した。全239頁：209-215 川田智恵子、大津一義、宮城重二、岩本淳子 他、
5. 地域包括ケアのすすめ	共 著	平成28年4月	ミネルヴァ出版 p. 127-135	保健医療福祉の視点から地域包括ケアシステムに関する法制度や医療介護の基礎知識を概説した。そして住まい、医療、介護、介護予防、生活支援を支える社会資源が相互に連携・協働する実践活動を紹介している。全262頁 本人担当部分：がんの動向とがん看護を担当した。 共著者：宮崎徳子監修、豊島泰子、立石宏昭編集、岩本淳子 他
6. 経過がわかる疾患別看護過程（糖尿病）	共著	平成30年9月	照林社ブチナースvol 1 27No. 10 2018別冊	糖尿病の診断・教育入院期い焦点を当て医療チームと協力して重症化予防を行うための看護ケアの知識と発症から入院・退院後の自己管理の時期に特徴的な看護診断とその根拠、看護計画について解説した。 共著者林みよ子監修、岩本淳子
7. 経過がわかる疾患別看護過程（COPD）	共著	令和元年10月	照林社ブチナースvol 2 7No. 10 2018別冊	COPDの急性増悪期～在宅移行期に焦点を当て、患者が薬物管理や非薬物管理の方法（禁煙、感染予防法、運動療法、栄養管理、在宅酸素導入・管理、社会資源の活用法等）を修得し、退院後の日常生活においてセルフマネジメントを継続できるように支援するための知識と各時期に特徴的な看護診断とその根拠、看護計画について解説した。 共著者林みよ子監修、岩本淳子

(学術論文)				
1. 開心術術後患者に対するアフターケア指導の検討ー69名に対する面接調査結果よりー(査読付)	共 著	昭和59年11月	「第15回日本看護学会成人看護集録」p. 125-126	昭和56年、奈良県立医科大学に心臓血管外科(第3外科)が開設された。開設後2年間に約400例の開胸・開心術が行われたが術後に冠状動脈の閉塞を生じ再手術が行われたり、心不全を起こすケースがあった。 術後患者69名の面接調査データを分析し、開心術術後患者には手術による侵襲と再建された冠状動脈への治療的介入に加え、冠状動脈狭窄に関連する生活習慣の見直しと生活行動の変容を目的とした健康教育の必要性を明らかにした。健康教育指導資料を作成し、その効果についても共同執筆した。 本人担当部分：調査用紙の作成、データ収集、分析 共著者：岩本淳子、寺川佐知子
2. 温・湿度、皮膚緊張からみる創傷かぶれの現状と課題(査読付)	単 著	昭和62年3月	「日本看護研究学会近畿・四国地区会雑誌」第9巻 第4号 p. 91-92	心臓カテーテル検査の際に頻発する絆創膏かぶれの要因については製品会社でも素材との関係から検討されている。しかし、臨床場面ではそれでも絆創膏かぶれを起こすケースは決して少なくない。そこで臨床でよく使われている絆創膏3種を選定し、それぞれに貼布時間・皮膚表面温度・湿度・貼付の張力(圧)との関係から絆創膏かぶれの成立機序について検討した結果をまとめた。 岩本淳子
3. 基礎実習における技術チェックの一考察ー自己学習と成績の関係よりー(査読付)	共 著	平成2年4月	「看護展望」第15巻第5号 p. 68-72	看護の基本技術・援助技術を習得させるためには単なる授業の学内演習に終わらせるのではなく、学生に演習の機会を与え、主体的に学習する意欲づけを行うことが大切である。そこで、基礎実習として行っている技術演習の成績と演習までに費やした学生の自己学習時間アンケート調査の結果を照合し、両者の関係を検討した。その結果、学生の主体的な学習動機は演習準備時間・場所・教員の関わりに影響されていることが明らかになり、カリキュラムの進行度及び時期や方法について考察した。 本人担当部分：学生の実習記録の解析及び実習効果について質的評価を行った。 共著者：今井充子、田淵郁子、東理恵 西浦真千代、岩本淳子、松原登志子
4. 看護学生の老人に対する色と言葉のイメージ変容について(査読付)	共 著	平成2年4月	「日本看護学校協議会雑誌」第21巻 第1号 p. 172-176	人口の高齢化が進む一方、看護学生の多くは各家族世帯に暮らし、老人と同居した経験がない。そのため老人に対するイメージも抽象化されたものとなっていることが多い。昭和62年度より特別養護老人ホーム実習を実施しているが、学生の特別養護老人施設実習前後における老人に対するイメージの変化を特に色と言葉のイメージを中心に比較検討した。その結果、実習開始時に比べ実習終了後には老人に対する色のイメージが寒色系から暖色系へ、言葉のイメージが弱い立場の人という表現から優しさ、尊敬、智慧という表現に変化していることがわかった。そこで実習目標である老人の発達段階を反映した対象者の理解が特別養護老人ホームの実習によって効果があることを考察し、検討経過を報告した。 本人担当部分：学生の実習記録の解析及び実習効果について質的評価を行った。 共著者：今井充子、東理恵、岩本淳子 吾郷久恵、田淵郁子、西浦真千代、池田佳代

5. 老人のイメージがよくなる特別養護老人ホーム実習の進め方 (査読付)	共 著	平成4年1月	「看護展望」 第17巻 第2号 p. 54-60	昭和62年度より従来の成人看護学から老人看護学を独立させ、特別養護老人ホームの実習を実施してきた。新カリキュラムにおける特別養護老人ホームの実習の成果と問題点を検討し、先行研究の結果を含め実習の進め方・方法について考察した。 本人担当部分：学生の実習記録の解析及び実習効果について質的評価を行った。 共著者：今井充子、岩本淳子、田淵郁子、上平悦子、西浦真千代、堀口陽子
6. 周手術期の看護 ー膀胱がん患者の看護 (査読付)	共 著	平成6年5月	「臨床看護」 第15巻第6号 p. 52-58	学生は臨地実習において受け持ち患者のどのような情報に注目し、看護問題を導き出していくとよいかについて不安を持っている。これは看護者としての病気や生活の捉え方について未成熟である場合が多い。 諸学者には看護者として対象者を理解するために既習学習内容のなかでも特に病態生理や術前・術後の身体の構造や機能、ボディイメージ、自己概念、生活行動の変化に着目し、どのように看護行為を導き出していくかを示すことも必要である。本論では看護の問題解決過程に沿って、情報収集と整理の仕方、アセスメント、関連性の検討、問題点の設定、目標の設定、看護計画の立案モデルを示し、看護者の問題解決過程における思考プロセスを解説した。 本人担当部分：紙上患者事例の提供、アセスメント・関連図・看護計画の立案例を示した。 共著者：岩本淳子、岡本千鶴子、松村喜世子
7. 成人臨床看護の授業展開 (1) ー成人臨床看護の位置づけとその概要ー (査読付)	共 著	平成6年5月	「看護展望」 第19巻第6号 p. 45-51	看護の対象者を理解し、健康問題に関する初歩的な臨床判断と看護行為の選択ができる学生の問題解決能力を養うことを目的として、成人臨床看護に紙上患者事例を活用した看護過程の演習を取り入れている。成人臨床看護の目的・目標、看護過程学習構造と事例選択に至った経緯を報告し、講義・演習・実習とのつながりをカリキュラムの配置と授業計画に沿って提示するとともに成人臨床看護における看護過程演習の効果について考察した。 本人担当部分：演習計画の作成と修正 共著者：今井充子、岩本淳子
8. 成人臨床看護の授業展開 (2) (査読付)	共 著	平成6年6月	「看護展望」 第19巻第7号 p. 36-42	成人看護学の看護過程の演習について、情報収集・情報の整理、アセスメント、問題点の設定、目標設定、看護計画の立案モデルを示した。 本人担当部分：紙上患者事例提供、事例の個性に応じた看護過程の実践についてモデルを作成した。 共著者：今井充子、岩本淳子、松村喜世子
9. 0～3歳児のいる成人男女のサポート源と社会的支援の互酬性 (査読付)	共 著	平成9年3月	「奈良県立医科大学看護短期大学部紀要」第2巻 第1号 p. 67-74	子育ての支援に関する研究は増加傾向にあるが、0～3歳の乳幼児を持つ成人男女の社会的支援に関する研究は少ない。そこで、少子社会における子育て環境や子育て支援の充実に寄与することを目的に、0～3歳児のいる家族のサポート源と支援の内容・方法について調査し、近隣や友人、家族・親族の関係について分析した。その結果、乳幼児期の子どもを持つ父親と母親が求めている子育ての支援は情緒的サポートであることが明確になった。成人期の発達段階である出産・養育に関する役割を獲得していく人々たちに対して支援体制の具現化が図れる必要性を考察した。 本人担当部分：データの分析及び考察 共著者：内藤直子、岩本淳子、南麗子

10. 初心者が行うBLSの手技上の問題点—シュミレーション人形による演習記録を通して— (査読付)	共 著	平成9年3月	「奈良県立医科大学看護短期大学部紀要」第2巻第1号 p. 58-66	突然死は、平常時に突然起こる個人の生命危機であり、現場に居合わせた人々の適切な救命活動によって救命率・社会復帰率は変化する。近年、一般市民に対しCPR (Cardio Pulmonary Resuscitation) の普及運動が高まり、日本医師会、救急隊員、救急指導員等の地道な啓蒙活動が行われ、その広がりを見せている。しかし、救命率の低さから見てもCPRの手技の修得は初心者にとって簡単なものではないため、救急看護学の演習授業で行った初学者である学生のBLS(Basic Life support)の手技上の問題を分析し、指導上の留意点について指導指針を作成した。 本人担当部分：データーの解析、指導指針の作成 共著者：岩本淳子、松村喜子、堀口陽子
11. 初心者が行うBLSの主技上の問題点(2) (査読付)	共 著	平成10年3月	「奈良県立医科大学看護短期大学部紀要」第13号 p. 91-98	初心者が行うBLSの手技上の問題点—シュミレーション人形による演習記録を通して—(第一報)に続いて手技上の問題の要因を実施者の情緒的側面から分析するために救急看護学の演習授業を受講した80名の学生を対象に意識調査を行った。その結果、救命活動に参画することに対して意識づけはなされているが、傷病者の口に実施者の口を直接当てることに抵抗があることがわかり、被覆用材の使用について考察した。 本人担当部分：調査結果の分析、考察 共著者：堀口陽子、松村喜世子、岩本淳子
12. 論理的思考の育成に焦点を当てた看護過程演習の結果分析と今後の課題	共 著	平成10年3月	「奈良県立医科大学看護短期大学部紀要」第13巻 p. 83-90	2年次における学生の看護過程に関するスキルと看護の問題解決過程を学習する学生の論理的思考の育成に焦点を当てた看護過程演習の学習方略について検討した。「一連の流れは経験しているが、その一段階ごとの思考が全体のプロセスに結びついていない」に対して帰納的・演繹的な思考過程がたどれるよう、学習環境の調整や教員の関わりについて指導の方向性を示した。看護モデルの年代的・文化の違いや言葉の意味を看護の生活モデルの視点から構成要素の意味を丁寧に解釈する演習時間を組み入れた。また「臨床で用いられている語句の意味が、これまでに形成してきた言語—経験の構造に組み込まれず、経験を伴わない言葉で論理を形成しようとするところに学習の困難性が生じている」は、特に病態生理や治療方針、治療経過の理解を促すために臨床医の協力を求め疾病論の授業内容を調整した。 担当部分：看護過程における学生の学習上の問題について具体的実践的方略について考察し、報告書作成を支援した。 共著者：岩本淳子、松村喜世子、大塚真代
13. 学習目標到達感を妨げる要因の分析と対策 (査読付)	共 著	平成10年3月	「奈良県立医科大学看護短期大学部紀要」第13巻 p. 99-106	看護基礎教育においては各看護学の特性を踏まえた問題解決過程の演習が重視され、論理的思考の育成が求められている。成人看護学では基礎看護学で看護過程の要素を学習した学生が生活モデルから対象者をより深く洞察できるよう学習目標を設定し、学生の学習を支援しているが、演習後の評価において教員側と学生のズレ(教員が設定した目標レベルの問題状況の抽出が行えているのも関わらず、その思考過程は断片的で一貫性を持っていないことが原因で学習成果に関する満足感が低かった)が生じていた。そこで、対象者のみかたについて演習終了後の学生意見や面接によって得られたデーターを質的に分析し、学生の論理的思考を妨げる要因として、構成要素の意味や充足・未充足の判断基準が明確になっていないことから自信が持てないことを明らかにした。 本人担当部分：学生意見と面接によって得られたデーターの解析と質的分析 共著者：岩本淳子、松喜世子、大塚真代

14. 生死に対する自己教育力とその要因に関する研究 (査読付) (学士論文)	単 著	平成10年9月	佛教大学教育学部教育学部初等教育専攻 全85頁	人の生死にかかわる医療者の生と死に関する自己教育力の必要性について論じた。具体的には人と人の関係性、人と自然の関係性が疎遠になった現代に生きる人の恐怖は自己の死である。生と死は自己において連続しているが、死が不可避な存在であると自覚しない立場では、死そのものを敗北として見なし、死の意味・生の意味を問うことをせず生を忘れた空虚な生を生きることになる。この様相は近代の合理主義を反映しており、死が生反対概念としてしか受け入れられていない現代文明において、人々がどのように生を全うできるかに何の留意も払われていない現状を考察した。 A 5 版 全85頁 岩本淳子
15. 職場喫煙に関する喫煙者と非喫煙者の意識の相違 —3000名のアンケート調査結果より— (査読付)	共 著	平成10年3月	「松仁会医学誌」 第38巻第2号 p. 179 -188	成人保健を担当する立場から職場喫煙の現状と、喫煙者の職場での喫煙態度や喫煙者と非喫煙者の職場喫煙に関する意識の違いを明らかにすることを目的に、某事業場の提起健康診断受診者3008名を対象に、自記式アンケート調査を実施した。有効回答率は98.8%であった。性・年代別の現在喫煙者、前喫煙者（以前に吸っていたが現在は一ヶ月以上禁煙している）、社会的喫煙者（食事等のつきあいの場で喫煙する）、非喫煙者の割合を示し、喫煙態度は男性より女性の方が、また喫煙本数が少ない者ほど良好であることが明らかになった。一方禁煙タイムや喫煙場所に関する遵守率は性・喫煙本数に関係がなく高かった。喫煙による肺がんのリスクなどの喫煙影響に関する肯定率は、非喫煙者で最も高く、おおむね前喫煙者、社会的喫煙者の順に続き、現在喫煙者が最も低率で、非喫煙者の約1/2程度であった。会議中の禁煙を支持した者は非喫煙者、前喫煙者がはともに80%を超えたが、社会的喫煙者は64%、現在喫煙者は30%と低率で、しかも喫煙本数が多い者ほど低く、30本以上群では20%以下であった。また、最も適切と思う喫煙対策に対する回答内訳は喫煙習慣によって異なっていたが、どの群も共通して独立した喫煙室の設置が最も適切とする回答が多く、いずれも40%を超えており、成人の健康被害による実態とその対策が示唆された 本人担当部分：データー収集、解析、考察 共著者：岩本淳子、車谷典男、米増國雄、新楽寛、中西理恵子
16. ヘンダーソン看護論における構成要素の演習評価	共 著	平成13年3月	「奈良医大看護短期大学部紀要」 第4巻 p. 123-130	看護モデルを観察の枠組みとして活用する場合、看護モデルの年代的・文化的背景の違いを解釈し、現代的活用の意味を理解する必要性を先行研究で明らかにした。成人看護学の看護過程の演習では複数の教員が小グループを担当して指導しており、教員の構成要素に関して共通の理解を図ることは学生の学習効果を高めるという意味で必然である。そこで、構成要素の構造について教員の共通理解の内容を「構成要素の意味」「構成要素の欲求を充足させるために人はどのような活動を行っているか」「共通する基本的欲求の充足された状態」について分析し、看護モデルを活用する際の指導要綱を作成した。そして作成した指導要綱を用いて看護過程の演習を指導した演習記録を分析し、学生の学習成果に関する評価と教員評価ズレがないことを確認した。 本人担当部分：学生の演習記録の文節単位の意味づけと一致率についての統計的分析を行い、結果を考察した。 共著者：岩本淳子、松村喜世子、大塚真代、堀口陽子

17. 急性期実習の体験学習における学習内容の構造化 (査読付)	共 著	平成14年3月	「奈良医大看護短期大学部紀要」 第5巻: p. 9-16	成人看護学急性期実習では一週目に集中治療を受ける患者、家族、看護者の疑似体験ができる体験学習を実施している。体験学習を終了した学生のレポートに記載された学びの内容を舟島の「看護概念創出法」に基づき内容分析を行った。その結果、226のコードから47のサブカテゴリ、12のカテゴリ、5のコアカテゴリを抽出した。【集中治療室に入室している患者・家族の理解】【集中治療室の特殊環境の理解】【集中治療室で看護を受ける患者・家族への看護の理解】【実習前段階における看護実践能力の自己洞察】【実習における心構え】の概念は急性期実習体験学習の「体験ー学び」の学習内容を説明し、実習直前における学習の先行理解を成す概念であることが明らかになった。 本人担当部分：学生の演習記録の文節単位の内容分析と意味づけ 共著者：松村喜世子、岩本淳子
18. 情報開示の時代に望まれる看護記録開示の考え方 (査読付)	単 著	平成14年9月	奈良県立医科大学附属病院看護部論文集「葦」 p. 275-280	診療情報の開示は、患者の医療への積極的な参画を実現するための一環として位置づけられ、国立病院をはじめ多くの医療施設では医療情報の提供を実現するためのシステムづくりが進められている。本稿では看護記録の法的位置づけを明確にし、診療情報の開示が求められるゆえんをインフォームド・コンセントに求め、患者の意思決定を支援する看護者の援助の意味と看護記録見直しの具現化をはかるための考え方について概説した。 <u>岩本淳子</u>
19. 看護師の職業的自律性の育成に影響する要因の構造 (査読付)	共 著	平成15年3月	「第34回日本看護学会看護管理 集録集」34 p. 148-150	A病院の助産師・看護師464名を対象に看護師の職業的自律性を阻む要因について調査を行った。自記式調査票に記述された内容をベレルソンの内容分析の手法を用いて内容の構造化を試みた。その結果、看護者が必要と判断した看護行為が煩雑な業務、慢性的な人不足が原因で行えず、看護実践に関する未充足感を感じたり葛藤している現状をはじめ6つのカテゴリー面抽出され、看護者のキャリア発達を支援する方向性について示唆が得られた。 本人担当部分：研究計画、分析、結果を考察した。 共著者：田岡眞由美、森本智磨子、岩本淳子他
20. 看護師の成長・発達の育成に影響する要因の構造化 (1) (査読付)	共 著	平成16年4月	「第35回日本看護学会看護管理 集録集」35 p. 331-333	A病院の助産師・看護師464名を対象に看護師の職業的自律性を阻む要因について調査を行ったが、阻害要因に対してどのように対応しているかについて、ベレルソンの内容分析の手法を用いて内容の構造化を試みた。その結果、「看護職に対する傾倒」をはじめ8つのカテゴリーが抽出され、看護師の対応能力と対応の現状が明らかになった。 本人担当部分：研究デザイン、研究計画、分析方法の指導を担当 共著者：橋口智子、石飛悦子、福山真理、岩本淳子他
21. 看護師の成長・発達の育成に影響する要因の構造化 (2) (査読付)	共 著	平成16年4月	「第35回日本看護学会看護管理 集録集」35 p. 215-217	A病院の助産師・看護師464名を対象に看護師の職業的自律性を阻む要因について調査を行ったが、今度はやめたいと思ったときに乗り越えられた理由について、ベレルソンの内容分析の手法を用いて内容の構造化を試みた。その結果、「自己の成長・自己実現を目指した職務継続意思」をはじめ6つのカテゴリーが抽出され、看護師の辞職を回避するためには個人の自己実現への思い入れとそれを支援する看護管理者と職場環境のありようの3つが構成要素になることが示唆された。 本人担当部分：研究デザイン、研究計画、分析方法の指導を担当 共著者：橋口智子、石飛悦子、福山真理、岩本淳子他

22. 看護師の成長・発達を促進する支援システムの方向性 (査読付)	共 著	平成16年4月	「第35回日本看護学会看護管理 集録集」35 p. 212-214	看護師の成長・発達の育成を阻む要因の構造を基に、看護師に対する看護管理者の役割を個人、支援者、職場環境の観点からの支援が必要であることが示唆された。 本人担当部分：研究デザイン、研究計画、分析方法の指導を担当 共著者：大林末子、石飛悦子、福山真理、岩本淳子他
23. 看護師の専門性の向上を目指すキャリア発達支援システムの必要性 (査読付)	共 著	平成17年5月	「第36回日本看護学会看護管理 集録集」36 p. 156-158	看護師が自らの専門性を向上させるために必要と感じている内容についてベレルソンの内容分析の手法を用いて内容の構造化を試みた。その結果、「自身・プライド・安定性」「成長・発展への志向性」をはじめ6つのカテゴリーが抽出され、看護師の成長・発達支援システムを構築していく必然性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、分析、結果を考察した。 共著者：石飛悦子、橋口智子、福山真理、岩本淳子他
24. 健康で健やかに生きるための生きがいの構造 (査読付)	共 著	平成15年5月	「第34回日本看護学会地域看護 集録集」地域看護 34 p. 121-123	5歳年齢階級別、男女別に無作為抽出した3592名のアンケート調査から高齢者の生きがいの構造化を試みた。その結果、「これまでの人生で積み重ねてきた能力が発揮できる」他9つのカテゴリーが抽出され、高齢者が求めている生活のあり方が示唆された。これらは老人の生きがい対策の検討資料になると考えられる。 本人担当部分：研究計画、分析、結果を考察した。 共著者：松村喜世子、岩本淳子、車谷典男
25. 看護実践における健康教育の課題 (査読付)	単 著	平成16年3月	「奈良県立医科大学看護短期大学部紀要」第8巻 p. 24-31	4万5千人の健診データを分析し、生活習慣病の発症率の実態を明らかにした。高齢化が急速に進展する今後5～15年間に保健・医療・福祉への需要が高まることが予測されるため、受診率の高い疾病に対して、発症後の病態の進行及び合併症を予防するために保健行動モデル、アンドラゴジー、エンパワメント、自己効力モデルを活用した看護実践のあり方と研究の可能性について検討した。 岩本淳子
26. 国保医療費の現状と保健予防施策に関する研究 (査読付)	単 著	平成17年3月	「奈良県立医科大学医学部看護学科紀要」第1巻 p. 60-67	国保医療費報告書をデータベース化し、地域における医療費の実態を明らかにした。また保健指導の対象となる健康問題と集団を推定し、地域保険指導事業の課題を提示した。 岩本淳子
27. 住民の主観的健康観と生活習慣、健康診査結果との関連 —奈良県橿原市の健康づくりに関するアンケート調査結果の分析— (査読付)	共 著	平成18年3月	「奈良県立医科大学医学部看護学科紀要」第2巻 p. 17-25	「健康日本21」計画の中間評価の時期を迎えるが、数値目標を達成するための施策を強化し、次の段階で新たな保健事業を設定するためには地域住民のニーズをより詳しく検討する必要がある。そこで、住民の健康に関わりがある行動の中から健康に良くないと感じ、しかも保健予防活動によって改善が期待できる生活習慣と生活習慣改善の考え方について主観的健康観の観点から保健予防事業の課題について解析した。調査の有効対象者数が3300名余りで、しかも20～30歳代の若年齢層を含んでおり、今後の定性的評価を行う上で参考となる結果が得られた。 本人担当部分：研究計画、実施、分析、結果を考察した。 共著者：岩本淳子、車谷典男、尾形希、奥田寧子

28. 高齢者のQOLと住居環境に関するコホート研究 —藤原京スタディー (査読付)	共 著	平成19年12月	「奈良県立医科大学医学雑誌」 p. 152-168	高齢者のQOLとADLの関連要因を明らかにし、これから高齢者施策策定に資することを目的に奈良県に在住する独歩可能な65歳以上の住民を対象に平成18年度より5年間のコホート調査を始めた。今回は調査の概要について報告した。本人担当部分：研究分担者、研究計画、実施、分析、結果を考察した。 共著者：車谷典男、岡本希、岩本淳子、森川将之、岸本年史、原納明博、羽崎完、天野信子、柳元和
29. 高齢者の1日歩数と身体機能および健康関連QOLに関する横断研究 —適正歩数の設定の試み— (査読付)	共 著	平成21年3月	「第24回健康医学研究所論文集」 p. 6-16	地域在住の65歳以上の男女258名を対象に、客観的かつ定量的な指標で、尚かつ妥当性が検証された加速度計に基づく一日の歩数を調査し、これと脚力を中心とした身体機能および健康関連QOLとの関連性を横断研究で検討し、高齢者の身体機能やQOLの維持の有効な適正歩数の設定を試みた。その結果、女性高齢者の身体機能や健康関連QOLを維持するために必要な一日の歩数は5500歩と推定されたことを報告し、優秀論文賞を受賞した。 本人担当部分：データ収集、健康教育の観点から見た考察の一部を担当した。 共著者：富岡公子、羽崎完、岩本淳子
30. 軽度認知症を伴う女性高齢者の睡眠に関する研究 (査読付)	共 著	平成21年12月	「医学と生物」 第153巻 第12号 p. 594-600	不眠の疫学調査によると、高齢になるほど中途覚醒や早期覚醒が増え、このような傾向は男性より女性が多い、睡眠に問題が生じると社会的適応や社会参加が妨害され、生活の質や健康生活を保つ上で困難が生じやすく認知症発症の危険因子を誘発する要因となることが報告されている。そこで、軽度認知症を伴う女性高齢者の睡眠の実態を睡眠ポリグラフと相関の高いアクティウォッチ (ITI AW-16 ITI社 Aagasaki) を7日間連続で装着し睡眠と覚醒リズムを測定した。夜間の覚醒回数が多いほど就床から起床時間が長く、睡眠効率が低いという傾向が示された。 本人担当部分：データ収集、健康教育の観点から見た考察の一部を担当した。 共著者：赤井由紀子、田中響、岩本淳子、Daniel T KIRK
31. Tooth loss is associated with mild memory impairment in the elderly: The Fujiwara-kyo study (高齢者における歯の損失と軽度の記憶障害の関係) (査読付)	共 著	平成22年7月	「Brain Research」 第1349巻 p. 68-75	残存歯数、認知機能障害、アルツハイマー病への移行率が高いとされる軽度記憶障害との関連を検討した。奈良県内在住の65歳以上の者を対象とした「高齢者のQOLと生活機能に関するコホート研究 (藤原京スタディー)」の受診者4,061名を1. 健常者3,896名 (MMSE;24点以上かつ3単語想起が2または3)、2. 軽度記憶障害121名 (MMSE;24点以上かつ3単語想起が0または1 & GDS;5点以下) (GDS;6点以上の30名除外) 3. 認知機能障害214名 (MMSE;23点以下) の3群に分類し歯の損失との関連を見たところ、残存歯数が0-10本 (3分の1以下) であることと、軽度記憶障害および認知機能障害との間に有意な関連が認められた。生物学的根拠として、歯周病による炎症性サイトカインの産生、炎症性サイトカインの遺伝子多型、歯根膜機械受容体の減少、栄養不良など歯牙喪失と認知機能の相方に関する要因等が考えられた。 本人担当部分：データ収集、健康教育の観点から見た考察の一部を担当した。 共著者：岡本希 森川将行 岩本淳子 岡本健介 佐伯圭吾 富岡公子 車谷典男

32. 地域在住高齢者の「生きがい」スケールの開発 —信頼性・妥当性および再現性の検討— Creation of an “Ikigai” Scale for Community-dwelling Elderly: Investigation of Its Reliability, Validity and Reproducibility (博士論文)	単 著	平成23年3月	女子栄養大学大学院	本研究は地域に在住する元気な高齢者の「生きがい」構造を実証的に明らかにし、信頼性・妥当性のある「生きがい」スケールを開発した。本研究は3つの研究から構成される。研究1は「生きがい」スケール開発のための質的調査、研究2は、「生きがい」スケールの開発、研究3は、「生きがい」スケールの別集団での検討である。 研究1は、65歳以上高齢者から性別年齢階級別層別化による無作為抽出された3,499人、研究2は、研究3は922人である。「生きがい」スケールは17カテゴリ4因子構造で構成され、その信頼性（再現性含む）・妥当性が検証された。 岩本淳子
33. Relationship Between Swallowing Problems and Tooth Loss in Community-dwelling Independent Elderly Adults The Fujiwara-Kyo Study (地域在住高齢者の嚥下障害と歯の損失との関連) (査読付)	共 著	平成22年12月	Journal of the American Geriatrics Society 2012;60(5) p. 849-853.	地域在住高齢者3663人を対象に残歯数と嚥下障害の関係を検討した。嚥下障害は15.1% (n = 554) であった。残歯数三分位値によって分類し、多重ロジスティック回帰分析で、歯損失と嚥下障害は関係していることが明らかになった。残歯が2.04 (95%の信頼区間 (CI) = 1.60-2.60) と1.31 (95%のCI = 1.02-1.70)。残歯が少ないことは咀嚼の能力を妨げ、円滑な嚥下を傷害するため、より若い年齢から歯の損失に対する予防措置が必要であるという健康教育の課題が明らかになった。 本人担当部分：データ収集、健康教育の観点から見た考察の一部を担当した。 共著者：Nozomi Okamoto, Kimiko Tomioka, Keigo Saeki, Junko Iwamoto, Masayuki Morikawa, Akihiro Harano, Norio Kurumatani,
34. スウェーデンにおけるがん患者のターミナルケアシステム (前編) (解説)	共 著	平成23年9月	看護展望 (0385-549X) 36 巻11号 p. 1024-1031	スウェーデンのがん患者のターミナルシステムについて視察を行った。前篇ではスウェーデンのがん患者ターミナルケアシステム成立の歴史的背景を解説した。 本人担当部分：データ分析、考察 宮崎徳子 Biro Mitsuko, 岩本 淳子, 高橋 佳子
35. スウェーデンにおけるがん患者のターミナルケアシステム (後編) (解説) (2011.10)	共 著	平成23年11月	看護展望 (0385-549X) 36 巻12号 p. 1111-1119	スウェーデンのがん患者のターミナルシステムについて視察を行った。後篇では、パリアティブ・ケアの意義とASIH (Advanced Sjukvård I Hemmet) の活動を紹介した。 本人担当部分：データ分析、考察 共著者：宮崎 徳子 Biro Mitsuko, 岩本 淳子, 高橋 佳子
36. Positive Effect of Daylight Exposure on Nocturnal Urinary Melatonin Excretion in the Elderly: A Cross-Sectional Analysis of the HEIJO-KYO Study Date: 2012, Apr 4 (高齢者における日中光曝露が夜間のメラトニン分泌に与える正の影響) (査読付)	共 著	平成24年	J Clin Endocrinol Metab. 2012 Nov;97(11):4166-73. doi: 10.1210/jc.2012-1873. Epub 2012 Sep 4.	メラトニン、ガン、不眠症、落ち込み、痴呆、高血圧と糖尿病を含むいろいろな病気に関係している。メラトニンは環境の明りに影響されるが、日常的な生活における光曝露とメラトニン分泌の関連は明らかではない。そこで、地域在住高齢者192人 (平均年齢69.9歳) を対象に日常生活における光曝露とメラトニン分泌の関連を検討した。多変量解析の結果、1000ルクスの光曝露と尿6-sulfatoxymelatonin排出は有意に関連していることが明らかになった (回帰係数、0.101;95%の信頼区間、0.003-0.199;P = 0.043)。日中光曝露が多いほどメラトニンの分泌量が多いことから、日中は屋内にとどまらず外出することが健康に良い影響をあたえる可能性を示唆し、これらは健康教育のエビデンスに活用することができる。 本人担当部分：データ分析、考察 共著者：Obayashi K, Saeki K, Iwamoto J, Okamoto N, Tomioka K, Nezu S, Ikada Y, Kurumatani N.

37.生活習慣と骨量との関連に関する研究の文献検討 (査読付)	共 著	平成25年4月	医学と生物 第157巻第4号 p. 455-460	生活習慣と骨量の関連に関する文献から骨粗しょう症を予防するための具体的な方法と課題を明らかにすることを目的とした。骨量に影響する因子として運動習慣、BMIが関係していることは報告されていたが、骨量と栄養・運動の効果的な骨量増加につながる具体策は明確ではなく、今後の課題であることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、考察 共著者：赤井由紀子, 田中馨, 坂口京子, 高田美子, 岩本淳子, Daniel.T.Kirk
38.Exposure to light at night, nocturnal urinary melatonin excretion, and obesity/dyslipidemia in the elderly: a cross-sectional analysis of the HEIJO-KYO study. (高齢者における夜間の光曝露とメラトニン分泌、肥満症、脂質異常症の関連性) (査読付)	共 著	平成25年1月	J Clin Endocrinol Metab. 2013 Jan;98(1):337-44. doi: 10.1210/jc.2012-2874. Epub 2012 Nov 1.	地域在住高齢者528名を対象に夜の尿メラトニン排出と肥満/脂質異常症との関連を検討した。夜間曝露照度が平均3ルクス以上の群は、3ルクス未満の群に比べ、肥満症や脂質異常症の有病割合が1.9倍であることを認めた。夜間の低照度光曝露が肥満症や脂質異常症(高中性脂血症、高LDL血症、低LDL血症)と関連し、夜間の低照度光曝露環境が健康に良い影響を与えることが示唆されことから、夜間光環境の設定と健康との関連を示す健康教育のエビデンスとして活用できる。 本人担当部分：調査実施、健康教育への活用に関する分析 共著者：Obayashi K, Saeki K, Iwamoto J, Okamoto N, Tomioka K, Nezu S, Ikada Y, Kurumatani N
39.Nocturnal urinary melatonin excretion is associated with non-dipper pattern in elderly hypertensives (高齢の高血圧患者における夜間のメラトニン分泌と夜間血圧の関係) (査読付)	共 著	平成25年4月	Hypertension Research 36, 736-740 (August 2013) doi:10.1038/hr.2013.20	地域在住高齢者220名を対象に光環境とメラトニン分泌量および夜間血圧低下率の関連を検討した。日中平均光曝露量とメラトニン分泌量、そしてメラトニン分泌量と夜間血圧低下率の間に正の関連を認めた。サーカディアン血圧変動因子は脳卒中や心疾患のリスク因子であり、それらを光環境の調整によって改善できる可能性が示唆された。 本人担当部分：調査実施、健康教育への活用に関する分析 共著者：Obayashi K, Saeki K, Iwamoto J, Okamoto N, Tomioka K, Nezu S, Ikada Y, Kurumatani N
40.生活習慣と骨量との関連に関する研究の文献検討 (査読付)	共 著	平成25年4月	医学と生物 第157巻第4号 p. 455-460	生活習慣と骨量の関連に関する文献から骨粗しょう症を予防するための具体的な方法と課題を明らかにすることを目的とした。骨量に影響する因子として運動習慣、BMIが関係していることは報告されていたが、骨量と栄養・運動の効果的な骨量増加につながる具体策は明確ではなく、今後の課題であることが示唆された。 本人担当部分：分析・考察 共著者：赤井由紀子, 田中馨, 坂口京子, 高田美子, 岩本淳子, Daniel.T.Kirk
41.The Hearing Handicap Inventory for Elderly-Screening (HHIE-S) versus a single question : reliability, validity, and relations with quality of life measures in the elderly community, Japan (高齢者スクリーニングのためのハンディキャップ問診票：信頼性、有効性、高齢者コミュニティにおけるQOL対策との関連) (査読付)	共 著	平成25年6月	Quality of Life Research June 2013, Volume 22, Issue 5, 1151-1159	本研究は、欧米においてその有用性が評価されているアンケート調査, HHIAを翻訳して, HHIA日本語版を作成し、「Hearing Handicap Inventory」の有用性と生活の質(QOL)を測定する尺度の信頼性・妥当性を確認したところ、高い信頼性をもつ尺度であることが示唆された。難聴の臨床における心理的評価として、社会面および感情面からのアプローチが必要であり、本研究によるスケールの活用の可能性は大きいことを明らかにした。 本人担当部分：調査の実施 データ分析 共著者：Kimiko Tomioka, Hiroki Ikeda, Kaoru Hanaie, Masayuki Morikawa, Junko Iwamoto, Nozomi Okamoto, Keigo Saeki, Norio Kurumatani

42. 独歩可能な地域在住高齢者の日常生活活動の関連要因 —大規模コホート研究(藤原京スタディ) ベースライン健診結果— (査読付)	共著	平成25年4月	日本衛生学雑誌, Vol68, 2013 p.22-32.	地域在住高齢者を対象にした健診結果を用いて、文部科学省新体力テストADL調査票の基本特性を明らかにするとともに、ADLよりも高次の日常生活活動に関連する要因を検討した。ADL低状態には低い身体能力と身体機能だけでなく、痛みの存在や視覚・聴覚機能低下の自覚、抑うつ状態、低い認知機能、低身体活動量、過体重が互いに独立して関連していることが示唆されたことから、ADL低状態の活動運動を支援する取り組みにはこれらの要因をふまえた対策が必要であることが明らかになった。 本人担当部分：調査実施、データ分析 共著者：小松雅代、根津智子、富岡公子、羽崎完、原納明博、森川将行、高木正博、山田全啓、松本善孝、岩本淳子、石塚理香、佐伯圭吾、岡本希、車谷典男。
43. Influence of room heating on ambulatory blood pressure in winter: a randomised controlled study. (冬季に暖房装置が血圧へ及ぼす影響) (査読付)	共著	平成25年6月	J Epidemiol Community Health. 2013 Jun;67(6):484-90. doi: 10.1136/jech-2012-201883. Epub 2013 Feb 27.	高齢者を対象に温熱環境と血圧モーニングサージの関連および光環境、メラトニン分泌量と夜間血圧降下率の関連を検討した。本研究の結果、離床後曝露温度と血圧モーニングサージの間に負の関連を認め、日中平均光曝露量とメラトニン分泌量の間に正の関連を認め、更にメラトニン分泌量と夜間血圧降下率の間に正の関連を認めた。本研究の結果は脳卒中や心疾患のリスク因子であるサーカディアン血圧変動を温熱環境および光環境という普遍性の高い要因を調整することで改善できることが示唆され、健康教育のエビデンスとして活用できる。 本人担当部分：調査実施、健康教育への活用に関する分析 共著者：Saeki K, Obayashi K, Iwamoto J, Tanaka Y, Tanaka N, Takata S, Kubo H, Okamoto N, Tomioka K, Nezu S, Kurumatani N.
44. Exposure to light at night and risk of depression in the elderly. J Affect Disord. (高齢者における夜間光曝露とうつ病の危険性) (査読付)	共著	平成25年10月	J Affect Disord. 2013 Oct;151(1):331-6.	高齢者の光曝露環境がうつ病と関連するかを検討した。夜間平均光曝露量が5 lux以上の群の「うつ病」に対する粗オッズ比は1.77 (95% 信頼区間: 1.22 to 2.58) と有意に高かった。さらに、性、年齢調整したオッズ比も1.80 (1.23 to 2.63) と有意な関連を認めた。夜間低照度光曝露がうつ症状の原因になるとする宮田季美恵ら (The Impact of Retinal Thickness on Actigraphic Sleep Quality in the Elderly: A Cross-sectional Analysis of the HEIJO-KYO Study.) の結果と一致したことから、夜間照明を調整するという生活習慣の改善により、うつ病予防できる可能性が示唆されたという点で健康教育のエビデンスとして活用する意義は大きい。 本人担当部分：調査実施、健康教育への活用に関する分析 共著者：Obayashi K, Saeki K, Iwamoto J, Ikada Y, Kurumatani N.
45. The relationship between indoor, outdoor and ambient temperatures and morning BP surges from inter-seasonally repeated measurements (季節間の反復測定による屋内外の温度と血圧モーニングサージとの関係) (査読付)	共著	平成25年4月	J Hum Hypertens. 2014 Aug;28(8):482-8. doi: 10.1038/jhh.2014.4. Epub 2014 Feb 20.	地域在住高齢者192人を対象に住居の温度(リビングルームとベッドルーム)と24時間血圧を測定し、両者の関連を検討した。血圧モーニングサージと曝露温度は、年齢、BMI、喫煙状況、身体活動量に独立して有意な負の相関を認めたことから、脳卒中のリスクファクターである血圧モーニングサージを室温のコントロールによって抑制できる可能性が示唆された。 本人担当部分：調査実施、健康教育への活用に関する分析 共著者：K Saeki, K Obayashi, J Iwamoto, N Tone, N Okamoto, K Tomioka and N Kurumatani

46. Stronger association of indoor temperature than outdoor temperature with blood pressure in colder months. (冬季の室内温度は外気温よりも血圧に強く関与する) (査読付)	共 著	平成25年5月	J Hypertens. 2014 Aug;32(8):1582-9. doi: 10.1097/HJH.0000000000000232.	地域在住高齢者868人を対象に、3日間連続して室内及び室外の気温と24時間の血圧を測定した。これまでの疫学研究では冬季に心疾患や脳卒中による死亡が増加し、他の季節に比べて総死亡の相対危険が1.2~1.3に上昇する冬季過剰死亡が認められているが、今回の結果は、単変量線形回帰モデルにおいて、睡眠トラフ血圧モーニングサージと曝露温度は有意な関連を認めた。さらに多変量マルチレベル線形回帰モデルにおいて、曝露温度はABPM の繰り返し測定の順序、年齢、BMI、喫煙状況、身体活動量に独立して、睡眠トラフ血圧モーニングサージと有意な負の相関を認めたことから、脳卒中のリスクファクターである血圧モーニングサージを室温のコントロールによって抑制できる可能性が示唆された。 本人担当部分：調査実施、健康教育への活用に関する分析 共著者：Saeki K1, Obayashi K, <u>Iwamoto J</u> , Tone N, Okamoto N, Tomioka K, Kurumatani N.
47. Independent associations of exposure to evening light and nocturnal urinary melatonin excretion with diabetes in the elderly. 高齢者における光曝露と夜間の尿中メラトニン排泄と糖尿病 (査読付)	共 著	平成26年	Chronobiol Int. 2014; 31:394-400.	光曝露が生体に及ぼす影響に関する研究は、動物実験やヒトを対象にした小規模な実験研究に限られており、大規模な疫学研究は行われていなかった。本研究では、2010年に開始した平城京コホースタディの追跡調査で、光曝露が健康指標や疾病発症に及ぼす影響を検討した。主な研究結果として、起床後の光曝露の減少や就寝前の光曝露の増加がBMIなどの肥満指標を増加させることや糖尿病の発症が増加することを明らかにした。本人担当部分：調査実施 共著者：Obayashi K, Saeki K, Iwamoto J, Ikada Y, Kurumatani N.
48. Lower melatonin secretion in older females: gender differences independent of light exposure profiles. (高齢女性における低メラトニン分泌：光曝露と独立したメラトニン分泌の性別差) (査読付)	共 著	平成27年5月	J Epidemiol. 2015;25(1):38-43. doi: 10.2188/jea.JE20140035. Epub 2014 Sep 13.	地域在住高齢者528人を対象にメラトニン分泌量の性差による違いを検討した。光曝露量と夜間尿の尿6-sulfatoxymelatonin excretion (UME; an index of melatonin secretion), 排出 (UME;メラトニン分泌) と測定し、メラトニン分泌量は女性が男性より18.4%が低いことが明らかになった。この調査結果は、今後高齢者のメラトニンと関連したいくつかの病気や健康障害の性差を調査するための基本データとして有効な結果が得られたといえる。 本人担当部分：調査実施、健康教育への活用に関する分析 共著者：Saeki K1, Obayashi K, <u>Iwamoto J</u> , Tone N, Okamoto N, Tomioka K, Kurumatani N.
49. Stronger association of indoor temperature than outdoor temperature with blood pressure in colder months.(査読付)	共 著	平成28年	J Hypertens. 2014; 32:1582-1589.	血圧モーニングサージは24時間血圧とは独立した心血管疾患の危険因子である。192名の自由行動下血圧、室温(居間、寝室)、アクテグラフを用いた身体活動量の同時測定を48時間×2季節(冬および春 or 秋)行い、768人・時間のデータを得た。外気温と居間の室温の相関を検討したところ、朝の外気温が中央値より高い日に比べて外気温の低い日には両者の相関が低下し、単変量および多変量回帰モデルを比較すると、外気温情報のみを用いた先行研究に比べて、室温情報を付加した分析は、血圧変動をより正確に予測していることを明らかにした。本人担当部分：調査実施 健康教育への活用についての分析 共著者：Saeki K, Obayashi K, Iwamoto J, Tone N, Okamoto N, Tomioka K, Kurumatani N.

50. Melatonin Secretion and Muscle Strength in Elderly Individuals: A Cross-Sectional Study of the HEIJO-KYO Cohort (高齢者におけるメラトニン分泌と筋力の関係) (査読付)	共 著	平成28年9月	J Gerontol A Biol Sci Med Sci. 2016 Sep;71(9):1235-40. doi: 10.1093/gerona/glw030. Epub 2016 Mar.	地域在住高齢者760人を対象に尿6-fatoxymelatonin排出(UME)と握力と四頭筋の強さの関連を検討した。尿中メラトニンの平均は7μg、握力と四頭筋 握力の平均は27.5±8.4Kg 大腿四頭筋の平均は162.6±80.1nmで、メラトニン値を四分位で分けると、一番高いグループは握力・大腿四頭筋力ともに筋力が高い値をしめした。これはBMI、喫煙、飲酒、腎臓の機能、高血圧、糖尿病、身体活動、うつ気分、認知機能障害、睡眠時間、睡眠の質、日長時間で調整してもメラトニンの分泌量の最も少ない群と多い群では、握力と大腿四頭筋の強さに有意な差がみられ、酸化ストレスと炎症が筋力の低下にかかわっているが、メラトニンは抗酸化や抗炎症化の作用を介して筋力の低下を予防することが示唆された。 本人担当部分：調査実施、健康教育への活用に関する分析 共著者：Saeki K1, Obayashi K, Iwamoto J, Tone N, Okamoto N, Tomioka K, Kurumatani N.
51. Melatonin Secretion and Muscle Strength in Elderly Individuals : A Cross-Sectional Study of the HEIJO-KYO Cohort 高齢者におけるメラトニン分泌と筋力の関係 (査読付)	共 著	平成28年10月	J Gerontol A Biol Sci Med Sci. 2016 Sep;71(9):1235-40. doi: 10.1093/gerona/glw030. Epub 2016 Mar 2.	地域在住高齢者760人を対象に尿6-fatoxymelatonin排出(UME)と握力と四頭筋の強さの関連を検討した。尿中メラトニンの平均は7μg、握力と四頭筋 握力の平均は27.5±8.4Kg 大腿四頭筋の平均は162.6±80.1nmで、メラトニン値を四分位で分けると、一番高いグループは握力・大腿四頭筋力ともに筋力が高い値を示した。これはBMI、喫煙、飲酒、腎臓の機能、高血圧、糖尿病、身体活動、うつ気分、認知機能障害、睡眠時間、睡眠の質、日長時間で調整してもメラトニンの分泌量の最も少ない群と多い群では、握力と大腿四頭筋の強さに有意な差がみられ、メラトニンは抗酸化や抗炎症化の作用を介して筋力の低下を予防することが示唆された。 本人担当部分：調査実施、健康教育への活用に関する分析 共著者：Saeki K2, Obayashi K, Iwamoto J, Tone N, Okamoto N, Tomioka K, Kurumatani N.
52. Gender differences in the association between melatonin secretion and diabetes in elderly: the HEIJO-KYO cohort. 高齢者の夜間光曝露量とメラトニン分泌、糖尿病の発症率の関係：平城京コホート。	共 著	平成28年8月	Clin Endocrinol. 2018; 89:750-756.	高齢者の自宅寝室へ照度計を設定し、2晩の平均照度を算出した。42ヶ月の追跡期間中に血液検査で糖尿病の診断に至った人を除く670名のうち19人が糖尿病を発症した。分析では糖尿病の新規発症者を従属変数、ベースライン時の夜間光曝露量を独立変数としてポアソン回帰分析を行ったところ、糖尿病の粗発症率は夜間光曝露利用が多い群と少ない群では、夜間光曝露量の多い群が少ない群より有意に高く、カットオフ値として設定した分析でも同様の結果を確認した。 本人担当部分：調査実施、健康教育に活用する部分の分析 共著者：Obayashi K, Yamagami Y, Iwamoto J, Kurumatani N, Saeki K.
53. Decreased daytime light intensity at non-window hospital beds: comparisons with light intensity at window hospital beds and light exposure in non-hospitalized elderly individuals. 非窓側病床における日中光量の減少：病院の窓側ベッドの光量と在宅高齢者の日中光曝露の比較	共 著	平成30年1月	Chronobiol Int. 2018; 35:719-723.	入院中の転倒は外傷や骨折の原因になるだけでなく、在院日数の増加やそれに伴う医療費の増加にも関連する。高齢者の病院内転倒の危険因子として、睡眠障害・うつ症状・認知機能障害が重要であることから、生体リズムに最も影響を与える環境因子である光に着目し、病室の窓側病床と廊下側病床で病院内転倒発生に差があるかを検討した。主な研究結果として、病院の25病室で120日間測定した日中平均照度は窓側病床で廊下側病床より有意に高く、窓側病床群の病院内転倒発生率は廊下側病床群より有意に低いことを確認した。さらに自宅で生活する高齢者(1113名)の光曝露量と比較して、非窓側病床の日中光照度は有意に低く、窓側病床は家庭環境と差がないことを明らかにした。 本人担当部分：調査実施、分析、論文作成 共著者：Iwamoto J, Obayashi K, Kobayashi M, Kotsuji T, Matsui R, Ito K, Yoshida O, Kurumatani N, Saeki K.

54. Gender differences in the association between melatonin secretion and diabetes in elderly: the HEIJO-KYO cohort.	共 著	平成30年	Clin Endocrinol. 2018; 89:750-756.	メラトニンとは膵島を保護し、インスリン抵抗性を低下させ、糖尿病の予防に貢献する可能性がある。メラトニン分泌の低下が女性看護師の糖尿病の発症率の上昇と関連していることは一般の人々には知られていない。本研究ではメラトニン分泌と糖尿病との関連を1096人、高齢男性 (n = 519) と女性 (n = 577) (平均年齢71.8歳) で一晩の尿中6-スルファトキシメラトニン排泄 (UME) を用いて糖尿病の有病率を測定した。その結果、UMEの中央値は6.7 μ g (四分位範囲、4.0-10.5)、糖尿病の有病率は男性で17.5%、女性で10.7%で、糖尿病の有病率は、男性のUME四分位数の増加とともに減少したが (傾向のP = 0.009)、女性では減少しなかった (傾向のP = 0.96)。年齢、喫煙と飲酒の習慣、経済状態、カロリー摂取量、身体活動などの潜在的な交絡因子を調整する多変数ロジスティック回帰分析で、糖尿病のオッズ比 (OR) は最高のUME四分位数グループと比較して有意に低かったことから、メラトニン分泌は男性では糖尿病と有意かつ逆に関連していたが、女性では関連していなかったことが明らかになった。 共著者: Obayashi K, Yamagami Y, Iwamoto J, Kurumatani N, Saeki K.
55. Objectively measured physical activity relates to nighttime blood pressure in older adults: cross-sectional analysis in the HEIJO-KYO cohort. 身体活動と夜間血圧の関連 (査読付)	共 著	令和2年4月	J Hypertens. 2020 Apr;38(4):649-655.	高齢者1100名を対象にアクチグラフを用いて平均夜間SBPとDBPはそれぞれ115.9mmHg (SD, 16.2) および67mmHg (8.6) であり、平均昼間の身体活動は299.2カウント/分 (104.3) であった。昼間の身体活動と夜間血圧の関係を検討したところ、昼間の身体活動強度と夜間血圧の低さと降圧剤を服用しないサブグループにおいても有意な関連が見られた。 本人担当部分: 調査実施、健康教育に活用する部分の分析 共著者: Yamagami Y, Saeki K, Tai Y, Maegawa T, Iwamoto J, Kataoka H, Kurumatani N, Obayashi K
56. Lower incidence of in-hospital falls in patients hospitalised in window beds than non-window beds. 窓側病床と院内転倒の関係 (査読付)	共 著	令和2年4月	J Am Med Dir Assoc. 2020 Apr;21(4):476-480.	高齢者が入院すると日中の光曝露は病室環境に強く依存するため、体内時計の乱れを引き起こし、入院中に発生する転倒の原因になっているのではないかと。この研究仮説を検証するために、まず病室の明るさに関する調査を行った。その結果、窓側病床は廊下側病床より日中平均照度は約3倍有意に高く (327.9ルクス vs. 118.4ルクス)、窓側病床の日中照度は在宅高齢者の日中曝露照度 (337.3 lux) と同等であった。さらに患者電子カルテ情報後向き研究を行った結果、窓側病床に入院した患者の病院内転倒率は、廊下側病床に入院した患者より有意に低いことを明らかにした (発生率比, 0.61; 95%信頼区間, 0.47-0.79)。本論文はJAMDAソーシャルメディアサイトでSNSに取り上げる対象に選ばれた。 本人担当部分: 研究代表者、調査の実施、データ管理・分析 共著者: Iwamoto J, Saeki K, Kobayashi M, Yamagami Y, Yoshida O, Kurumatani N, Obayashi K*
(その他) 「研究助成報告書」 1. 橿原市役所健康福祉部健康増進課国保事業報告書	共 著	平成14年3月	橿原市発行 A4判全132頁	老人保健法に基づく基本健康診査等受診対象者数の推定に関する事業報告書を作成した。本人担当部分: データー入力と解析、本人担当部分: データー入力と解析、共同発表者: 車谷典男、岩本淳子

2. 橿原市総合健康指導事業報告書	共	著	平成14年3月	橿原市発行 A4判全178頁	平成14年度、奈良県橿原市の住民を対象に実施した生活習慣、健康状態、健康づくりに関する調査結果と今後における保健予防事業の課題について事業報告書を作成した。 本人担当部分：データー入力と解析、 共同発表者：共著者：岩本淳子、車谷典男、松村喜世子
3. 橿原市高齢者健康指導事業報告書	共	著	平成14年3月	橿原市発行 A4判全56頁	平成14年度に実施した奈良県橿原市高齢者健康指導事業（健康・生きがい調査）の結果と今後における高齢者健康指導事業の課題について事業報告書を作成した。 本人担当部分：データー入力と解析、共同発表者：共著者 ：松村喜世子、岩本淳子、車谷典男
4. 橿原市総合健康指導事業報告書	共	著	平成16年3月	橿原市発行 A4判全105頁	平成15年度に実施した奈良県橿原市総合保健指導事業（運動指導事業の評価）の事業報告書を作成した。本人担当部分：運動習慣とQOLの関係について報告した。 共著者：尾形希、岩本淳子、車谷典男 中谷敏昭
5. 橿原市総合健康指導事業報告書	共	著	平成17年3月	橿原市発行 A4判全60頁	平成16年度に実施した奈良県橿原市総合保健指導事業（運動継続と非運動継続による健診成績への影響）について分析し、事業報告書を作成した。本人担当部分：運動継続と非継続者のBMIの変化について分析し、報告した。 共著者：岩本淳子、車谷典男、尾形希
6. 橿原市高齢者健康指導事業報告書	共	著	平成19年4月	橿原市発行 A4判全42頁	平成14年度に実施した奈良県橿原市高齢者健康指導事業（健康・生きがい調査）の対象者を追跡調査した。調査内容は4年間の死亡状況と生きがいの定量的評価を行い、事業報告書を作成した。本人担当部分：研究計画、調査、データの解析・考察 共著者：岩本淳子、車谷典男、岡本希
7. 奈良県立医科大学住居医学研究助成報告集（査読付）	共	著	平成19年4月	奈良県立医科大学住居医学教室発行 A4判全52頁	地域在住高齢者男女3400名を研究のベースライン調査の概要を報告した。調査内容はベースライン調査では生活習慣、社会参加、健康関連QOL、認知機能、運動機能、骨粗しょう症、生きがい、咀嚼機能、住居環境の他で、元気な高齢者のゲンキな秘訣を探っている。 本人担当部分：高齢者の生きがいと外出頻度との関係について報告した。 主任研究者：車谷典男 共同研究者：岡本希、岩本淳子、富岡公子、羽崎完、原納明博、森川将之、天野信子、柳元和
8. 奈良県立医科大学住居医学研究助成報告集	共	著	平成20年4月	奈良県立医科大学住居医学教室発行A4判47頁	地域在住高齢者男女980名を対象とした5年間のコホート研究のベースライン調査の概要を報告した。調査内容は生活習慣、社会参加、健康関連QOL、認知機能、運動機能、骨粗しょう症、生きがい、咀嚼機能、住居環境の他で、元気な高齢者のゲンキな秘訣を探っている。 本人担当部分：高齢者の生きがいと健康状態との関係について報告した。 主任研究者：車谷典男 共同研究者：岡本希、岩本淳子、富岡公子、羽崎完、原納明博、森川将之、天野信子、柳元和
9. 患者に安全・安心を提供するための待合環境調査と交差感染防止に関する研究	共	著	平成21年12月	奈良県立医科大学住居医学大和ハウス寄附講座発行 A4判全86頁	仕切りがなく広い待合スペースでは交差感染のリスクが懸念されているが、詳細な結果は見当たらない。そこで、空調設備による風向やフィルタの機能の現状を把握し、6m×25mの広さの待合室の浮遊粒子と座り位置、立ち位置の高さでエアースンプラによる空中粉塵を採集し細菌培養を行った。その結果、冬季より夏季の方が、外来患者の数が多くなるほど細菌数は多くなった。 本人担当部分：測定およびデータ解析。 共著者：徳谷純子、古西満、殿村雅弘、御守里絵、岩本淳子

10. 療養環境の清潔管理に関する細菌学的検討	共 著	平成21年12月	奈良県立医科大学住居医学大和ハウス寄附講座発行 A4判全87頁	化学療法を受ける患者・家族が安全・安楽に治療を受けるための療養環境を提供できるよう、落下細菌、浮遊細菌、付着細菌、ダニアレルゲンの定性的・定量的評価を実施した。その結果、付着細菌で高頻度に接触する面において日和見細菌が検出され、さらに、これまでは家庭でよく知られているダニアレルゲンは、長期間使用した寝具ほど数値が高くなる（未使用：0.07 $\mu\text{g}/\text{g}$ ダストに対して1ヶ月使用後の敷布団では11.4 $\mu\text{g}/\text{g}$ ダスト）傾向が見られた。本人担当部分：外来化学療法室でダニ被害が発生すると化学療法の副作用である皮膚障害との鑑別が困難で化学療法が中断される恐れがあるため、療養環境におけるダニ対策は一般家庭と同様に十分な対応が必要であることを報告した。 共著者：木村道子、岩本淳子、御守里絵
11. 放射線治療病室の室内環境の改善に関する研究	共 著	平成20年12月	奈良県立医科大学住居医学大和ハウス寄附講座発行 A4判全88頁	放射線治療病室を有する全国108施設を対象に密封小宣言治療病室及びアイソトープ治療病室の環境について任意の自記式アンケート調査を実施した。その結果、室内の照明、室温、香りなどに課題が生じた。そこで、治療病室における患者の反応を自律神経機能の測定や先行研究で妥当性・信頼性が明らかになった調査票を用いて調査した。その結果、自律神経機能では低周波数成分（LF:Low Frequency）の副交感神経活動を示すHF波は治療室では有意に低く、交換神経活動を示す（LF/HF）指標が高くなり、8-OH-dG（クレアチニン補正）でも同様の傾向が確認された。本人担当部分：治療病室使用時の対策を講じる必要性を考察した。 共著者：安藤英次、上野山文男、村上能庸、岩本淳子
12. 高齢者の1日歩数と身体機能および健康関連QOLに関する横断研究－適正歩数設定の試み－ （査読付）	共 著	平成21年3月	明治安田厚生事業団助成 平成20年度報告書A4判 128頁	健康な地域在住高齢者にライフコーダー（スズケン社製）を用いて65歳以上の男女235名の連続4週間の歩数を計測した。また国際標準化身体活動質問票（IPAQ）日本語版Short Version と歩行時間に関する質問票（WTQ）から得られた結果と歩数との関係を分析し、地域在住高齢者を対象にしたIPAQの信頼性・妥当性を検討し事業報告書を作成した。本人担当部分：データの解析・考察 共著者：富岡公子、羽崎完、岩本淳子
13. 奈良県立医科大学住居医学研究助成報告集 （査読付）	共 著	平成21年3月	奈良県立医科大学住居医学教室発行A4判72頁	地域在住高齢者男女4500名を対象とした5年間のコホート研究のベースライン調査から1年後のフォローアップ調査結果の概要を報告した。本人担当部分：高齢者の閉じこもりの要因の解析と報告書の作成を担当した。 主任研究者：車谷典男 共同研究者：岡本希、岩本淳子、富岡公子、羽崎完、原納明博、森川将之、天野信子、柳元和
14. 幼児期の家庭内喫煙による室内大気汚染環境についての研究 （査読付）	共 著	平成22年3月	奈良県立医科大学住居医学教室発行 A4版67頁	子どもの両親および同居家族からの受動喫煙による曝露の実態を把握し、その検査結果を返すことによって行動変容ステージが変化するか否かを確認することを目的に、3歳以上の幼稚園児145名の尿中コチニンの測定を行い、その両親を対象に家庭内における喫煙の自己記入式アンケートと実態調査を行った。両親および同居家族の喫煙者の割合は58.1%で、そのうち、尿中コチニン10mg/ml- $\geq$ 40mg/dlの子どもは22.6%であった。喫煙場所は約80%が台所、ベランダ、車内で台所と車内で子どものコチニン値が有意に高く、受動喫煙の更なる啓発の必要性が考えられた。禁煙の意識は、コチニンのバイオマーカーの測定結果をフィードバックすると、無関心期の人の約40%にステージの上昇が認められ、禁煙意識の導入の可能性示唆された。本人担当部分：データ収集・解析 共著者：坂東春美、岩本淳子、濱田 薫、吉田亨

15. 就寝中および起床後血圧に及ぼす室温の研究に関するランダム化比較試験 (査読付)	共 著	平成22年4月	奈良県立医科大学住居医学教室発行 A4版48頁	「10℃の室温の低下は、被験者の着衣および寝具による調整を行った条件でも、血圧の上昇、モーニングサージの上昇を引き起こすか」という仮説を検証するため無作為化比較試験を実施した。被験者を寒冷群、適温群に単純無作為割り付けし、就寝前2時間から起床後2時間までの室温を介入としてABPMを用いて測定した血圧から①Evening BP (就寝前2時間平均収縮期血圧)、②Pre-awake BP (起床前2時間平均収縮期血圧)、③Morning BP (起床後2時間平均収縮期血圧)、④Lowest BP (就寝中最低血圧値とその前後30分の平均値)、⑤Pre-awake MBPS (Morning Blood Pressure Surge) : ②-④、⑤sleep trough MBPS : ③-④、⑥Nocturnal BP fall : ①-④を算出し、比較し、冬季の部屋の暖房は、血圧上昇の抑制に有用であることが示された。本人担当部分：データ収集、解析 共著者：佐伯圭吾、岩本淳子、田中紀之
16. 奈良県立医科大学住居医学研究助成報告集 (査読付)	共 著	平成22年3月	奈良県立医科大学住居医学教室発行A4判54頁	地域在住高齢者男女4500名を対象とした5年間のコホート研究のベースライン調査から2年後のフォローアップ調査結果の概要を報告した。本人担当部分：高齢者の骨折と骨密度及び生活習慣の関係について解析し、報告書の作成を担当した。 主任研究者：車谷典男 共同研究者：岡本希、岩本淳子、富岡公子、羽崎完、原納明博、森川将之、天野信子、柳元和
17. 地域在住高齢者の家庭内孤立による孤独感の実態と日常生活への影響に関する研究 (査読付)	共 著	平成22年3月	大阪ガスグループ福祉財団研究・調査助成報告書 平成22年6月A4判183頁	家族と同居する高齢者の孤独感に焦点を当て、孤独感が日常生活の質 (QOL) に及ぼす影響、および孤独感を規定する因子について明らかにすることを目的に自記式アンケート調査を行った。調査対象は、独歩可能な65歳以上の高齢者であり、875名からの回答を分析対象とした。結果として、家族形態と孤独感との関連については、男女ともに有意な値は認められなかったが、抑うつや主観的QOLを含む多くの指標において、家族同居高齢者で孤独感が高い人の水準が最も低く、次いで独居高齢者であり、孤独感の低い家族同居高齢者の水準が最も良好であった。同居高齢者の高い孤独感を規定する要因として、有意な関連を示したのは老研式活動能力指標と、配偶者以外の家族からのサポート、友人からのサポートの3変数であった。本人担当部分：研究計画、調査、解析、考察 共著者：岩本淳子、坂口幸弘、富岡公子、車谷典男
18. 竹っ鶏卵の特性 一細菌・形状・栄養成分の解析一	共 著	平成22年4月	環境省「循環型社会地域支援事業」平成21年度報告書	自然との共生を図りながら、人間社会における物質循環を健全なものにすることで、持続的な社会が実現されることを目指す、「第2次循環型社会形成推進基本計画」(以下「新計画」という)に基づく「循環型社会」(3R=リデュース・リユース・リサイクルによる資源循環)、「低炭素社会」(温室効果ガス排出量の大幅削減)、「自然共生社会」(自然の恵みの享受と継承)への取組が推進され、四日市大学の「四日市大学エネルギー環境教育研究会」では、循環型社会の形成に向けて「竹鶏物語〜3Rプロジェクト」に取り組んでいる。産学官の連携で、生ごみに竹粉を混ぜて鶏の飼料を作り、鶏糞は肥料にしては竹の野菜栽培に活用、卵や野菜は地域や市場に戻り循環する実践モデルの開発と評価が期待されている。そこで、私たちは米唐竹粉末含有飼料の養鶏卵と標準配合飼料による養鶏卵の細菌・形状・栄養成分を解析し、その結果をまとめ報告した。本人担当部分：すべて 岩本淳子、赤井由紀子、新田義孝、矢口芳枝、田代義光

19. 早朝光照射の色温度が覚醒に及ぼす影響に関する研究	共 著	平成22年9月	奈良県立医科大学住居医学教室発行 A5版	起床直後より曝露される照明の色温度が唾液 中メラトニン濃度に及ぼす影響を確認した。 5000Kの照明または12000Kの照明に起床直後より 曝露された場合、5000K条件に比べて12000K条件 の方が唾液中メラトニン分泌や眠気が抑制さ れ、集中力や作業効率が改善された。 起床後に高色温度の光環境を作ることにより、 生活者の朝の目覚め感を向上させる住居環境の 開発に資することを報告した。 本人担当部分：データの解析・考察 共著者：福田映子、田中紀之、<u>岩本淳子</u>、篠義 人、佐伯圭吾
20. An Inadequately Heated Environment Increases Morning Blood Pressure and Morning Blood Pressure Surge in Winter : A Randomized Controlled Trial (冬季における不適切な温度環境は午前中の血圧と血圧サージを上昇させる)	共 著	平成22年11月	American Heart Assiaon 2010.11.01 (America)	「10℃の室温の低下は、被験者の着衣および寝 具による調整を行った条件でも、血圧の上昇、 モーニングサージの上昇を引き起こすか」という 仮説を検証するため無作為化比較試験を実施し た。被験者を寒冷群、適温群に単純無作為割り 付けし、就寝前2時間から起床後2時間までの室 温を介入としてABPMを用いて測定した血圧から ①Evening BP (就寝前2時間平均収縮期血 圧)、②Pre-awake BP (起床前2時間平均収縮期 血圧)、③Morning BP (起床後2時間平均収縮期 血圧)、④Lowest BP (就寝中最低血圧値とその 前後30分の平均値)、⑤Pre-awake MBPS(Morning Blood Pressure Surge) : ②- ④、⑤sleep trough MBPS : ③-④、⑥ Nocturnal BP fall : ①-④を算出し、比較し た。群の室温差は9.9℃に対し、寒冷群では有意 に上昇した。Lowest BPでは両群に差を認めな かった。Sleep trough MBPS は寒冷群では適温 群より有意に大きかった。Pre-awake MBPSは拡 張期血圧のみ有意に上昇したことから、冬季の 部屋の暖房は、血圧上昇の抑制に有用であるこ とが示された。 本人担当部分：調査、データ入力・分析 共著者：佐伯圭吾、大林賢治、田中紀之、<u>岩本 淳子</u>、岡本希、富岡公子、車谷典男
「学会発表」省略				

教 育 研 究 業 績 書		
令和7年6月30日		
氏名：嶋田 理博		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
天文学	光学赤外線天文学、科学教育	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) けいはんな科学体験プログラム「けいはんな子ども天文クラブ～星の光のひみつ～」実施主担当者および講師	平成27年10月31日 平成27年11月7日 平成27年12月5日 平成27年12月19日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 地域の小学生向けの天文教室を開催し、分光観測をテーマとして取り上げた。分光観測は、太陽をはじめ、天体に含まれている元素の量や、物理状態、運動状態を知ることが出来る手段である。参加者は、分光観測に必要な光の性質や分光器の原理について学び、レプリカグレーティングを用いた簡易分光器を製作し、太陽の分光観測を行った。観測結果から太陽の元素組成を調べ、天文学者がどのように天体からの情報を引き出しているのかを、体験を通じて学習した。光を分光することによって、手に取れない遠くの天体でもその物理状態を知ることが出来ること、そして、その情報を活用して宇宙の成り立ちについて知ることが出来ることを、工作と実験・観察を通して体験した。
2) 「けいはんな科学フェスティバル2016」出展	平成28年2月6日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、奈良教育大学、(公財)関西文化学術研究都市推進機構 「けいはんな科学フェスティバル2016」の中で、1ブース展示を担当した。 レプリカグレーティングを用いた簡易分光器を展示し、白熱電球や蛍光灯、LEDなど家庭にある光源、水素、ヘリウム、ネオン、水銀の各放電管のスペクトルの違いを、参加者に観察してもらった。目に見える光は、様々な色の成分が合成されて出来ていること、発光する物質によってそのスペクトルのパターンが異なること、水素やヘリウムのスペクトルが天文学の研究とどのような関係にあるかを解説した。
3) けいはんな科学体験プログラム「けいはんな子ども天文クラブ～手作り望遠鏡で星を見よう～」実施主担当者および講師	平成28年9月10日 平成28年10月8日 平成28年11月5日 平成28年12月10日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。天体望遠鏡の組立工作进行を指導し、その望遠鏡を用いて、月、土星から、明るい星雲・星団までを対象とした観測指導を行った。
4) 平成28年度「まほろば・けいはんなSSHサイエンスフェスティバル」講師	平成28年11月12日	主催：奈良県立奈良高等学校 共催：(公財)関西文化学術研究都市推進機構 けいはんな地域の11高校・中学校の28件の研究活動報告を指導講評した。
5) けいはんなサイエンスプログラム in KICK「太陽の光を調べよう」講師	平成29年1月8日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク グレーティングシートと工作用紙を使った簡易分光器の製作を指導した。また、それを用いた、白熱電球や蛍光灯、LEDなど家庭にある光源、水素やヘリウムなど各種元素の放電管スペクトルの観察を行った。発光する物質によってスペクトルのパターンが異なることを学び、分光が天文学の研究でどのように使われているかを解説した。

6) けいはんな科学フェスティバル2017「けいはんな子ども天文クラブ2016年活動報告」「太陽・月を観測しよう」出展	平成29年2月4日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、（公財）関西文化学術研究都市推進機構、奈良教育大学、京都府立大学 「けいはんな科学フェスティバル2017」の中で、「けいはんな子ども天文クラブ2016年活動報告」「太陽・月を観測しよう」の2ブースの展示・体験コーナーを担当した。前者では上記25)の活動成果を報告した。後者では、H α ナローバンドフィルタを備えた太陽観測望遠鏡を用いた太陽表面の観察、通常の天体望遠鏡を用いた月表面のクレーターの観察を行なった。
7) けいはんな科学体験プログラム「けいはんな子ども天文クラブ～手作り望遠鏡で星を見よう～」実施主担当者および講師	平成29年8月26日 平成29年8月30日 平成29年9月2日 平成29年10月7日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 助成：国立青少年教育振興機構 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。天体望遠鏡の組立工作进行を指導し、その望遠鏡を用いて、月、土星から、明るい星雲・星団までを対象とした観測指導を行った。
8) 平成29年度「まほろば・けいはんなSSHサイエンスフェスティバル」講師	平成29年10月28日	主催：奈良県立奈良高等学校 共催：（公財）関西文化学術研究都市推進機構 けいはんな地域の17高校・中学校の48件の研究活動報告を指導講評した。
9) けいはんな科学体験プログラム「けいはんな子ども天文クラブ～流れ星を観測しよう～」実施主担当者および講師	平成29年12月12日 平成29年12月13日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 助成：国立青少年教育振興機構 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。肉眼および電波エコーでふたご座流星群を観測した。
10) けいはんな科学フェスティバル2018「けいはんな子ども天文クラブ2017年活動報告」「太陽を観測しよう」出展	平成30年2月3日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、（公財）関西文化学術研究都市推進機構、奈良教育大学、けいはんな科学共育デザインラボ、京都府立大学 「けいはんな科学フェスティバル2018」の中で、「けいはんな子ども天文クラブ2017年活動報告」「太陽を観測しよう」の2ブースの展示・体験コーナーを担当した。前者では上記25)の活動成果を報告した。後者では、H α ナローバンドフィルタを備えた太陽観測望遠鏡を用いた太陽表面の観察を行なった。
11) 三郷町男女共同参画セミナー「親子天文教室」講師	平成30年7月21日	主催：三郷町 三郷町在住の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。天体望遠鏡の組立工作进行を指導し、その望遠鏡を用いた観測指導を行った。
12) 科学体験プログラム「けいはんな子ども天文クラブ～手作り望遠鏡で星を見よう～」実施主担当者および講師	平成30年8月20日 平成30年9月15日 平成30年10月6日 平成30年10月27日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ 助成：国立青少年教育振興機構 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。天体望遠鏡の組立工作进行を指導し、その望遠鏡を用いて、月、火星、木星、土星を対象とした観測指導を行った。
13) 「けいはんな子ども天文クラブ天体観望会」実施主担当者および講師	平成30年11月3日 平成30年12月14日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ、けいはんな記念公園 けいはんな地域の住民を対象とした天体観望会を開催した
14) けいはんな科学フェスティバル2019「けいはんな子ども天文クラブ～太陽を観測しよう～」出展	平成31年1月26日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、（公財）関西文化学術研究都市推進機構、京都府立大学 「けいはんな科学フェスティバル2019」の中で、「けいはんな子ども天文クラブ～太陽を観測しよう～」ブースの展示・体験コーナーを担当し、H α ナローバンドフィルタを備えた太陽観測望遠鏡を用いた太陽表面の観察を行なった。
15) サイエンスプログラムinせいか「けいはんな子ども天文クラブ～太陽の光を調べよう～」講師	平成31年3月23日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ 共催：せいか自然観察倶楽部 助成：国立青少年教育振興機構、ロート製菓 「サイエンスプログラムinせいか」の中で、「けいはんな子ども天文クラブ～太陽の光を調べよう～」プログラムの講師を務め、分光器の製作とそれを用いた太陽スペクトルの観察を行なった。
16) 「けいはんな子ども天文クラブ天体観望会」実施主担当者および講師	平成31年4月28日 平成31年4月29日 令和元年11月2日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ、けいはんな記念公園 けいはんな地域の住民を対象とした天体観望会を開催した
17) 「けいはんな子ども天文クラブ」実施主担当者および講師	令和元年8月10日 令和元年9月7日 令和元年9月14日 令和元年10月26日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ 助成：国立青少年教育振興機構 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。天体望遠鏡の組立工作进行を指導し、その望遠鏡を用いて、月、木星、土星を対象とした観測指導を行った。

18) けいはんな科学フェスティバル2020「けいはんな子ども天文クラブ～太陽を観測しよう～」出展	令和2年2月11日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、（公財）関西文化学術研究都市推進機構、京都府立大学 「けいはんな科学フェスティバル2020」の中で、「けいはんな子ども天文クラブ～太陽と金星を観測しよう～」ブースの展示・体験コーナーを担当し、H α ナローバンドフィルタを備えた太陽観測望遠鏡を用いた太陽表面の観察、通常望遠鏡を用いた昼間の金星の観察を行なった。
19) 「けいはんな子ども天文クラブ」実施主担当者および講師	令和2年10月24日 令和2年11月21日 令和2年11月28日 令和2年12月12日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ 助成：国立青少年教育振興機構 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。天体望遠鏡の組立工作进行を指導し、その望遠鏡を用いて、月、火星、木星、土星を対象とした観測指導を行った。
20) 令和2年度「まほろば・けいはんなSSHサイエンスフェスティバル」講師	令和2年11月7日 ～令和2年11月13日	主催：奈良県立奈良高等学校 共催：（公財）関西文化学術研究都市推進機構 けいはんな地域の13高校・中学校の50件の研究活動報告を指導講評した。
21) 「けいはんな子ども天文クラブ天体観望会」実施主担当者および講師	令和2年12月20日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ、けいはんな記念公園 けいはんな地域の住民を対象とした天体観望会を開催した
22) 令和2年度「サイエンスチームなら」科学研究実践活動発表会講師	令和3年2月11日	主催：奈良教育大学、奈良県立教育研究所 奈良県下7高校・中学校の15件の科学研究活動の実践活動報告を指導講評した。
23) けいはんな科学フェスティバル2021「太陽を観察しよう」「冬の星団・星雲めぐり」「冬の星座めぐり」出展	令和3年2月13日 ～令和3年2月28日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、（公財）関西文化学術研究都市推進機構 「けいはんな科学フェスティバル2021」の中で、「太陽を観察しよう」「冬の星団・星雲めぐり」「冬の星座めぐり」の3つのオンラインワークショップを企画し、講師を務めた。
24) 「けいはんな子ども天文クラブ」実施主担当者および講師	令和3年10月9日 令和3年10月16日 令和3年11月6日 令和3年11月13日 令和3年11月27日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ 助成：国立青少年教育振興機構 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。天体望遠鏡の組立工作进行を指導し、その望遠鏡を用いて、月、金星、木星、土星を対象とした観測指導を行った。
25) 「けいはんな子ども天文クラブ天体観望会」実施主担当者および講師	令和3年11月28日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ、けいはんな記念公園 けいはんな地域の住民を対象とした天体観望会を開催した
26) けいはんな科学フェスティバル2022「冬の星団・星雲めぐり」「冬の星座を観察しよう」出展	令和4年2月13日 ～令和4年2月27日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、（公財）関西文化学術研究都市推進機構 「けいはんな科学フェスティバル2022」の中で、「冬の星団・星雲めぐり」「冬の星座を観察しよう」の2つのオンラインワークショップを企画し、講師を務めた。
27) 令和3年度「サイエンスチームなら」科学研究実践活動発表会講師	令和4年3月17日 ～令和4年2月27日	主催：奈良県立教育研究所 助成：奈良教育大学 奈良県下7高校・中学校の19件の科学研究活動の実践活動報告を指導講評した。
28) 「けいはんな子ども天文クラブ天体観望会」実施主担当者および講師	令和4年4月4日 令和4年8月28日 令和4年10月16日 令和5年3月5日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ、けいはんな記念公園 けいはんな地域の住民を対象とした天体観望会を開催した
29) 「けいはんな子ども天文クラブ～星空観察教室～」実施主担当者および講師	令和4年8月27日 令和4年9月10日 令和4年9月24日 令和4年10月22日 令和4年11月12日 令和4年12月10日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ 助成：国立青少年教育振興機構 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。肉眼および双眼鏡で季節の星座、アステリズム、星団、星雲、銀河、二重星等の観察指導を行なった。
30) 令和4年度「サイエンスチームなら」科学研究実践活動中間報告会、発表会 講師	令和4年9月20日 令和4年12月24日	主催：奈良県立教育研究所 助成：奈良教育大学 奈良県下7高校・中学校の17件の科学研究活動の実践活動報告を指導講評した。
31) 「けいはんな子ども天文クラブ～望遠鏡工作教室～」実施主担当者および講師	令和4年10月1日 令和4年10月8日 令和4年10月29日 令和4年11月5日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ 助成：国立青少年教育振興機構 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。天体望遠鏡の組立工作进行を指導し、その望遠鏡を用いて、月、木星、土星を対象とした観測指導を行った。

32) けいはんな科学フェスティバル2023「太陽を観察しよう」出展	令和5年2月23日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、（公財）関西文化学術研究都市推進機構 助成：（公財）京都オムロン地域協力基金 「けいはんな科学フェスティバル2023」の中のワークショップ「太陽を観察しよう」を企画し、講師を務めた。
33) 「けいはんな子ども天文クラブ天体観望会」実施担当者および講師	令和5年4月8日 令和5年9月3日 令和5年11月5日 令和5年12月3日 令和6年3月2日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ、けいはんな記念公園 けいはんな地域の住民を対象とした天体観望会を開催した
34) 「けいはんな子ども天文クラブ～星空観察教室～」実施担当者および講師	令和5年7月29日 令和5年8月26日 令和5年9月9日 令和5年10月1日 令和5年11月11日 令和5年12月9日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ 助成：国立青少年教育振興機構 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。肉眼および双眼鏡で季節の星座、アステリズム、星団、星雲、銀河、二重星等の観察指導を行なった。
35) 「けいはんな子ども天文クラブ～望遠鏡工作教室～」実施担当者および講師	令和5年9月23日 令和5年10月21日 令和5年10月28日 令和5年11月25日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ 助成：国立青少年教育振興機構 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。天体望遠鏡の組立工作进行を指導し、その望遠鏡を用いて、月、木星、土星を対象とした観測指導を行った。
36) 令和5年度「サイエンスチームなら」科学研究実践活動発表会 講師	令和6年1月20日	主催：奈良県立教育研究所 助成：奈良教育大学 奈良県下の7つの高等学校、4つの中学校、計18グループの生徒による科学研究実践活動の報告発表を聞き、講評・審査を行った。
37) 「けいはんな子ども天文クラブ天体観望会」実施担当者および講師	令和6年4月14日 令和6年10月20日 令和6年11月24日 令和6年12月8日 令和7年3月9日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ、けいはんな記念公園 けいはんな地域の住民を対象とした天体観望会を開催した
38) 日本看護研究学会 第50回学術集会 学術集会企画講演「万葉の星空」	令和6年8月25日	主催：日本看護研究学会 後援：奈良県、奈良市 「看護発祥の地」として第50回学術集会の開催地に選ばれた奈良は、看護以外にも多くの文化・技術の発祥地で、古代の天体観測の記録も多数残されている。『万葉集』には天体を詠んだ歌が約300首があり、『日本書紀』には日食、月食、彗星など様々な天文現象が約20件記録されている。古代人の星空観や最新天文学を交え、古代と現代、奈良と宇宙とのつながりについて講演した。
39) 「けいはんな子ども天文クラブ～星空観察教室～」実施担当者および講師	令和6年8月3日 令和6年9月28日 令和6年10月26日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ 助成：国立青少年教育振興機構 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。肉眼および双眼鏡で季節の星座、アステリズム、星団、二重星等の観察指導を行なった。
40) 「けいはんな子ども天文クラブ～望遠鏡工作教室～」実施担当者および講師	令和6年10月12日 令和6年11月9日 令和6年11月16日 令和6年12月7日	主催：けいはんな科学共育デザインラボ 助成：国立青少年教育振興機構 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。天体望遠鏡の組立工作进行を指導し、その望遠鏡を用いて、月を対象とした観測指導を行った。
41) 令和4年度「サイエンスチームなら」科学研究実践活動発表会 講師	令和7年1月26日	主催：奈良県立教育研究所 助成：奈良教育大学 奈良県下の8つの高等学校、3つの中学校、計11グループの生徒による科学研究実践活動の報告発表を聞き、講評・審査を行った。
42) けいはんな科学フェスティバル2025「太陽を観察しよう」出展	令和7年2月15日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、（公財）関西文化学術研究都市推進機構 助成：（公財）京都オムロン地域協力基金 「けいはんな科学フェスティバル2025」の中のワークショップ「太陽を観察しよう」を企画し、講師を務めた。
5 その他		

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項		年月日	概 要	
1 資格、免許				
1) 修士（理学）		平成3年3月	京都大学 第3900号	
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
1) けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク サイエンス・サポーター		平成26年9月10日～現在	けいはんな学研都市で実施する科学イベントや科学体験プログラムについて企画・参加・支援している。（宇宙分野担当）	
2) 奈良県産業廃棄物排出抑制等事業費補助金審査委員		平成30年4月1日～現在	奈良県産業廃棄物排出抑制等事業費補助金に係る事業についての審査を行なっている。（令和4年度より委員長）	
4 その他				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称 （著書）	単著・	発行又は	発行所、発表雑誌等	概 要
(学術論文)				
1) グループ方式によるアンケート分析演習の実践と課題	共著	平成27年12月	神戸山手短期大学紀要, 58, 41-56	2015年度前期に開講された「アンケート演習(1)」はアンケート分析を主目的とした必修科目であった。授業を終えて、本科目の教育方法や成果を検討すると同時に、本科目で採用されたグループ方式によるアンケートの計画・実施・分析・発表の利点と問題点を考察した。 共著者：渡辺卓也、飯田一郎、本多佐知子、嶋田理博
2) 学生向けポータルサイトにおける個人認証システムの構築	単著	平成30年9月	奈良学園大学紀要, 9, 93-97.	奈良学園大学保健医療学部ポータルサイト上で、学生個人ごとのコンテンツやサービスを提供するため、個人認証システムを構築した。構築したシステムは、パスワードの平文を扱わずに認証を行えるダイジェスト認証と、パスワードのオンライン自動発行機能から構成されている。システムは約2年間稼働しており、その間にのべ約400名のユーザが利用し、約1,000個のパスワードを発行した。
3) デジタル天体観望システムの構築およびそれをを用いた教育の効果	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要, 14, 73-78.	眼視での天体観望とは異なり、望遠鏡またはカメラレンズにデジタルカメラを取り付け、ディスプレイ上で観望するものをデジタル天体観望という。デジタル天体観望には、肉眼での天体観望とは異なる数多くのメリットがある。我々は、奈良学園登美ヶ丘中学校・高等学校の校舎屋上望遠鏡にデジタル観望システムを構築した。児童を対象とした教育効果の検証を行い、眼視での天体観察、デジタルでの眼視観測、それぞれに教育上のメリットがあることを確認した。 共著者：嶋田理博・福呂匠・吉岡真志
4) チームビルディングを基盤とした全学合同新入生研修の試み	共著	令和4年12月	奈良学園大学紀要, 14, 225-232.	学部・学科を越えた仲間づくりとキャンパスを知ることが目的として、全学合同で、チームビルディングを基盤とした謎解きゲームを用いた新入生研修を実施し、研修の効果を分析した。 共著者：服部律子、松岡克典、阿波邦彦、安東雅訓、川端咲子、松浦尚子、荻布優子、嶋田理博、高橋寿奈、坪内善仁、辻井直幸

5) カリキュラム改正に伴う本学保健医療学部看護学科の 新カリキュラム構築のプロセス	共著	令和4年12月	奈良学園大学紀要, 15, 233-238.	2020年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正に伴い、育成しようとする学生像や能力の検討を行い、看護学科の新カリキュラムを構築した。教員が共通理解のもとに協力しながら教育に携わるため、および、学生が目指す方向を理解できるようにするため、3ポリシーや育成する学生像、育成する能力をより具体的に明らかにした。 共著者：服部律子、吉村雅世、西菌貞子、三浦康代、嶋田理博、小林由里、佐藤郁代、西出順子、溝口みちる
：				
(その他) 【学会発表】				
1) 看護教育IT化の一考察：教える側教わる側の思いとサービスデザイン	共同	平成27年7月	情報処理学会 第47回ユビキタスコンピューティングシステム・第2回高齢社会デザイン合同研究発表会 (於 立命館大学 大阪いばらきキャンパス)	看護教育における教材の電子化においては、単純に教科書を電子書籍や補助教材で置き換えるのではなく、教える側と教わる側の双方の要望に応える形で教材とサービスをデザインすることが重要である。筆者らは看護知識と技術を教育するためのタブレット型ツールを新設の看護学科に導入し、設立準備期間を含めて約2年間運用してきた。本発表では、その過程で得られた知見を報告した。 共同発表者：笹嶋宗彦、高岡良行、嶋田理博、吉岡隆之
2) 奈良産業大学／奈良学園大学での子ども向け天文普及活動の10年	単独	平成30年6月	日本天文教育普及研究会 2018年近畿支部会 (於 奈良学園大学 登美ヶ丘キャンパス)	奈良産業大学および奈良学園大学において活動してきた子ども向け天文教室の10年を総括した。
3) ペーパークラフト展開図作成アプリによる惑星儀、天球儀の製作	単独	令和元年11月	日本天文教育普及研究会 2019年近畿支部会 (於 大阪市立科学館)	任意の全球画像または全天画像を用いてペーパークラフト展開図を作成し、教材とすることができるアプリ「PazuCraft」を用いた、地球儀、月球儀、惑星儀、天球儀の製作について紹介した。
4) コロナ禍におけるデジタル観望会の可能性	単独	令和3年8月	第35回天文教育研究会・2021年天文教育普及研究会 年会 (オンライン開催)	コロナ禍の昨年度、参加者同士の接触を避けるため、 1) 屋外でディスプレイを使用したデジタル観望会、 2) ネット中継双方向観望会、3) 録画映像観望会という異なる3種類の観望会を、それぞれ異なる機会に実践した。各観望会について報告するとともに、デジタル観望会の長所・短所について考察した。
5) 保健医療大学教育における効果的なオンライン学習の活用に関する検討	共同	令和4年9月8日	2022年度 私立大学情報教育協会 教育イノベーション大会 (オンライン開催)	オンライン授業 の実際を、授業設計 (Instructional Design: ID) の視点で概観し、保健医療系学部におけるICT活用をどのように推進できるかを検討した。 共同発表者：堀内美由紀、宮崎誠、嶋田理、伊藤健一、服部律子、大浦智子
6) 双眼装置を用いた「ハイブリッド」天体観望会	単独	令和5年12月17日	日本天文教育普及研究会 2023年近畿支部会 (オンライン開催)	天体観望には、昔ながらの眼視観望と、近年普及してきたデジタル観望があり、それぞれにメリットがある。望遠鏡で集めた光を双眼装置で2つに分け、1台の望遠鏡でその両方を同時に行える「ハイブリッド」天体観望会の実践を報告した。

教 育 研 究 業 績 書		
令和6年 6月20日		
氏名 臼井 キミカ 印		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
看護学	地域・老年看護学	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例		
1) 学生の背景を考慮した動機づけと授業設計	平成7年4月 ～ 現在に至る	大阪府立看護大学看護学部看護学科講義科目「生活支援看護学概論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科において実践した。近年は高齢者と同居した経験のない学生が増加しているが、それらの実態を知って講義を展開するために、事前に高齢者関連の実態調査を行い、毎回の講義の導入に用いる。学生は高齢者を身近な存在として感じながら、理解できると評価している。
2) マルチメディアを利用した講義の効果的な方法	平成7年4月 ～ 現在に至る	大阪府立看護大学看護学部看護学科演習科目「生活支援論」、長崎大学大学院医歯薬学研究科「老年看護学概論」、大阪市立大学医学部看護学科「老年看護学概論」、甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科「老年看護学概論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科「成人老年看護学概論」において実践した。高齢者の特性の理解を深めるために、既存のビデオ教材活用とともに、最新の身近な情報である新聞の切り抜き、テレビ番組の録画等を編集して用いることで学生の関心を高め、実践的な内容にしている。
3) ゲストを招き、活きた講義の展開	平成10年4月 ～ 現在に至る	大阪府立看護大学看護学部看護学科講義科目「生活支援看護学概論」、甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科「老年看護学概論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科「成人老年看護学概論」で実践している。健康で円熟した精神の高齢者、要介護状態でありながらもボランティア活動等で人生に挑戦している高齢者、家族介護者（家族の会代表）等をゲスト招き、生きてきた人生、そして現在と将来の希望等について語ってもらった後、学生との意見交換を行い、高齢者の健康や高齢者看護の機能と役割についての理解が深められるような授業展開をしている。終了後はレポート提出により評価およびフォローアップを行い、その後の講義に活かしている。
4) 学生のニーズに対応した講義の展開	平成15年4月 ～ 現在に至る	大阪府立看護大学看護学部看護学科講義科目「生活支援看護学概論」、長崎大学大学院医歯薬学研究科「老年看護学概論」、大阪市立大学医学部看護学科「老年看護学概論」、甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科「老年看護学概論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科「成人老年看護学概論」において実践した。講義に対する感想・意見を提出してもらい、次回の講義時に、理解が十分でなかった部分は補足説明を行うなど学生の評価を生かした講義を工夫している。
2 作成した教科書、教材		

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1) 講義用教材作成 「諸外国の高齢者看護の現状と課題」	平成13年4月 ～ 現在に至る	諸外国の高齢者看護の現状を知り、日本における高齢者看護の課題を明らかにするために、アメリカ、オーストラリア、スウェーデン、デンマーク、フィンランド等での海外視察情報をDVD/Blu-rayなどの視聴覚教材に編集して解りやすく解説した（奈良学園大学医療看護学部看護学科 科目名：国際看護論、成人老年看護学概論）。
2) 車いすを使用する認知症高齢者の適正な座位姿勢への支援 －看護・介護職のためのガイドライン－ (DVD教材作成)	平成22年3月～ 現在に至る	施設や病院で認知症高齢者が普通型車いすに不自然な姿勢で座っている姿を見かけることがあるが、高齢者の安全で安楽な生活の実現には座位姿勢への支援が重要であり、その手がかりは日頃のケアの中にあることを理解してもらうために動画のDVDを制作した。DVDでは、座位姿勢での観察項目、観察方法、判断のポイント等について解説し、支援方法では①椅子の使用が考えられる場合と、②椅子に座ることは困難と考えられる場合を紹介し、具体的には3つの事例のアセスメントから支援方法、判断の根拠を含めて動画で解りやすく説明し、活用しやすく工夫した（奈良学園大学保健医療学部看護学科 科目名：成人老年看護援助論Ⅱ）。 共著者：白井みどり、佐々木八千代、北村有香、長畑多代、山内加絵、今川真治、 <u>白井キミカ</u>
3. 教育上の能力に関する大学等の評価 「老年看護学概論」の学生評価等		大阪府立看護大学看護学部看護学科、生活支援看護学概論、生活支援論、総合研究、老年看護学実習担当(教授)として、高齢者看護における実践的調査・研究で培った知識経験を、ビデオやOHP、液晶プロジェクター等で理解しやすく編集するなど、生きた授業を行っており、高い教育能力を有していると評価された。また、大阪市立大学医学部看護学科、及び甲南女子大学での「老年看護学概論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科「成人老年看護学概論」での学生評価では「概ねよい」と評価された。
4. 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 保健・医療・福祉職に対する研修活動	平成12年3月 ～ 現在に至る	大阪府、京都府、兵庫県、神奈川県、広島県、岡山県、石川県、宮崎県、香川県、長崎県等で介護保険事業者、保健・医療・福祉職員に対して「認知症高齢者の人権擁護」「高齢者虐待予防と対処」についての講師を務めた。
2) 介護保険事業者等に対する 人権関連研修活動	平成13年5月 ～ 現在に至る	介護保険事業者、福祉関係職に対する人権啓発の講演「よりよいサービス提供のために－在宅における身体拘束－」、「高齢者虐待の現状と課題」、「施設における人権擁護」等の講師を務めた。
3) 大阪府立大学大学院リハビリテーション学研究科	平成27年6月 ～ 平成31年3月	コア・プロジェクト外部評価委員会委員
4) 第6回長崎県認知症グループホーム大会 特別講演	平成27年11月	特別講演講師 テーマ「グループホームだからできたこと」
5) 日本病院協会 平成28年度「認知症ケア講習会」講師	平成28年6月	平成28年度「認知症ケア講習会（認知症ケア加算2取得講座）講演講師。テーマ「入院認知症患者に対する看護に必要なアセスメントと援助スキル」

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
6) 暮らしの学校 特別講座	平成28年7月 ～平成30年7月 愛知県岡崎市	第58回特別講座 講演講師 テーマ「家族のための認知症高齢者ケア～後悔 しない介護とは～」 テーマ「幸せに暮らす心と生き方」 「家族のための認知症高齢者介護ケア」 第59回「健康と家庭の医学」特別講座 講師 テーマ「絆を深め、不安を和らげる ～タッチ ケア～」
7) 日本病院協会 平成28年度「認知症ケア講 習会」	平成28年9月	平成28年度「認知症ケア講習会（認知症ケア加 算3取得講座）講演講師。テーマ「入院認知症患 者に対する看護に必要なアセスメントと援助ス キル」
8) ネットワーク大府 ケア担当者研修	平成28年9月	平成28年度 ケア担当職員研修講師。テーマ 「北欧の認知症ケアに学ぶ」
9) 愛知県看護協会 研修会	平成29年1月～ 令和3年3月	愛知県看護協会 高齢者看護ケア研修会 講師
10) 名古屋市高齢者虐待相談支援会議	平成29年4月～ 平成31年3月	名古屋市高齢者虐待相談支援介会議 スーパー バイザー
11) 高齢者虐待防止、高齢者の養護者に対する 支援等に関する法律に基づく「市町村・都道 府県における高齢者虐待への対応と養護者支 援について」のマニュアル改訂 (厚生労働省)	平成29年10月 ～平成30年3月 総頁101ページ	高齢者虐待防止、高齢者の養護者に対する支援 等に関する法律に基づく「市町村・都道府県に おける高齢者虐待への対応と養護者支援につい て」のマニュアル改訂委員会（座長）として、 平成29年度までの各自治体における高齢者虐待 への取組状況、その他の制度運用状況を踏まえ て、マニュアル内容の追補・充実を図り、より 適切な対応に資するマニュアルとして改訂を 行った。
12) 市町村・地域包括支援センターへの期待 ～学会と朝日新聞との合同調査から～ 講演	平成29年7月 16日（千葉県 松戸市）	日本高齢者虐待防止学会主催研修会において高 齢者虐待防止に資するために、保健医療福祉専 門職及び行政担当者を対象（60人、50分間）に実 践力向上を目的として研修を実施。講演テーマ は「市町村・地域包括支援センターへの期待～学 会と朝日新聞との合同調査から～」と題して学 会と新聞社との合同調査の結果からみえてきた 市区町村・地域包括支援センターをめぐる支援 課題に関する最新の動向を提示・問題提起し た。さらに、看護・医療関係のQ&Aコーナーで意 見交換・実践的な助言等を実施した（約90分 間）。
13) 高齢者のケアの質の向上を目的とした実践 と啓発活動 講演	平成19年4月 ～ 現在に至る	認知症高齢者の尊厳を尊重したケアの具体的な 方法やコミュニケーション方法としての回想法 について、その有効性と具体的な進め方、留意点 及び認知症高齢者が自己決定をする意味や、それ を支えて質の高いケアを提供するための視点に ついて啓発活動を実施。対象は①グループホー ムの認知症高齢者とケアスタッフ、②医療機関や 地域包括支援センター等に勤務する看護職等 ③一般住民 ④介護老人保健施設従事者など。
14) 学園前サロン 講演	令和5年10月 28日	奈良県学園前サロンにおいて一般住民を対象に 健康教育・啓発活動を実施した。講演テーマは 「健康と食生活～健康日本21を基本とした栄養 と健康問題を中心として～」

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
15) 高齢者虐待防止セミナー (Zoomオンラインセミナー、オンデマンドビデオ配信)	令和6年7月 18日 (ビデオ公開 期間：7月22日 ～8月22日)	日本高齢者虐待防止学会理事会企画プログラム「夏季学会セミナー」2024年7月18日開催、「法改正と高齢者虐待防止課題～今、『現場』で何が起こっているのか?～」において、テーマ「グローバル化する介護」で講演。対象は、高齢者施設職員、高齢者介護職員、道府県・市町村担当者・地域包括支援センター等（Zoom定員：200人）である。
16) 登美ヶ丘カレッジ「新しい研究成果を活かした健康な生活」講演	令和6年12月 7日	奈良学園大学 登美ヶ丘カレッジにおいて、地域在住高齢者を対象に、テーマ「新しい研究成果を活かした健康な生活」と題して、成人期では健康に関するエビデンスと認知されていた事柄も高齢期では否定される場合も多く（主として長期間の縦断研究による成果による）、それらの内容を活かした高齢期を健やかに豊かに生き抜く生活術について実践的に解説した。
17) 奈良学園大学図書館 「研究の森」展示	令和7年3月1日 ～5月15日	奈良学園大学図書館の「研究の森」コーナー展示を行った。研究テーマは「看護学生と共に取組んだ認知症高齢者看護に関する研究 その1：居心地の良い環境の構成要素 その2：人生紙芝居を用いた回想法の効果」である。
5. その他 ① 学位論文指導実績	平成11年4月 ～ 現在に至る	1) 大阪府立看護大学大学院（前期課程）指導教授として博士前期課程学生6人を対象に6年間「老年看護学研究」を指導した。学位論文のテーマは「環境の変化にみる痴呆性高齢者の行動特性―施設建て替えに伴う転居を通して―」「排泄援助場面でのプライバシー保護―高齢者と看護職双方の立場からの考察―」「高齢血液透析患者の食に対する看護ケア」「予防的ケアに至った看護職の認識の特徴―痴呆性高齢者の問題行動を予測して―」「高齢者の身体的抑制に直面する病棟勤務看護者のジレンマに関する研究」「痴呆性高齢者看護の「人生暦」に関する研究―行動障害の対処とQOLの向上のために―」である。 2) 大阪府立大学大学院（後期課程）指導教授として平成13年度より3名の博士後期課程の「生活支援看護学特別研究」を担当し、博士後期課程生2名の博士論文「痴呆性高齢者の感情反応と行動に基づく生活環境の査定方法の開発」、「高齢者の強みを導入した介護予防プログラム開発とその有用性」を指導した。 3) 大阪市立大学大学院指導教授として平成20年度より3名の修士課程の「生活支援看護学特別研究・課題研究」を担当し、修士課程生3名の課題研究論文「養護者から虐待を受け分離・保護の処遇にある高齢者のニーズ～回想を通しての語りからの一考察～」施設入所中の高齢者を持つ娘介護者の介護に対する肯定的感情の変化」「施設に環境移行した認知症高齢者の初期の思いと継続的関わり」を指導した。

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
		4) 甲南女子大学大学院看護学研究科指導教授として平成24年度より3名の修士課程の「老年看護学特別研究・老年看護学課題研究」を担当し、「認知症の人へ選択の機会を提供する意味－グループホーム入居者の表情・行動を手がかりにした介入研究－」「家族介護者の嫁が認知症になった姑を介護する意味」を指導した。 5) 人間環境大学大学院看護学研究科指導教授として平成27年度より合計3名の博士後期課程生、平成29年度からは合計4名の博士後期課程生の「成人・高齢者特別研究」を担当し、平成30年度博士論文「認知症高齢者への選択的支援ケアモデルの開発」、「関節拘縮高齢者に対するポジショニングケアの有効性」、「認知症高齢者への表情筋運動を取り入れたケアプログラム開発と有効性の検討」「軽度から中等度のアルツハイマー型認知症高齢者を対象とする写真療法の有効性の研究」を指導した。 6) 岐阜保健大学大学院看護学研究科指導教授として令和3年度より1名の修士課程生の「広域看護学」特別研究を担当し、論文指導した。 7) 奈良学園大学大学院看護学研究科指導教授として令和5年度より合計4名の修士課程生を担当し、令和6年度修士論文「地図アプリケーションを使用した回想法が地域在住高齢者の感情及び生体に与える影響」「閉じこもり高齢者が改善に至るプロセス－複線径路・等示性モデリング(TEM)による変容の分岐点および文化的・社会的影響の分析」「新型コロナウイルス感染症による面会制限の中で入院高齢患者とその家族の心理的・社会的苦痛を緩和するためのアプローチ」を指導した。なお、1名は「訪問看護師による『在宅療養に対する意思決定支援』における遺族の満足度に関連する要因」を継続指導中である。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項	年 月 日	概 要
1 資格、免許 看護師免許 養護教諭一級普通免許 保健師免許 高等学校教諭二級普通免許 衛生管理者免許証 修士（社会福祉学） 日本公衆衛生学会認定専門家	昭和43年 5月16日 昭和47年 3月16日 昭和47年 5月31日 昭和49年 2月20日 昭和57年 9月30日 平成5年 3月31日 平成23年 4月22日	第182238号 昭46養一第102号 第31275号 昭48養高二普第4661号 第い3871号 大阪府立大学 第1号 日本公衆衛生学会認定専門家として認定 (登録番号第739号)
2 特許等 ありません		
3. 実務の経験を有する者についての特記事項	平成26年 1月	日本看護系大学協議会専門看護師教育課程認定委員会より専門看護師教育課程認定審査において「老年看護」可と判定(大学院該当科目：看護研究方法論、老年看護学特講、老年看護学援助特講、老年看護学演習Ⅰ、老年看護学演習Ⅱ、老年看護学実習Ⅰ、老年看護学実習Ⅱ)(平成27年4月人間環境大学大学院看護学研究科開学に伴う審査)

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項				
事 項		年月日	概 要	
4. その他 (科学研究費、共同研究補助金等) 22) 認知症高齢者への表情筋運動を取り入れたケアプログラム開発と有効性の検討		平成28年度～ 平成31年度	科学研究費補助金研究（基盤研究(C)） 認知症の進行に伴い「笑う」ことなどの感情の表出が乏しくなりがちな認知症高齢者に対して、表情筋運動を取り入れたケアプログラムの開発と有効性の検討を行い、その実践応用性を検証することを研究目的とする。 研究代表:神谷智子 共同研究者:福田由紀子、杉浦美佐子、竹内貴子、奥村潤子、 <u>白井キミカ</u> 、安藤純子、中川武夫、中島香緒里、服部美穂、山田聡子 〔研究分担者として介入調査の企画・集計・分析、総括〕を担当。	
23) 写真療法が軽度から中等度の認知症高齢者のQOLに及ぼす効果に関する研究		平成30年度～ 令和2年度	科学研究費補助金研究（基盤研究(C)） 認知症高齢者認知症高齢者を対象にした写真療法が認知症高齢者のQOLの向上に及ぼす効果を紹介群30名と比較群30名の介入研究（不等対照群デザイン）により明らかにする。収集データは、MMSE、DBDスケール、QOLDスケール、意欲評価指標、半構成インタビュー、指尖脈による自律神経活動8ゆらぎ数値：リアプノフ指数等)のデータを基礎水準期(4週間)、操作導入期（8週間）、追跡期（4週間）に測定する。介入プログラムは5つのセッションを配置した60分のプログラムとする。データ分析は、SPSSを用い基礎水準期の測定値をベースラインとして各測定値との比較をFriedman検定等を用い、インタビュー調査は質的分析を実施した。 研究代表:荻野朋子 共同研究者: <u>白井キミカ</u> 、 〔研究分担者として介入調査の企画・集計・分析、総括〕を担当。	
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名	概 要
128. 人権意識と認知症高齢者の看護	単著	平成27年3月	研究助成兵庫県人権啓発協会 研究紀要第16号 平成27年3月 pp. 69-85	認知症の人の人権を守り、認知症になっても暮らしやすいまちづくりにつながるのかを検討した結果、認知症の人の視点で考え、認知症の人が変わるのではなく社会が変わることが重要。認知症は人生の終わりではなく、それからの人生に挑戦する希望を持てる方策のひとつに「ユマニチュード」があり、さらに人生の最期まで寝たきりにならない技法もその中から修得できる可能性がある。認知症は誰にも起こる可能性があり、家族介護に関する提言を行った。
129. 心身のストレスおよび作業量から見た体圧移動で座面が変化するERチェアの評価ー健康成人女性および高齢者を対象としたプレテストの結果からー (査読付)	共著	平成28年3月	甲南女子大学研究紀要 看護学・リハビリテーション学編 第10号 pp. 19-28	研究目的はA社が開発したERチェアと通常の椅子を比較して使用者の心身のストレス、能動的な作業量に与える影響の違いを明らかにする。対象は健康成人女性6名と高齢者8名の計14名。研究デザインはクロスオーバー・デザインであり、読書等の課題を課したときの主観的疲労感、唾液アミラーゼ値、作業量等を比較した結果、統計的な差が認められたが、交互作用が認められ、更なる検証が必要であるものの、ERチェアは心身のストレス「を軽減させることが示唆された。 分担部分は研究代表として企画・総括を担当 共著者：丸尾智実、兼田美代、 <u>白井キミカ</u> 、辻下守弘、速水裕子

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項				
事 項		年月日	概 要	
130. 認知症ケアメソッド「バリデーション」「パーソンセンタードケア」「ユマニチュード」の文献検討によるメソッド比較 (査読付)	共著	平成28年3月	中部学院大学・中部学院大学短期大学部、研究紀要第17号 17. PP. 73-79	認知症ケアの代表的なメソッドである、バリデーション、パーソンセンタードケア、ユマニチュードについて文献検討による方法でメソッドの特徴を比較検討した。医学中央雑誌、CiNii, EBSCO hostから検索し、バリデーション17件、パーソンセンタードケア36件、ユマニチュード8件を抽出し、精査した結果、「パーソンセンタードケア」と「バリデーション」については評価尺度に基づけケアがなされていたが、「ユマニチュード」は評価指標が存在しなかった。 共著者：中谷こずえ、 <u>臼井キミカ</u> 、安藤純子、兼田美代、神谷智子 担当部分：研究企画、総括を担当。
131. ベトナム社会主義共和国における看護の現状－JICA事業 草の根技術協力時魚緒「老年ケア・キーパーソン研修」参加者調査から（査読付）	共著	平成28年7月	日本ヒューマンヘルスケア学会誌1 (1) pp. 21-32 日本ヒューマンヘルスケア学会	ベトナムにおける看護の現状と課題を明らかにして、わが国の看護職に期待されていることを明確にするために、「老年ケア・キーパーソン養成研修」受講者に対して研修前後のアンケート調査を行った。その結果、「ベトナムの看護」では改善が必要であると全員が回答していたものの、教育内容に日常生活支援技術は含まれていないため、他国の価値観の押し付けではない技術協力事業となるための方策や検討が急務である。（総13頁） 共著者：中谷こずえ、海老論香、 <u>臼井キミカ</u> 担当部分：研究企画、総括を担当。
132. 通所介護における選択的ケアの意味－利用者、ケア提供者へのインタビュー調査から－ (査読付)	共著	平成29年7月	日本ヒューマンヘルスケア学会誌2 (1) pp. 45-57	「自己選択・自己決定」をケア理念としている通所介護での選択的支援ケアの意味を明らかにするのが研究目的である。対象は利用者14名、ケア提供者14名であり、面接調査の結果をテキストマイニングで解析し、それぞれの主要語を主成分分析とクラスター分析を用いて類型化した結果、選択的支援ケアはコンフォートにつながる4つのコンテキストに全て包含できること、ケアは利用者の自律を支え、ケア提供者と利用者双方が「超越」へと導かれる可能性を秘めていた。 共著者：中谷こずえ、 <u>臼井キミカ</u> 、兼田美代 担当部分：研究企画、総括を担当

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項				
事 項		年月日	概 要	
133. 矯正施設で生活する元受刑者の健康プログラム開発に向けて (査読付き)	共著	平成30年3月	中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要第19号 pp. 81－87	元受刑者の健康状態と受診の実態から、健康増進プログラムを開発することが最終目的であり、その第一段階として基礎データを収集することが今回の研究目的である。研究方法は支援法人から紹介された6名（男5名、女1名、年齢レンジ50～73歳）に対して1人20分程度の半構成面接を実施し、その内容をICレコーダーに録音し、逐語録に起こし、共通点を探った。対象者が少人数であるため一般的傾向を導くことは困難であるが、5人は脳梗塞等による疾病・障害があるため生活に支障があり、服薬治療中4人、飲酒及び喫煙習慣あり各々4人、痛みの訴え、特に腰痛が共通していた。長寿に対する認識では、長生きは考えていない3名、早く死にたい1名であり、相談者なし3名は、自らの意思で他者との関わりを絶ち、他者に頼らないと回答していた。 共著者：中谷こずえ、小嶋健仁、 <u>臼井キミカ</u> (担当部分：研究企画、総括を担当)
134. 長期臥床高齢者の筋緊張による関節屈曲拘縮に対するポジショニングケアプログラムの有効性 (原著論文・査読付き)	共著	令和2年1月	社会医学研究 Vol. 37. No1、PP24－34	研究目的は長期臥床高齢者の筋緊張によるポジショニングケアプログラムによるケアを実施し、その効果を明らかにする。対象は長期臥床状態にあり、肘・膝関節屈曲拘縮を有する高齢者20名とケア提供者147名、方法は90日間のシングル・ケースA-B型準実験介入研究。対象高齢者に30日毎に測定した関節可動域等の客観的評価とケア提供者に介入前後の主観的評価をフルードマン検定等を用いて総合的に評価。結果：90日間の測定が可能であった12名の高齢者の肘・膝関節屈曲、膝関節筋緊張は全て有意に改善、肘関節筋緊張は改善傾向、脳波変動解析による自律神経機能（LF/HF）は差はなく、ケア提供者の主観的評価は内的一貫性があり、信頼性は高く、評価項目7項目中3項目有意に改善した。以上からポジショニングケアプログラムは長期臥床高齢者の筋緊張による関節屈曲拘縮の改善に有効であることが示唆された。（総11ページ） 共著者：兼田美代、 <u>臼井キミカ</u> 、中谷こずえ 担当部分：研究企画、総括を担当。
135. 介護老人保健施設の認知症入所者への選択的支援ケアモデルの有効性 (原著論文・査読付き)	共著	令和2年3月	高齢者虐待防止研究 Vol.1. No1. PP. 2-17 (2020)	研究目的は介護老人保健施設に入所中の認知症高齢者への選択的支援ケアモデルを作成し、その効果を検証することである。 (総16ページ) 共著者：中谷こずえ、 <u>臼井キミカ</u> 、兼田美代、小嶋健仁 担当部分：研究企画、総括を担当。
(その他) ①口頭発表				

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項				
事 項		年月日	概 要	
169. 高齢者への実用化を目指した体圧移動で座面が変化するERチェアの快適性評価 (示説)	-	平成27年6月	第6回日本プライマリ・ケア連合学会大会 (茨城県)	高齢者への実用化を目指した体圧移動で座面が変化するERチェアを試作した。その快適性を評価するために、健康な高齢者を対象に、日常生活での座位で行う様々な行為（テレビを見る、新聞・雑誌を見る、読書をする、寛ぐ等）をERチェアと普通の椅子で実施時の体圧の状況、唾液のアミラーゼ値測定、主観的評価等を実施し、年齢、性別、体格（身長・体重・BMI等）、座位時間により比較検討し、快適性の評価を実施し、有効性を評価した。 共著者：丸尾智実，<u>臼井キミカ</u>，兼田美代，辻下守弘，速水裕子，（TBカワシマ株式会社受託研究） 担当：研究の総括
170. 認知症ケアメソッド「humanitude ユマニチュード」の文献検討 (示説)	-	平成27年12月	第35回日本看護科学学会学術集会 (広島)	認知症の代表的なケアメソッドである「バリデーション」「パーソンセンタードケア」「ユマニチュード」の3つの特徴を文献で比較検討した。医学中央雑誌、CiNii, EBSCO host により検索し、バリデーション17件、パーソンセンタードケア36件、ユマニチュード8件が抽出できた。その結果、「パーソンセンタードケア」と「バリデーション」では評価尺度に基づいてケアがなされていたが、「ユマニチュード」では評価指標が存在しないことが明らかになった。
171. 笑いの介入による効果と評価指標に関する文献検討 (示説)	-	平成27年12月	第35回日本看護科学学会学術集会 (広島)	認知症の進行に伴い「笑う」ことなどの感情の表出が乏しくなりがちな認知症高齢者に対して、表情筋運動を取り入れたケアプログラムの開発を研究の最終目的としており、今回の研究はその基礎的データの収集である。笑いの介入による効果と評価指標を明らかにするための国内外における文献レビューの結果を明らかにした。 共著者：神谷智子，中谷こずえ，兼田美代，<u>臼井キミカ</u>，安藤純子 担当：研究の総括
172. フィンランドの高齢者介護施設における認知症高齢者ケアと介護状況－3施設への調査訪問とアンケート調査（2施設）から－ (示説)	-	平成28年6月	第17回日本認知症ケア学会大会 (神戸)	研究目的は、フィンランドにおける認知症高齢者ケアの実情と、介護に携わる職種の実態を明らかにすることであり、ラップランド州の3つの高齢者介護施設を訪問調査と、2施設を対象にしたアンケート調査の結果を分析し、日本の認知症ケアとの違いと課題を明らかにした。 共著者：三宅眞理，佐瀬美恵子，<u>臼井キミカ</u>，兼田美代，山本恵
173. Support for choice during everyday life for elderly care facility residents: a literature review (高齢者ケア施設利用者の日常生活における選択支援ケアの 文献検討) (査読付) (示説)	-	平成28年10月	2016 Global Human Caring Conference- China (Wuhan, China) 国際ケアリング学会 (中国) 武漢	研究目的は、高齢者の日常生活における「選択するためのケア」について文献検索を行い、その内容を明らかにすることである。Webデータベースは、1995年から2015年までの20年間とし、キーワードを「選択」「高齢者」「ケア」「看護」として検索した。その結果、医学中央雑誌では97件のうち3件、海外文献からは44件のうち5件が抽出できた。しかし、国内外を問わず、文献の内容は共に医療的な内容の選択についてであり、日常生活に関する内容は存在しなかった。 担当：論文全体の総括を担当。 共著者：Kozue Nakatani, <u>Kimika Usui</u>

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項				
事 項		年月日	概 要	
174. The meaning of the choice support care in everyday life to the day care facility utilization elderly (通所介護施設の高齢利用者に関する日常生活における選択支援ケアの意味) (査読付)	-	平成29年4月	32rd International Conference of Alzheimer's Disease International 26-29 April 2017. Kyoto, JAPAN 第32回国際アルツハイマー病協会国際会議 (京都)	研究目的は、利用者・ケア提供者の2者間での日常生活に関する選択的支援ケアの意味を明らかにする。方法は、通所介護サービス利用者、ケア提供者各14名合計28名にインタビュー調査を行い、テキストマイニングで解析し、それぞれの主要語を主成分分析とクラスター分析による類型化し統合する。結果：単語頻度分析により主要語は利用者26語、ケア提供者42語抽出され、それぞれの主要語を類別抽出すると、利用者6クラスター、ケア提供者8クラスターに類別できた。両者を統合し、「選択的支援ケアは、身体的、サイコスピリットの、社会的、環境的要素もコンフォートな状態に変化させることができるケア」であると導き出され、さらに選択的支援ケアはコンフォートに繋がる4つのコンテキストに全て含まれるケアであると意味づけられた。 担当：論文全体の総括を担当。 共著者：Kozue Nakatani, <u>Kimika Usui</u> (中
175. Promoting of Understanding Dementia Report of the Project "Dancing with Peoples with Dementia ~Let's Dance Together~"	-	平成29年4月	32rd International Conference of Alzheimer's Disease International 26-29 April 2017. Kyoto, JAPAN 第32回国際アルツハイマー病協会国際会議 (京都)	認知症に対する理解を深めることを目的にして 歌詞・作曲等を行い、その内容をDVDに収め、認知症の人も、そうでない人も、関心の高い人もそうでない人も一緒になって踊るプロジェクトを立ち上げて活動してきた。参加者総数は2012年から5年間で6660名であり、その様子・経過と成果について写真とともに分析評価した。認知症の人とつながる力として、ダンスは効果的なコミュニケーション手段であり、国境を越えての有効性が示唆された。 担当：論文全体の総括を担当。 共著者：三宅真理、佐瀬美恵子、前原園代、橋本洋子、 <u>臼井キミカ</u> 、David Sykes, Heather Hill, 植田正美
176. A Study on Timing of Laughing Seen in Healthy Elderly People Who Do Not Utilize Nursing Service (Poster) 介護保険サービスを利用していない健康な高齢者を対象にした笑いのタイミングに関する研究 (示説) (査読付き)	-	平成30年6月	The 7th GCQHR2018 (Global Congress for Qualitative Health Research), 21-22 June 2018, Seoul, Republic of Korea. 第7回国際質的健康学会 韓国 (ソウル)	研究目的は地域で生活しており、介護保険等のサービスを利用していない元気高齢者を対象に、日常生活で笑い始める場面を明らかにすることである。研究対象は某地域の老人クラブに所属する高齢者であり、「どのような状況下で声を出して笑うか、笑顔になるか」の質問に対しての回答を質的に分析した結果、笑い始めるのは人との関係性が影響することが明らかになった。 担当：論文全体の総括を担当。 共著者：神谷智子、 <u>臼井キミカ</u> 、兼田美代、中谷こずえ (Satoko Kamiya, <u>Kimika Usui</u> , Miyo Kaneda, Kozue Nakatani)

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項				
事 項		年 月 日	概 要	
177.The Effectiveness of Positioning Care for Long-term Bedridden Elderly People in Joint Contracture Caused by Muscle Tone:An Interviews survey of care providers (Poster) 筋緊張による関節拘縮のある長期臥床高齢者のためのポジショニングケアの有効性～ケア提供シヤンへのインタビュー調査から～ (示説) (査読付き)	-	平成30年6月	The 7th GCQHR2018 (Global Congress for Qualitative Herlth Research), 21-22 June 2018, Seoul, Republic of Korea. 第7回国際質的健康学会 韓国 (ソウル)	研究対象は「1ヶ月以上臥床状態で療養病棟入院の肘・膝・後頸部に拘縮のある高齢者」に3ヶ月間ポジショニングケアを継続した看護・介護職。6病棟から無作為抽出した18名に半構面面接調査を実施。逐語録からポジショニングケアの有効性を意識した部分を一要素として抽出し、類似するものをまとめてネーミングしカテゴリーに分類。結果：ケアの有効性は「ケア方法の重要性を理解し納得した」「ケアが高齢者の心身により影響を及ぼすことを観察し実感した」「高齢者と家族とケア提供者の三者の信頼関係が高まりケアを楽しめた」「ケアの有効性の意味を考え他の高齢者にも活用できた」の4カテゴリーに分類できた。結論：ポジショニングケアは関節拘縮のある高齢者の心身両面に好影響をもたらし、その有効性を家族・職員間で共有でき、ケアの楽しさへと繋がり、他的高齢者への活用へと広がる。
178.Assessment of positioning care for joint flexion contracture caused by muscle tone in long-term bedridden elderly people (Poster) 療養病棟に入所中の長期臥床高齢者の筋緊張による関節屈曲拘縮に対するポジショニングケアの評価 (示説) (査読付き)	-	平成30年7月	The12th WHOCC2018(Global Network of WHO Collaborating Centres for Nursing and Midwifery) 17-20 July 2018, Cairns, Australia. オーストラリア (ケアンズ)	共著者：兼田美代、<u>臼井キミカ</u>、中谷こずえ、神谷智子、中野美加 長期臥床者の関節拘縮には筋緊張に起因するものが考えられる。対象は肘・膝関節拘縮拘縮(60度以上)、後頸部後屈拘縮(20度以上)の寝たきり高齢者20人に5カ月間のポジショニングケアによる介入を行い、関節可動域・自律神経指標LF/HF等の6項目、ケア提供者によるVAS主観的QOL評価等2項目の総合的評価によりケアの有効性を検証。全データ収集が可能であった2名(平均年齢94歳)のすべての関節拘縮が有意に改善し、QOL評価では「関節が柔らかくなり、表情が和らぎ笑顔が出てきた」等があり、心身状態が深刻な高齢者でもケアにより関節屈曲拘縮は改善し、QOLが高まることが示唆された。 担当：論文全体の総括を担当。
179.A study for healthy elderly people on awareness of positive sentiment and stress depending on frequency of laughing (Poster) 健康な高齢者の笑いの頻度に関連する肯定的な感情とストレスの認識に関する研究 (示説) (査読付き)	-	平成30年7月	The12th WHOCC2018(Global Network of WHO Collaborating Centres for Nursing and Midwifery) 17-20 July 2018, Cairns, Australia. オーストラリア (ケアンズ)	共著者：兼田美代、<u>臼井キミカ</u>、中谷こずえ、神谷智子、中野美加 研究目的は、地域で生活する健康な高齢者を対象に、笑いによって脳に生じるポジティブな感情がどのように高齢者のQOLに影響を与えるのかを明らかにすることである。研究方法は郵送法によるアンケート調査であり、「笑いの頻度」「高齢者用うつ尺度GDS-15」「ストレス認識(VAS)」等であり、5つの肯定的な感情による合成変数を作成した。分析は年齢、性別、家族構成、心身状況、家庭内・地域等での役割、仕事の有無とその内容、社会的交流の程度等との関連を解析した。笑いの少ない群に有意にうつ傾向が認められ、うつ傾向を予防するには日常生活に表情筋運動を意図的に取り入れていく必要性があり、介入研究でその成果を明らかにする予定である。 担当：論文全体の総括を担当。 共著者：神谷智子、<u>臼井キミカ</u>、兼田美代、中谷こずえ (Satoko Kamiya, Kimika Usui, Miyo Kaneda, Kozue Nakatani)

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項				
事 項		年 月 日	概 要	
180. 元受刑者に対する健康実態・意識調査 －インタビュー調査から－ (示説) (査読付き)	－	平成30年 9月	日本ヒューマンヘル スケア学会学術集会 (大府市)	研究目的は矯正施設で生活する元受刑者の健康実態・予防意識を明確にし、看護職が介入可能な課題を明らかにし、健康プログラムの開発をすること。対象者6名に面接調査を実施した結果、既往歴の無い者の現在歯数は全国平均を超えており、その背景には、健康知識・意識が高く、特に歯の衛生に留意していたことが明らかになった。矯正施設という限られた条件下でも、健康に留意した支援・指導が可能であり、施設入所中から口腔ケアに重点をあてた支援の必要性が示唆された。 担当：論文全体の総括を担当。 共著者：中谷こずえ、小寫健仁、 <u>臼井キミ</u>
181. 介護老人保健施設における日常生活の選択的支援ケア実施頻度と必要性の認識－その人らしさのケアの実現を志向して－ (口頭発表) (査読付き)	－	平成30年9 月	第15回日本高齢虐待 防止学会学術集会 泉州大会 (堺市) 抄録集pp. 171	研究目的は介護老人保健施設における日常生活の中で日常的に実施している選択的支援の実態について、その頻度とケア職種の支援の必要性に関する認識の実態を明らかにすることである。 担当：論文全体の総括を担当。 共著者：中谷こずえ、 <u>臼井キミカ</u> 、兼田美代、神谷智子、中野美加
182. 療養病床入所中の長期臥床高齢者の筋緊張による関節屈曲拘縮に対するポジショニングケアの有効性－ケアの質の向上を目指した試み－ (口頭発表) (査読付き)	－	平成30年9 月	第15回日本高齢虐待 防止学会学術集会 泉州大会 (堺市)	療養病棟に入院中の関節屈曲拘縮を有する長期臥床高齢者20人を対象にポジショニングケアを行い有効性を明らかにした。拘縮部位は肘関節、膝関節、屈曲60度以上、介入期間は、5か月間。評価は関節可動域、筋緊張(MAS)、自律神経指標LF/HF、写真撮影、ケア提供によるVisual Analogue Scale測定等であり、全ての測定が可能だったのは12名(5名死亡等)。測定結果をFriedman検定等により検定した結果、いずれも有意(肘関節:p<.000、膝関:p<.000、後頸部後屈:p<.001)、筋緊張は膝関節では有意(p<.005)に改善、肘関節では改善傾向(p<.053)を認め、以上からポジショニングケアの有効性が示唆された。 担当部分：論文全体の総括を担当した。 共著者：兼田美代、 <u>臼井キミカ</u> 、中谷こず
183. 看護の視点からみたsexual behavior への理解と対応 シンポジウム11： テーマ「高齢者の性－介護現場のsexual behavior に対する理解と対応」 (口頭発表) (査読あり)	－	令和元年 6月	第61回日本老年医学 会学術集会 (仙台) 日本老年医学会雑誌 56巻 臨時増刊号 (学術集会講演抄録集) p77	セクシャリティとは、人の様々な性の側面を包含した概念であり、人間であることの中核的な特質であるにもかかわらず、看護師国家試験の出題基準では基本的な理解を問う内容に限定され、今日までに出題されたことはなく、看護基礎教育(高齢者看護学実習)でもセクシャリティが取り上げられることは殆どないのが実情である。しかし対応困難事例として苦慮し、深刻な課題となっているのがケアの現場である。これらの現状を踏まえて、事例の背景を可能な限り詳細に分析し、いわゆる成功事例から対応の試案と共に、看護基礎教育や現任教

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項				
事 項		年月日	概 要	
184. 向老期にある女性受刑者に対する健康維持増進ケアモデルの有効性 (口頭発表) (査読あり)	－	令和3年12月4日～5日	第41回日本看護科学学会 学術集会 (名古屋市) (学術集会講演抄録集) p427	研究目的は、向老期にある女性受刑者が自身の健康に目を向け、行動変容を支援する健康維持増進ケアモデルを開発し、主観的指標を用いてその有効性を検証する。研究方法は、①呼吸法、②口腔ケア、③腰痛体操、④手洗いをケアモデルとした介入研究であり、基礎水準期、介入期、フォローアップ期からなり、日常生活状況、歯周病症状の主観的評価を実施。結果：対象の年齢は57～65歳の28名、喫煙者10名、平均現在の歯牙数16.04 (±9.88) 本であり、介入の結果、歯周病症状「歯間に者が詰まりやすい」「起床時の口腔内のネバネバ感」の2項目と「睡眠の質」が有意に改善。さらに単語頻度解析・非階層クラスタの結果、健康に対して積極的な行動や前向きな心の変化があり、健康の視点から自身の将来まで見据える機会になったことが明らかになった。共著者：中谷こずえ、 <u>臼井キミカ</u> 、原田英子 担当部分：論文全体の総括を担当した。
185. 地図アプリケーションを使用した回想法の効果 その1 (口頭発表) (査読あり)	共著	令和6年7月	第63回近畿公衆衛生学会 (滋賀県大津市)	地域在住の健常な高齢者17人を対象に、VR空間上で地図アプリケーション用いて思い出の地を巡る回想法を週1回合計6回実施し、脳活動への影響を測定。MCI度は有意差はなかったなかったものの脳全体の脳波の平均値は低下し、認知症予防への効果が示唆された。 担当部分：脳波測定、論文全体の総括を担当した。
186. 地図アプリケーションを使用した回想法が地域在住高齢者の感情及び生体に与える影響 (口頭発表) (査読あり)	共著	令和6年12月	認知症ケア学会 大阪大会 (大阪市)	共著者：片山彩萌、 <u>臼井キミカ</u> 、堀内美由 地域在住の健常な高齢者17人を対象に、VR空間上で地図アプリケーション用いて思い出の地を巡る回想法を週1回合計6回実施し、脳活動への影響を測定。MCI度は有意差はなかったなかったものの脳全体の脳波の平均値は低下し、認知症予防への効果が示唆された。 担当部分：脳波測定、論文全体の総括を担当した。 共著者：片山彩萌、 <u>臼井キミカ</u> 、堀内美由
②その他				
136. 学会功労者の業績紹介 津村智恵子先生を偲ぶ	単著	令和5年8月	一般財団法人日本高齢者虐待防止学会 創立20周年記念誌 PP34-35	一般財団法人日本高齢者虐待防止学会創設時から学会活動を支え、第3回大会長として活躍、数々の看護大学創設に携わってこられた津村智恵子先生の功績を紹介した。
上記記載以外に				
		著書	1 件	
		学術論文	5 件	
		その他	5 件	

教 育 研 究 業 績 書		
令和 7 年 4 月 15 日		
氏名 西 蘭 貞子		
研 究 分 野	研究内容のキーワード	
看護教育	IBL (Inquiry Based Learning) / 課題発見課題解決 / 看護アセスメント能力 / 教育プログラム/人材育成/トランジション	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		課題発見課題解決の探究的学習方法であるIBLを活用し、学生の主体で探究的な学習の促進継続を目指している。より具体的な事例作成、ロールプレイの活用など、学習者がアクティブに学習を進め、思考力強化に繋ぐ教育に工夫を重ねている。
2 作成した教科書、教材		
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 奈良県看護協会 新人研修	2025.1	2024 年度 新人看護職員研修「集合研修」講師
2) 宮城大学看護学部 FD 研修	2024.11	「Inquiry Based Learning—による能力育成と教育評価」
3) 奈良県看護協会 新人研修	2024.1	2023 年度 新人看護職員研修「集合研修」講師
4) 鹿児島国際大学看護学部 FD 研修 講師	2023.6	「臨床判断能力の育成につながる Inquiry Based Learning—能力の育成につながる教育方法・評価方法—I」
5) ～ 溝上慎一 と大学教育について考える ～「教学マネジメント」実践事例セミナー第4回	2022.12	「教育目標の明確化、アセスメント開発から能力育成まで～看護師に求められる能力と評価指標開発、教育モデルの確立を目指して～」をテーマに発表、対談
6) メディカ出版「ナースングビジネス12月号対談掲載	2020.12	鼎談テーマ「これからの次世代管理者育成に求められること」 河野秀一氏、箕浦洋子氏と鼎談
7) 週刊医学界新聞 対談掲載	2019.4	テーマ「心からアクティブになるアクティブ・ラーニング」で、溝上慎一氏と対談
8) 第10回日本医療教授システム学会総会「看護領域の臨床推論」	2018.3	シンポジスト「看護に必要な推論—論証能力と IBL 学習法の活用」
9) 兵庫県立尼崎総合医療センター	2016.9	教育研修(人材育成)支援
10) 京都府後援保育士免許取得特例講座	2014.8	特例講座講師
11) 奈良県立医科大学 FD 研修会	2014.3	講演「IBL で看護アセスメント能力をはぐくむ」
12) 京都コンソーシアム主催第18回FDフォーラム	2013.2	シンポジスト講演「学生間の協同的学習を促す授業方法」
13) 日本精神科看護技術協会 臨床指導者講習研修	2012.8	臨床指導者研修における教育講演
14) 京都府看護協会 京都市看護職能力向上研修 その他、多数	2012.1	看護教員を対象とした研修会講師
5 その他		
日本看護研究学会第50回学術集会 実行委員長	2022～	2022.1～準備,2024.8 大会開催
日本移植・再生医療看護研究学会 評議委員	2022～	
関西教育学会 理事	2021～	
日本医療教授システム学会 査読委員	2022～	
日本看護科学学会第32回学術集会 実行委員	2013- 2014	

日本移植・再生医療看護研究学会 第 10 回学術集会 企画委員 日本看護科学学会第 33 回学術集会 企画委員		201～ 2014 2012～	(実行事務局)	
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項		年月日	概 要	
1 資格、免許		2010 2008 2007		
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項 米国における看護研修			・メイヨクリニックにて臨床現任教育に関する視察研修 ・米国看護学部の教育プログラムに関する視察研修	
ベルリン・ドイツ心臓病センターでの臓器移植医療に関する研修			移植待機患者の状況やレシピエントおよびドナーコーディネートの実際、医療と社会保障制度、看護教育制度などの教育研修を受講。	
「魅力ある大学院教育」文部科学省採択教育プログラム 「生活環境の課題発見・解決型女性研究者養成」教育プログラム			奈良女子大学国際交流センター共催「国際的 FD 視察・交流・研修」参加。スタンフォード大学・ワシントン大学・UCLAなどを視察し、実践的なアメリカの FD 理論を考え、研修成果を冊子にまとめた。	
4 その他 補助金（過去 10 年以内を記載）				
1) 文部科学省基盤研究（基盤 B）（代表者）		2022. 4 ～	「看護人材の円滑なトランジションを促す大学教育～新人教育の抜本的な改革と体系化」	
2) 文部科学省基盤研究（基盤 C）（分担者）		2021. 4 ～2024	「エンドオブライフケアに携わる看護師の 暗黙知に基づく臨死期の予測」	
3) 文部科学省基盤研究（基盤 C）（分担者）		2018. 4 ～2023	「看護実践能力の評価指標を基盤とした看護学実習カリキュラムの開発」	
4) 文部科学省基盤研究（基盤 C）（分担者）		2018. 4 ～2023	「学生の思考力強化を図る小児看護学実習の課題構造の明確化と教育方略の開発」	
5) 文部科学省基盤研究（基盤 C）（分担者）		2017. 4 ～2022	「看護リテラシー教育としての看護過程を活性化する IBL 教育プログラム開発」	
6) 文部科学省基盤研究（基盤 B）（代表者）		2016. 4 ～2019	「看護基盤能力の評価指標開発と IBL の進化によるプロフェッショナル教育モデルの確立」	
7) 文部科学省基盤研究（基盤 C）（分担者）		2015. 4 ～2018	「看護領域における臨床推論教育の概念整理と改善された教育プログラムの開発」	
8) 文部科学省基盤研究（基盤 C）（代表者）		2013. 4 ～2016	「IBL 方 式を用いた看護アセスメント能力向上教育プログラムの開発」。	
9) 文部科学省基盤研究（挑戦的萌芽研究）（分担者）		2012. 4 ～2015	「生体肝臓移植を受けたレシピエントの退院後の自己管理支援プログラムソフトの開発」	
10) 医学教育開発研究センター特別経費研究（2,000 千円）（分担者）		2011. 4 ～2014	「医科－歯科連携口腔衛生管理のための多職種連携教育者養成プログラムの開発」	
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 小児看護学実習指導 ガイドライン	共著	2023.2	文芸社	泊裕子、大西文子、岡田摩理、竹村淳子、
2. リンパ浮腫ケアのテク ニク	共著	2011	金方堂	リンパドレナージや圧迫療法の手法を 200 点以上のイラストを用いてわかりやすく解説 した。担当部分:5 章 スキンケア、6 章 日常 生活の注意点)赤澤千春、西園貞子、山本 昌恵、福田里砂

3. アクティブ・ラーニング IBL で進める成人看護 学演習法	共著	2010.12	金芳堂	IBL(Inquiry-based Learning) を用いた講義 演習におけるアクティブ・ラーニングの進め 方を詳しく解説した。全 189 頁(担当:第 2. 第 3. 第 4 章), 赤澤千春, 西薊貞子
(学術論文) ・PROG テストを用いた看護 師の能力の特徴と成長	共著	2023.5	日本医療行動科学研究	Vol.10 79-88 西薊貞子 箕浦洋子 勝井伸子
・看護師の暗黙知による予 後予測に関する文献検討	共著	2023.5	日本医療行動科学研究	Vol.10 37-46 小林由里 小笠原 西薊貞子
・A RESEARCH ON COMPETENCY OF NURSES: A COMPARISON WITH WORKFORCE COMPETENCY	共著	2023.7	EDULEARN2023 15th	Teiko Nishizono , Yoko Minoura
・言語化と委嘱—看護師長— 臨床看護師に求められる能 力の構成要素—	共著	2023.3	奈良学園大学紀要	第 15 巻, 145-154 西薊貞子, 箕浦洋子, 勝井伸子
・アメリカ看護由来の用語の わかりにくさの解明 : 看護 師インタビュー調査	共著	2022.3	奈良県立医科大学看護研 究ジャーナル	第 18 巻 61-69 勝井伸子、青山美智代、西薊貞子
・学生が主体的にデザイン する実習 : 統合実習の試 み	共著	2022.1	奈良県立医科大学看護研 究ジャーナル	18 巻 43-51 西薊貞子, 勝井伸子, 箕浦洋子, 橋口智子
・IBL アセスメント教育プログ ラムによる課題発見力開発	共著	2022.1	奈良県立医科大学看護研 究ジャーナル	18 巻 70-77 西薊貞子, 勝井伸子
・看護過程の授業はどう展開 されているか(2): 看護大学 シラバス分析	共著	2021.7	梅花女子大学看護保健学 部紀要	Vol.11. 1-10 青山美智代, 勝井伸子, 西薊貞子
・看護の高等教育化への歩 みとアクティブ・ラーニング展 開の要請	共著	2021.7	奈良県立医科大学看護研 究ジャーナル	第 17 巻 48-57 西薊貞子, 勝井伸子
・看護教育における知識の 構築—IBL の基盤となる考 え方	共著	2021.7	奈良県立医科大学看護研 究ジャーナル	第 17 巻 38-47 勝井伸子, 西薊貞子
・小児看護学実習において 「実践と理論の統合」を必要 とする学習課題の構造	共著	2020.8	日本看護科学会誌	40 巻 474-483 泊祐子, 大西文子, 竹村淳子, 西薊貞子, 川島美保
・看護過程展開はどう展開さ れているか(1)—看護大学 シラバス分析—	共著	2019.6	奈良県立医科大学医学部 看護学科紀要	Vol.15, 青山美智代, 勝井伸子, 西薊貞子
・超高齢社会の医療を担う 看護師・看護学生の「看護 実践力」に関する検討	共著	2018.4	関西看護医療大学紀要	10(1) 58-61 江川隆子, 赤澤千春, 西薊貞子, 他 5 名
・IBL(Inquiry Based Learning)が高める思考・論 証能力の多面的評価	共著	2018.4	奈良県立医科大学医学部 看護学科紀要	Vol.14, 75-82 西薊貞子, 青山美智代
・看護アセスメント教育にお ける Inquiry Based Learning の学習効果	共著	2018.4	奈良県立医科大学医学部 看護学科紀要	Vol.14, 67-74 青山美智代, 西薊貞子

•Characteristics of Nursing Practical Fundamental Capabilities (Literacy and Competency) By Fundamental Education And Acquired Qualification of Nurses	単著	2018.3	INTED2018	proceedings paper 6576-6582
•小児看護学実習における看護実践と理論を結びつけるための指導方法の検討	共著	2016.7	日本看護学教育学会誌 Journal of Japan Academy of Nursing Education	26(1), 79-88 増尾美帆, 泊祐子, 竹村淳子, 西薊貞子, 岩間恵
•看護基礎教育における臨床判断力育成をめざした周手術期看護のシナリオ型シミュレーション演習の効果の検討	共著	2015.2	大阪医科大学看護研究雑誌	第 5 巻 76-86 山内栄子, 西薊貞子, 林優子
•肝移植レシピエントの退院後の生活を支えるサポートの実態－1 事例の分析を通して－	共著	2014.3	大阪医科大学看護研究雑誌	第 4 巻 50-59 谷水名美, 西薊貞子, 赤澤千春, 林 優子
• Investigation of an actual daily lifestyle leading to continuous self-management after living-donor liver transplantation: More than 5 years living with living donor liver transplantation and emotions of recipients	共著	2013.6	The Japan Journal of Nursing Science	Vol.10(1)79-88 Akazawa C, Nishizono T, Yamamoto M, Teraguchi S
•看護大学生の自己学習力獲得状況の検討	単著	2013.12	人間文化研究科年報	第 28 巻 107-120
•看護大学生における自己学習力構成因子の変化の検討	単著	2013.1	大阪医科大学看護研究雑誌	第 3 巻 90-99
(学会発表) • 自らの実習を学生がデザインする統合実習の試み～研鑽し続ける能力の育成 • 円滑なトランジションを目的とした新人研修の試み～PROG 看護版テストによる能力の可視化の活用～ • Research on Competency of Nurses : A Comparison with Workforce Competency、 • 看護学実習をどうデザインするか・課題と展望ー • 看護師の生涯続く能力育成教育戦略 IBL (Inquiry-Based Learning) 活用による経年別能力育成 • アメリカ看護由来の用語の理解と使用をめぐる問題	共著 共著 共著 共著 共著 共著	2024.8 2024.8 2023.7 2023.8 2022.8 2022.12	日本看護研究学会第 50 回学術集会 日本看護研究学会第 50 回学術集会 EDULEARN2023 15th annual International Conference on Education and New Learning Technologies Palma de Mallorca (Spain) 日本看護学教育学会 第 33 回学術集会 看護管理学会 第 26 回日本看護管理学会学術集会 第 42 回 日本看護科学学会学術集会	交流集会 西薊貞子, 小林由里, 松浦尚子, 井上理子, 森本早紀 高中優子, 須佐庸子, 船山恵生, 熊田ひとみ, 西薊貞子 Teiko Nishizono 、Yoko Minoura 交流集会 西薊貞子, 江川隆子, 赤澤千春, 箕浦洋子 交流集会(インフォメーションエクステンジ 西薊貞子, 箕浦洋子 交流集会 西薊貞子, 勝井伸子, 青山美智代

・看護職固有のコンピテンシー(成果を生み出すための能力)テストの開発	共著	2021.8	看護管理学会 第 25 回日本看護管理学会学術集会	交流集会(インフォメーションエキスチェンジ 西藺貞子, 箕浦洋子, 松村直樹
・IBL (Inquiry-Based Learning) 教育プログラムの導入による課題発見力の育成 看護師の基礎力測定指標 (PROG) による評価	共著	2021.8	看護管理学会 第 25 回日本看護管理学会学術集会	交流集会(インフォメーションエキスチェンジ 西藺貞子, 箕浦洋子, 三浦智恵
・看護学実習前後で看護実践能力のコンピテンシー数値が大きく変化した学生の経験の聞き取り調査～対人基礎力に着目して～	共著	2020.8	第 46 回日本看護研究学会学術集会(横浜)	赤澤千春, 西藺貞子, 青山美智代, 江川隆子, 箕浦洋子
・看護学実習によって獲得する対自己基礎力～PROG テストの前後比較からコンピテンシーが変化した学生の経験分析～	共著	2020.8	第 46 回日本看護研究学会学術集会(横浜)	西藺貞子, 江川隆子, 赤澤千春, 青山美智代, 箕浦洋子
・小児看護学実習において教員が捉えた学習課題の構造	共著	2020.8	日本看護学教育学会第 30 回学術集会	交流集会 泊祐子, 岡田摩理, 大西文子, 西藺貞子, 他
・Characteristics of the abilities of nurses and general members of society in the evaluation of basic skills in society.	共著	2020.3	The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science	Teiko Nishizono, Takako Egawa , Yoko Minoura
・Capabilities required of nurses as viewed by nurse managers	共著	2020.3	The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science	Teiko Nishizono, Yoko Minoura
・Fundamental Competencies for Professional Nurses: Qualitative Analysis of Interviews with Nursing Directors	単著	2020.11	ICERI2020 13th annual International Conference of Education, Research and Innovation	
・限られた場で小児看護学実習を効果的に行う実習計画と到達目標の設定 課題と対策の検討	共著	2019.11	日本看護科学学会学術集会講演集 39 回	泊 祐子, 大西 文子, 竹村 淳子, 西藺 貞子, 岡田 摩理
・看護学実習前後での看護実践能力テストのコンピテンシー数値が大きく変化した学生のインタビュー調査 ～対課題基礎力～	共著	2019.8	第 45 回日本看護研究学会学術集会(大阪)	ポスター発表 赤澤千春、江川隆子、西藺貞子、箕浦洋子
・看護学実習前後に変化する社会人基礎力(看護実践能力)の特徴	共著	2019.8	第 45 回日本看護研究学会学術集会(大阪)	ポスター発表 西藺貞子、江川隆子、赤澤千春、箕浦洋子
・主体的な学びの好循環を生み出す教育の仕掛け―基盤教育と卒後教育における IBL 教育プログラムでの展開―	共著	2019.8	第 45 回日本看護研究学会学術集会(大阪)	交流集会 西藺貞子、箕浦洋子、吉見絵美子

・看護学実習後における社会人基礎力(看護実践能力)の特徴	共著	2019.7	第 51 回日本医学教育学会大会(京都)	口演発表 西薊貞子, 赤澤千春, 江川隆子
・Competency characteristics acquired by mid-level nurses	単著	2019.3	The ACEID2019 Conference, Tokyo	
・中堅看護師(ラダーⅢ)のPROG(社会人基礎力測定尺度)評価から 継続教育の課題を考える	共著	2018.8	第 22 回日本看護管理学会学術集会(神戸)	交流集会(インフォメーションエキスチェンジ 西薊貞子, 箕浦洋子, 江川隆子, 赤澤千春
・大学における基盤教育と卒後継続教育の連携促進を目指した能力評価の共有～汎用性の高い「社会人基礎力評価」調査結果からの意見交換～	共著	2018.8	第 28 回日本看護学教育学会学術集会(横浜)	交流集会 西薊貞子, 江川隆子, 箕浦洋子, 赤澤千春, 日隈ふみ子, 青山美智代
・看護基盤能力の評価指標開発に向けて～看護管理者が育成したい看護師像とは～	共著	2017.8	第 21 回日本看護管理学会学術集会(横浜)	交流集会(インフォメーションエキスチェンジ 西薊貞子, 箕浦洋子, 江川隆子, 赤澤千春

教 育 研 究 業 績 書		
令和 8 年 3 月 31 日		
氏名 小林 由里		
研 究 分 野	研究内容のキーワード	
看護学	基礎看護学、看護教育学、看護管理学、エンドオブライフケア	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
多重課題を用いたリスクアセスメント力と判断力の育成演習	平成 28 年 1 月	統合分野「看護の統合と実践」の科目として、卒業前に多重課題を用いたリスクアセスメント力と判断力、対応力を育成することを目的に演習を実施した。病室に呼吸不全の患者、転倒リスクのある患者、嚥下困難のある患者などを設定し、学生は、グループでディスカッションして患者への援助計画を立案しておく。教員が患者役を演じ、ロールプレイを行い、患者の状況に対応しながら、リスクアセスメントや優先度の判断を行う体験学習とした。このメリットとして、学生は、臨場感のある患者の反応への対応について思考し判断する機会となった。
看護管理の考え方を学ぶ事例を用いたグループ討議	平成 28 年 4 月～平成 29 年 6 月	統合分野「看護の統合と実践」の科目である、看護管理では、看護管理の定義やマネジメントプロセス、病院・看護部の組織体制などについて教授した。また、倫理的問題のある事例を用いて、自らがミドルマネージャーとしてどのように倫理的判断を行うかのディスカッションや、複数の様々な状況にある患者のケアが必要な事例に対し、チームでケアを実施する際のリーダーシップのあり方についてのディスカッションを取り入れた。
成人看護援助論Ⅱ、成人看護援助論演習の講義・演習	平成 30 年 4 月～令和 2 年 7 月	慢性疾患を持つ患者のセルフマネジメントを支援するための看護について、学生がイメージしながら学べるよう、事例を用いて、段階的に思考プロセスをたどれるよう講義の組み立てを行った。セルフマネジメントの患者教育では、模擬患者（教員）に対してパンフレットを用いて学生が指導する課題とした。患者役の様々な反応に対して思考し、対応するという内容とした。学生は不足する知識や患者教育の技術など課題を明確にすることができた。医療事故防止のリスクアセスメント力を高めるためのシミュレーションを取り入れた。
看護管理学特論の講義	平成 31 年 9 月～現在に至る	大学院の看護管理学特論では、臨床で現在も勤務する学生であるため、生きた教材を活用するべく、各自の管理的疑問や問題を提起しあい、ディスカッションを行った
想像力・創造力を高めるコミュニケーション論の講義・演習の工夫	令和 3 年 4 月～現在に至る	看護の初学者である1年次の学生に対し、コミュニケーションが、単なる言葉の伝達ではなく、目標や意図の共有であることや、看護職としてのコミュニケーションが理解できるよう工夫した。例えば様々なシチュエーションや臨床事例を用いて、学生が自ら考え、ディスカッションも組み入れて思考を深めていくようにした。
看護技術の基礎Ⅰ・Ⅱ、看護実践プロセスの基盤Ⅰ、看護学概論Ⅱの講義・演習	令和 3 年 4 月～現在に至る	基礎看護技術やアセスメントは、方法論のみの思考にならないよう、授業外の学習を促進する取り組みを行った。事前課題は、手順を覚えるのではなく、その技術が必要とする根拠、実施の際の判断に必要な要素の視点で考えられるように工夫した。演習においても、自ら考え、学生同士でディスカッションしながら、事例患者に応じた援助の内容、方法、時期、留意点などの判断について深められるように促している。また、医療職としての倫理観を醸成するために、リアリティを持たせた事例を用いて体験を通して、深く考察できるよう工夫した。
看護管理学の講義	令和 3 年 4 月～現在に至る	4年次の学生が、卒業後に所属する組織の意義や機能、看護管理の定義やマネジメントプロセスなどをイメージすることができるとを目標としている。そして自らも組織の一員として看護をマネジメントしていく必要が

		あることを理解できるよう教授する。現場で起こりうる様々な事例を用いたり、3年次までの実習を想起させて、マネジメントの視点による判断について思考を促す問いやディスカッションを取り入れている。
学生が4年次前期までの学びを統合させ、現象を捉え思考しながら行動できる力を育成する統合看護論の講義・演習	令和6年9月～現在に至る	既習の知識・技術・態度を統合させ、患者にとっての「より良い」を目指した看護の判断・実践・評価ができることを目的とした授業・演習を計画・実施した。複数の受持ち患者の状態を推論・論証し、模擬患者の流動的な反応に対応しながら、必要なケアを優先順位を考慮して実践すること、看護チームとして患者の課題解決のためのカンファレンス、退院に向けた医療チームカンファレンスなど、臨床現場に即した場面を提供し、学生の興味・関心を揺さぶり、学習意欲の向上につながった。卒業前のDPへの到達状況を確認することができた。
2 作成した教科書、教材		
3 教育上の能力に関する大学等の評価	令和元年8月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において奈良学園大学大学院看護学研究科講師、「看護管理学特論」M可、「特別研究」M合と判定
4 実務の経験を有する者についての特記事項	平成19年4月～平成24年3月	院内看護職（看護師、療養介助員、看護助手）の育成を図るため、経年別、役割別研修の企画・運営を担当した。毎年、新人看護師は毎月1回、2年目、3年目、4.5年目は2か月に1回程度、6年目以上は半年に1回程度、実習指導に関すること、褥瘡予防、摂食嚥下などの専門分野の研修などを実施した。経年別研修は、OJTを重視し、それぞれの経験年数での課題をOJTにより達成できるよう取り組み、集合研修ではその補填となるよう位置付けた。その結果、各部署で実践を通して、看護職員同士でお互いを育てあう意識ができた。新人看護職の研修テーマは主に看護技術や看護倫理に関すること、2年目はケーススタディ、3年目は組織におけるリーダーシップ・メンバーシップ、4年目以上は業務改善など組織における管理とし、業務改善につなげた。
教員に対する指導・教育、教員の教育実践力向上のための研修の企画・運営	平成25年～平成30年3月	看護専門学校教育主事として看護学校管理を担当した。近畿内国立病院機構附属看護学校の1、2年目教員を対象とし、教育実践力向上を目的とした研修や、中堅看護教員を対象とし、学校運営・管理の視点の育成を目的とした研修を実施した。
国立病院機構近畿グループ主催実習指導者講習会講師、施設内実習指導者	平成26年6月～平成29年6月	国立病院機構近畿グループ主催実習指導者講習会にて「基礎看護学」や「実習評価」について担当し講義を行った。また、国立病院機構舞鶴医療センター附属看護学校、京都医療センター附属看護助産学校、敦賀医療センターでの実習指導者研修において、教育課程、実習指導の意義、実習評価、実習指導案の作成などについて講義を実施した。
5 その他	平成25年4月～平成28年3月 平成28年4月～平成30年3月	「看護学概論」「老年看護学概論」「医療安全」などの講義を担当した。また、「基礎看護学実習」「小児看護学実習」「成人看護学実習」「在宅看護論実習」の実習指導を行った。効果的な実習となるよう、実習施設への実習依頼や調整を行った。院外講師へは学生の講義評価結果をフィードバックし、講義依頼を行った。また、看護教員の指導、実習施設の実習指導者対象研修の講師などを行った。 「看護管理」「医療安全」の講義を担当した。また、「基礎看護学実習」「小児看護学実習」などの実習指導を行った。効果的な実習となるよう、実習施設への実習依頼や調整を行った。院外講師へは学生の講義評価結果をフィードバックし、講義依頼を行った。また、看護教員の指導や実習施設の実習指導者対象研修の講師などを行った。
国立病院機構舞鶴医療センター附属看護学校における教育実績		
国立病院機構京都医療センター附属京都看護助産学校 看護学科における教育実績		

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許	平成元 年 4 月	看護婦免許
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 国立病院機構奈良医療センター教育担当看護師長	平成 21 年 4 月 ～平成 24 年 3 月	教育担当として看護職の現任教育の企画・実施を行った。また、医療安全管理係長とともに全職員対象の研修を実施した。人材確保対策事業として、看護職募集活動、復職支援研修や中途採用者研修の企画・運営を実施した。また実習受け入れ態勢整備等の役割を果たした。
4 その他		
実習部会	平成 31 年 4 月～令 和 4 年 3 月	看護学科における実習に関する企画・運営、検討を行った。3 年次領域の臨地実習学生配置の作成、次年度実習ローテーション案の作成、実習要綱の修正・検討・作成、実習協議会の企画・運営・評価、統合看護実習の計画案作成、学生配置の検討など多岐にわたり、学生の実習で質の高い学びができるよう取り組んだ。令和 2 年は実習に向けた学生のコロナワクチン接種の対応も行い、コロナ禍における臨地実習のあり方についても検討した。
学生生活ワーキング	平成 30 年 4 月 ～令和 2 年 3 月	新入生研修の準備・運営・評価を行った。また、学生の大学生生活に関わる事項について情報共有および検討を行った。
国家試験対策ワーキング	平成 31 年 4 月 ～令和 3 年 3 月	国家試験合格に向けた模擬試験や夏季、秋季対策講座の準備、学生の学習状況把握のためのポートフォリオ作成の検討、学習支援のためのアドバイザー教員との連携方法などについて検討し、実施した。
卒業研究ワーキング	平成 31 年 4 月 ～R2 年 3 月	卒業研究に向けたガイダンスの計画と運営、卒業研究抄録集作成に向けた、執筆規程の修正、ポートフォリオ、評価表の検討を行った。
カリキュラム検討ワーキング	令和 2 年 4 月～令 和 4 年 3 月	令和 4 年度カリキュラム改正に向けて、本学看護学科のディプロマポリシー、カリキュラムポリシーを検討した。また、そのポリシーを達成するための科目、科目内容、カリキュラムツリー、科目間の関連、担当者等を検討するにあたり、検討案を提示し、意見を述べた。
教員評価制度検討ワーキング	令和 3 年 4 月	教員の教員分野に関する評価（ベストティーチャーなど）について検討し、実現に向けて具体案を計画した。
看護学科教務委員会	令和 4 年 4 月 ～現在 に至る	看護学科における教務に関する検討・運営を行っている。シラバス、授業担当教員の確認、時間割の確認・調整、教室や実習室の重複の確認など、学生の授業が円滑に進むよう、問題点を検討し、調整をおこなった。学業不振の学生や欠席が多い学生について早期のスクリーニングを行い、個別に声をかけるなど、学業継続に向けて対応した。時間割調整、カリキュラム改正に伴う読み替え履修が必要な対象学生の確認、履修が問題なくできるよう調整した。また、卒業研究のガイダンス計画及び実施、抄録集の作成などを行った。
入学前スクーリング検討ワーキング	令和 5 年度 4 月～現 在に至 る	令和 5 年度は、入学前教育を入学前スクーリングとして、ワーキングが立ち上げられた。そのメンバーとして、企画・運営に携わった。入学生が不安なく大学生活に適應できるようなプログラムを企画し、2 クール、計 5 回実施することができた。
キャリア部会	令和 5 年 4 月 ～令和 6 年 3 月	国家試験合格に向けた模擬試験や夏季、秋季対策講座の準備、学生の学習状況把握のための情報交換、学習支援のためのアドバイザー教員との連携方法、卒業年度生以外の国試に向けた学習支援などについて検討し、実施した。他にも、就職活動などのキャリア支援について、キャリアセンターとの情報交換を行うなど行った。
奈良学園大学自己点検自己評価委員会	令和 3 年 4 月 ～現在 に至る	奈良学園大学白書の加筆・修正について、意見を取りまとめ、修正した。令和 6 年度認証評価に向けて資料の作成に携わった。

奈良学園大学全学教務委員会			令和 6 年 4 月～現在に至る	全学の教務・カリキュラム運営に関する学部間の連絡や調整を行った。シラバス作成依頼や点検、次年度授業担当者の調整、履修の手引きの改訂、新入生ガイダンスの準備等を行った。
独立行政法人国立病院機構紫香楽病院 看護師ラダー研修 「看護研究」に関する講義・指導			令和 5 年 4 月～現在に至る	看護師のラダー研修 レベルⅢ、Ⅳの方を対象とした「看護研究」の講義および研究指導を行っている。看護研究の一連の流れを学習し、研究の基礎を身につけることを目的とし、看護研究の基礎的な内容に関する講義、3 題の研究に対する研究計画書作成、倫理審査申請に向けての指導を行った。令和 6 年度は発表に向けて継続的に指導を行い、3 題すべて学会発表ができた。
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
1 看護師国家試験 直前社会福祉学領域ファイナルチェック	共著	2021 年 03 月	金芳堂	社会福祉の仕組みを学び、対象者の生活を基盤とした QOL の質の向上に向けた社会福祉の知識を体系的に理解できるものである。3-2) 障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律（障害者総合支援法）を担当した。
2 エビデンスに基づく消化器看護ケア関連図	共著	2022 年 03 月	中央法規出版	第Ⅱ部 疾患別／D 肝臓・胆嚢の疾患胆石症を担当した。
(学術論文)				
1. 看護教員の基礎看護学の教材研究と学習者観との関連	共著	平成 13 年 3 月	近畿管内国立病院療養所附属看護（助産）学校教官研修会誌第 8 集 p.66～p.74	看護教員の基礎看護学の教材研究と学習者観との関連を明らかにすることを目的とした。全国の看護基礎教育機関 667 校に研究依頼し、協力が得られた 233 校の基礎看護学を教授している教員を対象に、教材研究の実践状況とその授業を受ける学生の学習者観に関する独自に作成した質問紙調査を実施した。結果、以下のことが明らかになった。 1. 教材研究得点と学習者観の合計点にはやや相関があった。2. 教材研究得点の低得点群は、学習者観の質問項目について「自主的な学習スタイルが身につけている」「知識と知識を結びつけて考える力をもつ」を有意に否定し、「他者に責任転嫁をする」を有意に肯定していた。高得点群では「自主的に考える力をもつ」「経験を振り返り気づく力をもつ」「課題への興味や関心により根気よく取り組む」等の 6 項目を有意に肯定していた。3. 学習者を成人学習者と捉える項目の合計点と教材研究得点、教員の年齢・経験年数にはやや相関があった。4. 教材研究得点と教員の年齢・経験年数は共にやや相関があった。共著者：池田仁美、井上敏江、佐藤美春、伊藤真理、宮地由紀子、林幸子、岡田和美、桜井明子、高田弥寿子、半場江利子、小林由里
2. 新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性とその特徴（修士論文）	単著	平成 25 年 3 月	畿央大学	新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の特徴とその関連性を明らかにすることを目的とした。質問紙は批判的思考態度尺度(常盤ら,2010)、情報活用の実践力尺度(高比良ら,1999)で構成した。分析方法は記述統計、Spearman の相関係数、重回帰分析を用いた。結果新人看護師および看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性は、双方とも有意な正の相関が認められ($r=.449,p<0.1$)、両能力は

				有意に関連していることがわかった。クリティカルシンキング能力を高めるには情報活用能力の判断力、創造力、処理力を育成する必要性が示唆された。 A 4 判 全 64 頁
3. 看護学生の碎石位体位前後の産婦人科診察台に対するイメージと羞恥心の変化 (査読付)	共著	平成 27 年 6 月	畿央大学紀要 p19～P30	看護学生が産婦人科診察台で碎石位を体験することで、体験前後の診察台のイメージや羞恥心の変化を検討することを目的とした。15 項目の産婦人科診察台イメージ尺度を作成した。羞恥心は樋口の状態羞恥心感情測定尺度で碎石位体験前後に調査した。参加者は 80 名。産婦人科イメージは、因子分析の結果「情動イメージ」「体感イメージ」「緊張的イメージ」「見た目イメージ」の 4 因子が抽出された。体験前は 13 項目がマイナスイメージであったが、体験後 5 項目がプラスに有意に変化した。体験後の羞恥心尺度の高値群は、診察台イメージの「高く」「嫌な」の項目でマイナスに有意に変化した。以上から産婦人科診察台に対してマイナスイメージが強い場合、羞恥心が強くなることが示唆された。本人担当部分：データの分析、結果の考察を行った。 共著者：◎中居由美子,小笠原知枝,播金ヤスミ,小林由里,河合まゆみ,文鐘聲
4. 実習指導者育成の取り組み (第 2 報)	共著	平成 27 年 10 月	医療の広場 第 55 巻 第 10 号 (国立病院総合医学会発表)	実習指導者を育成することは学生の学習環境を整え、質の高い教育の実践につながる。そこで平成 24 年度、副学校長教育主事協議会近畿支部と教員研修会合同で実習指導者育成の研修プログラムを作成した) (作成プロセスは第 1 報) 実習指導者研修を実施し、参加者の反応から今後の実習指導者育成への示唆を得る。5 校の研修対象者総数はのべ 497 名、アンケートは最終回参加者に協力を依頼し、回答者数は 131 名 (回収率 100%) であった。参加した動機は、「実習指導に役立てたい」が最も多く、81%が実習指導者の役割に関心があると回答したことから、研修の実施は、実習指導への関心につなげることができた。また、今後に生かせる研修内容は、「実習指導者の役割」が最も多く、詳しく知りたい内容は、「指導方法」や「指導の計画的実施」であったことから、参加者は学生への関わり方や具体的な指導方法に関心があることがわかった。今後は参加しやすい研修時間や内容等の組み立てを検討し、研修を継続的に開催することが課題である。◎小林由里, 伊藤睦美, 山本薫里
5. 基礎看護学実習評価項目の内容分析によるパフォーマンス評価のためのルーブリックの作成 (査読付)	共著	平成 30 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究第 5 巻 P43～P51	基礎看護学実習の評価に用いられた項目から、パフォーマンス評価のためのルーブリックを作成することを目的とした。10 校の基礎看護学実習評価表の評価項目を基礎データとし、Berelson の内容分析を参考にカテゴリ化した。445 記録単位数をコード化し、110 サブカテゴリ、25 カテゴリ、6 コアカテゴリを抽出した。6 コアカテゴリは、看護過程展開力、クライアント理解力、自己学習力、チーム医療における看護師役割の認識力、倫理的態度に基づく実践力、コミュ

				ニケーション力と命名し、基礎看護学実習の実践力とした。これに基づき、縦軸に 25 カテゴリーの評価規準、100 サブカテゴリーの評価基準から構成され、到達度で評価できる評価表を作成した。 本人担当部分：データの分析、結果の考察を行った。 共著者：◎播金ヤスミ、小笠原知枝、中居由美子、河合まゆみ、<u>小林由里</u>、對中百合、新井祐恵、太田容子、伊藤明子
6. 新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の特徴とその関連性 (査読付)	共著	平成 31 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究第 6 巻 P3～P11	新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の特徴とその関連性を明らかにすることを目的とした。看護師 712 名に質問紙調査を実施した。質問紙は属性、批判的思考態度尺度(常盤ら、2010)、情報活用の実践力尺度(高比良ら、1999)で構成した。 分析方法は記述統計、Spearman の相関係数、重回帰分析を用いた。結果、クリティカルシンキング能力は、協同的態度が高く、看護師との比較では、探求心が高く、論理的思考への自信が低かった。情報活用能力では、収集力、発信・伝達力が高く、看護師との比較では表現力が高かった。新人看護師および看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性は、双方とも有意な正の相関が認められたが、新人看護師は看護師より関連性が低かった。(修士論文をもとに作成) 本人担当部分：質問紙の作成と調査及び統計解析、研究の総括を行った。 共著者：◎<u>小林由里</u>、小笠原知枝、河合まゆみ、中居由美子、播金ヤスミ
7. 看護師の暗黙知による予後予測に関する文献検討 (査読付)	共著	令和 5 年 3 月	医療福祉情報行動科学研究第 10 巻 (2022) P37-46	【目的】看護師が暗黙知に基づきどのように死期を察知し、予後を予測しているかを明らかにする。 【方法】対象となる文献から、看護師の暗黙知による予後予測に関する記述を取り出し、内容の類似性に基づき抽象化しサブカテゴリ、カテゴリを生成した。 【結果】15 件の文献を分析した。 暗黙知による予後予測は、目つきや表情の変化、違和感のある臭気の消失、土気色のねっとりした皮膚、つじつまの合わない会話、今までにない異常な言動、一瞬の回復、死の恐怖、惜別に伴う感情、生へのこだわりの喪失、看護師自身に生じる何かが違うという感覚の 10 カテゴリーが抽出された。 【結論】看護師は、患者の特異的な身体的情報や、死を自覚することに関連した心理的变化、今までにない言動や予想外の反応だけでなく、看護師自身に生じる「何かが違う」という感覚により死期を察知し、予後を予測していることが示唆された。 共著者：◎<u>小林由里</u>、小笠原知枝、西蘭貞子、平松幸子、河合まゆみ、兒玉 拓

8.カリキュラム改正に伴う 本学保健医療学部看護学 科の新カリキュラム構築 のプロセス	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要第 15集	「看護学教育モデル・コア・カリキュラム ～『学士課程においてコアとなる看護実践能力』の修得を目指した学修目標～」(文部科学省「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」)、「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」(日本看護系大学協議会)も踏まえながら、育成しようとする学生像や能力の検討から開始し、3ポリシーを見直し、新カリキュラムを構築した。 教員全員が共通理解のもとに同じ方向を目指して協力しながら教育に携われる、新入生が目指す方向を具体的に理解できるために、ポリシーや育成する学生像、育成する能力をより具体的に示し、それらの能力の育成を目指し段階的に学修できるカリキュラムを作成した。 今後はこの新カリキュラムと3ポリシーのもとに教員が協力して教育にあたるとともに、カリキュラムの評価を行いながら更なる改善にむけた取り組みを行っていききたい。◎服部律子, 吉村雅代, 西薊貞子, 三浦康代, 嶋田理博, <u>小林由里</u>, 佐藤郁代, 西出順子, 溝口みちる
9.看取りケアへの移行を判断するための看護師の暗黙知に基づく予後予測指標の開発 ー非がん性呼吸器疾患患者に焦点をあててー (博士論文)	単著	令和5年8月	兵庫大学	非がん性呼吸器疾患は「がん」と比べ病の軌跡が多様なため、予後予測が難しい。本研究では、Polanyi が提唱した暗黙知という概念を理論的背景としている。そこで、仮定した暗黙知に基づき、看護師が、非がん性呼吸器疾患患者の看取りケアへの移行期をどのように判断しているのかを明らかにし、予後予測指標を開発することが研究の目的である。 【研究1】看護師の暗黙知に基づく予後予測に関するシステマティックレビューおよび質的研究【研究2】研究1の質的分析により抽出された予後予測項目の具体的表現をもとに、28項目を予後予測指標原案とした。CVIによる内容妥当性検討により14項目を看護師の暗黙知に基づく予後予測指標項目とした。【研究3】14項目からなる看護師の暗黙知に基づく予後予測指標について、慢性呼吸器疾患看護認定看護師や、呼吸器疾患の看取り経験のある訪問看護師など14名の研究協力者を対象に実用性を調査した結果、看取りケアへの移行期であるかを判断するためにこの指標が実用できるということが概ね示唆された。非がん性呼吸器疾患の特徴をふまえた看取りのケアへの移行期を判断する指標となるには、個人差を考慮する必要があること、また看護師の暗黙知に基づく項目にあわせて、客観的データなども考慮する必要性が示唆された。

10.看護師の暗黙知に基づく看取りケアへの移行を判断する予後予測指標の開発 ー非がん性呼吸器疾患患者に焦点をあててー (査読付)	共著	令和6年4月	日本看護診断学会「看護診断」第29巻第1号 P1-10	非がん性呼吸器疾患患者の看取りケアへの移行を判断するために、看護師の経験知から導かれた暗黙知に基づき作成した予後予測指標原案の内容妥当性と実用性を検証することを目的とした。予後予測指標原案（小林，2023）は、看護師の暗黙知の観点から死期が近いことを予測する手がかりとなる兆候を文献から抽出した28項目で構成されたものである。内容妥当性は、看取りケアの経験のある看護師を対象に質問紙調査を実施し、Lynn(1986)の内容妥当性指数(CVI)を算出した。実用性については、非がん性呼吸器疾患患者の査定に際して、予後予測指標原案を用いて評価を依頼した。CVIを算出した結果、0.78以上を示した項目は4項目であった。また症例により指標となる可能性があるCVIが0.67～0.73を示した10項目を含めた14項目を予後予測指標とした。実用性は、呼吸器系非がん患者37名に予後予測指標を使用した結果、70%が看取りケアへの移行の判断に「大いに参考にできた」「まあまあ参考にできた」と回答した。以上から、本研究で開発された看取りケアへの移行を判断するための予後予測指標は内容妥当性と実用性の観点から検証された。 本人担当部分：質問紙の作成と調査及び分析、研究の総括を行った。 共著者：◎小林由里，小笠原知枝，河合まゆみ，平松幸子，西菌貞子
11.在宅認知症高齢者のエンドオブライフと家族を支援する訪問看護師のストレス要因ーインタビュー調査に基づく質的内容分析ー (査読付)	共著	令和6年7月	日本地域共生ヘルスケア学会誌第1巻2号	【目的】在宅認知症高齢者のエンドオブライフと家族を支援する訪問看護師のストレス要因を明らかにする。【方法】4年以上の訪問看護の経験と在宅認知症高齢者のエンドオブライフケアの経験をもつ訪問看護師19名を対象とした。半構造化面接法を用いてナラティブデータを収集し、質的記述的研究の手法を用いて分析した。在宅認知症高齢者と家族への支援を通して感じる困難感、不安、負担感に関する語りを類似の文節ごとにコード化しカテゴリ化した。【結果】ストレス要因として10カテゴリと28サブカテゴリが抽出された。10カテゴリは、〔認知機能低下に伴う日常生活上の支障への対応〕〔看護介入に対する在宅認知症高齢者の理解困難〕〔認知症高齢者と家族の情緒不安定な言動〕〔家族の認知症に対する受容の難しさ〕〔在宅医療・看護ケアの見直しにかかる費用負担の困難さへの対応〕〔意思決定を代行する家族への支援上の困難さ〕〔意思疎通ができない認知症高齢者の看取りに対する家族の混乱〕〔多職種連携の困難さ〕〔多岐にわたる業務の繁忙に伴う疲労〕〔幅広い看護実践に必要な知識・技術の不足〕であった。【結論】ストレス要因は、認知症に伴う中核症状と周辺症状への対応上の困難、在宅療養の継続上の困難、家族によるエンドオブライフの支援上の困難、訪問看護の業務上の特徴から生じる困難に4分類された。これらの4

				観点から訪問看護師のストレス要因に対処する必要性が示唆された。共著者：◎平松幸子，小笠原知枝， <u>小林由里</u> ，河合まゆみ，兒玉 拓
12. 訪問看護師が認識する認知症患者遺族へのグリーフケア（査読付）	共著	令和 6 年 10 月	日本地域共生ヘルスケア学会誌第 1 巻 2 号	訪問看護師の認知症患者遺族に対する支援の実態を踏まえ、訪問看護師のグリーフケアに対する認識を明らかにすることを目的とした。その結果、訪問看護師は【否定的・肯定的な感情や思いの表出支援】【思いや悲しみへの共感と寄り添い】【認知症患者の人格を尊重した代理意思決定の行程】【認知症の進行に伴う介護疲労への労い】【遺族間で思いを共有する機会の提供】【今後の生活に向けた社会資源の活用】【認知症の特徴と悲嘆プロセスに関する教育的支援】をグリーフケアと認識していた。 ◎河合まゆみ，小笠原知枝， <u>小林由里</u> ，平松幸子，兒玉 拓
(その他)				
1.重症心身障害児（者）病棟における小児看護学実習学習内容の検討－ムーブメントを活用した遊びを通して小児の成長発達を学ぶ－	—	平成 15 年 11 月	第 58 回国立病院総合医学会	小児看護学実習を重症心身障害児（者）病棟で実施する際、ムーブメントを活用した遊びの場面における小児の成長発達に関する学習効果について検討した。児の反応や行動を詳細に記録に表現し、児の反応を意識するとともに外部からの刺激との関連を考える内容とした。学生は、目の動きを変化させるなどの反応が、自分の思いを訴えようとする児の反応であることに気づき、記録に記載される児の反応が増えた。児の感覚機能から刺激に対する反応を予測して、遊び（ムーブメント活動）を計画・実施し、光や色彩など視覚的刺激や、風など触覚的刺激、揺れ刺激を含めた。学生は「児が光を追視し、手を伸ばしてつかもうとした」、「揺れを感じたとき、体を支えようと手を出したりした。揺れという不安定をもたらすことで、従重力な状態から抗重力姿勢をとろうとする筋の運動につながった」など児の反応を捉えていた。重症心身障害児（者）病棟において小児の成長発達を学ぶためにムーブメントを活用した遊びの場は有効である。また児の成長発達において感覚運動統合をもたらす感覚刺激の重要性に気づくことができた。◎ <u>小林由里</u> ，戸川裕子

2.新人看護師を対象とした病棟ローテーション研修の効果	—	平成 21 年 10 月	第 7 回国立病院看護研究学会	新人看護師の職場適応を目的とした病棟ローテーション研修の実施とその効果を検討した。A病院の平成 20 年度卒後 1 年目看護師 20 名を対象に、希望診療科の病棟名と未経験、あるいは習得したい技術・看護を調査した。ローテーション研修を実施し、研修前と研修後の技術経験状況を比較、研修終了後のアンケート調査結果や事後レポートよりデータ収集、評価した。結果、「未経験」だった 48 項目のうち 35 項目 (73%) が経験できた。また、65 項目 (74%) は、「根拠をもって一人で行える」が研修後増加していた。反対に、「根拠をもって一人で行える」が減少した項目は、13 項目 (15%) あり、減少した理由として、同じ技術でも経験を重ねることで、患者の症状アセスメントが加わり、患者の個性を重視した援助の判断が必要であることを学んだためと思われる。事後レポートでは、「フィジカルアセスメントを身につけていくことが課題である」「一人一人異なる患者の状況に合わせた援助の実施の必要性」についての記述が多かった。このことから今まで実施していた技術への考え方の浅さを実感し、「根拠に基づいた実施」の思考過程が深まったと思われる。他病棟での経験は、今までの技術を振り返る機会となり、自己の課題を明確にすることができた。◎<u>小林由里</u>
3.アセスメント能力向上に向けての継続的関わりによる研修者の変化	—	平成 23 年 2 月	日本医療マネージメント学会奈良支部会	卒後 2 年目看護師 19 名を対象とし、アセスメント能力の向上に向けて継続的に関わったことにより、変化した研修者の意識と行動を明確にした。アセスメントの集合研修を実施し、1 か月後、3 か月後にアセスメントに関する症例カンファレンスを OJT で実施。6 か月後にアンケート調査した。調査表は鎌田ら 1) の「看護過程の構造」を参考に、「Ⅰ.問題意識」「Ⅱ.情報収集」「Ⅲ.アセスメント」「Ⅳ.自分の分析の確認」「Ⅴ.根拠にもとづく看護判断」の 5 項目について研修後の意識と行動の変化を問う 14 の小項目で構成し 4 段階で評価する独自の調査票を作成した。結果、患者の病態や実施されている治療に対して疑問を感じ、情報の解釈や分析、判断について自分で考え、先輩看護師に指導を受け理解していた。アセスメント研修は、事前課題の内容をグループで共有しあい、また、模擬患者が次々に提示する訴えやデータについてアセスメントできていた。6 か月間、意図的に継続的に関わったことにより卒後 2 年目看護師は、①問題意識を持ったアセスメントを意識するようになった②客観的な情報収集の必要性を感じ、五感を使って観察するようになった③自己のアセスメントや判断の不十分さを自覚し、信頼性を高めるために先輩に確認・相談するようになった。◎<u>小林由里</u>

4. 長期療養型病院における中堅以上の看護師に必要な教育内容の検討	—	平成 23 年 6 月	日本医療マネージメント学会	長期療養型 A 病院における中堅以上の看護師の看護技術修得状況調査から、今後の教育内容を明らかにすることを目的とした。対象は A 病院看護師 126 名（看護師長を除く）とし、国立病院機構看護職員能力開発プログラム「看護実践における技術的側面」の大項目 8 項目、小項目 76 項目について 5 段階評価の自記式質問紙により調査した。看護必要度、超重症児（者）・準超重症児（者）評価結果と対比し、教育内容を抽出した。結果、看護必要度評価では、「呼吸ケア」が必要な患者が全体の 43% を占めている。技術修得状況調査結果では「根拠に基づき一人で実施」の修得度が低かったのは「救命救急処置技術」「創傷管理技術」であり、具体的には「人工呼吸器装着中患者の観察と管理」「ドレナージの管理」など「呼吸管理技術」に関するものが低く、中堅以上の看護師に必要な教育内容は「呼吸管理技術」「救命救急処置技術」である。◎小林由里
5. A Study of Young Women's Images of the Gynecological Examination	—	平成 25 年 10 月	International Nursing Conference & World Academy of Nursing Science	若い女性が婦人科診察台に対して、どのようなイメージをしているのかを目的とした。婦人科診察台のイメージの 15 項目のスケールを作成した。80 人の女子大学生に婦人科診察台で診察を受けるポーズをとってもらった。結果、診察ポーズ前の婦人科診察台のイメージは、「緊張する」67.0%、「恥ずかしい」58.0%、「親しみにくい」50%、「こわい」43.3%、「嫌い」32.7%であった。診察ポーズ後の婦人科診察台のイメージは、「高い」61.7%、「嫌い」45.3%、「緊張」42.7%、「こわい」28.0%、「恥ずかしい」27.7%に変化した。 診察ポーズ後 50 名の学生が婦人科診察台のイメージはマイナスイメージからプラスイメージに変化した。このことから若い女性は診察前は婦人科診察台に対してマイナスイメージをもっているが体験後プラスイメージに変化した。子宮がん検診率を上げるために、ヘルスケア・プロバイダーは、若い女性の婦人科診察台の否定的なイメージを減少させる必要がある。 本人担当部分：データの分析、結果の考察を行った。 共同発表者：◎Yumiko Nakai, Jong-Seong Moon, Yasumi Harikane, <u>Yuri Kobayashi</u>, Mayumi Kawai, Midori Takagi, Akiko Ito

6. 新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性とその特徴	—	平成 26 年 8 月	日本看護学教育学会 第 24 回学術集会	看護師 1,075 名を対象に自記式質問紙法による調査を行った。質問紙は高比良ら(1999)による情報活用の実践力尺度、常盤ら(2010)による批判的思考態度尺度を使用。分析対象者は新人看護師 158 名、看護師 583 名。 新人看護師および看護師の「クリティカルシンキング能力」と「情報活用能力」の関連性は、双方とも有意な正の相関が認められた。本研究から、新人看護師の両能力は関連していることが示唆された。クリティカルシンキング能力では「懐疑的態度」や「論理的思考への自信」、情報活用能力では「判断力」や「処理力」などの能力を高める教育が必要であると考えられる。(修士論文の一部を発表) 本人担当部分：質問紙の作成と調査及び統計解析、研究の総括を行った。 共同発表者：◎<u>小林由里</u>、河合まゆみ、播金ヤスミ、中居由美子、伊藤明子、小笠原知枝
7. 看護専門学校における高校新卒学生と社会人経験学生の学習意欲に関する要因	—	平成 27 年 8 月	日本看護学教育学会 第 25 回学術集会	専門学校における高校新卒学生と社会人経験学生の学習意欲に関する要因を明らかにすることを目的とした。看護専門学校 3 年課程（4 校）の 1～3 年生 445 名を対象に、自記式質問紙調査を実施。質問紙は永嶋らの学習意欲尺度、斎藤らの志望動機尺度、菅原らの自意識尺度と学習活動で困った場面・学校生活での人間関係・相談の気兼ねなど 6 項目とした。結果は、社会人が学習意欲全体で有意に高く、学習意欲に関する要因とした高校卒は「志望動機」のみであったが、社会人は「志望動機」「自意識」「学校生活の相談」が関与していることが示唆された。さらに高校卒は看護職への憧れと自分に適性があると感じているほど演習・実習に期待が大きいことが推察された。 本人担当部分：データの分析、結果の考察を行った。 共同発表者：◎河合まゆみ、小笠原知枝、中居由美子、<u>小林由里</u>、播金ヤスミ
8. Prognosis Prediction at One Month Before Death Based on Nurses' Assumed Tacit Knowledge: Qualitative Inductive Research Based on Systematic Review	—	令和 4 年 4 月	The 25th East Asia Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference	【目的】看護師の経験に培われた暗黙知に基づく予後予測を可能にする要素を明らかにする。 研究デザインは、系統的レビューに基づく質的帰納的研究。文献検索は、2000 年～2020 年に発行された医療系データベースを使用した。質的データはコード化し分類して分析した。選択基準に合致した 27 文献が分析対象となった。その結果、看護師の暗黙知に基づく死の約 1 か月前の予後予測の要素として、【目つき、表情の変化】【反応の低下】【死に対する恐怖】【家族等との惜別（せきべつ）】【今までにない異常な言動】【違和感のある臭気の消失】【生へのこだわりの喪失】【ただならぬ雰囲気を感じ】【一瞬の回復】【発汗を伴う皮膚色の変化】などの 10 カテゴリが抽出された。 共同発表者：◎<u>Yuri Kobayashi</u>, Chie Ogasawara, Teiko Nishizono, Mayumi Kawai, Sachiko Hiramatsu, Yasumi Harikane.

9. 看護師の暗黙知による 予後予測に関する文献 レビュー	—	令和4年 10月	日本エンドオブ ライフケア学会 第5回学術集会	【目的】1) 国内外の文献レビューにより、看護師の暗黙知による予後予測に関する研究の動向を把握し、2) 看護師がどのような予感や直観に基づいて患者の予後を予測しているのかを明らかにする。 【方法】文献レビュー方法および対象文献の選定は、医中誌 Web 版, CiNii, PubMed, CINAHL 等を使用した。 【結果】分析対象文献は17件となった。暗黙知による予後予測に関する文献の動向は、8件が看護師の暗黙知による死期の予測に関する文献、7件は暗黙知による急変や異常の臨床判断に関する文献、2件は経験により培われた実践知に関する文献であった。 【考察】看護師は過去の経験において培われた暗黙知の視点から予後を予測しており、特に患者の目つき・表情の変化、臭い、いつもと違う雰囲気などから予後を察知し予測していることが示唆された。 本人担当部分：文献検索、データ分析、研究の総括を行った。 共同発表者：◎小林由里, 小笠原知枝
10. 学生の主体性を引き出す有効な教育支援の検討 —学生がデザインする統合実習における教員の実践から—	—	令和4年 12月	日本看護科学学会 第42回学術学会	【目的】対象学生2名への実践から、教員のどのような支援が学生の主体性を引き出しているかを検討する。今後の教育支援をより有効なものとする具体策を明らかにする。 【方法】「学生が主体的にデザインする実習（西菌）」を活用。この方法は、学生が自ら課題を設定し、看護の現象に対して探究心を持つことにより、研究的手法を用い、情報収集から計画立案、実践、考察を行うものである。 1)探究テーマと理由の明確化 2) 実習施設とのスケジュール調整 3)実習日程の設定 【教育支援の実際】1)言語化へのサポート、2) 主体的な学習行動継続のサポート 3)主体的に学ぶ環境づくり、4) カンファレンスで成長確認 共同発表者：◎松浦尚子, 西菌貞子, 小林由里
11. Stressors for Visiting Nurses Supporting End-of-Life Care for Older Patients with Dementia and Their Families	—	令和5年3月	The 26th East Asia Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference	目的：高齢認知症患者のエンドオブライフと家族を支援する訪問看護師のストレス要因を明らかにする。方法：5年以上の訪問看護の経験をもつ看護師に、半構造化面接法を用いてデータ収集し、質的記述的研究の手法を用いて分析した。 結果：研究参加者は19名で、訪問看護の経験年数の平均は12.2年であった。分析の結果、訪問看護師のストレスとして、12のカテゴリと28のサブカテゴリが抽出された。12カテゴリはストレスの特徴から、1.中核症状、行動心理症状、2. 在宅療養継続困難、3. 意思決定支援、4. 在宅における看取り、5.職場環境への課題の5つの視点に分類された。 共同発表者：◎平松幸子, 小笠原知枝, 兼澤あゆみ, 小林由里, 河合まゆみ

12. Grief Care Provided by Visiting Nurses to Bereaved Families of Patients with Dementia	—	令和5年3月	The 26th East Asia Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference	目的：認知症患者の遺族に対して訪問看護師が提供するグリーフケアを明らかにする。 方法：訪問看護師を対象にグリーフケアに関する質問紙調査。 結果：調査対象は、平均訪問看護師歴9.2年であった。認知症患者の配偶者や子どもへのグリーフケアは、家庭訪問や電話相談で行われた。訪問看護師が行ったグリーフケアは遺族に寄り添い傾聴、表現の促し、行ってきたことを肯定、ねぎらいの言葉、生前の家族との関係構築、故人の思いを察して言葉をかける(代弁)、新たな問題や心配事の確認と支援、同じ境遇の遺族の紹介、社会資源の活用、遺族の健康状態の把握、悲嘆過程の説明の11項目であった。 共同発表者：◎河合まゆみ、小笠原知枝、小林由里、平松幸子
13. 基礎看護学実習Iの体験想起を活用した看護技術における学びのアウトプット	—	令和6年8月25日	日本看護研究学会第50回学術集会	【目的】基礎看護学実習Iにおける学生の体験想起の活用は、後続の授業＜看護技術I＞で、どのように学びのアウトプットにつながるかを明らかにする。【方法】(1)調査対象：同意を得られた学生81名。(2)データ収集方法：「看護技術の基礎I」の課題や振り返りの記載内容の中から、基礎看護学実習Iにおける看護師のシャドーイング実習で見学した内容や、その体験から考えたことについて想起して記載された文脈を抽出した。(3)データ分析方法：記述内容を取り出し、想起した場面と学びの特徴や深まりについて考察した。【結果】学生は、朝のバイタルサイン測定場面について実習中は疑問に感じなかったことを想起により疑問に思い、授業後に調べ学習により気づいていた。【結論】看護技術の講義や演習においてインプットした知識は、実習で見学した看護師の言動や行動などの体験の想起により、具体的な場面とつなげた理解の深まりに変化していた。また、体験した内容は、その時どう感じ、考えたのかという学生の感情とともに想起され、記録し、言語化することで体験による知識が意味づけされる。体験場面の想起の活用は、ただ知識を記憶するだけではなく、学びを深化させることにつながる事が明らかとなった。 共同発表者：◎小林由里、松浦尚子、井上理子、森本早紀、西園貞子
14. 高齢認知症患者のエンドオブライフと家族を支援する訪問看護師のコーピング方略尺度の構成要素の探索	—	令和6年9月15日	日本地域共生ヘルスケア学会第4回学術集会	【目的】在宅認知症高齢者のエンドオブライフと家族を支援する訪問看護師のストレス要因を明らかにする。【方法】4年以上の訪問看護の経験と在宅認知症高齢者のエンドオブライフケアの経験をもつ訪問看護士19名を対象とした。半構造化面接法を用いてナラティブデータを収集し、質的記述的研究の手法を用いて分析した。在宅認知症高齢者と家族への支援を通して感じる困難感、不安、負担感に関する語りを類似の文節ごとにコード化しカテゴリ化した。【結果】ストレス要因として10カテゴリと28サブカテゴリが抽出された。10カテゴリは、〔認知機能低下に伴う日常生活上の

				支障への対応〕〔看護介入に対する在宅認知症高齢者の理解困難〕〔認知症高齢者と家族の情緒不安定な言動〕〔家族の認知症に対する受容の難しさ〕〔在宅医療・看護ケアの見直しにかかる費用負担の困難さへの対応〕〔意思決定を代行する家族への支援上の困難さ〕〔意思疎通ができない認知症高齢者の看取りに対する家族の混乱〕〔多職種連携の困難さ〕〔多岐にわたる業務の繁忙に伴う疲労〕〔幅広い看護実践に必要な知識・技術の不足〕であった。共著者：◎平松幸子，小笠原知枝，<u>小林由里</u>，河合まゆみ，兒玉 拓
15.汎用的能力の向上を目指す4年次科目「統合看護論」演習の授業設計に基づく学びの特徴	-	令和7年12月7日	日本看護科学学会第45回学術集会	【目的】汎用的能力の獲得を目指した設計を試みた本校4年次開講「統合看護論」演習における学生の学びの特徴を明らかにした。【方法】2024年度の「統合看護論」の授業展開は，臨床実践をイメージした臨場感，包括的支援への判断，変化する状況の中での判断が必要になる状況設定で演習方法を工夫した。データ収集方法は，本授業の履修者73名のうち，同意が得られた40名（54.7%）の15回を通しての学びレポートの記述を分析対象とした。データ分析方法は，Word Miner（多次元データ解析ソフト）を用いて分析を行った。【結果】Word Miner による解析で，11クラスターに分類された。〈1.それぞれの状態に応じたアプローチ〉〈2.思考と判断のプロセス〉〈3.対話によって深まる本質理解〉〈4.能動的に実践に移す行動力〉〈5.対象者主体の目標設定〉〈6.他者の立場に立って考える〉〈7.看護職としての存在価値を感じる職業的アイデンティの自己像〉〈8.看護師としての能力を磨き続ける〉〈9.看護師としての基軸〉〈10.常に省察する態度〉〈11.学習者としての姿勢〉と命名した。【考察・結論】学びの特徴を示すクラスターは，この科目がめざしていた汎用的能力を示すものであったといえる。共同発表者：◎<u>小林由里</u>，西菌貞子，松浦尚子，岩本淳子
(その他)				
科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（c）（研究分担者）		令和2年4月～令和4年3月		研究課題名「終末期患者の意思表示を支えるための高齢者市民を対象としたエンドオブライフケア教育」市民を対象とした研修会の実施および、報告書冊子の作成に携わった。
令和3年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）（研究代表者）		令和3年～令和6年		研究課題名「エンドオブライフケアに携わる看護師の暗黙知に基づく臨死期の予測」令和3年度は，看護師の暗黙知に基づく予後予測項目の抽出を目的に，システマティックレビューおよび質的分析を行った。
科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（B）（研究分担者）		令和4年～令和7年		研究課題名「看護人材の円滑なトランジションを促す大学教育～新人教育の抜本的な改革と体系化」
奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成（成果発表）		令和6年		「汎用的能力の向上を目指す4年次科目「統合看護論」演習の授業設計に基づく学びの特徴」

教 育 研 究 業 績 書		
2026年 6月 17日		
氏名 宮本 雅子		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
	助産学、母性看護学、周産期看護、健康教育、思春期教育、母子間愛着	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 (1) 助産学実習学内実習のシミュレーション教育の実践	2023年9月	奈良学園大学において、助産学実習の学内実習方法として、シミュレーション教育を担当した。全国助産師教育協議会の事例フォーマットに沿って、産婦事例の実習を計画し、2023年10～12月に実施した。産婦の入院から分娩介助、産後2時間までを継続してシミュレーションを行い、分娩経過中の助産診断を重視したリフレクションを行った。
2 作成した教科書、教材		無し
3 教育上の能力に関する大学等の評価		無し
4 実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 摂南大学看護学部「自衛保安隊」 (2) 常翔啓光学園高等学校1年生を対象とした思春期教室 (3) 摂南大学看護学部「国家試験対策委員会」 (4) 摂南大学看護学部「教務委員会」 (5) 摂南大学看護学部「安全管理委員会」 (6) 摂南大学看護学部「学修支援センター運営委員会」 (7) 西宮市保健所課内保健師研修会講演テーマ「妊娠中から始める母と子の歌唱」 (8) 常翔啓光学園高等学校1年生を対象とした思春期教室	2016年4月～2018年4月に「安全管理委員会」に名称変更 2016年12月 2017年4月～2018年3月 2018年4月～2019年3月 2018年4月～2019年3月 2018年4月～2019年3月 2018年10月 2018年12月	同大学「自衛保安隊」に所属し、地区看護部隊の「避難誘導班」を担当し、年に2回の防災訓練の学生の誘導を実施した。摂南大学校方キャンパス防火・防災管理委員会にて、防災訓練内容について検討した。 摂南大学看護学部への左記授業依頼について、1年生男女の生徒479人を対象として、思春期教室を実施した。演習を担当し、助産学実習室において、助産に必要な教材を紹介し、分娩時のケアや体験などを企画、運営した。 同大学「国家試験対策委員会」に所属し、看護師国家試験対策の計画、模擬試験準備、実施手続き、試験監督、下位学生への指導を実施した。主に、助産師課程学生対象の国家試験対策として、年間学習計画、模擬試験手配、国家試験の動向と内容の分析、学生の意欲向上への取り組み、面談、学生の成績分析と対策考案、国家試験対策用の補講準備と資料作成を実施した。 同大学「教務委員会」に所属し、看護学部看護研究Ⅰ・Ⅱの手引書の検討、発表会企画運営、学部履修要綱の検討・確認を、ワーキンググループとして実施した。委員会全体として時間割作成、履修ガイダンス計画、学習状況調査などの業務に関わった。 同大学、「安全管理委員会」に所属し、災害訓練の企画、運営を実施した。災害記録用紙内容の検討を行った。委員会全体では、学生情報の教職員間での共有方法について検討し、実施に至った。 同大学「学修支援センター運営委員会」に所属し、ランチタイムイングリッシュの運営を担当し、学生利用者の把握、推進、集計を実施した。委員会全体では、学修支援センターの運営についても同様に実施した。 西宮市保健所の依頼にて、西宮市保健所課内の保健師32名を対象に講演を行った。講演内容として「妊娠中からの歌唱の意義、胎児や乳児への影響、妊娠期の歌唱クラスと継続した歌唱の効果等」を担当した。 摂南大学看護学部への左記授業依頼について、1年生男女の生徒436人を対象として、思春期教室を実施した。思春期教室の企画・運営を行い、授業は「胎児の発育、妊婦体験、育児体験、分娩室体験」の内容に関する演習を担当した。

(9) 四天王寺大学看護学部 「学生支援委員会」	2019年4月～ 2020年3月	四天王寺大学看護学部「学生支援委員会」に所属し、学生生活に関する支援（ロッカー割り当て、各期オリエンテーションの企画運営他）を実施した。また、1年生から行う国家試験対策ゼミの企画運営、成績分析、学習状況調査を実施し、学生への支援を実施した。
(10) 四天王寺大学看護学部 「キャリア委員会」	2019年4月～ 2020年3月	同大学、「キャリア委員会」に所属し、就職情報等の設置、就職支援シンポジウムの企画運営を行い、1年生に対し支援を実施した。
(11) 四天王寺大学、四天王寺大学大学院 四天王寺大学「入試問題校正委員（英語）」、四天王寺大学大学院「入試問題作成委員（英語）」	2019年4月～ 現在に至る	同大学、「入試問題校正委員（英語）」の委嘱を受け、業務に携わった。同大学大学院、「入試問題作成委員（英語）」の委嘱を受け、業務に携わった。
(12) 四天王寺大学 「基礎教育ワーキンググループ」	2020年4月～ 2021年3月	同大学、社会人基礎力向上のための基礎教育の在り方について、和の精神1・Ⅱ、および大学基礎演習、キャリア教育について検討した。
(13) 四天王寺大学高等教育推進センター員	2021年4月～ 2022年3月	同大学、「高等教育推進センター」の委嘱を受け、構成員としてプレエントランスガイダンスや社会人基礎力の向上に必要な入学前教育について検討した。
(14) 四天王寺大学看護学部 「国試対策委員会」	2020年4月～ 2023年4月	同大学、「国試対策委員会」委員長として、新たに設置された委員会に所属し、委員会規程、委員役割・活動計画、国試対策ゼミの企画・実行・評価、業者講座と模試を実施、成績分析と評価を実施した。
(15) 奈良学園大学保健医療学部看護学科 「FD・SD委員会」、学科「FD部会」	2023年4月～ 2025年3月	同大学、全学委員会と学科部会に所属し、全学および学科のFD研修の企画や運営に携わった。さらに、学科部会において、PROGテストの実施運営、地域住民を対象とした「健康フェスタ」の企画、運営に携わった。
(16) 奈良学園大学保健医療学部看護学科 「実習ワーキング」	2023年4月～ 2024年3月	同大学、学科教務部会の実習ワーキングに所属し、実習配置、実習オリエンテーション、看護学臨地実習要綱印刷調整、臨地実習指導者を対象とした実習調整会議の企画、運営に携わった。
(17) 奈良学園大学保健医療学部看護学科 「教務委員会」	2024年4月～ 現在に至る	同大学、学科教務委員会に所属し、教育課程、履修に関する事項、学生の試験、進級・卒業に関する事項、導入教育に関する事項、卒業研究に関する事項、課程選択に関する事項について業務に関わっている。
(18) 奈良学園大学保健医療学部看護学科 「実習ワーキング」	2025年4月～ 現在に至る	同大学、学科教務委員会の実習ワーキングのWG長として、学生の実習状況の把握と各領域での対応に関する事項、実習配置、実習オリエンテーション、看護学臨地実習要綱印刷調整、臨地実習指導者を対象とした実習調整会議の企画、運営に携わった。
5 その他 摂南大学大学院看護学研究科 修士論文審査（副	2018年4月	摂南大学大学院看護学研究科にて、健康発達支援看

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項		年月日	概 要	
1 資格, 免許 (1) 看護婦免許 (2) 助産婦免許 (3) 新生児蘇生法「一次」コース インストラクター資格 (4) 日本助産評価機構「アドバンス助産師」 認定		1990年5月 1991年5月 2014年2月 2015年12月	第700131号 第94883号 J-14-34269 認証番号15-013271	
2 特許等 なし				
3 実務の経験を有する者についての特記事項 なし				
4 その他 なし				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) なし (学術論文) 1.Effects of antenatal exercise on the quality of life in pregnant women: a literature review. (妊娠期のエクササイズによる妊婦のQOL: 文献 検討) 《筆頭論文》 (査読付)	共著	2017年3月	摂南大学看護学研究 5 巻1号 pp.37～47 摂南大学	本研究は、妊娠期に行う身体的エクササイズの 心理的効果のうち、QOLの向上への効果について 文献検討を行った。レビューは、Cochrane Handbook for Systematic Reviewに基づき国内 外の文献137件よりRCT9文献を抽出した。その うち2件はWHOQOL-BREFに関してメタアナリシス を実施した。9文献からエクササイズ実施後のQOL が有意に上昇した報告を認めたが、メタアナリ シスの結果から有意差がなかった。今後はQOLに 効果的なエクササイズの内容や介入方法などの 検討が必要である。(11頁) (共著者：宮本雅子、小神野雅子、松田佳子) 担当部分：文献収集、レビュー、統計分析、論文執筆を担当した。共著者は、文献検索、文献 の抽出、妥当性検討、結果の妥当性検討を担当 した。
2. 妊娠中期以後の妊婦のケアへの関心と気分・感情との 関連－POMS尺度を用いて－ 《筆頭論文》 (査読付)	共著	2017年6月	第47回日本看護学会論文 集 ヘルスプロモーション pp. 7～10 日本看護学会	本研究は、妊婦の肯定的感情を促進するケアに つなげるために妊婦の興味・関心のあるケア、 および妊婦自身が気分の変化への対処として実 施しているケアと気分・冠状との関連について 明らかにすることを目的として実施した。初妊 婦209名のうち、有効回答が得られた125名を分 析対象とした。その結果、心身症状として最も 多いのが「疲れやすい」であり、「妊婦体操・ ヨガ・呼吸法・リラックス法」などのケアに関 心を持っていた。「胎教や音楽」への関心も認 めた。エクササイズを行っている妊婦はPOMSの 「活気」因子が有意に高く、音楽鑑賞や歌唱す る妊婦は「疲労」因子が有意に低下した。今後 は、ケアの実施効果を研究することが課題と なった。(4頁) (共著者：宮本雅子、町浦美智子) 担当部分：研究計画、データ収集、共著者とと もに内容分析の実施、論文執筆を担当した。

3. 性別にみた高校生の性に関する理解と性教育の在り方の検討 (査読付)	共著	2017年6月	第47回日本看護学会論文集 ヘルスプロモーション pp. 40～43 日本看護学会	本研究は、高校1年生974名を対象に性に関する理解について思春期教室実施前後に質問紙調査を行い、847名の有効回答について分析した。その結果、思春期教室後の性に関する理解が高く、その効果に性差は認められなかった。パワーポイントを用いた講義後に、育児体験や出産体験・妊婦体験など演習が理解に対するうかをあげたといえる。その後の知識の定着については今後の課題となった。(4頁) (共著者：穂迫享子、但馬まり子、 <u>宮本雅子</u> 、赤井由紀子) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。
(その他) 「研究報告書」 1. 科学研究費補助金基盤研究C [研究費]	共著	2017年4月～ 2022年3月	日本学術振興会	課題名：「妊娠早期からの主体的・継続的な出産準備教育による父親役割形成への効果」 研究経費：4,550千円 研究内容：妊娠早期からのケア内容の充実を図ることを目的とし、妊娠期の父親へのケア効果に関するシステマティックレビューを実施し、効果内容を明らかにする。日本における妊娠期の父親の妊娠・出産・育児への意識や父親役割意識について調査を行い、夫のニーズを把握し、教育プログラムを作成した。 (共同研究者： <u>宮本雅子</u> 、小神野雅子、松田佳子) 担当部分：研究代表者、研究統括、研究計画、調査計画、調査の実施、データ入力、分析、学術集会、論文の発表。
2. 科学研究費補助金基盤研究C [研究費]	共著	2021年4月～ 2025年3月	日本学術振興会	課題名：「妊娠期から産褥期の母親による歌唱の胎児・新生児への愛着促進の効果」 研究経費：4,030千円 研究内容：妊婦自身の愛着体験により、胎児から継続して乳幼児期の愛着の変化について、妊娠期から産後にかけて行う歌唱により明らかにする。歌唱による心理変化として、妊婦や母親自身が感じる肯定的感情の変化、うつや不安などが軽減する効果があるのか、対照群と比較して検討する。本研究は、歌唱を母子愛着増進への助産ケアと位置付ける意義があると考えられる。 (共同研究者： <u>宮本雅子</u> 、西頭知子、石上浩美) 担当部分：研究代表者、研究統括、研究計画、調査計画、調査の実施、データ入力、分析、学術集会、論文の発表。
「総説」 なし 「国際学会発表」 1. Father's involvement during antenatal and postnatal periods: a systematic review of mixed study methods. (妊娠中と産後における父親の関わり：マルチメソッドにおけるシステマティックレビュー) [示説発表]	共著	2017年3月	The 20th East Asian Forum of Nursing ScholarsEAFONS (香港)	妊娠期と産後の夫への助産介入に関する文献より、ケアによる心理効果や父親役割向上に関する効果について検討した。国内外の1680文献より8文献を抽出し、RCT4文献、質的研究4文献を分析し、質的に統合した。その結果、RCTからは妊娠早期から始める教育的介入は、夫の不安を軽減する効果があり、質的研究からは、多くの夫が十分な情報や知識が不足し、妊娠・出産・育児の場面にいても関わりを持っていないことが明らかになった。本文献検討から、夫への妊娠早期からのケア介入の必要性和、知識や父親役割遂行に必要な十分な知識提供が課題となった。 (共同研究者： <u>宮本雅子</u> 、小神野雅子、松田佳子) 担当部分：研究計画、文献検索、文献検討、分析、学会抄録、発表原稿、ポスター作成を担当。

2. Problems relating to dual caring roles in working women in Japan. (我が国の就労女性のダブルケアに関する課題) [示説発表]	共著	2017年3月	The 20th East Asian Forum of Nursing ScholarsEAFONS (香港)	就労女性がダブルケアを両立するための支援について、日本の動向を知り、今後の研究課題を明確にするために文献検討を行った。医学中央雑誌より1999年～2015年の原著論文のうち、ダブルケアに関するものは0件であった。「就労女性」の「介護」と「子育て」に関する文献は14文献あり、これらの文献の評価方法、結果を年代別に整理した。その結果、就労女性が介護と子育てを両立するための支援へとつなげる知見が必要であるが、サンプル数も少なく、負担面に注目したものが多かった。今後、検討を加えていく必要があると考える。 (共同研究者：堀川尚子、宮本雅子、赤井由紀子) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。
3. Positive effect of singing on pregnant women's mood and feelings. (妊婦の歌唱による気分と感情の肯定的効果) [示説発表]	共著	2017年6月	31st ICM Triennial Congress (カナダ／トロント)	本研究は、妊娠期における歌唱クラスと毎日の歌唱の継続による気分や感情の変化について調査することを目的とした。質的記述的研究を実施した。妊婦を対象とした90分の歌唱クラスを月に1～3回実施し、5人の妊婦が参加した。その後約4週間の毎日の歌唱と記述を継続した。歌唱直後の記述データの分析から「快感情 (29)」、「リラックス (17)」、「ストレス軽減 (12)」、「歌への意欲向上 (10)」、「胎児への関心 (8)」、「回顧 (4)」の6つの主なカテゴリが得られた。毎日の歌唱日記の分析から上記に加え「胎児への意識向上 (15)」、「活気 (8)」、「ストレスと疲労の軽減 (6)」の3カテゴリが新たに抽出された。本研究の結果より、妊娠中に歌唱することは妊婦の肯定的感情を高める可能性が示唆された。妊娠期の歌唱は、重要な助産ケアの質提供のアプローチとして考慮する必要がある。 (共同研究者：宮本雅子、町浦美智子) 担当部分：研究計画、文献検索、文献検討、分析、学会抄録、発表原稿、ポスター作成を担当。
4. Importance of Japanese midwifery education in assisting alternative birth positions on the second stage of labour. (分娩第2期の分娩体位に関する日本における助産師教育の重要性) [示説発表]	共著	2017年6月	31st ICM Triennial Congress (カナダ／トロント)	本研究は、分娩第2期のフリースタイル分娩の介助に関する助産ケアの重要性に関して、日本における助産師教育の重要性について検討する。367人の助産師を対象に、2007年に自記式質問紙法による調査を実施した。フリースタイル分娩の介助は、1986年ごろの助産師学校卒業生より経験していた。フリースタイル分娩の介助を行っている施設の助産師のうち、助産師学生時代にフリースタイル分娩の教育を受けた経験の有無と、促進・導入の意思に有意差を認めた。産婦の分娩体位の選択を促進していくためには、助産師教育において仰臥位以外の分娩体位の理論と技術が必要とされる。 (共同研究者：宮本雅子、赤井由紀子、但馬まり子、穂迫享子) 担当部分：研究計画、文献検索、文献検討、分析、学会抄録、発表原稿、ポスター作成を担当。
5. A literature review of respiratory changes and singing in pregnancy (妊娠期における呼吸機能と歌唱に関する文献検討) [口頭発表]	共著	2020年1月	The 23rd East Asian Forum of Nursing ScholarsEAFONS (タイ／チェンマイ)	本研究は、妊娠期における呼吸機能の変化と、歌唱時の呼吸機能と変化について、文献学的に検討し、妊婦が歌唱する場合の利点や問題点を明らかにすることを目的とした。電子データベース；医中誌、MEDLINE、CINAHLより検索した文献からテーマに関連する文献を28件抽出し、妊娠期の呼吸機能について3文献、歌唱時の呼吸機能と変化について3文献、妊婦の歌唱時の呼吸機能に関する文献2件（ケーススタディ）を分析した。その結果、妊娠中に歌唱を行うことで、肺活量に変化はなく、上昇する横隔膜により、吸気で胸郭の前後左右に拡大すること、残気量が増えること、過呼吸発作を起こしにくいこと、オキシトシンの分泌により多幸感を得ることなどの利点があった。今後、妊娠期の歌唱を推進するための根拠となる結果を得ることができた。 (共同研究者：宮本雅子、町浦美智子、西頭知子) 担当部分：研究計画、文献検索、文献検討、学会抄録、発表原稿・資料作成を担当、

「国内学会発表」 1. 妊娠中期以後の妊婦のケアへの関心と気分・感情との関連－POMS尺度を用いて－ 〔示説発表〕	共著	2016年11月	第47回 日本看護学会学術集会ヘルスプロモーション (津市)	本研究は、妊婦の肯定的感情を促進するケアにつなげるために妊婦の興味・関心のあるケア、および妊婦自身が気分の変化への対処として実施しているケアと気分・冠状との関連について明らかにすることを目的として実施した。初妊婦209名のうち、有効回答が得られた125名を分析対象とした。その結果、心身症状として最も多いのが「疲れやすい」であり、「妊婦体操・ヨガ・呼吸法・リラクセス法」などのケアに関心を持っていた。「胎教や音楽」への関心も認めた。エクササイズを行っている妊婦はPOMSの「活気」因子が有意に高く、音楽鑑賞や歌唱する妊婦は「疲労」因子が有意に低下した。今後は、ケアの実施効果を研究することが課題となった。 (共著者：宮本雅子、町浦美智子) 担当部分：研究計画、データ収集、共著者とともに内容分析の実施、ポスター作成を担当した。
2. 性別にみた高校生の性に関する理解と性教育の在り方の検討 〔示説発表〕	共著	2016年11月	第47回 日本看護学会ヘルスプロモーション (津市)	本研究は、高校1年生974名を対象に性に関する理解について思春期教室実施前後に質問紙調査を行い、847名の有効回答について分析した。その結果、思春期教室後の性に関する理解が高く、その効果に性差は認められなかった。パワーポイントを用いた講義後に、育児体験や出産体験・妊婦体験など演習が理解に対するうかをあげたといえる。その後の知識の定着については今後の課題となった。 (共著者：穂迫享子、但馬まり子、宮本雅子、赤井由紀子) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。
3. 妊娠期から産褥期の母親による歌唱の胎児・新生児への愛着促進の効果 (1) 〔ラウンドテーブル〕	共著	2023年3月	第34回 日本発達心理学会 (大阪府)	本研究は、妊娠中期以後産後にかけて、子守歌やわらべうたなど子どもをイメージする歌を題材に、継続的に「歌いかけ」ることによる、母子間の愛着形成効果、および助産師などによる教育的支援の効果明らかにすることを目的とした。妊娠期の出産準備教育における歌唱実践事例報告および研究計画経緯を発表したのち、歌唱行為の意義、歌唱と子育ての支援の関係について討論を行った。 (共著者：石上浩美、宮本雅子、西頭知子)
4. 母親の子どもへの「歌い聴かせ」による愛着促進効果について 〔ラウンドテーブル〕	共著	2023年11月	第35回 日本発達心理学会 (大阪府)	本研究は、産後の母親が子どもに「歌いかけ」行為により、感情変化と母子間愛着形成について、現在継続中であるインタビュー調査結果を発表した。3名の母親の調査から、「歌い聴かせ」を行うことにより、子どもの反応から母子相互作用を示す行為が語られていた。また、子どもが肯定的反応を示すと母親も肯定的な感情が生じていた。今後は、母子間愛着形成との関連性について、量・質ともに研究を続行する。 (共著者：石上浩美、宮本雅子、西頭知子、入江眞理)
5. 育児期における母親の「歌い聴かせ」による愛着感情への影響と内的ワーキングモデル	共著	2024年10月	第65回 日本母性衛生学会 (宮崎市)	本研究は、子どもに歌い聴かせることによる母親の感情の変化が、愛着形成や過去の愛着体験と関連があるか探究することを目的とし、乳幼児の母親を対象に、インタビューおよびwebアンケート調査を実施した。インタビューでは、母親が「歌い聴かせ」により母子相互作用を感じたり、子どもの肯定的な反応により、共感的感情や子どもとの一体感をもっていること等が語られた。アンケート(分析対象31名)では、歌い聴かせの実施群と未実施群において愛着尺度に有意差はないが、内的ワーキングモデルの不安定型、回避型因子の点数に有意差があることが認められた。 (共著者：宮本雅子、石上浩美、西頭知子、入江眞理)

(注)

- この書類は、学長（高等専門学校にあっては校長）及び専任教員について作成すること。
- 医科大学又は医学若しくは歯学に関する学部若しくは学部の学科の設置の認可を受けようとする場合、附属病院の長についてもこの書類を作成すること。
- 「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。

教 育 研 究 業 績 書

令和 7 年 5 月 20 日
氏名 小池 伝一 印

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
小児看護学・家族看護学・災害看護学		子ども・家族・健康・健康障害・看護援助・災害	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
事項		年月日	概 要
1 教育方法の実践例			
奈良学園大学	国際看護論にて第1～6回の講義	2025. 4～	国際看護論にて国際看護の概要から、国際看護の具体的展開方法について講義を実施した。
奈良学園大学	家族看護論にて第1～8回の講義	2024. 4～	家族看護論にて家族の定義から、家族看護に必要な看護理論について講義を実施した。
奈良学園大学	小児看護学概論にて第1～15回の講義	2023. 4～	小児看護学概論において小児看護の役割から学校保健まで講義を実施した。
奈良学園大学	小児看護援助論にて第1～15回の講義	2023. 9～	小児看護援助論において、健康障害をもつ子どもと家族の看護について講義を実施した。

太成学院大学 小児看護学概論にて第 1～15 回の講義	2021. 9～ 2021. 12	小児看護学概論において小児看護の役割から学校保健まで講義を実施した。
太成学院大学 小児看護学援助論にて第 1～24 回の講義	2020. 4～ 2020. 7	小児看護学援助論の総論から災害を受ける子どもと家族の看護の講義を実施した。
太成学院大学 小児看護学実践実習 実習指導	2020. 9～ 2021. 2	小児看護学実践実習にて、学部 3 年生を対象に、健康障害をもつ子どもと家族の看護について、実習指導をおこなった。
北海道科学大学 小児看護学援助論	2015. 10～ 2016. 7	小児看護学援助論第 10 回災害を受けた子どもと家族の援助
北海道科学大学 小児看護学援助技術論演習講義	2016. 4～ 2016. 8	小児看護学援助技術論演習第 1 回総論から第 30 回バイタルサイン演習までの講義・演習を実施した。
自治医科大学 生涯発達看護学概論Ⅱ(小児期)の演習	2016. 10～ 2017. 2	生涯発達看護学概論Ⅱ第 6 回講義「乳幼児期の食行動」において、子どもの食行動の発達、離乳食についての演習を実施した。
自治医科大学 小児実践看護学Ⅱの演習	2016. 10～ 2017. 2	小児実践看護学Ⅱ第 10 回「バイタルサインズの測定」において、体温測定・心拍測定・呼吸測定・血圧測定の演習を実施した。
北海道科学大学 小児看護学実習 実習指導	2016. 9～ 2017. 2	小児看護学実習にて、学部 3 年生を対象に、健康障害を持つ子ども、健康な子どもを対象に、子どもと家族の看護実践の指導をおこなった。
2 作成した教科書、教材 奈良学園大学 国際看護論 第1～6回の講義資料作成	2025. 4～	国際看護論第1回から第6回までの講義資料及び学生配布資料を作成した。
奈良学園大学 家族看護論 第1～8回の講義資料作成	2024. 4～ 2024. 7	家族看護論第1回から第8回までの講義資料及び学生配布資料を作成した。
太成学院大学 小児看護学概論 第 1～15 回の講義資料作成	2021. 9～ 2021. 12	小児看護学概論第 1 回から第 15 回までの講義資料及び学生配布資料を作成した。
太成学院大学 小児看護学援助論 第 1～24 回の講義資料作成	2020. 4 ～ 2020. 7. 28	小児看護学援助論第 1 回から第 24 回までの講義資料及び学生配布資料を作成した。
北海道科学大学 小児看護学援助論・小児看護学援助技術論演習の講義資料作成	2015. 10～ 2016. 7	小児看護学援助技術論演習第 1 回から第 30 回までの講義資料・演習資料を作成した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 昭和大学による講師認定 文部科学省による講師認定	2012. 4. 1 2016. 4. 1	大学院保健医療研究科講師兼任 北海道科学大学 保健医療学部 看護学科

4 実務の経験を有する者についての特記事項 看護師長	2019. 2 ～ 2020. 3	博慈会記念総合病院小児センター
実習指導者委員会 委員長	2019. 4 ～ 2020. 3	博慈会記念総合病院
昭和大学 教育委員会	2012. 4～ 2014. 3	
北海道科学大学 実習委員会 副委員長	2014. 4～ 2017. 3	
太成学院大学 国家試験対策委員会 国家試験対策担当主担	2021. 4～ 2023. 3	
奈良学園大学 看護学科 教務委員会 委員	2023. 4～	
奈良学園大学 全学 教務委員会 委員	2023. 4～ 2024. 3	
奈良学園大学 看護学科 FD委員会 委員	2023. 4～	
奈良学園大学 看護学科 キャリア支援委員会 委員長	2024. 4～	
奈良学園大学 全学 キャリアセンター運営委員会 委員	2024. 4～	
5 その他 臨床研究指導	2009. 6～ 2020. 3	横浜労災病院・国立病院機構広島西医療センター・博慈会記念総合病院における看護研究指導
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許 看護師免許	1997. 4. 26	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他 新生児蘇生法一次インストラクター 介護職員によるたんの吸引等実施のための指導者講習 指導者(不特定多数の者対象) 介護職員によるたんの吸引等実施のための指導者講習 指導者(特定の者対象) DENVERⅡ 発達判定法 判定員 ピアカウンセラー養成者養成 インストラクター	2011. 12～ 2013. 10～ 2013. 11～ 2013. 6～ 2014. 11～	日本周産期・新生児医学会 厚生労働省 厚生労働省 日本小児保健協会 日本家族計画協会

第4回 日本パラスポーツ看護学会 学術集会 一般演題 座長		2023. 6		
第50回 日本看護研究学会 学術集会 運営委員		2024. 5～ 2024. 9		
第50回 日本看護研究学会 学術集会 一般演題 座長		2024. 8		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年 月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
2				
(学術論文)				

1. 積雪寒冷地に居住し乳幼児を養育する母親の育児支援ニーズ（査読付）	共著	2016 年 10 月	北海道科学大学紀要	「積雪寒冷地に居住し乳幼児を養育する母親のQOL と育児状況に関する実態調査」を実施した質問紙は、461 部配布し、450 部回収し（回収率 97.6%）有効回答は 420 部（有効回答率 91.1%）であった。そのうち自由記載欄への回答がされている 80 名を本研究の分析対象者とした。対象者 80 名の属性については、単純集計を行った。自由記載欄に書かれた文章は、積雪寒冷期に回答した内容であることから、積雪寒冷期に感じていることとして扱った。記載されている内容のうち、「育児に関して困っていること」と、「希望する育児支援内容」について表されているものを、それぞれ文脈単位で抽出し、コード化した。続いて、類似した内容をサブカテゴリー（以下〔 〕で示す）、カテゴリー（以下【 】で示す）へと集約した。小児看護学、母性看護学教員が中心となり、子育てを行う親や家族のストレス解消、QualityofLife(以下 QOL と記述)の向上、児童虐待の防止を目標とし、「HUS 子育て支援カフェ」を立ち上げ、育児支援プログラムを実施した。これまで実施した内容と参加者へのアンケートの結果を報告した。共著者：笹尾あゆみ, 山本八千代, 前田尚美, 草野知美, 伊織光恵, 市川正人, 小池伝一, 須藤 桃代, 関口史絵, 福原朗子, 三田村保 小池担当：データ分析、考察、論文執筆の助言をおこなった。査読有
2. 北海道科学大学が提供する地域子育て支援活動（査読付き）	共著	2016 年 10 月	北海道科学大学紀要	目的：小児看護学・母性看護学教員が中心となり、子育てをおこなう親・家族のストレス解消、QOL の向上、自動虐待防止を目標に、社会貢献事業を展開した結果について報告することである。 結果：プログラム参加者は 270 名で、養育者 124 名、子ども 146

				名であった。プログラム参加者の90%が地域貢献事業に満足していた。 寒冷積雪期の生活状況は厳しく、子育て支援ニーズは高いと言えるため、親の孤立感、ストレスであるが、今後も継続し、寒冷地域の自然環境、住環境を踏まえたプログラムを提供する必要がある。
3. 乳幼児を養育する母親のQOLと影響要因 (査読付)	共著	2016 年 10 月	母性衛生	目的：乳幼児を養育する母親のQOL 得点とQOL への影響要因を明らかにすることを目的とした。 方法：6 歳未満の子どもを養育する母親 375 名を対象に、無記名自記式質問紙調査を実施した。QOL 測定尺度は、WHO が作成したWHOQOL26（日本語版）を用い、QOL 平均点を基準として高群・低群に分け、影響要因の群間比較を行った。 結果：母親のQOL 得点に有意に影響している要因は、世帯年収居住状況、夫の育児協力及び精神的サポート等の物的・人的環境であった。また、育児に費やす時間の長さは、母親のQOL 得点に有意な影響は見られず、自分自身の時間を持つ、気分転換を図る等の育児中の過ごし方や、自分なりの育児観を持つこと等が有意に影響していた。 結論：育児中であっても母親として以外の側面を持つこと、他者との相互作用を通じて母親自身の育児観を育てていくことの重要性が示唆された。 共著者：前田尚美，山本八千代，草野知美，須藤桃代，笹尾あゆみ，市川正人，小池伝一，伊織光恵，関口史絵，三田村保 小池担当分：データ収集と分析、考察、論文執筆の助言をおこなった。査読有
4. 重症心身障がい児の親の認識に対する看護師の捉え方 (査読付)	単著	2019 年3 月	小児保健研究	本研究は、重症心身障がい児の親と看護師が、子どもの日常生活援助を協働して実践する時、子どもの日常生活援助に対する「親の認識」について看護師がどのように

				捉えていたのかを明らかにし、親と日常生活援助を協働するうえで親との関わり方に示唆を得るという目的で、重症心身障がい児施設に勤務する 11 人の看護師からインタビューを行った。その結果、【重症心身障がい児の状況や日々のケアに精いっぱいな親】、【親との難しい関係】、【重症心身障がい児の育児に対する親のこだわり】の 3 カテゴリーが抽出された。親と看護師の日常生活援助に関わる協働について看護師は、親の状態を俯瞰的に観察する、「親の認識」など考えていることを確認し、子どもと親にとってよい影響を与える関わりについてアセスメントする、最初に親がどんな喪失体験をしているかアセスメントして関わる、以上 3 つの示唆を得た。
5. 重症心身障がい児施設に従事する看護師の看護実践状況と役割認識（査読付）	単著	2021 年3 月	太成学院大学紀要	本研究は、重症心身障がい児の看護を実践している看護師が、日々の看護をどこまで認識し、実践しているのか。また、実践できていない部分はどこで、その要因は何かを明らかにした。その結果、重症心身障がい児施設に勤務する看護師の看護実践状況は、25~75% の看護援助を実践していた。
6. 乳幼児の経口与薬と原則に対する国内書籍の検討	共著	2023 年3 月	太成学院大学紀要	本研究は、我が国の小児看護書籍における乳幼児への経口与薬援助・原則の記述内容について明らかにすることを目的とした。その結果、与薬目的、薬剤確認、内服準備、説明と同意、内服方法とタイミング、シリンジ・スプーン・スポイト・乳首による援助方法、与薬後の援助、薬と食の関係、親への参加方法について記載されていた。記述内容には差があるため、統一した内容にすることが望ましいと言える。
7. 在宅で生活する重症心身障がい児をもつ母親が医療処置導入後の児を養育する中での新たな	単著	2023 年3 月	自治医科大学大学院看護学研究科博士後期課程博士論文	本研究の目的は、1. 母親は、医療処置を実施して退院後、在宅で重症心身障がい児の養育をする中、養育に対しどのような経験をし、解決していたか、2. 母親は、それ

な医療処置の意思決定にかかわる経験			までおこなって来た養育に対する経験が、重症心身障がい児の新たな医療処置が導入される際の意思決定に、どのように影響するか、を明らかにすることであった。 1. 研究方法；桜井(2002)のライフストーリー法とした。 2. 研究協力者；医療処置を導入後、在宅で養育をし、新たな医療処置を導入した重症心身障がい児をもつ母親 3 人とした。A さん(a さん)、B さん(b さん)、C さん(c さん)のストーリーを分析した。a さんは気管切開術を受け、1 年程度の在宅療養を経て、喉頭分離術を受けた。b さんは胃瘻造設術を受け、在宅療養を経て、喉頭分離術を受けた。c さんは気管切開を受け、在宅療養を経て、胃瘻造設術を受けた。研究結果の分析から、在宅で生活する重症心身障がい児をもつ母親が医療処置導入後の児を養育する中での新たな医療処置の意思決定にかかわる経験がメインピックとして明らかとなった。考察として 1) 新たな医療処置の導入を、希望を持って意思決定できていた。医療者は、母親が医療処置導入の先に希望が持てる状況をイメージできるように支援する必要がある。 2) 母親たちの納得は重要であり、母親の子どもの状態の状況把握を確認し、医療処置導入が子どもの状態に必要であることを母親が納得できるように支援する必要がある。 3) 在宅での養育経験の満足から、児との在宅での生活の継続のために医療処置の導入を決定していた。本研究の母親の時代は活用可能な社会資源も十分ではなかったが、近年、訪問看護の充実、支援情報のインターネットによる提供等社会資源も増加しており、在宅での療養を支援する体制が整ってきている。満足いく在宅生活を送ってもらうためには、この社
--------------------------	--	--	--

				会資源を上手に活用することが必要である。今後は適切な情報活用のため、母親のインターネットリテラシーを高め、インターネット情報活用への支援が必要である。
(その他) (学会発表) 1. 重症心身障がい児の親の認識に対する看護師の捉え方	単独	2015 年 9 月	第 22 回日本家族看護学会学術集会 (於国際医療福祉大学小田原キャンパス)	本研究は、重症心身障がい児の親と看護師が、子どもの日常生活援助を協働して実践する時、子どもの日常生活援助に対する「親の認識」について看護師がどのように捉えていたのかを明らかにし、親と日常生活援助を協働するうえで親との関わり方に示唆を得るという目的で、重症心身障がい児施設に勤務する 11 人の看護師からインタビューを行った。その結果、【重症心身障がい児の状況や日々のケアに精いっぱいな親】、【親との難しい関係】、【重症心身障がい児の育児に対する親のこだわり】の 3 カテゴリーが抽出された。査読有
2. 重症心身障がい児施設に従事する看護師の看護実践状況と役割認識	単独	2016 年 6 月	第 63 回日本小児保健協会学術集会 (於大宮ソニックシティ)	重症心身障がい児の看護を実践する看護師がどの程度役割を認識し実践しているかを明らかにした。 質問紙は有効回答 140 名を分析した。対象の年齢は 26～64 歳。性別は女性 110 名。資格は看護師が、教育背景は門学校卒業が多かった。対象の看護経験年数は 4 か月～40 年、重心経験は 2 か月～45 年。実践 30 項目の平均は 2. 67～ 4. 87。平均値が高値の内容は、児の状態を医師に報告と点滴や側管注射管理 4B7、低値は児の遊びや勉強の相手が 2. 67。因子分析の結果は 8 因子が抽出された。看護の役割と回答した割合が 9 割以上の項目は、児の状態を医師に報告が 97. 8%などであった。看護の役割と回答した割合が 6 割以下の項目は児の交流を図る援助 35. 1%、児の遊びや勉強相手 34. 3%であった。実践平均は高いが役割認識が低い項目は、家族の状況に合わせた面会調整が 3. 51 に対し役割認識が 62. 2%。

3. Literature review of the recognition about "daily life" of mother with severe motor and intellectual disabilities.	単独	2016 年 9 月	第 15 回自治医科大学シンポジウム（於自治医科大学）	児と養育者の支援のため、学校教諭やコメディカルなど他職種との調整が 3. 53 に対し役割認識が 62. 0%。実践平均値は低いが役割認識が高い項目は、養育者の相談に乗るが 3. 56 に対し役割認識が 75. 0%。自由記載の結果は 39 件で、8 カテゴリーに分類された。 査読有 This study of purpose determines the recognition about "daily life" of mother with severe motor and intellectual disabilities, and we decided to make a future research theme clear. With CINAHL, Ichyushi, we conducted document retrieval using following Key word, and the methods of study chose the literature which there was in a purpose of study and analyzed the contents. Key word ; "severe motor and intellectual disabilities" "mother" "daily life" "recognition" The results were as follows. Seven of 11 studies for families were the studies that focused on mother. The study that focused on the mother of child with severe motor and intellectual disabilities were as follows, "recognition for the child-rearing" "experience before a home care being stable" "reason why was not given temporary nursing at home by night" "relations with a bileaf and the disorder reception of the family" "present conditions of the respite care hospitalization" "at-home medical treatment life" "a nurture burden feeling" "home care time" "annoyance about brothers" "thought as the parent of father".
4. 積雪寒冷地に居住し乳幼児を養育する母親の QOL ―夏季と冬季の比較― 前田尚美、山本八千代	共同	2016 年 9 月	第 57 回日本母性衛生学会総会・学術集会（於：品川プリンスホテル）	目的：乳幼児を養育する母親の QOL 得点と QOL への影響要因を明らかにすることを目的とした。 方法：6 歳未満の子どもを養育する母親 375 名を対象に、無記名自記式質問

草野知美、須藤桃代、市川正人、小池伝一、笹尾あゆみ、伊織光恵、関口史絵、三田村保				紙調査を実施した。QOL 測定尺度は、WHO が作成した WHOQOL26（日本語版）を用い、QOL 平均点を基準として高群・低群に分け、影響要因の群間比較を行った。 結果：母親の QOL 得点に有意に影響している要因は、世帯年収居住状況、夫の育児協力及び精神的サポート等の物的・人的環境であった。また、育児に費やす時間の長さは、母親の QOL 得点に有意な影響は見られず、自分自身の時間を持つ、気分転換を図る等の育児中の過ごし方や、自分なりの育児観を持つこと等が有意に影響していた。
5. 積雪寒冷地に居住し乳幼児を養育する母親に必要な育児支援 前田尚美、山本八千代 草野知美、須藤桃代、市川正人、小池伝一、笹尾あゆみ、伊織光恵、関口史絵、三田村保	共同	2016 年 9 月	第 57 回日本母性衛生学会総会・学術集会（於：品川プリンスホテル）	「積雪寒冷地に居住し乳幼児を養育する母親の QOL と育児状況に関する実態調査」を実施した質問紙は、461 部配布し、450 部回収し（回収率 97.6%）有効回答は 420 部（有効回答率 91.1%）であった。そのうち自由記載欄への回答がされている 80 名を本研究の分析対象者とした。対象者 80 名の属性については、単純集計を行った。自由記載欄に書かれた文章は、積雪寒冷期に回答した内容であることから、積雪寒冷期に感じていることとして扱った。記載されている内容のうち、「育児に関して困っていること」と、「希望する育児支援内容」について表されているものを、それぞれ文脈単位で抽出し、コード化した。続いて、類似した内容をサブカテゴリー（以下【】で示す）、カテゴリー（以下【】で示す）へと集約した。小児看護学、母性看護学教員が中心となり、子育てを行う親や家族のストレス解消、QualityofLife(以下 QOL と記述)の向上、児童虐待の防止を目標とし、「HUS子育て支援カフェ」を立ち上げ、育児支援プログラムを実施した。これまで実施した内容と参加者へのアンケートの結果を報告した。

6. 重症心身障がい児をもつ母親の「養育に対する思い」に関する国内文献検討	単独	2021 年 7 月	第 31 回日本小児看護学会学術集会（web 開催）	文献の内容を分類した結果、母親の「養育に対する思い」に関する研究は、育児、医療的ケア、親役割、家族関係、教育、子どもの体調、社会資源、成長・発達、人間関係の 9 つに集約された。母親の思いや経験などを明らかにする際には、重症心身障がい児の、障害の程度やどのような疾患を持っているのかなど、ある程度条件を明確にしていく必要がある。母親の思いを明らかにする際には、いつの時期に、どのような思いや経験が出現したのか、質問紙形式を用いて、出現時期を明らかにすることが必要である。医療的ケアをもつ子どもの養育者を援助するためには、母親の思いに関連する経験について、詳細を明らかにすることが必要である。重症心身障がい児を養育する母親を援助する方略を考えるためには、罪責感などが養育に影響する度合いについて、明らかにする必要がある。
7. 在宅で生活する重症心身障がい児をもつ母親が医療処置導入後の児を養育する中での新たな医療処置の意思決定にかかわる経験	単独	2023 年12 月	第 43 回日本看護科学学会学術集会（於：峡海メッセ下関）	本研究の目的は、1. 母親は、医療処置を実施して退院後、在宅で重症心身障がい児の養育をする中、養育に対しどのような経験をし、解決していたか、2. 母親は、それまでおこなって来た養育に対する経験が、重症心身障がい児の新たな医療処置が導入される際の意思決定に、どのように影響するか、を明らかにすることであった。 1. 研究方法；桜井(2002)のライフストーリー法とした。2. 研究協力者；医療処置を導入後、在宅で養育をし、新たな医療処置を導入した重症心身障がい児をもつ母親 3 人とした。A さん(a さん)、B さん(b さん)、C さん(c さん)のストーリーを分析した。a さんは気管切開術を受け、1 年程度の在宅療養を経て、喉頭分離術を受けた。b さんは胃瘻造設術を受け、在宅療養を経て、喉頭分離術を受けた。c さんは気管切開を受け、在宅療養を経て、胃瘻造設術を受けた。研究結果の分析から、在宅で生活する重症心身障がい児をもつ母親が医療処置導入後の児を養育する中での新たな医療処

				置の意思決定にかかわる経験がメイントピックとして明らかとなった。考察として1) 新たな医療処置の導入を、希望を持って意思決定できていた。医療者は、母親が医療処置導入の先に希望が持てる状況をイメージできるように支援する必要がある。2) 母親たちの納得は重要であり、母親の子どもの状態の状況把握を確認し、医療処置導入が子どもの状態に必要なことを母親が納得できるように支援する必要がある。3) 在宅での養育経験の満足から、児との在宅での生活の継続のために医療処置の導入を決定していた。本研究の母親の時代は活用可能な社会資源も十分ではなかったが、近年、訪問看護の充実、支援情報のインターネットによる提供等社会資源も増加しており、在宅での療養を支援する体制が整ってきている。満足いく在宅生活を送ってもらうためには、この社会資源を上手に活用することが必要である。今後は適切な情報活用のため、母親のインターネットリテラシーを高め、インターネット情報活用への支援が必要である。
8. 子どもの最善の利益に関する看護師の援助における概念分析	共 同	2024年7月	第34回 日本小児看護学会学術集会 (大阪府大阪市)	子どもの最善の利益に関する看護師の援助における概念の定義、属性、先行要件、帰結を明らかにし、結果から、子どもと家族への看護援助について検討する目的とした。 研究データとなる文献は、医中誌 Ver. 5及びCINAHLを用いて行った。keywordは、子どもにケアを行う際、子どもにとって一番良いケアについて考察する必要があるケアが含まれるようwordを選択しておこない、文献数は31文献とした。概念分析の方法はRodgers & Knaf1 (2000) の概念分析アプローチを参考とした。 結果は、属性は【ケアの指標になり得るものの参照】【子どもと家族の状況をふまえたかわり】【子どもが一番良い状態でいられるよう継続して考える】【親や多職種、看護師間の協働】の4カテゴリーを抽出した。先行要件は【子どもの背景や状況】【親の心情や子どもに対する意識】【看護師の背景と子どもの現象に対する捉え方】の3カテゴリーを抽出した。帰結では【子どもにとって一番良いケアの決定と家族との意思決定】【子どもにとって一番良いケアのための看護師のさまざまな実践】【家族や多職種との子どものケアの協働】の3カテゴリーを抽出した。 概念分析の結果を実践的に検証する為、概念分析の4つの属性を含むモデルケースを示した。今回、結果で明らかになった4属性は、子どもへの援助

				を充実させる為、家族の思いを重んじた実践という、小児看護の特徴を反映していた。子どもと家族への援助の示唆として、子どもの最善の利益に関する看護師の援助には正解がない。しかし、家族の思い・認識が、子どもの代弁となり得る。従って、子どもの疾患、発達段階を踏まえ、家族の子どもへの思いや認識を理解することが求められる。
--	--	--	--	---

教 育 研 究 業 績 書

令和 7 年 5 月 19 日

氏名 蓮池 光人 印

研 究 分 野		研究内容のキーワード	
精神看護学		境界性パーソナリティ障害 青年期のメンタルヘルス	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
事 項		年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 音楽、楽曲を活用した講義方法		2017 年 4 月	講義の途中に、その単元に合わせた歌詞などを用いて講義の内容をさらに深める
お笑い芸能事務所社長、構成作家と 「笑い与健康」をテーマしたトークライブ形式の講義		2022 年 1 月 2022 年 6 月	大学のキャリアアップセミナーと連携し「笑い与健康」「笑い とコミュニケーション」をテーマに大学ホールで開催
2 作成した教科書、教材 境界性パーソナリティ障害を脅かす要素の明確化モデル		2017 年 10 月	境界性パーソナリティ障害患者自身の自己評価により「他者との関係性」「社会的役割」「自傷行為、衝動行為。操作行為」に大きな影響を与えられていることを図式化して示す
3 教育上の能力に関する大学等の評価 森ノ宮医療大学ベストティーチャー賞 在学生在が高校生に薦める講義 夢ナビ講義動画サービスにて講義を公開		2018 年 6 月 2022 年 4 月 2022 年 4 月	全学科教員、大学職員、該当学年の授業評価において全項目において 90 点以上の評価を得て表彰された 在学生在が高校生に薦める講義に、在学生在より選出され大学パンフレットに掲載 高校生向けサイト、夢ナビ講義動画サービスに看護学科の代表として講義が公開
4 実務の経験を有する者についての 特記事項			
5 その他			
職 務 上 の 実 務 に 関 す る 事 項			
事 項		年 月 日	概 要
1 資格、免許 保健師 看護師		2005 年 4 月 2005 年 4 月	
2 特許等			
3 実務の経験を有する者についての 特記事項 新人教育担当看護師 臨地実習指導者		2012 年 4 月 ～2015 年 3 月 2012 年 4 月 ～2015 年 3 月	新人教育担当として病棟内においてプリセプターを担当し、病院全体として看護理論、コミュニケーション、BPD の看護の研修会を行った 臨地実習指導者会の取りまとめとして看護学校、看護大学との調整を行った 指導者として学生へ直接指導を行った
4 その他			

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) なし				
(学術論文)				
3”境界性パーソナリティ障害患者が社会生活に適応していくための看護に関する研究”	単著	平成27年	博士論文	境界性パーソナリティ障害患者が社会生活に適応していくための支援枠組みを開発することである。第一段階の研究目的は、支援枠組み案を作成することである。1 事例への看護過程を分析し、支援枠組み試案を抽出する。試案を意識的に適用しながら2 事例へ看護を実践し、看護過程を分析し、患者の変化の構造と患者の状態に応じた看護の指針を抽出し、支援枠組み案を作成する。第二段階の研究目的は、支援枠組み案を検証し、支援枠組みを完成させることである。
4”本学看護学科における解剖見学実習による学生の学びと今後の課題ー解剖見学実習後のレポートの内容分析からー（査読付）”	共著	平成29年	”森ノ宮医療大学紀要 11, 111-126 頁”	学生が解剖見学実習を通して看護の視点から解剖学や生理学の知識を習得することや看護師としての倫理観を育てる機会とするため、学生の学びを明らかにし、その取り組み方法等の検討を行った。解剖見学実習が看護学生としての自覚・学修姿勢などを再確認する機会となり、今後の指導方法の基礎資料を得ることができた。 清水容子、蓮池光人、外村昌子、関口敏彰、上田佳世、高橋可奈英（森ノ宮医療大学）
5”行動変容の契機を作りだすもの（査読付）”	単著	平成29年	”キャリアと人生観 10(1), 7-10 頁” ”	質的分析を担当 人間は日々、成長発展している。日々の変化は小さいものかもしれないが、その日々のプロセスこそが人生における行動変容の契機を作り出しているのである。そして、行動変容の契機をしっかりと認識し行動を起こしていくのは自分自身なのである。
6”腹腔鏡手術後消化器がん患者におけるソフトマッサージの効果：予備的ランダム化比較試験（査読付）”	共著	令和2年	”日本統合医療学会誌 13(1), 4 0-4 6 頁” ”BMC Nursing 20(1), 237”	近年増加した腹腔鏡手術に対する安楽ケアとしてソフトマッサージの効果ならびに研究方法の検証をするために、消化器がん患者を対象にマッサージ前後の変化についてRCTを実施した。「不安な気分から安心な気分」は対照群と比較して有意に改善しており「マッサージ中は痛みがない」などの発言が得られた。体温、脈拍、血圧などの測定値には顕著な変化は見られなかったが、心理的安定に寄与することが示唆された。
7”Influence of New Coronavirus Pandemic on Behavior and Awareness of Young Nurses and Nursing Students in Japan（査読付）”	共著	令和3年		緒方昭子、井手口範男、外村昌子、 <u>蓮池光人</u> （森ノ宮医療大学） 質的分析を担当 新型コロナウイルス感染症パンデミックによる看護学生及び看護師の、感染予防・職業観・死生観に関する意識・行動変容につ

8” COVID-19 パンデミックがもたらした看護大学生・卒業生の意識と行動変容に関する研究（査読付）	共著	令和4年	”森ノ宮医療大学紀要 16, 23-38 頁”	いて検討し、学生の心情を理解しより適切な指導内容と看護師への支援内容への示唆を得る。COVID-19 に対する不安・恐怖の増強によって行動変容を余儀なくされ、感染予防行動だけでなく、仕事や勉強に対する行動変容や意識の変化が見受けられた。死生観は看護師よりも看護学生で大きく異なっていた。このことは、若い学生に対する生と死に関する適切な教育の重要性を示唆していた。 Mitsuto Hasuike, Yoshiaki Hara, Hiroko-Miyuki Mori, Norio Ideguchi, Fumie Shirai, Yasuko Yoshimura, Ikumi Murakami, Hirohisa Kawahata, Motokuni Aoki and Toshio Ogihara （森ノ宮医療大学）筆頭論文 「COVID-19 が世界に発生する前と後の意識・行動変容について」尋ねたアンケートの回答を量的に分析し自由記述の内容を質的記述的に分析し学生と卒業生の比較を行った。自分自身が感染のリスクが高い状況にあり、感染に対する不安と恐怖を感じながらも、感染の媒介者とならないようにとの医療従事者としての高い意識を持ち、感染予防行動を行っていた。学生は、死生観に影響を与えられていた。 蓮池光人、原良昭、吉村弥須子、村上生美、白井文恵、小西由起子、青木元邦、荻原俊男（森ノ宮医療大学）筆頭論文
（その他）				
7”社会生活を再開した境界性パーソナリティ障害患者の変化の構造”	単独	平成27年	”日本看護学会－精神看護－ 第46回学術集会(大阪市)”	先行研究で見出した、BPD 患者は《自己否定》《自己表現》《自己実現》の3つの自己評価のレベルをたどりながら回復していくという、この変化の段階をたどる患者の状態の変化と構造を明らかにすることで、患者の支援について考察した。自己評価のレベルごとに、患者の変化の段階があることを明らかにし、患者の変化の構造を導き出した。
8”境界性パーソナリティ障害患者の退院後の支援と今後の課題”	単独	平成28年	”日本看護研究学会 第21回九州・沖縄地方学術集会(宮崎市)”	退院後も継続して関わる中で、再入院に至ることなく社会生活を送ることができた BPD 患者3事例への看護過程を振り返り、退院後の支援と今後の課題を明らかにすることを目的とした。「社会生活を再開する中で生じた衝動的行為を、客観視して振り返られるように支える」「対象の社会生活を支える人々に、対象の今の状況が回復している状態として理解できるように伝える。更に回復を支える存在としての看護者の役割を伝える」という退院後の生活を支える2つの看護の指針を取り出した。
9”境界性パーソナリティ障害患者への支援枠組みの作成と検証 ～第1報～”	単独	平成28年	”日本精神保健看護学会 第26回学術集会(大津市)”	境界性パーソナリティ障害患者が、入院から退院後まで関わりを継続していく中で衝動的な行動を繰り返しながらも退院し、社会生活を継続できた。この事例との看護過程を振り返ることで、境界性パーソナリティ障害患者が社会生活に適応していくための看護の支援の枠組みを作成することを目的とした。＜患者の変化の段階＞＜患者

10”境界性パーソナリティ障害患者への支援枠組みの作成と検証 ～第2報～”	単独	平成28年	”日本精神保健看護学会 第26回学術集会(大津市)”	の状態><患者の変化の構造><看護の方向性><患者の状態に応じた看護の指針>からなる支援枠組み案を図作成した。 境界性パーソナリティ障害患者への支援枠組み案を適用しながらチームで看護を実践し、支援枠組み案の検証を経て支援枠組みとして完成させることを目的とした。支援枠組みを活用しながら、個々人の看護の自己評価能力高めていくこと、及びチームが一丸となって、境界性パーソナリティ障害患者に向き合っていくことは、境界性パーソナリティ障害患者が、社会に復帰し生活に適応にしていくための看護につながることを示唆された。
11”地域での生活が困難とされた統合失調症患者と家族を支える地域看護実践上の指針”	単独	平成29年	”日本看護科学学会 第37回学術集会(仙台市)”	精神障がい者の地域生活を促進していくためには、地域の一つの社会資源である医療機関を活用し、症状悪化時の急性期の入院治療を患者自らが納得して選択できるよう、ともに暮らす家族の協力を得ながら、支援していくことで、長期入院を行うことなく、地域生活を継続できると考える。
12”Clinical practicum of psychiatric nursing improves emotional intelligence. ”	共同	平成30年	”21st World Nursing Education Conference (Melbourne)”	4年生の精神領域における統合実習は学生の情動知能にどのような影響があるのかを明らかにすることを目的とした。EQSの3つの項目の内、「自己対応」「状況対応」に有意差がみられた。質問紙調査では、「患者への理解の深まり」、「精神科看護への認識の深まり」、「コミュニケーション能力の向上」の3つのカテゴリーが抽出された。 蓮池光人、久木元由紀子、外村昌子
13”Evaluating understanding of wheelchair seating care for multidisciplinary healthcare team workers”	共同	平成30年	”21st World Nursing Education Conference (Melbourne)”	看護学生は、臨地実習中に患者とラポールを確立することに困難を感じるがある。タッチケアは、痛み、吐き気、不安、疲労、不眠などに有効であり、受け手と送り手のラポール確立にも効果的である。本研究の目的は、タッチケアを学んだ看護学生が、患者とのコミュニケーションスキルが向上したことを明らかにすることである。学生は、タッチケアの効果を実感し、コミュニケーション能力の向上を認識していた。看護学生が治療的コミュニケーション能力を習得するために、タッチケアスキルは有効であった。 久木元由紀子、蓮池光人、外村昌子
14”Undergraduate nursing students acquire therapeutic communication skills through touch care practice. ”	共同	平成30年	”21st World Nursing Education Conference (Melbourne)”	医療従事者の車いすシーティングケアに対する理解度を評価することを目的とした。専門職間教育の重要性は、ほとんどの医療従事者が認識していた。車いすを必要とする人のQOL向上に専門職間教育は有益であり、看護師は専門職間教育をコーディネートする重要な役割を担っていると考えられる。しかし、介護職者がシーティングケアを認知していないことが明らかになった。シーティングケアについて、もっと医療従事者、看護師や看護学生に教え、実践していく必要性が示唆された。 外村昌子、蓮池光人、久木元由紀子

15”地域中核精神単科病床に勤務する看護師の首尾一貫感覚（SOC）とストレス反応の関連”	共同	平成30年	”日本看護研究学会第44回学術集会”	都市部中核病院の精神単科病床に勤務する看護師の首尾一貫感覚（SOC）とストレス反応との関連を明らかにすることを目的とした。地域中核病院の精神単科病床に勤務する看護師においても、SOCは職業性ストレス簡易調査票のストレス因子・影響因子、BSCP各下位尺度、HPI、属性で補正しても、独立して心理的・身体的ストレス反応に関連する要因であった。先行研究と同様、SOCが直接ストレス反応を少なくする可能性を示していると考えられる。 吉田えり、 <u>蓮池光人</u> （森ノ宮医療大学）山田和子、森岡郁晴（和歌山県立医科大学大学院）
16”The effects of end of life (EOL) education using color association related to death for nursing undergraduate students (ICN) ”	共同	令和元年	The International Council of Nurses 2019	成人慢性期看護学で継続して死生観についての講義を行い講義後に毎回、看護学生3年生の死生観の変化について、記述式アンケートとカラーイメージの調査を行った。講義を重ねるごとに、死に対する恐怖や不安は軽減し、受容すべきもの人間尊厳と変化していた。また、カラーイメージは初期は、黒と灰のみであったが、白や黄、オレンジなどバリエーションに変化が見られた。 藤本陽子、黒木美紀、久木元由紀子、 <u>蓮池光人</u>
17”セルフリフレクションシートを用いた精神看護主題実習前後の学生の情動知能と認識”	共同	令和元年	”日本精神保健看護学会 第29回学術集会”	精神看護主題実習期間中に、セルフリフレクションシートを用いながら実習を行うことで情動知能にどのような変化がみられるのか、また実習中のセルフコントロールにどのように影響があるのかを明らかにし、自分の感情をセルフリフレクションすることについての効果の検討を行う。一般の大学生と比較して情動知能は、主題実習後には、状況対応、全体合計において有意な差が見られた。アンケートの分析では、セルフリフレクションを行うことで学生が自分自身の一日の行動やその時の考えを客観視する機会となっており、自分自身の良い点や悪い点を振り返り、次の日の行動に繋げることができ、自分を客観視することで自己のコントロールができるようになっていた。 <u>蓮池光人</u> 、原邦子
18”統合実習においてプリセプターシップを取り入れた手術室実習の学びと効果”	共同	令和2年	”第46回日本看護研究学会”	手術室実習は学生にとって強い緊張や不安を伴う環境であり、学生の学びが促進できる実習指導者の関わりや学習意欲を高める教員の関わりが求められている。今回、統合実習においてプリセプターシップを取り入れた手術室実習を行い、学生の学びとプリセプターシップの効果を明らかにした。学生はプリセプターの指導による手術室実習での体験を通して、患者を中心とした周手術期看護の繋がりや手術室看護師としての専門性を学んでいた。 吉村弥須子、 <u>蓮池光人</u>
19”COVID-19 パンデミックがもたらした看護大学生・卒業	共同	令和3年	”第47回日本看護研究学会”	「COVID-19が世界に発生する前と後の意識・行動変容について」尋ねたアンケート

生の意識と行動変容に関する研究”			の回答を量的に分析し自由記述の内容を質的記述的に分析し学生と卒業生の比較を行った。自分自身が感染のリスクが高い状況にあり、感染に対する不安と恐怖を感じながらも、感染の媒介者とならないようにとの医療従事者としての高い意識を持ち、感染予防行動を行っていた。学生は、死生観に影響を与えられていた。 吉村弥須子、白井文恵、<u>蓮池光人</u>
-------------------------	--	--	--

教 育 研 究 業 績 書		
2026年 6月10日		
氏名 松井 利江		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
がん看護，成人看護	がん治療（手術療法・薬物療法），婦人科がん，セクシュアリティ	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
病態に基づく成人慢性期疾患患者の看護の教育	2013年10月～ 2018年1月	天理医療大学 看護専門科目の共通基盤看護学実践論Ⅱセルフケアを支える看護（2年次、2単位30時間）の講義および演習を担当し、慢性腎不全患者、造血管疾患の看護、がん看護、緩和ケアに関する講義を担当した。講義では、関連する解剖生理、病態、診断・治療と治療に関する知識と、患者のアセスメントと看護について実際の経験や理論も用いて講義を行った。演習では、糖尿病認定看護師をゲストに迎え、血糖測定やインスリン注射の演習、在宅酸素療法の演習を担当した。学生の授業評価からは、病態を十分理解した根拠に基づく看護や、患者のセルフマネジメントを支援する重要性を学んでいることが分かった。
患者の強みを生かした看護過程の展開と健康を促進するための看護援助の指導	2013年10月～ 2018年10月	天理医療大学 看護専門科目の共通基盤看護学実習Ⅱ健康回復を支える看護（2年次、2単位90時間）の実習指導を担当した。初めて看護過程の展開の一連を学ぶ学生の実習指導として、身体的側面だけではなく、心理・社会面も含めて患者の全体像を捉えること、患者の看護上の問題点だけに着目するのではなく、患者の強みを生かした看護を展開する重要性を指導した。実習終了時には、学生は患者の反応を捉え実践を評価する難しさを感じつつ、患者のもつ力を尊重することの重要性を学んでいた。
病みの軌跡理論を活用した慢性期患者の看護実践の指導	2014年5月～ 2020年5月	天理医療大学 看護専門科目の、共通基盤看護学実習Ⅲセルフケアを支える看護および慢性期療養過程を支える看護実習（ともに3年次、2単位90時間）の実習指導を担当した。主に血液内科、泌尿器科、循環器内科、総合内科において受け持ち患者の全体像を捉え、患者が病とともに生きることを支援するための看護実践の指導を行った。受け持ち患者の病みの軌跡を理解し、学生が患者に関わる「今」すべきことは何かを学生に問いながら、患者と家族への看護を深く学べるように指導を行った。
術後離床の援助の体験的学習	2015年7月～ 2019年7月	天理医療大学看護専門科目の共通基盤看護学実践論Ⅲ急性期療養過程を支える看護（3年次、2単位30時間）および、急性期療養を支える看護演習（3年次、1単位15時間）において、看護技術演習を担当した。開胸手術あるいは開腹手術を受けた患者の事例を用い、学生が交代して看護師役・患者役になって術後初回歩行の援助を行った。デモンストレーションは行わず、学生が考えた方法で実施し、改善点を考察しながらより良い援助を検討させた。学生は、術後1日目の患者の離床に配慮すべき点や疼痛緩和の看護、離床の動機付けなど様々な視点で援助を検討でき、実習のイメージがついたと評価した。

周手術期患者の看護実践の指導	2015年11月～ 2021年2月	天理医療大学看護専門科目の共通基盤看護学実習Ⅳ急性期療養過程を支える看護実習（共に3年次、2単位90時間）の実習指導を担当した。主に、泌尿器科、心臓血管外科、婦人科病棟において、解剖生理や病態の知識を常に結びつけながら、患者が術後合併症を起こすことなく、順調な回復を支えるために不可欠な看護および、退院後の生活を想定した看護を学べるよう、思考過程およびベッドサイドでの看護援助の実際を指導した。
周手術期患者の看護実践を考察するケースレポートの指導	2015年11月～ 2019年11月	天理医療大学看護専門科目の共通基盤看護学実習Ⅳ急性期療養過程を支える看護（3年次、2単位90時間）の実習指導を担当し、学生が受け持ち患者に行った看護実践を客観的に振り返るためにケースレポートの指導を担当した。ケースレポートを記述し、先行研究を活用して考察することは学生にとって難しい課題ではあったが、その過程を通じて自己の課題にも気づくことができていた。
社会的問題を教材にしたがん看護教育	2015年～4月 2020年6月	天理医療大学 看護専門科目のがん看護論（4年次、選択1単位15時間）の科目担責任者として、講義と演習を担当した。より広い視野で現在のわが国でがん患者と家族が置かれている状況や課題を認識できるよう、セクシュアリティや就労、子どもへのがん教育、遺伝子医療などのトピックスを提示し、看護師の役割を考えるよう促した。さらには、天理市におけるがん罹患の状況と課題、行政の施策についての講義を取り入れ、地域に根差したがん感医療の展望を考える機会とした。学生による授業評価では、がん看護に対する関心の高まりと、がん患者と家族をめぐる課題の重大さが示された。
終末期がん患者の苦痛症状緩和に焦点を当てた緩和ケア教育	2015年4月～ 2022年6月	天理医療大学 看護専門科目の緩和ケア論（4年次、選択1単位15時間、令和3年からは3年次 選択2単位30時間）の科目責任者／科目担当者として、講義を担当した。緩和ケアはすべての患者に適応されるものであるが、本科目ではがん終末期患者に焦点を当て、身体的・心理的・社会的・スピリチュアルの局面から患者と家族の苦痛を緩和するための理論と具体的な看護援助について講義を行った。実際の事例を教材としたほか、臨床の認定看護師を招き、理論と実践がつながることをねらいとした。単位認定レポートや学生による授業評価では、緩和ケアへの理解・関心の高まりが示された。
終末期患者の心理を理解するための「死にゆく過程の疑似体験」ワークの導入	2016年10月～ 2018年10月	天理医療大学 看護専門科目の緩和ケア論（4年次、選択1単位15時間）の科目担当者として、初回講義の導入のために「死にゆく過程の疑似体験」ワークを簡易的に改変し、取り入れた。学生に、現在大事にしているものを4つ書き出してもらい、がん患者の病状の経過（診断、治療、再発、余命告知）において、一つずつ手放すものを選択するように指示した。「胸が苦しくなった」「どれも手放したくない思いで辛かった」「一番大事なものに気づけた」という学生の反応から、終末期患者の喪失体験に理解が深まり、講義への関心が高まったと評価した。
がん領域の認定看護師と協働した事例展開	2016年10月～ 2017年10月	天理医療大学 看護専門科目のがん看護論（4年次、選択1単位15時間）の科目責任者として、自ら作成した乳がん患者の事例展開を取り入れた。がん領域の認定看護師（がん放射線療法看護、がん化学療法看護、がん性疼痛看護）に授業に参加してもらい、アセスメント視点や看護援助について学生とディスカッションできるようにした。学生は「臨床看護師の思考が分かった」「その患者に必要な看護を導く過程が理解できた」と、実践に即した学びをしていた。

看護研究論文のクリティーク指導	2017年1月～ 2022年7月	天理医療大学 看護専門科目 看護研究方法論（3年次、1単位15時間）および、看護研究基礎演習（3年次、1単位30時間）のなかで、毎年2～5名の学生をゼミ形式で担当し。学生個々の関心に基づいて選択した質的・量的デザインの看護研究論文のクリティークを指導した。また、クリティークを通じて、研究疑問への発展を支援した。
看護研究計画書作成の指導	2017年4月～ 2022年8月	天理医療大学 看護専門科目看護研究演習Ⅰ・Ⅱ、看護研究演習（いずれも4年次、1単位30時間）にて毎年2～5名の学生をゼミ形式で担当し、研究疑問の明確化、文献レビュー、研究計画書作成、研究計画書発表までを指導した。担当学生のテーマは、がん治療期の看護、グリーフケア、看護師の終末期ケアに対する態度、慢性疾患患者のセルフマネジメントなど多岐にわたった。
ゴードンの機能的健康パターンの枠組みを用いたアセスメント方法・看護診断の授業	2017年4月～ 2022年12月	天理医療大学 看護専門科目実践基礎論Ⅲフィジカルアセスメント（2年次、2単位30時間）および健康回復過程を支える看護演習（2年次、1単位30時間）において、ゴードンの機能的健康パターンのうち「排泄パターン」「役割－関係パターン」「セクシュアリティパターン」と関連するNANDA-I看護診断について、各パターンの背景となる知識や概念・理論からアセスメント視点、情報収集の内容を講義した。その後の科目で行う事例展開に役立つよう、簡単な事例を用いたアセスメント演習を取り入れた。
慢性疾患患者事例を用いた早期からの退院支援を意図した看護展開の指導	2021年9月～ 2022年10月	天理医療大学 看護専門科目慢性期療養過程を支える看護演習（3年次、1単位30時間）を担当し、急性増悪を繰り返すCOPD患者の事例を設定し、看護過程の展開を指導した。現在だけでなく、今後を見据えた長期的な病態変化を捉え、患者の望む生活実現を支えることを重視して指導を勧めた。また、患者のセルフマネジメント支援の実施や、退院カンファレンスのロールプレイを取り入れることで、多職種における看護師の役割を学ぶ機会とし、4年次の実習のレディネスを高めるようにした。学生は、患者と家族の価値観を重視した支援を行う意義について考察を深め、4年次の実習に向けた意欲を示した。
国民の大規模調査結果を活用した成人の健康の現状と課題に関する授業	2021年5月～ 2022年4月	天理医療大学 看護専門科目健康の回復過程を支える看護（2年次、1単位15時間）において成人期の健康に関する動向と問題の講義を担当した。国民生活基礎調査などの大規模調査を示し、その背景を分析することで、学生がより成人期の特徴を理解できるようにした。都道府県別統計や、学生が属する青年期を題材にして、学生が身近に健康問題を考えられるように工夫をした。授業後には、自分の健康について振り返り、壮年期に向けた健康づくりが必要であるとの感想が多く聞かれた。
シミュレーションを取り入れた急性期患者の看護実習指導（COVID19感染拡大に伴う学内実習）	2021年11月～ 2023年2月	天理医療大学 看護専門科目急性期療養過程を支える看護実習（3年次、2単位90時間）を3クール担当した。令和2年は、コロナ禍において臨地実習が中止された。そのため、肺がん患者の事例を作成し、患者役を教員が演じて術前実～術後7日目までの患者のアセスメント・看護実践を日々進めていった。実習に近い状況を作るための場の再現をし、学生の実践を録画してリフレクションを繰り返した。学生個々の思考過程や実践指導を通じて、学生は臨床実習同等の意義があり、自己の課題が明確になったと述べた。

在宅移行支援を目指した慢性期患者の看護実践指導	2022年5月～7月	天理医療大学 看護専門科目在宅移行期を支える看護実習（4年次、3単位135時間）を担当し、慢性疾患患者の在宅移行の看護実践を指導した。入院・退院支援部門や看護専門外来の見学実習では、在宅で療養する患者の現状を捉えられるように支援し、続く病棟実習に活用できるようにした。患者を生活者としてとらえ、患者と家族が望む生活に着目しながら看護援助を導けるように指導した。また、看護チームや多職種と積極的にかかわり、学生が計画した看護が実践できる場づくりを調整した。コロナ禍で時間や行える援助の制約があったものの、学生や臨床指導者からは、これまでの学習の統合となる実習になったと評価を受けた。
教育用電子カルテシステムとアバターを活用した慢性期疾患患者に対する看護の事例展開	2022年9月～10月	天理医療大学 看護専門科目慢性期療養過程を支える看護演習（3年次、1単位30時間）を担当した。演習の半分強はオンラインで実施するため、急性増悪を繰り返すCOPD患者の事例展開において教育用電子カルテシステム・患者と家族はアバターを利用した。患者の状態に日々変化を捉えることや、カルテにはない情報を患者や家族から収集するといった臨床に近い状況を再現した。学生は関心をもって主体的に学習に取り組んでいた。
看護実践の基盤となる解剖生理学の知識習得の強化を目指した授業	2023年4月～6月、2024年4月～6月	関西医科大学 看護専門科目 障がい論（2年次、1単位15時間）において、主に身体機能障害（呼吸機能、循環機能、排泄機能、運動機能、高次脳機能障害、セクシュアリティ）をもつ患者を理解するための授業を行った。学生のレディネスを考慮しながら、解剖生理を楽しんで学べるよう資料は図表を多く取り入れ、低学年の学生にも理解できる事例を取り入れた。さらに、授業ごとにミニテストを行い、知識の習得に努めた。課題レポートはルーブリック評価表で評価をし、一人一人にフィードバックを行った。毎回の授業の感想から、「解剖生理が分かりやすく、楽しかった」「難しいけど理解したい」「実習で忘れないようにしたい」といった、概ね肯定的な評価を受けた。
施設と地域における双方向からがん看護実践を学ぶ実習の設計と指導	2023年4月～6月、2024年4月～6月	関西医科大学 看護専門科目卒前インターンシップ実習（4年次、3単位135時間）において、がん看護学領域ゼミの学生の実習指導を行った。がん患者が多い血液内科・消化器病棟での実習に加え、緩和ケアを重視する訪問看護ステーションによる実習を計画し、病院と在宅における看護実践の連続性を学ぶことをねらいとした。また、異なる看護実践の場における、それぞれの魅力と厳しさなどを知ることができるよう、看護師との対話の時間・カンファレンスを取り入れた。実習終了時には、学生たちは看護師として目指す看護師像や自己の課題を語るとともに、臨床で働くことへのイメージがついたと評した。
臨床判断能力の基礎形成を主眼とした周術期看護実習指導	2023年8月～2024年2月、2024年8月～2025年2月（予定）	関西医科大学 看護専門科目成人治療看護論実習（令和5年度は3単位135時間、令和6年は2単位90時間）において、実習指導を4クール/年担当した。全身麻酔下で手術を受ける患者の看護展開において、日々変化する患者の状態にあわせて必要な看護を速やかに行うこと、患者の反応を受けての「気づき」を重視し、リフレクションを積み重ねた。実習を通じて、学生は生体侵襲や術後合併症について理解を深め、患者に必要な看護を考えることができるようになっていった。また、実習後の面談において多くの学生が、毎日変化する患者の反応を捉えられるようになったと述べ、気づきを看護に発展させることの重要性を学んでいた。
学部生のがん看護に関する卒業論文（文献研究）の指導	2023年4月～10月、2024年4月～10月	関西医科大学看護専門科目看護研究法Ⅱ（4年次3単位90時間）において、2年間に6名の学生を担当し、国内外論文を対象とした、文献研究の指導を担当した。学生のテーマはいずれも、がん看護に関連するものであった。学生の研究疑問の明確化から研究計画、研究の実施、論文作成、学内発表会に至るまでの指導を行った。

博士前期課程(高度実践看護師コース)の学位論文の指導	2023年4月～ 2025年3月	関西医科大学大学院看護学研究科 博士前期課程 高度実践看護師コース治療分野の学生の学位論文の副指導を担当した。担当した学生はがん看護学領域2名、慢性疾患看護学領域1名であり、放射化学療法を受ける患者の体験、遺伝子プロファイリング検査を受ける患者の支援、生物学的製剤による治療を受ける炎症性腸疾患の患者の体験をテーマ(いずれも質的記述的研究)とした研究であった。
博士前期課程(高度実践看護師コース)の学位審査副査	2022年2月、 2025年2月	関西医科大学大学院看護学研究科 博士前期課程 高度実践看護師コースの学生各1名の学位論文審査を、副査として担当した。
看護実践能力の向上を目指した高度実践コース学生の経験事例の分析・省察を取り入れた授業	2024年8月～9月	関西医科大学大学院看護学研究科 博士前期課程 共通科目臨床推論・診断学(1年次2単位)の科目責任者として、医師による臨床診断のプロセスを理解できる講義に併せ、看護の実践知と臨床推論について授業を行った。また、学生の経験事例を基に自己の看護実践プロセスを分析、省察する課題を与え、ディスカッションを取り入れた。これにより、学生が看護の質を高めるための臨床判断とはどのようなものかを熟考し、自己の課題に気づくことで臨床判断能力を高めることをねらいとした。学生は臨床経験が豊富な者が多く、授業後の意見では、自分の臨床判断の際の思考パターンを知り、学生同士のディスカッションによってより看護の専門性を理解する機会になったと語った。
高度実践看護師コース(がん看護学)の学生に対するがんサバイバーへの全人的ケアを目指した講義	2024年9月～ 11月	関西医科大学大学院看護学研究科 博士前期課程 治療看護分野専門科目がん看護学生活援助論(1年次2単位)において、がん看護学高度実践看護師コースの学生1名に対し、がんサバイバーが直面する課題に対する看護について講義をした。講義では、看護モデルを取り入れた事例分析を取り入れて、学生が培ってきた実践知と知識が統合されるように努めた。なかでも、セクシュアリティや妊孕性、新たながん治療に伴う経済的問題など近年重要視されている内容も取り上げ、がんサバイバーに全人的なケアを提供するための知識を講義した。
高度看護実践コース(がん看護学)の学生に対する、最新のがん治療における看護師の役割を見出すための講義・演習	2024年11月～ 2025年1月	関西医科大学大学院看護学研究科 博士前期課程 治療看護分野専門科目がん看護学演習ⅠおよびⅡにおいて主に婦人科がんの放射線療法や遺伝子医療に基づく薬物療法の動向・現状を概観し、外界の知見やガイドラインを含めて理解を深められるように授業を行った。また、実際の事例をもとに患者と家族のアセスメント、看護介入をディスカッションした。そのなかで、がん専門看護師として、ジェネラリストに対してどのような教育や倫理調整ができるか、多職種と連携できるかを学生と共に検討した。
学生の思考過程を育む看護過程展開の演習指導	2025年4月～6月	奈良学園大学看護学科 成人老年看護援助論演習Ⅱにおいて、ゴードンの機能的健康パターンの枠組みと看護診断を用いた事例展開を指導した。展開のポイントを示しながらも、学生の気づきやその患者にとって重要だと考えることを起点に、アセスメントから全体像、看護課題の特定、看護計画、看護実践と評価という一貫したプロセスを辿れるよう、講義と演習、フィードバックを繰り返し取り入れた。看護援助の実施ではグループディスカッションにより良い援助方法の探求を促した。
実習の経験を教材としたターミナルケアについての講義	2025年5月	奈良学園大学看護学科 ターミナルケア論(4年次選択科目)において、これまでの実習で経験した終末期ケアの経験を共有し、患者と家族の心理や看護師の実践の意味についてディスカッションを行った。また、スピリチュアルケアについては、村田理論を活用し、受け持ち患者や事例患者の苦痛やケアについて学べるよう授業を組み立てた。
看護統合実習の学びを起点とした卒業論文の指導	2025年6月～ 10月	奈良学園大学看護学科 卒業研究(4年次)において、学部生の卒業論文を指導した。学生が設定した探求テーマをもとに計画した看護統合実習での学びを起点とした研究疑問の明確化、研究計画、文献検討の実施、論文の執筆までを指導した。卒業研究が卒業後の看護実践や研究に繋がるよう、学生の関心や研究の意義を尊重しながら指導にあたった。

2 作成した教科書、教材 ・がん看護論における診断期～再発乳がん患者の事例作成 ・慢性期療養過程を支える看護演習におけるCOPD患者の事例作成 ・在宅移行期を支える看護実習における外来化学療法を受ける乳がん患者の事例作成 ・在宅移行支援を学ぶためのパーキンソン病患者の事例作成 ・疼痛を訴える子宮がん患者の事例作成 ・周術期看護実習のルーブリック評価表の作成 ・がん薬物療法を受ける壮年期肝臓がん患者の事例作成 ・成人老年看護学実習1～4の実習要項・指導要領の作成	2016年4月 2020年10月 2021年10月 2021年5月 2022年5月 2023年7月 2024年8月 2025年4月 2025年4月～6月	天理医療大学 看護専門科目のがん看護論（4年次、選択、1単位15時間）において、実際のがん患者が辿る療養過程に合わせた事例を作成した。診断期、治療期、再発治療の選択といった、がん患者の意思決定支援が重要な時期に焦点をあて、治療を継続するうえで必要な看護を検討できるようにした。 天理医療大学 看護専門科目の慢性期療養を支える看護演習（3年次、2単位30時間）において、急性増悪を繰り返すCOPD患者の事例を作成した。緊急入院から回復し、自宅に退院する過程で、実際の退院支援や看護援助を導くことができるような情報を含めた。また、実習をイメージして7日間の変化を捉えられるように工夫した。 天理医療大学 看護専門科目の在宅移行期を支える看護実習（3年次、3単位135時間）の学内実習のために外来化学療法を受ける乳がん患者の事例を作成した。化学療法外来での看護を想定し、患者のこれまでの経過と現状を端的に捉えられるように工夫し、学生がその日に必要な看護を検討・実施できるようにした。 天理医療大学 看護専門科目の在宅移行期を支える看護実習（4年次、3単位135時間）において、COVID-19感染拡大による臨地実習中止に備え、病棟実習の追体験が可能にする事例を作成し、教育用カルテMedi-EYE®に収納した、事例は、実習目標達成のために、患者の全体像を深く捉え、多職種連携や退院調整、家族看護が検討できるように工夫をした。 関西医科大学看護学部看護専門科目の卒前インターンシップ実習（4年次、3単位135時間）の一部として、がん看護学ゼミの学生3名を対象に、がん疼痛を訴える子宮がん患者の事例を作成し、患者の身体・心理・社会的アセスメント踏まえた清拭の援助計画立案・実施を行った。 関西医科大学 専門科目成人老年治療看護論実習（3年次、2単位90時間）の科目責任者として、学生・教員・指導者間が到達度を共通理解するためのルーブリック評価表を作成した。 奈良学園大学 成人老年看護援助論演習Ⅱにおいて、壮年期肝臓がん患者の事例を作成した。繰り返し薬物療法を受けているものの、治療の限界を迎えつつある患者の事例であり、患者だけでなく家族に対する看護や意思決定支援についても考えられる事例とした。複雑な病態であるが、臨床で出会う患者をイメージして作成した。 奈良学園大学看護学科3年次の領域実習、成人老年看護学実習1～4の実習要項・指導要領を作成した。評価基準はより明確になるように下位項目を示し、学生・教員間で共通理解ができるように努めた。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		なし

5 その他		
【学会・研究会における活動】		
第16回日本クリティカルケア看護学会 学術集会 実行委員	2020年7月～ 12月	当日の会場案内など参加者の対応を担う予定であったが、webによる開催となった。
日本看護科学学会 和文専任査読委員	2023年10月～ 現在	公益財団法人日本看護科学会の和文専任査読委員として、投稿論文の質的研究の査読を担当している。
第21回日本乳癌学会近畿地方会 看護セミナー講師 乳がん女性のセクシュアリティ～女性として生きることを支えるために看護師が知っておきたいこと～	2023年11月 於：京都産業会館	乳癌の最新の薬物療法によって生じるセクシュアリティの変化と、そのケアについて30分間の講演を担当した。多数の乳がん看護に携わる看護師の参加があり、患肢がが高い様子が伺われた。講演後は、多様なセクシュアリティへのケアの難しさ・重要性について参加者と議論した。
International Journal of Qualitative Studies on Health & Well-being 査読員	2024年2月	International Journal of Qualitative Studies on Health & Well-beingの編集者より依頼を受け、投稿論文1件の査読を行った。
第38回 日本がん看護学会学術集会 実行委員	2024年2月 於：神戸国際展示場	口演会場の運営を担当し、座長の補佐、発表者の支援等を行った。
【天理医療大学における委員会・プロジェクト活動等 2013年4月～2023年3月まで】		
・教務委員会	2017年4月～ 2019年3月	委員として、学生の取得認定の確認、看護学科の時間割調整、筆記試験マニュアルや学習ガイドの改訂等を行った
・ハラスメント対策委員会	2016年4月～ 2018年3月, 2020年3月～ 2023年3月	委員として、ハラスメントガイドラインの作成と改訂、ハラスメント防止啓発のための講演会の企画運営、学生向けリーフレットの作成、ハラスメントに関する意識調査の実施、ハラスメント事案発生の対応を行った。
・学生委員会	2015年4月～ 2016年3月	委員として大学祭における学生支援、学生と教職員の意見交換会の企画・運営等を行った。
・図書委員会	2016年4月～ 2018年3月	委員として、新規購入図書の検討と希望図書の取りまとめ、図書の紛失予防策の検討・学生への啓発活動を行った。
・チューター会議	2019年4月～ 2023年3月	学年チューターとして、他の学年・検査学科と日々のチューター活動内容の共有と課題の検討を行った。
・安全管理委員会	2017年4月～ 2020年3月	委員として、防災・避難訓練の企画と当日の運営、防災講演会の企画、防災マニュアルの改訂、大学内の安全点検を行った。
・キャリア支援委員会	2018年4月～ 2020年3月	委員として、学生の進学・就職支援の講義の企画、天理医療大学同窓会と協働してホームカミングデーの企画と運営を行った。
・広報社会連携委員会	2020年4月～ 2023年3月	委員として、年間4回のオープンキャンパスを担当し（令和3年度は看護学科責任者）、各回の企画と看護学科紹介・体験教室の指揮、アルバイトの指導を行った。また、COVID19の感染状況に応じた開催方法、感染予防策を検討した。その他、参加者の個人相談の対応、模擬授業を行った。また、まちの保健室の準備、実施を行った。
・ハラスメント相談員としての活動	2014年8月～ 2023年3月	大学よりハラスメント相談員の任命を受け、教職員・学生に対するハラスメント相談業務、報告書作成、臨時委員会への参加を行った。

・国家試験対策	2019年4月～ 2023年3月	看護学科4年生のチューターとして、国家試験対策の計画・実施を行った。模擬試験や出張講義、学内補講のみならず、高頻度に出題されるキーワードに関連した練習問題の作成、学習成果の分析などを行い、それを看護学科教員と共有した。また、学生の学習意欲を維持するためのサポートを行った。
天理医療大学 教職員のための公開講座 講師	2018年7月	天理医療大学 教職員のための公開講座「学校教育におけるがん教育の進め方」において、県内の小中学校教諭を対象にがんの病態、治療、がん患者が経験する苦痛について講義を担当した。
天理よろづ相談所病院看護部 倫理審査委員としての活動	2020年4月 ～2023年3月	天理よろづ相談所病院看護部の倫理審査委員として、研究計画書の倫理審査を行った。
【関西医科大学における委員会・プロジェクト活動 2023年4月から2025年3月まで】		
・看護学部教務委員会	2023年4月 ～2024年3月	委員として、学部生の履修に関する審議、単位認定、授業シラバスの点検、成績不振者や単位未修得者の面談などを行った。また、令和6年度の日本看護学教育評価機構の受審にむけて、学部内の授業評価の実態調査を行い、資料を作成した。
・大学院教務委員会	2023年4月 ～2025年3月	委員として、大学院生の履修に関する審議、単位認定、授業シラバスの点検、学位論文の執筆要項の検討などを行った。博士前期課程の研究者コース修了生が、高度実践看護コースに入学する場合の履修モデル案作成を担当した。また、カリキュラム変更・セメスター変更に伴う時間割の検討などを行った。
・関西医科大学 看護キャリア開発センター・研究部門	2023年4月～ 2025年3月	委員として、関西医科大学の系列病院の看護研究の促進を目指し、研修の企画運営や、研究支援体制について検討した。看護スタッフの研究を指導する立場にある管理者(病棟師長や副師長、教育担当者)約20名に向けて、2023年・2024年ともに研究デザインの選択をテーマとした研修の講師を務めた。
・国家試験対策委員会	2024年4月～ 2025年3月	副委員長として、看護師・保健師・助産師国家試験対策について検討・年間計画、実施をした。模擬試験の結果を分析し、ゼミの担当教員と連携して学習支援を行った。模擬試験結果と授業成績との関連などを分析し、指導を強化すべき学生の抽出を行った。
・1年生担任、学生委員会	2024年4月～ 2025年3月	1年生の担任として、学期ごとのオリエンテーション、チューターと連携した大学生活の支援を行った。学生委員では、委員として1年生の状況を報告し、生じている問題や対応について協議した。
【奈良学園大学における委員会活動など】		
・実習ワーキンググループ	2025年4月～	看護学科実習ワーキンググループに成人老年看護学領域を代表して加わった。実習配置の作成、統合実習オリエンテーション運営、実習要項の修正、支援を要する学生の情報共有を行った。
・高校への出前授業・アカデミックインターンシップ担当	2025年4月～7月	京都文教高等学校の2～3年生約15名を対象に、がん患者と家族の理解をテーマに講義・ワークショップを行った。また、本学の「成人老年看護学概論」をアカデミックインターンシップとして公開し、終末期患者と家族のケアについて授業を行った。
【社会貢献活動】		
・NPO法人 ニューマン理論・研究・実践研究会 社員(令和4年4月に監事就任)	2016年9月～ 現在	本NPOは、マーガレットニューマンの看護理論研究者である遠藤恵美子氏代表のもと、国内の臨床看護師・研究者に理論に基づく看護実践を普及・発展することを目的としており、年間4回の研究会や年次集会の企画、運営を担当している

がん患者会支援の活動	2019年1月～ 2022年5月	神戸市の婦人科がん患者会「パールポート」が2か月に1度開催する患者会にボランティアとして参画し、自身の医療専門的知識や臨床経験、研究成果に基づく情報の提供、参加者の相談に応じている。
A LITTLE COURAGE IS NEEDED ON BOTH SIDES World Ovarian Cancer Coalition Inspiring Voices Project	2025年8月公開	Inspiring Voices Projectは、世界中の卵巣がん当事者、ケア提供者、研究者など様々な立場から、卵巣がん患者が声をあげる重要性をアピールするものである。卵巣がん患者のケアの研究者として要請を受け、実施した研究内容やそこから得られた考察、卵巣がん患者のケアの重要性などについてインタビューに応じることでプロジェクトに参加した。インタビュービデオは、World Ovarian Cancer Coalitioのホームページ・YouTubeで公開されている。 https://worldovariancancercoalition.org/world-ovarian-cancer-day/inspiring-voices/
【競争的研究資金の獲得】 日本学術振興会 科学研費助成事業 1. 壮年期の進行期婦人科がん患者の配偶者が体験する支援ニーズに基づくケアモデルの構築（基盤研究C 課題番号25463451）	2013年4月～ 2015年3月	研究代表者として、左記の研究課題に取り組んだ。第化学療法を受ける患者の配偶者に行った質的調査の結果と先行研究をもとに配偶者に対するケアモデルを作成し、臨床看護師のグループインタビューによる実行可能性と有用性の評価を行った。研究代表者：松井利江 分担研究者：布谷麻耶、片岡純
2. 脳卒中患者の家族介護者に対する在宅支援介入プログラムのに関する研究 （基盤研究C課題番号26463362）	2014年4月～ 2017年3月	研究協力者として、データ収集・データ分析を担当した。脳卒中患者家族に対して急性期からそれぞれの時期に応じた在宅移行のための看護支援を明らかにした。家族の不確かさを軽減できる病状説明と医療者の丁寧かつ親身なかかわりを意図的に組み込む必要性、看護師の先を見通す力と患者・家族の自宅での生活を判断する力が必須であることが示唆された。 研究代表者：林みよ子
3. 卵巣がんが疑われる患者に対する術前外来ケアプログラムの開発（基盤研究C 課題番号19K10920）	2019年4月～ 2024年3月	研究代表者として、左記の研究課題に取り組んだ。手術まで確定診断がつかず、術中所見で術式が決まる不確かな状況で手術を受ける患者に対し、患者および熟練看護師に対する調査を基盤としたケアの開発に取り組んだ。卵巣がんが疑われる患者に対してセクシュアリティを根幹とした術前ケアプログラムの作成を試みた。 研究代表者：松井利江 分担研究者：青木早苗、瀬戸奈津子
4. 婦人科がん患者のセクシュアリティのケア実践能力向上を目指した教育プログラム開発（基盤研究C課題番号23K0994）	2023年3月～ 2028年3月（予定）	研究代表者として、婦人科がん患者のケアに携わる臨床看護師を対象とした、セクシュアリティの教育プログラムの作成に取り組んでいる。博士論文を含めたこれまでの調査、先行研究を基に教育プログラムのアウトカム・教育内容の検討を行っている。 研究代表者：松井利江 分担研究者：青木早苗、瀬戸奈津子
天理医療大学共同研究費 1. 婦人科がん患者が初回治療を完遂するプロセス—診断から術後補助療法までの体験—	2016年9月～ 2017年8月	研究代表者として研究全般を遂行した。外来通院する婦人科がん患者に面接調査を行い、質的に分析を行った。 研究代表者：松井利江 共同研究者：林みよ子、森知美、木村智美

2. 継続的なStructured debriefingがSCU若手看護師の早期在宅移行に向けた家族看護実践に与える影響		2016年9月～ 2017年8月		共同研究者として、SCUに勤務する卒後3年目の看護師を対象に、在宅移行における家族ケアの認識と実践についてStructured debriefingを1年間実施した。Structured debriefingの実施およびデータ収集、分析・結果のまとめを担当した。 研究代表者：林みよ子 共同研究者：松井利江，森知美，臼井千春，大仲陽子	
3. 終末期血液がん患者の在宅療養移行を支える看護活動		2022年9月～ 2023年3月		研究代表者として、高齢血液がん患者の在宅移行における看護師の思考と実践を明らかにする研究を行った。終末期に在宅移行を実現できた4事例の診療録や地域連携記録、カンファレンス記録をデータとし、看護師の実践を可視化した。 研究代表者：松井利江 共同研究者：高田幸恵，山中政子，奥田真紀子	
天理医療大学若手奨励研究 ・婦人科がん患者が初回治療を完遂するプロセス—診断から術後補助療法までの体験—		2016年9月～ 2017年3月		研究代表者として研究全般を遂行した。外来通院する婦人科がん患者に面接調査を行い、質的に分析を行った。 研究代表者：松井利江，林みよ子，木村智美	
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項					
事項		年月日		概 要	
1 資格，免許		1994年 5月2日 2009年 12月22日 2014年 5月11日		看護師免許（第828097号） 厚生労働省認定看護教員養成講習会修了 第2199号 日本緩和医療学会 End-of-Life Nursing Education Consortium・Japan(ELNECJ)指導者	
2 特許等				なし	
3 実務の経験を有する者についての特記事項					
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項					
著書，学術論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(学位論文) 卵巣がん治療を受けた女性のセクシュアリティの変容プロセス The process of transforming sexuality in women treated for ovarian cancer (博士論文)		単著	2022年3月	関西医科大学大学院看護学研究科	本研究は、Eriksonの「三種の現実」を理論枠組みとして卵巣がん治療を受けた女性のセクシュアリティの変容を明らかにした。卵巣がん経験者18名に半構造化面接を行い修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析した。 結果、女性のセクシュアリティは、術前に【完全には拭い切れない生殖器温存への期待】をもつことで、術後に【「突然」生殖器を失った身体との対峙】をし、『女性である私の可逆性と不可逆性の問い』『これまで通りにいかないセックスへの否定的感情』『パートナーシップの真価の見極め』を繰り返しながらも、いずれの女性も『女性である私に対する納得』をするように変化していた。卵巣がん治療を受けた女性のセクシュアリティには、卵巣がんの診断過程の特徴が反映しており、自身自身との対峙やパートナーとの相互作用によって変化しながら、女性として肯定的な自己評価に至ることが分かった。

(著書) 1. がん薬物療法の基本とマネジメント	分担著者	2024年1月	メジカルビュー社	第Ⅰ章「投与管理」「退院後のセルフマネジメント」および、第Ⅲ章「性機能障害」「ホットフラッシュ」を執筆した。看護師が実践にすぐに活用できるよう、最新のがん薬物療法を受ける患者の看護に必要な知識と介入についてガイドラインに準拠して解説した。
(学術論文) 1. 進行期卵巣がんの妻と療養を共にした壮年期配偶者の体験-2人の遺族の分析- (査読有)	共著	2015年3月	天理医療大学紀要, 3(1),16-24	進行期卵巣がん患者の療養過程における壮年期配偶者の体験を明らかにすることを目的に、2名の遺族である患者の夫に面接調査を行い、質的記述的分析を行った。結果、【妻を死なせるわけにはいかない】【今日1日をやり過ごす】【妻の気力を支える】【妻らしさを守る】【後悔なく見送る心づもり】という、卵巣がんの診断から死に至るまでの体験が明らかになった。 松井利江, 福田陽子, 布谷麻耶 本人担当分：研究全般
2. Decreased daytime light intensity at nonwindow hospital beds: Comparisons with light intensity at window hospital beds and light exposure in nonhospitalized elderly individuals (査読有)	共著	2018年5月	Chronobiol Int, 35(5), 719-723.	高齢入院患者の転倒と生体の日内リズムを検討するため、高齢入院患者が日中に浴びる日照強度の実態を調査した。1つの医療機関で日中のベッドサイドの光強度を、季節ごとに1分間隔で測定した。地域で過ごす高齢者のデータと比較して、非窓側ベッドは有意に低い日中の光強度を浴びていたが、窓側ベッドは地域の高齢者が浴びる光強度と有意差はなかった。これらの結果は、季節や部屋の方角に関係なく一貫していた。 Iwamoto J, Obayashi K, Kobayashi M, Kotsuji T, Matsui R, Ito K, Yoshida O, Kurumatani N, Saeki K. 本人担当分：データ収集、データ整理
3. 繰り返し化学療法を受ける婦人科がん患者の配偶者の対処 (査読有)	共著	2020年9月	日本がん看護学会誌, 34. 136-144	繰り返し化学療法を受ける婦人科がん患者の配偶者の対処プロセスを明らかにすることを目的に、10名の子宮がん、卵巣がん患者の配偶者を対象に面接調査を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析した。結果、配偶者は妻の気持ちに寄り添いたくても難しく、【妻の苦しみを前に自分の気持ちを抑え込む】ようにしながら、【自分一人で妻を守る】【共倒れしない術を探す】【妻の治療継続を支える】ようにし、【治療の限界を意識しながら夫婦で生きていく】ことが明らかになった。 本人担当分：研究全般 松井利江, 片岡純, 布谷麻耶
4. 卵巣がん患者のセクシュアリティに関する研究の動向と今後の課題 (査読有)	共著	2021年1月	Palliative Care Research, 16(1),3-12	卵巣がん患者のセクシュアリティに関する先行研究の動向と今後の課題を明らかにするため、国内外の文献を検討した。対象論文30件に日本の論文は含まれなかった。「性機能障害の実態と影響要因」「性行為の実態と影響要因」「パートナーとの関係性と影響要因」「性的魅力・ボディイメージの変化と影響要因」「セクシュアリティに関する患者のニーズとケア」であった。本研究より、卵巣がんの独自性に焦点を当てたセクシュアリティを明らかにする必要性が示唆された。 本人担当分：研究全般 松井利江, 瀬戸奈津子

5. 奈良ニューマン理論・実践学習会の歩みーMargaret.A.Newman理論に基づく看護実践をめざしてー	共著	2023年2月	天理医療大学紀要, 11(1),30-35	M.A.Newmanの拡張する意識としての健康の理論に基づく看護実践の探求を意図する奈良ニューマン理論・実践学習会の設立から7年間の活動を振り返り、その意義を考察した。文献抄読と看護実践を語り合う対話によって、参加者は全体論の視点で現象を捉えることができるようになり、看護実践に変化が生じていること、学習会が成長できる場として認識していることが示唆された。 <u>松井利江</u> , 森知美
6. A qualitative analysis of sexual transformation in Japanese women after ovarian cancer treatment (査読有)	共著	2024年4月	Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing,2024 Jan 19;11(4)	卵巣がん治療後の日本人女性におけるセクシュアリティの変容を明らかにすることを目的とした。卵巣がん治療を受けた18名の女性にインタビューを行い、修正グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。分析の結果、(1)卵巣と子宮を失う現実直面する(2)女性であることの可逆性と不可逆性を熟考する(3)性行為に対する気持ちの変化と否定的な感情に向き合う(4)パートナーシップの本質を再評価する(5)女性としてのアイデンティティに満足感を見出すことが明らかになった。これらは、卵巣がんの診断と治療、過去の生殖に関する意思決定、パートナーとのコミュニケーションのありよう、日本における社会規範の特徴に影響されていると思われる。 本人担当分：研究全般 <u>Rie Matsui</u> , Sanae Aoki, Natsuko Seto
8. 成人看護学実習において単一医療機関で行われている在宅移行支援の見学実習を取り入れた学習成果（査読有）	共著	2024年4月	天理大学学報, 75 (4), 1-13	成人看護学領域に単一の医療機関で行われている在宅療養移行支援の見学実習を取り入れたことによる学習成果を明らかにした。成人看護学実習の履修を終えた4年生64名の実習レポートとアンケート調査の結果を、テキストマイニングと質的統合法を用いて分析した。結果、学生の78%が見学実習の学びを病棟実習に活用できたと回答し、その内容として【療養生活継続のための看護展開：生活者の視点で地域に戻る患者を支援】などの5つが抽出された。 山中政子、森知美、大内田靖子、 <u>松井利江</u> 、東真理 本人担当分：データ分析、結果まとめ、論文の推敲
(その他) 「学会発表」 1. 化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者が体験する困難と対処	共同	2015年9月	日本家族看護学会第22回学術集会 (於 国際医療福祉大学 小田原保険医療学部)	化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者が体験している困難とその対処を明らかにすることを目的に、質的研究を行った。10名の研究参加者から得られたデータを、修正版グラウンデッド・アプローチの手法を用いて分析した。分析の結果、配偶者は【八方ふさがり】【抜け道を探す】【気負いを捨てる】というプロセスで課題に対処をしていること、このプロセスの全体を通じて＜妻の苦しみを感じて辛い＞ものの、＜弱みは見せない＞よう振る舞う対処が明らかとなった。 本人担当分：研究全般 <u>松井利江</u> 、福田陽子、布谷麻耶、片岡純

2. 卵巣がんの妻と死別した高齢配偶者のSpiritual Needs	共同	2015年11月	日本家族看護学会第22回学術集会 (於 国際医療福祉大学 小田原保険医療学部)	卵巣がんの妻と死別した高齢配偶者が抱くSpiritual Needsを明らかにすることを目的に、質的研究を行った。卵巣がん患者の妻を看取った高齢配偶者2名に対し、面接調査を行い、得られたデータをSCAT (Steps For Cording and Theorization)の手法で分析した。分析の結果、＜家族の健康を守りたい＞＜常に一緒に居たい＞＜あの世で幸せにいてもらいたい＞＜生きる希望を持ちたい＞＜面倒かけずに死にたい＞というニーズが明らかになった。 本人担当分：面接調査、データ分析、結果のまとめ 福田陽子、 <u>松井利江</u> 、布谷麻耶
3. 奈良ニューマン理論・実践学習会：発足から現在までの歩み	単独	2015年10月	ニューマン理論・研究・実践研究会第9回対話集会 (於：神奈川県立がんセンター)	マーガレット・ニューマンの拡張する意識としての健康の理論に基づく看護実践を追求するために、奈良ニューマン理論・実践学習会を創設したプロセス、毎回の学習会の企画・運営の実際を発表した。さらに、全国の医療機関や教育機関で学習会を開始するうえでの助言を行った。
4. 化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者へのケアモデル案の作成と評価	共同	2016年8月	日本家族看護学会第23回学術集会 岩手	化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者に対するケアモデル案を作成し、その評価を行った。国内外33件の文献検討と著者らの先行研究結果から、配偶者のケアに関する内容を抽出し、これをケアモデルの構成要素としてケアモデル案を作成した。次に、がん診療拠点病院の婦人科病棟に勤務する看護師へのグループインタビューによって、ケアモデルの内容の妥当性と実用性を評価した。結果、内容の妥当性は認められたものの、配偶者に関わる機会の少なさが障壁となり、配偶者へ直接介入するケア項目の実践は困難なことが明らかとなった。 本人担当分：研究全般 <u>松井利江</u> 、福田陽子、布谷麻耶、片岡純
5. Nursing Support for the Family Members of Cerebral Stroke Patients in the Acute to Subacute Stages	共同	2018年1月	21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conference (韓国・ソウル)	急性期から亜急性期の脳卒中患者の家族のケアにおける看護実践を明らかにすることを目的に7名の看護師に面接調査を実施し、質的機能的に分析した。結果、看護師は常に家族の受容を促進しようとしていた在宅介護への移行期に看護を提供した経験のある看護師は、入院直後に脳卒中患者の経過を予測し、その段階で家族のために何をすべきかを判断し、情報収集や支援を行った。対照的に、救命救急の経験しか持たない看護師は、何をすべきかの判断に苦労しながら、患者の変化を予測し、家族と関わっていた。 本人担当分：データ収集、結果の分析・考察 林みよ子、 <u>松井利江</u> 、山口真有美、森知美
6. Decreased daytime light intensity at non-window hospital beds compared with light exposure in non-hospitalized elderly individuals	共同	2018年7月	日本睡眠学会第43回定期学術集会 (於：札幌コンベンションセンター)	高齢入院患者の転倒と生体の日内リズムを検討するため、高齢入院患者が日中に浴びる日照強度の実態を調査した。地域で過ごす高齢者のデータと比較して、非窓側ベッドは有意に低い日中の光強度を浴びていたが、窓側ベッドは地域の高齢者が浴びる光強度と有意差はなかった。これらの結果は、季節や部屋の方向に関係なく一貫していた。 本人担当分：データ収集、データのまとめ 岩本 淳子, 大林 賢史, <u>松井 利江</u> , 小林 美和, 小辻 俊通, 吉田 修, 車谷 典男, 佐伯 圭吾

7. 卵巣がん患者が初回治療を完遂するプロセス	共同	2018年12月	第38回日本看護科学学会学術集会 (於：愛媛県ひめぎんホール)	卵巣がん患者が初回治療を完遂するプロセスを明らかにすることを目的に、卵巣がん患者5名を対象に面接調査を行い質的帰納的に分析した。患者は<手術で腫瘍の正体を明らかにする><女性機能よりも命が優先>と考え手術を決意していた。化学療法を勧められたとき、<「卵巣がん患者」であることを思い知>り、やむを得ない、と化学療法に同意していた。<これ以上続けられない>と治療の継続に限界を感じるようになるが、<前を向くしかない>と自分に言いかけ、<気力で押し切る><「絶対に生きなければ」と立ち上がる>。こうして、治療終了のカウントダウンの中で<「最後までいける」見通し>を立てていた。 本人担当分：研究全般 松井利江，林みよ子
8. 外来で初回治療を受ける壮年期子宮がん患者の体験	共同	2019年12月	第39回日本看護科学学会学術集会 (於：石川県立音楽堂)	外来で初回治療を完遂した壮年期子宮がん患者の体験を明らかにすることを目的に、子宮がん患者7名を対象に半構造化面接法でデータ収集し、質的帰納的に分析した。結果、患者は、[治療と生活を両立させる手立てを考え]ながら[手術による問題よりもがんをなくすことを優先する]ために迷わず手術を選択する。また、[化学療法に生き続けられる確証を求め]て同意する。化学療法開始後[自分なりに副作用と付き合おうと努力する]が[絶え間ない副作用に辟易]しながら[いつも通りでありたいと願]い[自分の生活を守るための体制をつくる][社会と繋がり続ける]ことに取り組んでいた。 本人担当分：研究全般 松井利江，林みよ子
9. Survey of Nursing Support for Patients with Stroke and their Family Caregivers in their Transition to Home Care in Japan	共同	2020年1月	23rd East Asian Forum of Nursing Scholars Loutus Hotel Pang Suan Kaew, Chang Mai, Thailand)	脳卒中患者とその家族の在宅移行期ケアにおける実態を明らかにするために、無作為抽出された国内210の医療機関の看護師に自己記入式質問紙調査を実施した。275名の看護師のうち95%がMSWやリハビリテーションスタッフ、訪問看護師等と協働しており、入院中は患者と家族のニーズの確認、患者の日常生活動作の自立支援を実施していた。退院前には、患者が使用できる資源に関する情報提供し、試験外泊の手配と実施を支援していた。その一方、約70%が看護師の知識と経験不足などの課題を認識していた。 本人担当分：データ収集、結果の考察 林みよ子，松井利江
10. Experience of a Middle-aged Gynecologic Cancer Patient Receiving Initial Surgery and Chemotherapy	共同	2020年1月	23th East Asian Forum of Nursing Scholars (Loutus Hotel Pang Suan Kaew, Chang Mai, Thailand)	壮年期の婦人科がん患者の初治療の体験を明らかにすることを目的に、婦人科がん患者11名に面接調査を行い、質的記述的に分析した。結果、「状況の不確かさ認知」と「日常性認知」によって変化する3つの局面と「前に進み続けるよりどころ」という支えがあることが明らかとなった。この変化は、診断時から治療方針が明確で比較的予後が良い子宮がん患者は、早期に「日常性維持の願いと取り戻しの努力」の局面に移行するが、術前に確定診断できず予後が悪い卵巣がん患者は、「がん患者としての現実認知と治療継続への努力」の局面が長期化していた。 本人担当分：研究全般 松井利江，林みよ子

11. 継続的なStructured debriefingがSCU若手看護師の早期在宅移行に向けた家族看護実践に与える影響	共同	2020年12月	第47回日本脳神経看護研究学会 WEB開催	在宅移行に向けた家族看護実践に関するSCU若手看護師の変化を明らかにすることを目的に、基礎看護教育終了後SCUに配属された2年目と3年目の看護師6名を対象とし、Structured debriefingを1年間実施し、Debriefingでの語り内容、介入前・6ヶ月後・12ヶ月後の自律的看護実践認識度・実践度の自記式質問紙でデータ収集した。結果、自律的看護実践の認識度と実践度はいずれも介入前後で上昇した。対象者は先輩看護師の助言に基づいて実践する中で元の生活や家族に目を向け始め、今後の生活を予測して患者や家族の希望実現のために他職種と調整するようになった実践を語り、Debriefingの有用性が示された。 本人担当分：データ収集，考察 林みよ子， <u>松井利江</u> ，臼井千春，大仲陽子
12. 見学実習と看護過程展開の2部構成で行う成人慢性期看護学実習における学生の学び	共同	2022年8月	第48回日本看護研究学会 学術集会（於：松山市総合コミュニティセンター）	看護専門外来や退院支援部門などの多様な看護活動の場の見学と病棟実習を組み合わせた慢性期看護実習において、学生が見学実習の学びをどのように病棟実習に活かしたのかを明らかにすることを目的に、オンラインによるアンケート調査を実施した。結果、見学実習の学びを受け持ち患者への看護で活かすことができたかの問いに対し、78.0%がとてもそう思う・そう思うと回答した。また、自由記述の分析から、学生が＜患者目線の多職種連携＞＜退院前カンファレンス見学の成果＞＜家族看護＞＜看護過程の展開＞を行っていることが明らかになった。 本人担当分：データ分析，考察 山中政子， <u>松井利江</u> ，東真理，森知美，大内田靖子
13. 成人慢性期看護学実習において通院治療を受ける患者への看護を見学した学生の学び	共同	2022年11月	第12回日本在宅看護学会学術集会 於：東京都中野サンプラザ	成人慢性期看護学実習で透析室、化学療法室、心臓リハビリテーション室で通院治療を受ける患者への看護を見学した学生の学びを明らかにすることを目的に、4年生45名の実習記録をテキストマイニングソフトKH Coderを用いて分析した。共起ネットワーク分析の結果、強い共起関係にあったのは、サブグラフ1で「透析」「自己」「自身」「管理」「指導」、サブグラフ2で「化学」「療法」「受ける」「副作用」「対応」などであった。学生は、透析室では自己管理を促す指導、化学療法室では副作用への対応を学んでいた。また、通院治療の継続には病棟と外来、家族との情報共有や、患者と一緒に考えながら生活を支える看護の必要性を学んでいた。 本人担当分：分析，考察 山中政子， <u>松井利江</u> ，東真理，大内田靖子
14. 学生が捉えた入院当日患者に対する看護師の在宅移行支援—看護師のシャドウイング実習による学び—	共同	2022年11月	第12回日本在宅看護学会学術集会 於：東京都中野サンプラザ	入院当日患者を担当する病棟看護師のシャドウイング実習で学生が捉えた看護師の在宅移行支援を明らかにすることを目的に、4年次看護学生40名の実習記録を質的記述的に分析した。分析の結果、学生が認識した病棟看護師の在宅移行支援は、＜退院支援の必要性和開始のタイミングを判断する＞＜過去から今後を見据えて全人的に患者像を捉える＞など7つのカテゴリーに集約された。学生は、看護師が患者の今後を長期的に見据え、より望ましい生活実現の支援をしていることや、日々の看護援助を通じて患者の在宅移行を支援していることを認識していた。これは、将来の看護実践において、早期からの在宅移行支援に対する意識を高める効果が期待できる。 本人担当分：研究全般 <u>松井利江</u> ，山中政子，東真理，森知美，大内田靖子

15. 卵巣がん治療を受けた女性のセクシュアリティの変容プロセス	共同	2022年12月	第42回日本看護科学会学術集会 於:広島市文化交流開館	本研究は、卵巣がん治療を受けた女性のセクシュアリティの変容を明らかにした。卵巣がん経験者18名に半構造化面接を行い修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析した。結果、女性のセクシュアリティは、術前に【完全には拭い切れない生殖器温存への期待】をもつことで、術後に【「突然」生殖器を失った身体との対峙】をし、『女性である私の可逆性と不可逆性の問い』『これまで通りにいかないセックスへの否定的感情』『パートナーシップの真価の見極め』を繰り返しながらも、いずれの女性も『女性である私に対する納得』をするように変化していた。 本人担当分:研究全般 松井利江, 青木早苗, 瀬戸奈津子
16. 看護学生が看護専門外来の見学実習から捉えた通院患者の特徴と在宅移行期の支援における看護の学び	共同	2022年12月	第42回日本看護が各学会学術集会 於:広島市文化交流開館	A大学4年次の看護専門外来の見学実習を行った24名の実習記録内容を、SCAT(Steps for Cording and Theorization)を用いて分析した。結果、学生は看護専門外来に通院する患者を絶えず[専門的治療への関心]を持ち、[疾患と共に生きる方策]をとるがゆえ、[生活の狭小化]を余儀なくされた[生活者]と捉えていた。さらに[切れ目のない生活の維持]を図るために、[継続した通院治療]と[望ましい療養行動]、時には[家族を巻き込んだ健康管理]をしている人々と捉えていた。また、看護師は[共感的態度]で[患者の強み]を見極め、[患者の歩調に合わせた継続的支援]をする役割があり、時に[ソーシャルサポート]を提供し[患者の生活]に合わせ[ルーティンワークではない]生活の[切れ目のない支援]を見据え、[現実的な方法への転換]を導いていると捉えていた。 本人担当分:データ分析, 考察 東真理, 山中政子, 松井利江, 大内田靖子, 森知美
17. 卵巣がんが疑われる患者に対する外来看護師の実践と課題	共同	2024年2月	第38回日本がん看護学会学術集会 於:神戸国際会議場	卵巣がんが疑われる患者に対して外来看護師が行う支援の実際と課題を明らかにすることを目的に、外来看護師を対象にフォーカス・グループ・インタビューを実施し、質的記述的に分析した。結果、来看護師は、【患者の心情に配慮しながら、卵巣がん患者と共に生きる場合の道筋を与える】【医師やスペシャリストと連携し、妊孕性温存の厳しさに対峙できるように支える】などの実践をしていた。その一方、【術前の患者に必要な情報が提供できないまま病棟に送り出すジレンマ】【遺伝的な観点で患者を捉えるスキルの不足】【継続的なケアを実現しうる病棟との連携不足】などの課題を認識していることが明らかになった。 本人分担分:研究全般 松井利江、青木早苗、瀬戸奈津子
18.生物学的製剤/Janus kinase阻害剤を使用している 炎症性腸疾患患者の治療体験	共同	2025年8月	第16回日本炎症性腸疾患学会, 於:札幌プリンスホテル	生物学的製剤およびJAK阻害剤を使用しているIBD患者の治療に伴う心情や体験を明らかにすることを目的に、11名の患者に質的調査を行った。分析の結果、【IBDと闘う体験】【治療の不確実性を認識する体験】【治療を人生の中に位置づける体験】【人生をIBDとともに紡ぐ体験】が明らかとなった。看護は常に患者の人生に寄り添い続ける視点を持ち、IBD患者は不確実性の中で生活していることを念頭に置いた継続的な支援が重要であると示唆された。 本人分担分:分析, 考察 貝津 里乃, 松井利江, 阪上佳誉子, 伊藤 裕章, 瀬戸奈津子

19.Treatment Experiences of Patients with Inflammatory Bowel Disease Using Biologic Agents or Janus Kinase Inhibitors	共同	2025年7月	The 13 th Annual Meeting of Asian Organization on for Crohn's & Colitis 2025 於:幕張メッセ国際会議場	炎症性腸疾患患者に対する意思決定支を促進するために、生物学的製剤およびJAK阻害剤を使用するIBD患者の感情・課題・期待を探索することを目的とした質的調査を行った。クローン病・潰瘍性大腸炎患者計11名の語りから、患者は活動期に苦痛を伴う経験を回想し、寛解後も持続的な不確実性を抱えていた。また治療維持における不確実性と課題への継続的な対応が必要であり、葛藤していることが明らかとなり、看護師の継続的な支援の重要性が示唆された。 本人分担分:分析, 考察 貝津 里乃, <u>松井利江</u> , 阪上佳誉子, 伊藤 裕章, 瀬戸奈津子
(その他)				
1. 経過が分かる！疾患別看護過程 前立腺肥大症/前立腺がん	共著	2018年11月	照林社, プチナース, 27(12)1-20	看護学生が実習で受け持つことが多い前立腺疾患の解剖生理学・病態・看護アセスメントの視点・看護問題と看護計画といった看護過程の展開に必要な知識や考え方をまとめた。 <u>松井利江</u> , 林みよ子 本人担当分:執筆全般
2. Margaret Ann Newman 先生の85歳の生涯を祝福し語る会の報告 Celebration of Dr. Margaret Newman's life!	共著	2019年3月	看護の科学社, 看護実践の科学, 44(3), 58-63	Margaret Ann Newman博士の逝去をうけ、NPO法人ニューマン理論・研究・実践研究会において追悼の会を開催しニューマン理論との出会いや理論に導かれて実践が変わった経験を語り合い、ニューマン博士の功績をたたえた。この追悼の会の様子をレポートし、ニューマン理論の意義を伝え実践への適応を呼び掛けた。 共著者:宮原知子, <u>松井利江</u> 本人担当分:原稿執筆
3. 経過が分かる！疾患別看護過程 慢性腎不全	共著	2019年6月	照林社, プチナース, 28(7)1-20	看護学生が実習で受け持つことが多い慢性腎不全の解剖生理学・病態・看護アセスメントの視点・看護問題と看護計画といった看護過程の展開に必要な知識や考え方をまとめた。 <u>松井利江</u> , 林みよ子 本人担当分:執筆全般
4. 実習で出合う疾患の病期別 看護ガイド】腎泌尿器、生殖器疾患 (DISEASE 14)慢性腎不全	単著	令和3年5月	照林社, プチナース創刊号, 30(6),88-93	血液透析を導入する末期腎不全患者の看護に必要な知識と看護の要点を、看護学生が理解しやすく実習で活用できるように工夫してまとめた。
5. 【実習で出合う疾患の病期別 看護ガイド】腎泌尿器、生殖器疾患 (DISEASE 15)前立腺がん	単著	2021年5月	照林社, プチナース創刊号, 30(6),94-99	周手術期にある前立腺がん患者の看護に必要な知識と看護の要点を、看護学生が理解しやすく、実習で活用できるように工夫してまとめた。
6. 第113回看護師国家試験問題解説 e-learning Nplus	単著	2024年5月	メディカ出版(e-learning教材)	第113回看護師国家試験問題のうち、がん看護に関する設問(午前第41問、48問、午後94-96問)の解説を執筆した。
7. ニューマン理論に導かれた看護実践をめざした学習会を始めよう！	単著	2024年7月	看護の科学新社, オンライン, 3(3), 33-37	M.A.Newmanの拡張する意識としての健康の理論に基づく看護実践を探索する学習会を立ち上げた経験を紹介した。学習会の準備・仲間づくり、学習会の進め方など、これから学習会を始めようとする看護師に向けてポイントをわかりやすく記載した。

8.ケアと指導のポイントが分かる！がん患者さんの症状と看護	単著	2025年7月	照林社, プチナース, 34(8),11-27	がん患者の症状マネジメントの特集を担当し、がん治療によって起こる7つの症状(悪心嘔吐・口腔粘膜炎・便秘・下痢・皮膚障害・脱・, 倦怠感・骨髄抑制・リンパ浮腫)とがん疼痛について, 学生が実習で看護計画に活用できる知識をまとめた。
-------------------------------	----	---------	-------------------------	--

教 育 研 究 業 績 書		
2025 年 5 月 7 日		
氏名 西出 順子 印		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
看護学、心理学	自己心理学、共感、 患者－看護師関係、相互作用	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
1) 課題・レポートの活用	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野、1年次配当、半期、必修1単位）「精神看護特性論」（専門分野、2年次配当、半期、必修1単位）「精神援助論」（専門分野、3年次配当、半期、必修2単位）において、次回の講義内容の予習として、他の科目で習得した内容が講義内容と関連する場合、レポートにまとめたうえで受講する形をとっている。例えば、講義内容が「向精神病薬の副作用に対する援助」であれば、解剖学・生理学等で既習した錐体外路や副交感神経の作用について、有害反応の根拠となる基本をレポートにまとめ、授業に挑むようにしている。「精神看護学概論」や「精神看護特性論」は、「精神援助論」につながる基本をおさえているので、既習した内容が「精神援助論」の授業内容に関連する場合、既習の知識をレポートとしてまとめた上での受講としている。定期試験において、レポートと関連させた内容のところは正答率がやや高い結果となっている。学生の意欲の差はあるが、既習得の授業内容とリンクさせ学生にまとめさせることによって、授業に向かう動機付け及び順序立てた理解につながると考えられる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学 保健科学部 看護学科において、1年次配当「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、予習としてポイント個所をまとめ授業前に発表する形をとっている2年次配当「精神看護援助論」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）においては、授業後にポイントを文脈を作ってノートにまとめ、授業期間中間と最終日に提出し、コメントをつけて返却する。これらにより、単位修得試験以外において、最低限、授業内容について考える機会を設けている。また、看護の対象を理解するツールとして用いるエリクソンの発達論に関しては、自己の発達と関連させてキーワードの考察を深めるためにレポートを課している。

事項	年月日	概要
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所 CNSコースの精神看護学演習Ⅰ・Ⅱ（専門科目、半期、各2単位）において、授業内容に応じたテーマで日頃の看護実践場面をまとめたものを持参してもらい、授業素材とし、実践に応じた助言を行っている。
2) 演習・実習の効果的な活用	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神援助論」（専門分野、3年次配当、半期、必修2単位）において、IBL(inquiry-based learning)方式のアクティブラーニングとロールプレイングを導入している。IBLは、①目的に沿った事例を作成（統合失調症、うつ病性障害等）②事例から数行の情報が入ったパートを3から4作成。パートごとに＜事実＞＜仮説＞＜必要な情報＞＜調べる項目＞に分けて進行していく。＜調べる項目＞では学生が次の授業までに分担して調べる。③②に続くグループワークでは、①で作成した事例を学生に提示し、病院実習で用いる記録用紙に情報を記入、治療薬について調べ、精神のアセスメント、セルフケア項目順に沿ってのアセスメント、全体図、看護計画を作成していく。④③で作成した看護計画をロールプレイングで実施する。また、ロールプレイングでは他に「かかわりを拒絶する患者」や「幻覚のある患者」等、病院実習でよく遭遇する場面を設定し行っている。IBL方式の少しずつの情報提供は、病院実習での情報のとり方を想定し、少しずつイメージを膨らませ、患者に問いかけられるようにと言う意図も含み行っている。学生からは、この方式に馴染めない者もいるが、情報から、考えを進めていく筋道がわかるとの評価ももらっている。ロールプレイングでは、患者像のイメージを掴むのが難しく、双方向のコミュニケーション効果までは望めないが、「このような場面に遭遇した時はどうすればいいのか」と意識することにはなっていると思われる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において3年次配当、「精神看護援助論演習」（専門科目、3年次配当、前期、必修1単位）ペーパーペイシエントを用い、情報の収集の仕方、収集した情報の記録の仕方、アセスメント方法と看護援助の導き方について、小ステップでの個人ワークとグループでの意見交換の後教員の解説を行う。授業ごとに個人ワークは提出し、教員のコメント付きで返却することを看護過程終了までの5回行う。次に、別事例（ペーパーペイシエント）をグループで展開する。グループワークの内容は、情報の収集・アセスメント、援助の方向性までグループで検討しながら看護の展開をはかる。自分で考えたうえでグループで検討しあうことは、思考過程を広げ深めていくことができると考える。また、グループで立案した看護計画は学生同士で患者・看護師役を交代で行い実践し、その実践課程をプロセスレコードに記入し振り返りを行っている。模擬ではあるが実習で実施する看護実践課程を一通り体験している。

事項	年月日	概要
3) 視聴覚教育技術その他教材の利用	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野、1年次配当、半期、必修1単位）「精神看護特性論」（専門分野、2年次配当、半期、必修1単位）「精神援助論」（専門分野、3年次配当、半期、必修2単位）において、精神障がい者の生きづらさや苦悩について、理解をはかるためにドキュメンタリーのDVDを活用している。「精神看護学概論」では、映画「精神」から統合失調症の女性のヒストリーを語る場面を視聴、後に解説をすることで、成育歴や生活環境が患者の精神状態や心理にいかに関与を及ぼすのかについて理解を図る。「精神看護特性論」では、自閉症の患者のDVDを用い、障害の特性や苦悩の理解を図る。「精神看護特性論」と「精神援助論」では、COMHBO地域精神保健福祉機構の作成するDVDを用い、SSTや訪問看護、心理教育など地域で暮らす障がい者の様々な治療やサポートについて患者の心理の描写とともに理解を図る。後の感想・評価からは、いずれも精神障がい者に対して、共感的にイメージ化が図れている一助となっていることがわかる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて「精神看護援助論」（専門科目、2年次配当、後期、必修1単位）で、抗精神病薬の有害反応や、閉鎖病棟のイメージ化を図るためにドキュメンタリーの映像を活用している。また、妄想や幻覚などの病的体験のイメージを広げ共感的理解の促進を図ることを目的に、当事者グループが作成した「妄想幻聴かるた」を活用している。 精神看護の理解が進んだ後に、奈良県の地域活動支援センターに通所する当事者にゲストスピーカーを依頼し、ご自身の体験と看護師の支援に関する体験をお話しいただいている。以上により、様々な生きづらさや背景を持つ対象と看護に必要な基本知識の理解を促進する。

事項	年月日	概要
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所 精神看護学特論Ⅳ・精神看護学演習Ⅱ（専門科目、1年次配当、後期、各2単位）でSSTの実践について、流れやポイントを理解するためにDVDを活用している。
4) 双方向授業の実践	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」「精神看護特性論」「精神援助論」において、講義形式をとる場合、適宜発問をし、周囲の学生と2分ほど話し合い、意見を発言してもらおう。これらを1回の授業で4回～5回設けることで、学生の注意を喚起し、居眠りが減る傾向にある。
		神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「健康支援実習Ⅲ（精神）」（専門分野、3年次配当、半期、必修2単位）では、8日間の病院実習と半日の学内実習を行っている。病院での実習と学内実習では、学生に付き添い、対象者の背景から読み取る理解やコミュニケーションを通しての理解、精神状態や心理状態の把握、コミュニケーションの取り方や実施した援助についてなど、その場その時に応じた質問や助言を行っている。実習学生から返ってくる内容や感想、提出物の内容の充実さから効果が認められる。

事項	年月日	概要
5) ディスカッションの導入	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において担当の1年次配当「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、ゼミ形式にて、常時問いかけと発言を繰り返して行っており、学生が自分の考えを発言する機会を多く持つようにしている。2年次配当「精神看護学概論」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）においては、授業の終わりにミニノートと質問を記述し、次の授業の際に授業のおさらいの意図も含め、質問に答えている。オムニバスにて、次週担当しない場合は、GoogleClassroomにコメントを掲載し、学生に返している。2年次配当「精神看護援助論」（専門科目、2年次配当、半期、1単位）および3年次配当「精神看護援助論演習」（専門科目、3年次配当、半期、必修1単位）においては、講義形式の際は発問を取り入れ、演習の際には、巡回し、質問ができる環境を整えている。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所 精神看護学特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・精神看護学演習Ⅰ・Ⅱ（専門科目、1年次配当、半期、各2単位）では、理論や知識の説明後、臨床経験を有する学生の現場での体験を話してもらいながら関連付けて授業を進めている。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護特性論」「精神援助論」において、隔離・拘束について“人権を守る”ということはどういうことなのかについてディスカッションをしている。ディスカッションをすることで精神障がい者の人権を守る意義について意識化を図る。また、精神状態やセルフケアのアセスメントをする際、まずグループで事例を用いて討議することからはじめ、個人作業に移行させている。グループによっては、討議までにはなかなか至れず、発言する者にグループが引っ張られる傾向も見られるが、学生同士が質問し教え合う場にはなっている。

事項	年月日	概要
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において1年次配当の「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、少人数の中でさらにグループに分け、テーマに応じてディスカッションする時間を複数設けている。その時の約束事として、相手の意見を積極的に聞く・否定しない・話の腰を折らないなどを設け、自分の考えを発言し、他者に受け入れてもらえる体験を強化している。2年次配当「精神看護学援助論」（専門科目、2年次配当、後期、必修1単位）においては、幻聴妄想かるたをグループで行った後、患者の気持ちの推測や、似たような体験、どう関わると安心できるかについて討議し、理解を深める機会としている。3年次配当「精神看護学援助論演習」（専門科目、3年次配当、前期、必修2単位）においてはペーパーペイシェントの演習を通して、根拠を相手に伝えながら、グループで一つのものをまとめていくことを狙いとしている。自分の意見も主張しつつ、他者の考えも受け入れる態度を学習する機会としている。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所 精神看護学特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・精神看護学演習Ⅰ・Ⅱ（専門科目、1年次配当、半期、各2単位）では、社会で自立し仕事をしている者同士のディスカッションを通して、さらに建設的な学びになるように時には、教員はファシリテーターの役割を担いながら、ディスカッションを促進する。
6) プレゼンテーションの導入	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護特性論」において、他の授業で既に授業を受けた発達課題についてグループでまとめ、発達段階ごとにプレゼンテーションを行う。また評価は、各グループの成員同士が互いのグループワークの参加度について5段階で評価し、平常点として加算することになっている。ほとんどの学生が4～5の評価をしており、グループワークの参加に対する意欲が高いと考える。

事項	年月日	概要
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「健康支援実習Ⅲ（精神）」において、実習の最終日に各実習病棟ごと（1クール：10～18名、1病棟3～6人、実習病棟は2～4病棟）に各病棟の紹介と実習で看護展開をした2事例を取り上げ、援助の流れと学び・感想を模造紙にまとめて発表している。プレゼンテーションを通して、他病棟での実習内容を共有することで学びの巾を広げている。実習最終日でもあり、様々な思いを抱く中、プレゼンテーションに対する内容の質疑・応答、感想などの発言も比較的活発であり、主体的な参加が認められる。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「課題別総合実習」（専門分野、4年次配当、半期、必修4単位）において、実習を終えた後、実習病院で全実習病棟の看護部長・師長・指導者・かかわりのあった看護師に向けて、パワーポイントを用い、実習の成果を発表し、評価を受ける。自己の成果について実習病院で発表し評価を得ることは、学生にとって緊張度も高いが、また達成感も大きく、その後の自信につながっていくと考えられる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において1年次配当の「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、グループで話し合った内容を模造紙やパワーポイントを活用して、プレゼンテーションを行っている。学生は、初めて体験するものも多いが、グループで要点をまとめ、分担しながら行っている。3年次配当「精神看護援助論演習」（専門科目、3年次配当、前期、必修1単位）においては、グループワークの成果である看護過程の経過と援助の方向性について、決められたパワーポイントの枚数内と制限時間内で発表をしている。制限のある中で、メンバーが協力し合い、おのおののマンパワーを生かしつつ成果を発表する場は、学生にとって達成感を得、自信を得る機会となっている。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所 精神看護学特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（専門科目、半期、各2単位）において、授業内容について、あらかじめ各自で調べプレゼンテーションを行うことで、主体的な授業参加、学習となっている。

事項	年月日	概要
7) 小テストの活用	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」「精神看護特性論」「精神援助論」において、軸となる理論については、小テストを実施し、理解の定着を図っている。小テストの項目としては自我防衛機制、エリクソンの発達論、精神の症状、薬の有害反応、ペブロウとトラベルビーの関係性の進捗等がある。これらの知識を臨地実習において活用していることから、繰り返しの学習効果によるものと考えられる。

事項	年月日	概要
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において2年次配当「精神看護援助論」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）においては、精神看護学の重要な内容の授業が続く、内容は多岐にわたり、その都度の予習復習が求められるが、この時期、他科目も同じように進行しているため、学生は学ぶことが多く、能力を超えるものも多い。小テストをこまめにするこゝで、要所要所でいやおうでも、振り返り学習機会を持つこゝで、ポイントは抑えられると考える。
2 作成した教科書、教材		
1) 各授業、レジュメを作成し配布する。	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」「精神看護特性論」「精神援助論」において、講義の要点の理解と、復習に活用するために、授業のアウトライン及びポイントを1回ごとに作成し、そのプリントを毎回の授業で配布している。「精神看護特性論」「精神援助論」では、精神状態のアセスメントについては他の授業で馴染みがなくイメージしにくいことを受け、DVDで視聴した事例について、学生が考えた後に、教員が精神状態をアセスメントしたプリントを配布し、比較し考えるようにしている。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において1年次配当の「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、レポートの書き方、要約の仕方のところで、朝日新聞の天声人語を学生が興味を持ちやすいと思われるテーマを8つほど選び教材を作成した。その中からさらに、学生が選び、グループで内容の精読や要約を行っている。2年次配当「精神看護学概論」（専門科目、2年次配当、前期、必修2単位）、2年次配当「精神看護援助論」（専門科目、2年次配当、後期、必修1単位）においては、毎回講義内容のポイントをまとめたうえで関連するアニメポイントをうい視覚的に工夫したレジュメを配布している。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		

事項	年月日	概要
1) 神戸常盤大学学生による授業評価		神戸常盤大学において平成27年度に実施された学生による授業評価によると、「精神看護学概論」では、授業内容 4.2, 授業方法 4.3, 学習成果 4.2, 総合評価 4.5 「精神看護特性論」では、授業内容 3.4, 授業方法 3.4, 学習成果 3.5, 総合評価 3.3 「精神援助論」では、授業内容 3.6, 授業方法 3.5, 学習成果 3.8, 総合評価 3.7であり、2年・3年次の授業においては満足度が高いとは言えない。
2) 奈良学園大学保健医療学部看護学科における学生による授業評価		2022年度「精神看護援助論」では、授業方法に関する内容の＜先生の説明はわかりやすいですか＞3.54、＜毎時間の授業汚要点は明確ですか＞3.77 2022年度「精神看護援助論演習」では、授業方法に関する内容について1組＜先生の説明はわかりやすいですか＞3.43、＜毎時間の授業汚要点は明確ですか＞3.21、2組＜先生の説明はわかりやすいですか＞4.07、＜毎時間の授業汚要点は明確ですか＞3.93、基本同じ内容と方法の授業をしているにもかかわらず、この点数差について考察するが、一つ思い浮かぶのは印象の問題が考えられる。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) なし		
5 その他		

事項	年月日	概要
1) 神戸常盤大学保健科学部看護学科における教育実績		神戸常盤大学保健科学部看護学科の専任教員（講師）として、以下のような科目を担当している。
	平成27年4月～平成30年3月	「精神看護学概論」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野、1年次配当、半期、必修1単位）において、精神の機能と精神の健康・不健康に関する基本概念、および様々な成長・発達段階にある人の精神・心理状態を理解するための基礎的な理論の概要、精神看護実践に活用する理論の基礎的知識の内容の授業を行い、精神看護を支える基本的な知識の修得をはかっている。
	平成27年4月～平成30年3月	「精神看護特性論」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護特性論」（専門分野、2年次配当、半期、必修1単位）においては、ライフサイクルにおける危機と心と精神の問題、精神障害を有する人の精神機能上の問題や苦悩、セルフケアに及ぼす影響、各種療法と看護援助に関する基礎的な知識、精神保健福祉施策の変遷や精神障がい者に向けられる偏見の問題等を理解する内容となっており、グループワークや演習等を行い、医療・福祉・看護における現状の理解と課題を意識化させている。
	平成27年4月～平成30年3月	「精神援助論」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神援助論」（専門分野、3年次配当、半期、必修2単位）においては、精神ならびに身体の病をもつ人を総合的に理解し、適切な看護援助を組み立てる基礎的能力を培うことを狙いとした内容となっている。講義・グループワーク・IBL(inquiry-based learning)方式のアクティブラーニングとロールプレイング等の演習を通して、代表的な精神の病と生活への影響、精神の病をもつ人に対する看護展開の基礎、精神の病をもつ人と家族への看護援助の基礎、適切な社会資源の活用を理解させている。また、リエゾン精神看護の役割及び機能や精神看護における倫理についての理解も図っている。
	平成27年4月～平成30年3月	「健康支援実習Ⅲ（精神）」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「健康支援実習Ⅲ（精神）」（専門分野、3年次配当、半期、必修2単位）では、一学生につき8日間の精神科病院での実習と半日の学内実習を行っている。精神の病をもつ人を生物学的・心理的・社会的側面から総合的に理解するとともに、良好な治療的関係を構築し、セルフケアニードとストレングス視点に基づく看護実践能力の基礎を培うことを目的とした実習内容になっている。その場その時に応じた指導内容によって、精神看護の統合を図る効果がある。計14週/年の精神科病院（急性期・回復期・慢性期）において学生指導を行う。

事項	年月日	概要
	平成27年4月～平成30年3月	「課題別総合実習」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学の講師として担当の「課題別総合実習」（専門分野、4年次配当、半期、必修4単位）では、自己の課題を明らかにし、課題を達成するために精神科病院での実習を希望する学生が対象となる。学生自身が実習計画を立て実習を行うことで、総合的な実践能力を高め、自己の将来の看護展開能力へとつなげる実習となっている。13日間の病院実習と2日間の学内実習から成り、病院実習最終日に成果を発表することでさらなる学習効果を得ている。
	平成27年4月～平成30年3月	「看護研究」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「看護研究」（専門分野、4年次配当、通年、必修2単位）では、研究方法の基礎力と研究的態度を身につけることを目標としている。精神看護学に関連する研究課題を選択した学生を対象に、一緒に研究過程をたどることを通して論文をまとめ上げ、目標を達成している。
	平成27年4月～平成30年3月	「看護活動基礎実習」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「看護活動基礎実習」（専門分野、1年次配当、半期、必修1単位）では、看護専門職の実際の活動場面の見学実習を通して、看護の対象と機能・役割について学ぶ内容となっている。実習形態の学習に不慣れな学生のフォローと、実習場面でのポイントをその場その時におさえながら実習を進めることで成果を得ている。
2) 兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科における教育実績	平成18年4月～平成30年3月	兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科の非常勤講師として以下の科目を担当している。
	平成28年4月～平成30年3月	「健康心理学」 兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科の非常勤講師として担当の「健康心理学」（2年次、4時間）においては、オムニバスで演習部分を担当した。臨地実習後に学生が実習中にとってきたプロセスレコードを素材に、対象者の思いに寄り添ったコミュニケーションの理解を図った。
3) 奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の専任教員（助教）として、以下のような科目を担当している。令和2年4月に講師となり、以下科目を担当する

事項	年月日	概要
	平成30年4月～令和元年前期	「基礎演習Ⅰ」（ラーニングスキルズ） 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年次前期配当、必修1単位）においては、1年生が大学の学習に慣れ、4年間の大学生活を有意義に送るための基礎を習得することを目的としている。講義ノートのとり方、文献資料の検索、学術的な文章の読み方、グループワークの進め方などについてゼミ形式の演習を通じて学習する。慣れたグループの中で、自分の意見を発言し他者に受け入れられる体験を通して、自己発信する基礎的な力を培っている。
	令和2年6月～現在に至る	「精神看護学概論」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」（専門科目、2年次前期配当、必修1単位）においては、他教員と分担・協力して授業を展開している。主に人間の精神の機能や脳の仕組み、発達段階における漸次的心理葛藤など、看護の対象理解を促進する基本的や自身のメンタルヘルスの向上をはかる部分を担当する。令和5年度よりカリキュラム変更にて（専門科目、2年生前期配当、必修2単位）になり、オムニバス形式で、主に人間の心の働きとパーソナリティ、心の発達論、精神看護の基盤となる理論と実践に関する内容について担当する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学援助論」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「精神看護学援助論」（専門科目、3年次前期配当、必修2単位）においては、他教員と分担・協力して授業を展開している。様々な精神疾患や精神障がい者を理解し、精神看護学の基礎的知識と看護を学ぶことを目標としている。例えば、治療的な患者－看護師関係を成立させる方法、精神障がい者の観察の方法と治療について、精神科医療現場における身体合併症の看護について、精神症状や問題行動とその援助について、精神科リハビリテーション及び地域におけるサポートシステムの現状・課題について修得する。 令和2年度より（2年次後期配当、必修1単位）講義形式に変更。精神障害の理解から様々な治療方法、精神保健福祉法、精神疾患と苦渋の症状と看護のポイントについて修得する。

事項	年月日	概要
	令和2年4月～現在に至る	「精神看護援助論演習」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「精神看護援助論演習」（専門科目、3年次前期配当、必修1単位）においては、ペーパーペイシエントを用い、情報の収集の仕方、収集した情報の記録の仕方、アセスメント方法と看護援助の導き方について、小ステップでの個人ワークとグループでの意見交換の後教員の解説を行う。授業ごとに個人ワークは提出し、教員のコメント付きで返却することを看護過程終了までの5回行う。次に、別事例（ペーパーペイシエント）をグループで展開する。グループワークの内容は、情報の収集・アセスメント、援助の方向性までグループで検討しながら看護の展開をはかる。また、グループで立案した看護計画は学生同士で患者・看護師役を交代で行い実践し、その実践課程をプロセスレコードに記入し振り返りを行っている。模擬ではあるが実習で実施する看護実践課程を一通り体験している。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学実習」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「精神看護学実習」（専門科目、3年次後期配当、必修2単位）においては、精神の健康上の問題を有する人とその家族について、身体的・精神的・社会的側面から総合的に理解するとともに、治療的な関係を築き、精神看護における看護実践能力の基礎を培うことを目的に精神科病院にて実習を行う。実習時間中は実習場にて、その場その時に応じて助言を行う。令和2年度は病院実習がかなわなくなったことを期に、訪問看護ステーションでの実習を行ったところ生活者としての対象をどのように支えていくかということの意識を強めることができた。令和3年度から病院実習と訪問看護ステーション両方の場で実習をすすめていく。
	平成30年4月～現在に至る	「統合看護学実習」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「統合看護学実習」（専門科目、4年次後期配当、必修2単位）においては、看護過程の展開はもとより多重課題や看護マネジメント、多職種連携、地域連携などを視野に入れた実習を行っている。令和3年度から、学生自身の課題と探求したい内容に応じて個別の計画を立て、主体的な実習の中で看護観を深め、探求する意義を学ぶ。

事項	年月日	概要
	平成30年4月～現在に至る	「卒業研究Ⅱ」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「卒業研究Ⅱ」（専門科目、4年次前後期配当、必修1単位）においては、学生の興味関心のあつるテーマを文献検討し、論文を作成する。少人数グループ（2～4名）でゼミ形式で進めている。
	令和3年～現在に至る	「統合看護論」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「統合看護論」（専門科目、4年次後期配当、必修2単位）において、精神看護学分野において担当する。精神看護の全体像をおさえたうえで家族・地域も含めた複雑事例の看護の展開について、小テストの事例からアセスメントと支援の方向性について解説し、精神看護学についてさらに実際に根差した気づきと理解の深化を促進する。

事項	年月日	概要
3) 奈良学園大学大学院看護研究科における教育実績	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の専任教員として、以下のような科目を担当している。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅰ（歴史・法制度）」 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にノーマライゼーションの概念と実際について担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅱ（精神・身体状態の評価）」 奈良学園大学大学院看護学研究科講師として主に心理機能評価・身体機能評価を担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅲ（精神科治療技法）」 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主に治療技法（精神療法）について担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。

事項	年月日	概要
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅳ（精神看護理論、援助技法）」 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にSSTについて担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学演習Ⅰ（精神科治療技法）」 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にカウンセリングの基本技法について担当し、各々の実践による経験による検討や模擬演習をしならすめる。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学演習Ⅱ（精神看護理論、援助技術）」 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にSSTについて担当し、計画立案と模擬演習を行う。
	平成30年4月～令和4年度	「特別研究」（専門科目、1・2年通年、8単位） 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として、学生の研究テーマから研究計画、倫理申請、データ収集、結果、論文の作成まで助言を行った。
	平成30年4月～現在に至る	「課題研究」（専門科目、2年通年、4単位） 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として、学生の研究テーマ、研究計画、倫理申請、データ収集、結果、論文の作成まで助言を行った。データ収集においては、直接ケア実習、上級ケア実習の実践内容から抽出するため、実習の進行の最中においてもテーマに焦点を当てた助言を行う。
職務上の実績に関する事項		

事項	年月日	概要
事項	年月日	概要
1 資格, 免許		
1) 看護師免許証	昭和60年5月9日	第532000号
2) 修士 (人間文化学)	平成15年3月	甲子園大学大学院人間文化学研究科人間文化学専攻 修了 人間文化学 修人第9号 論文題目「看護師の地域性に関する認識と特徴」
3) 臨床心理士資格認定	平成16年3月20日	第11561号
4) 公認心理師登録	平成31年2月5日	第14522号
2 特許等		
1) なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1) 常盤大学テーマ別研究助成金 研究代表者 西出順子 研究題目「在宅で生活する精神障がい者と家族のストレングスに焦点を当てた支援方法の検討ー 訪問看護師のストレングスへの着目点とケアの成果 ー」	平成28年5月～平成29年2月	訪問看護師が在宅で生活する精神障がい者と家族（以下、対象者とする）に対して行っているストレングス に着目した支援方法とその成果を明らかにした。対象者を訪問する看護師に半構造化面接を行い、得られた結果から意識化されず実施されているストレングスに着目した支援内容をカテゴリ化にて明らかにし、成果について検討した。
2) 奈良学園大学共同研究助成金 研究代表者 西出順子 研究題目「COVID-19 状況下でのグループワークにおける学生の体験」	令和4年5月～令和5年3月	令和3年度に実習を終えた4年生に臨地実習とグループワーク演習についての体験についてインタビュー調査を行った。奈良学園大学紀要第17集に投稿する。

事項	年月日	概要
3) FD委員会 委員	平成19年4月～平成27年3月 平成28年4月～平成30年4月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程在籍中と神戸常盤大学保健科学部看護学科において、FD委員として活動を行っている。大学教職員の能力開発を目標とし、平成19年度から全教員に向けて年2回の研修を行っている。平成28年度は 1. 教育改革を進めようとする当大学の教職員の理解を進めるために最近の教育改革の動向を文科省の大学改革官から聞く機会を企画する。 2. 主体的かつ深く志向する学生を育成するための教育技能を学ぶためにディープアクティブラーニングのワークショップを開催する。 3. 学科内のFD活動を計画的に進める 4. 公開授業を促進し、教員相互の教育技法を向上させるを目標に進めている。学科内FDでは、全体のディープアクティブラーニングのワークショップの前に、学科内で活発にアクティブラーニングを行っている教員に依頼し、模擬授業を実施、そのあとグループワークを行い、アクティブラーニングの効果的な方法について検討を行った。
4) 国家試験対策委員会 委員	平成28年4月～平成30年3月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程在籍中と神戸常盤大学保健科学部看護学科において国家試験対策委員をしている。看護師国家試験対策として、学科教員の講座や業者の模擬試験や講座を組み入れたプログラム作り、模擬試験成績の振るわない学生へのフォロー、学生主体の学習会のサポート等を行っている。平成27年度生の看護師国家試験の合格率は95.1%であった。
5) 入学試験の出題 看護学 委員	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学 保健科学部 看護学科 編入試験の精神看護学に関する問題を作成した。
6) イギリス研修旅行（トラウマ・インフォームドケア研修）に参加	平成28年9月18日～9月25日	医療法人寿栄会有馬高原病院主催の研修旅行に参加。イギリスを訪問し、認知症の方が利用する施設・病院の視察を行い、またスウォンジー大学で研修を受けた。認知症を患った方が利用する施設や病院を見学し、トラウマ・インフォームド・ケアの観点から日本との差異を認識し、よりよいケアのありかたについて考える機会を得た。患者―看護師関係は平等であり、患者の意思と尊厳が最大限に守られる理念のもと物理的・人的環境が作られていた。スウォンジー大学では当事者（てんかん）から治療による有害反応から生活障害を引き起こした体験や、治療の弊害を訴え発言する場を確保する活動について話を聞いた。また、研究者からはメンタルヘルスシステムが細分化されすぎ、ケアの評価が患者個人の思いや願いが重視されず、数値のみに頼る弊害を明らかにしたうえで見直すための研究や、患者目線からみたケアの評価の検討等の研究について聞く機会を得た。

事項	年月日	概要
7) 第2回 臨床精神看護学研究会 準備事務局員	平成29年1月～5月	平成29年5月20日 有馬高原病院で開催予定。発表会の運営と準備に関する役割を担う。
8) FD委員会 委員	平成30年4月～平成31年3月、令和4年4月～令和5年3月	奈良学園大学において『教育力をあげるようなFD活動』をテーマに2回/年の研修会を企画運営に携わった。8月日頃の指導の中での困難さや課題を出し合い次回FDプログラム作成につなげるためのワーク、3月コーチングについて 令和4年度は、教育に関する現状の課題や取り組みの工夫について、グループワークを中心としたFD研修会を3回開催した。第1回テーマ「PROGテストの結果の説明を受け、教育の工夫についてのグループワークで話し合い、結果を共有する」、第2回テーマ「学生の授業態度によく見られる2ケース <集中力が続かない学生><事前学習が不十分なまま実習に行き、自己評価が高く、自分のことを振り返られない学生>について工夫や対処方法を検討する」、第3回テーマ「後期の授業を振り返り、次年度への改善策を発見する」その他、1年次生対象に地域住民との交流「健康フェスティバル」を企画運営した。
9) 人権教育研究推進委員会	平成30年4月～平成31年3月	奈良学園大学において、奈良県大学人権教育研究協議会の企画する研修会に参加するとともに、1回/年の研修会を企画運営する。30年度は「ハラスメントを防止するために」の企画運営に携わった。
10) 実習ワーキング	平成31年4月～令和2年3月	奈良学園大学において、3年次各領域の臨地実習枠の作成、4年次統合実習の実習枠の作成、実習場の開拓、実習方法の見直し、実習要綱の見直し、コロナ渦においての臨地実習方法などについて検討した。また、実習における学生の進捗状況やケア方法なども検討し共有しあった。
11) カリキュラムワーキング	令和2年4月～令和5年3月	奈良学園大学において、新カリキュラムに向けて、アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーを新たに定め、カリキュラムの立案に携わった。

事項	年月日	概要
1 2) 教務ワーキング（令和4年度教務部会に変更）	令和2年4月～現在	奈良学園大学において、時間割や単位修得に関する判定方法と各種日程・期間、履修の手引き、入学前試験、新入生ガイダンスや新年度ガイダンスに関する内容検討と実施に携わった。その他、学習・授業に関する問題など適宜検討した。
1 3) 学生生活部会	令和4年4月～令和5年3月 令和6年4月～令和7年3月	学生の状況の共有、他、学生からの提案窓口の設置と事項の共有、支援などを検討した。
1 4) 日本看護研究学会 第50回学術集会 企画準備委員	令和5年4月～令和6年8月	令和6年8月24日25日奈良県コンベンションセンターにて学会が開催され、広報はじめ企画準備に携わる。

事項		年月日	概 要	
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
1. 会話でわかる看護師のコミュニケーション技術	共著	平成30年9月	中央法規	第6章 様々な分析からわかる看護師のコミュニケーション技術の中の「共感の視点を分析してわかるコミュニケーション技術」のテーマで自己心理学を用い共感に着目し会話を分析した。(p. 98～107)
2. 改訂版 エビデンスに基づく精神科看護ケア関連図関連図	共著	令和2年1月 (改訂版発行日)	中央法規	ワンポイントラーニング 身体合併症を担当する。生活習慣病、生活習慣病から生命にかかわる疾患へ、衛生面からの問題、ロコモティブ症候群など、精神障がい者と関連の深い合併症について解説した。(p. 149)
(学術論文)				
1. 精神科病院におけるトラウマインフォームドケアの有用性について 資料(査読なし)	単著	平成28年3月	甲子園大学 発達・臨床心理センター紀要10. 11号合併号 p. 30～33	トラウマインフォームドケアは、アメリカの精神科医療におけるコア戦略の中でも核となる概念の一つであり、トラウマインフォームドケアを導入することで入院中の再トラウマ体験を防止し、速やかに回復を図ることが狙いとされ、精神科病院においてこの考え方が浸透している。日本では、2015年に川野がアドバイザーとして所属する特定医療法人寿栄会有馬高原病院で病院をあげてトラウマインフォームドケアの理解を深め、臨床の中で実践を試みている。トラウマインフォームドケアについて、以下二点考察を行った。一つは自己心理学を用い個別的なケアの有用性について、もう一つは組織における管理的な側面からの取り組みの必要性について考察を行った。
2. 看護のケアリング機能―共感の意味についての一考察― 研究報告(査読付)	単著	平成29年12月	日本サイコセラピー学会雑誌第18巻第1号 p. 87～95	急性骨髄性白血病(AML)で化学療法を受けた50歳男性の看護援助の経過について報告し、看護師の患者に対する共感的理解と看護師のニーズに焦点を当てて考察を行う。生活のほとんどが受け身的にならざるを得ない患者にとって、過酷な入院生活で生じる感情こそが自己の存在を確認するものとなる。しかし、時には患者から発せられる感情は、看護師のニーズに反することもある。看護師は共感を通して患者の気持ちに寄り添いながらも、時としてアンビバレントな感情を抱え、関係性の中でその瞬間に浮かび上がってくる言語・非言語の表現を返し、それを受けて患者は反応し看護師に投げかける。この絶え間ないやりとりがケアリングであり、危うくなる患者の自己存在感を支えることとなる。

事項			年月日	概 要
3. 訪問看護師にとっての対応困難事例の困難要素について：テキストマイニングソフトを用いた個別面接調査の分析より原著（査読付）	共著	平成29年12月	日本在宅医学会雑誌第19巻第1号 p. 11～18	困難事例について多職種連携チームでの対応を促進するため、訪問看護師の困難要素を明確にすることを目的とした。訪問看護師12名に対する半構造化面接法による個別面接調査、横断研究で、テキストマイニングソフトを用い解析し、困難要素の分類を行った。【体制・マネジメント】【職務】【疾患・障害】【現状認識】【治療・ケアに対する反応】【利用者・家族の不服】【人間関係】【療養環境】の8カテゴリーの困難要素を特定し、「利用者・家族の感情」「訪問看護師の職務意識」「地域体制の整備と訪問看護ステーションのチームマネジメント」について考察した。 分担部分：構想・デザイン・データの取得・分析・解釈に関与 共著者：◎武ユカリ、小坂素子、西出順子、安斎三枝子、金川治美
4. 20歳代女性のカウンセリング場面の分析～自己心理学の観点から治療的かわりについて焦点を当てて（査読付）	単著	平成30年3月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌第5巻 p. 25～32	カウンセリングの一場面を取り上げ、会話分析を行った。セラピストは60代の男性。患者は20歳代の女性であり、職場でのハラスメントをきっかけにパニックになり、認知行動療法をベースに定期的にカウンセリングを受けていた。定期的に行われている面接場面を患者の同意を得て録音・録画し、そのうちの1セッションの逐語録を作成した。本稿では、セラピストが患者のいつもと違う様子を察知し、手法を切り替えた1セッションを取り上げ、治療的関りについて自己心理学の主要概念である「自己対象ニード」「自己対象体験」「共感」「相互的調制」に焦点を当て分析を行った。セラピストとの安定した自己対象体験は、患者の傷ついた自己対象（男性像）を修復し、成果に通じる可能性を大きく持つと考える。
5. 相互作用を振り返るための概念枠組みーポスト自己心理学の臨床活用（査読付）	単著	令和2年3月	第3回 臨床精神看護学研究会（奈良） p48～52	患者看護師関係のプロセスを振り返るツールとして、自己心理学派のリヒテンバーグの動機付けシステム理論をとり上げる。リヒテンバーグの言う動機付けとは、シンプルには「何がその人を動かすのか、その人は何を求め、何を避けるのか」を指しており、これを関係性の中で湧く「欲求」と捉え、以下7つの欲求・動機付けシステムを挙げている。①生理的要請に対する心理的調節②個人への愛着③集団への親和性④養育⑤探求と好みや能力の主張⑥身体感覚的快と性的興奮⑦引きこもりや敵意を用いた嫌悪的反応、これらの欲求には感情が伴い、その先には意図や目的がある。これら7つのシステムが相対的に「今ここで」あるいは「その時そこで」重要あるいは優勢かということは刻一刻と変化する事柄といえる。この動きを相互作用として丁寧に捉えることが、その場その時の関係性をアセスメントすることにつながると考える。今回は、事例を用いて理論の概要を紹介する。

事項			年月日	概 要
6. 精神障害を有する患者の理解を促進する授業方法の工夫—『幻聴妄想かるた』を教材にした学生の体験と学び—(査読なし)	単著	令和2年12月	奈良学園大学紀要第13集 p. 177～188	〔目的〕『幻聴妄想かるた』を取り入れた演習が、学生にどのように体験されているかを把握し、学習への影響や体験の中で生じている現象について考察し、さらに効果的な授業方法を検討する。〔研究方法〕『幻聴妄想かるた』を用いた演習後、任意によるアンケート調査を行った。〔結果〕『かるた』を行っている時の感想は【学生の感情体験】【現象・対象理解】【作品の印象】に、精神障がい者に対する理解では【精神障がい者に対する理解】【グループメンバーの視点の差異】【関わりの姿勢】に、幻覚妄想を有する精神障がい者に対する援助では＜聞く＞＜寄り添う＞＜受けとめる＞＜共感する＞＜否定も肯定もせず、幻聴を深めることは言わない＞＜幻覚・妄想の対応へのとまどい＞〔考察〕『幻聴妄想かるた』を用いた演習は、自由な雰囲気の中で楽しみながらも、幻聴妄想体験の不思議さや、わからなさが探究の動機付けに適切だったこと、そして、学生同士安心して楽しめる場を作り、そこでの討議がイメージの拡充や理解の促進に効果的だったことが示唆された。課題として、共感的な支援につなげるために、学生自身が当事者に近い体験ができるような工夫が必要であることが明らかになった。
7. 新型コロナウイルス感染症流行下で臨地と学内混合による実習形態が看護学生にもたらす心理的变化	共著	令和4年12月	奈良学園大学紀要第17集 p. 119～130	本研究の目的は、新型コロナウイルス感染症（以下COVI-19）流行下における3年次後期の臨地実習と学内実習の混合の実習形態が、継続する学内実習（学内演習）におけるグループでの学生の心理的体験への影響、及び、そのプロセスを明らかにすることである。方法は、A大学在学中の4年次看護学生18名に半構造インタビューを実施し、M-GTAを用いて分析した。結果、プロセスは23個の概念と9個のカテゴリーで構成された。3年次学生の心理面に2年次から続くコロナ渦での体験＜COVI-19流行下による学習体験の影響＞を受けての体験が基盤にあり、3年次後期の臨地実習と学内実習が混在する中での学内実習ではグループワークがほとんどを占めていた。＜グループワークの参加の仕方＞としてメンバーの特性をアセスメントし、＜カンファレンスの空気感＞等グループワークの寄り方を模索し＜グループに参加する努力＞を行っていた。一方、メンバーの発言力や能力の差を目の当たりにし、焦りや劣等感、羨望を抱くことや、また、課題に向ける熱量の差からやりづらさを感じ葛藤する中で、グループ形成のための対応に尽力していた。これらグループ・ダイナミックスの渦中にある個人の自己内界では＜グループ活動を通しての自己成長のプロセス＞を踏んでいた。これらの過程の中で生じる内なる葛藤を収め、成長に向かうためのコアカテゴリーを【協働する中での自己調整】とした。 共著者：◎西出順子，上野栄一
(その他)				
[実践報告]				

事項			年月日	概要
1. 患者を支えるための概念枠組みー自己心理学の臨床活用	単著	平成29年11月	第2回 臨床精神看護学研究会誌 2017年 p. 2～5	筆者は看護師の経験を持ちながら大学・大学院で心理学を学習する機会を得た。多くの理論を学び、臨床心理士としてリハビリテーション病院に入職し、患者と自己の理解、関係性の把握に活用してきたが、精神分析系の理論を治療的な関りに用いようとする、病院臨床では使うことが難しい現状に行き当たった。その理由として、治療の枠組みが厳密であること、患者自身が自己を分析し、把握していくためのモチベーションを必要とすること等が考えられた。模索する中で、患者の言動と筆者の心理がちょうどマッチした自己心理学に出会った。本稿では筆者の臨床での経験を通して、これら理論の活用の概要を紹介する
[学会発表]				
1. 訪問看護師の対応困難事例における困難要素の検討ー全国質問紙郵送調査の結果より	-	平成28年7月	第18回日本在宅医学学会（東京）	8カテゴリ28分類に整理した個別面接調査の分析結果と文献検討、グループ対話で得られた結果を含め、岩間の分類を参考に質問項目を作成した。回答数588（回収率29.4%）、うち505（有効回答25.3%）を分析対象とした。65項目について最終的に全40項目、4因子を抽出し、以下の通り命名した。i「家族・利用者の抑制のバランスが保てていない態度」、ii「訪問看護師の能力レベルと組織の協力体制」、iii「利用者・家族の疾患と状態に起因する生活能力の低下」、iv「家族が円滑にケアすることを阻む状況」全体のクロンバック α 係数は0.96であり、各因子のクロンバック α 係数は0.89～0.92で内的整合性は高い結果が得られた。 本人担当部分：質問紙の作成（訪問看護師への個別面接調査と語りの内容からカテゴリーの作成とネーミング、文献やグループ対話で得られた結果から質問項目を考えた）、結果分析（因子分析過程においてのデータの絞り込みとネーミング）、発表内容の検討を行った。 共同発表者：武ユカリ、金川治美、小坂素子、西出順子

事項			年月日	概 要
2. 訪問看護師が感じる困難要素の検討—インタビューによる質的分析と質問紙による量的分析の統合—	—	平成28年8月	第2回 日本混合研究法学会(東京)	訪問看護師は療養者と家族を対象に個別性の高い多様な援助ニーズに対応しなければならず、対応困難事例に遭遇することが多い。文献研究ではこれまで対応困難事例に関する訪問看護領域の研究は少なく、何が困難の要素となっているかについて検討されていなかった。また哲学的対話手法(NSD)による調査では、訪問看護の対応困難事例には非常に複雑な困難要素があるが、それらにはいくつかの抽象的な枠組みがあることが示唆された。そこで本研究では対応策の検討につなげるため、訪問看護師の感じる困難要素の構造を明らかにすることとした。研究方法は、質的研究の結果から訪問看護における困難要素を抽出し、その結果得られた知見をもとに、仮説検証のための量的研究につなげた統合した探索的順次的デザインを用いた。混合研究法を用いることで、より実態に沿った調査を行い、困難要素の構造を明らかにした。 本人担当部分：発表内容に関連する研究への関与と発表内容の構成と内容検討。 共同発表者：武ユカリ、小坂素子、西出順子、曾澤久仁子、金川治美
3. 在宅で生活する精神障がい者の支援方法の検討～訪問看護師のストレスに着目したケアの一考察～	—	平成30年7月	第49回日本看護学会—在宅看護—学術集会(佐賀)	【目的】訪問看護師が精神障害を有する療養者に対して、独自の方法で行っているストレスに着目した支援方法を明らかにする【方法】[研究対象]A県下の訪問看護ステーション6施設、各施設管理者に推薦された看護師10名[研究期間]平成28年9月～平成29年2月[研究デザイン]質的記述的研究[分析方法]質的統合法(KJ法)【結果】元ラベル74枚から①困りごとは強みに通じるゲート②身体をいたわる③好きなことは現実感覚強化の糸口④自信は新たな希望のエネルギー源⑤望みや願いを第1に守るの5要素を抽出した。【結論】訪問看護師は日々の関りの中で自ずとストレスに着目しながら支援をしている。時に、利用者の願いや望みが過剰に作用し体調を崩すことにもなるが、あきらめずに将来に希望を持ち共存していく手立てを一緒に探ることが、地域での生活を支えていく上で重要であることがわかった。 本人担当部分：研究計画、文献検討、インタビューガイドの作成とインタビュー、結果分析、考察、発表 発表者：◎西出順子、木村聡子、鶴飼知鶴、畑吉節未

事項			年月日	概要
4. トラウマに関する看護研究の特徴－テキストマイニングによる解析－	－	令和4年7月	第28回日本看護診断学会学術大会 Web開催	【目的】トラウマに関する文献検討から、トラウマの研究の特徴を明らかにし、今後のケアの方向性について検討すること【方法】医学中央雑誌ウェブ版（2022年4月10日現在）（1998年12月～2022年1月）を用いた。検索はトラウマ、看護、原著論文、本文有とした。結果、72件抽出され本研究対象とした。テキストマイニングにより、タイトルと抄録内容について共起分析、コロケーション解析対応分析をして、トラウマ研究の特徴をみた。【結果・考察】多岐にわたる研究（対人ストレス、災害、疾患や出産体験など）がなされ、トラウマの研究の特徴として、「トラウマへの支援」、「様々な外傷に関連するストレス」「ケア行動の効果」「障害の治療」「退院困難な患者の家族への支援」があった。トラウマのケアに対する有効性の研究はほとんどされておらず、今後の検証が期待され、また、看護診断の指標にTICの新しい概念をとり入れることも必要と考える。本人担当部分：結果分析、考察 発表者：上野栄一、西出順子、山崎陸世、高田勝子
5. 高校生のマインドフルネスが心身の健康状態に及ぼす効果の関係性	－	令和5年1月15日	第66回日本心身医学会近畿地方会Web開催	【目的】高校生のストレス軽減法として、マインドフルネス呼吸法に着目し、健康状態に及ぼす効果を検討する。【方法】高校生16名に起床後に5分間の呼吸を2週間実施し、呼吸開始前と14日目で健康状態と主観的ストレス度を測定した。また、毎日の呼吸前後に現在の気分を数字で評価し、ノンパラメトリック検定を行った。【結果】2週間後の主観的ストレス19項目中7項目に優位差があり、また、呼吸前後で気分の変化指数が上昇した。本人担当部分：実施準備、データ打ち込み、結果考察 発表者：高田勝子、上野栄一西出順子

事項			年月日	概 要
6. COVID-19感染症拡大の状況下での精神看護学実習における看護学生の学び	-	令和5年3月4日	第27回日本看護研究学会東海地方会	【目的】Withコロナ時代における臨地実習の教育につなげるため、看護学生へのインタビューによる調査を行い、今後の教育の示唆を得ること。 【方法】研究 対象者14名の学生にインタビューを行った。分析はKrippendorfffの内容分析法に準じた。 【結果】「病院実習」では、実際に『患者－看護師関係のコミュニケーション』を通して《患者視点ヘシフト》することで『精神患者の生きづらさを認識』し、【精神看護実習ならではの体験】をしていた。また、受け持ち患者の【看護展開】を通して《意図的な看護ケア》について『自己の未熟さに気づき』ながらも『患者からもらったことば』に感動していた。さらに目標とする『将来の看護師像』ができ【将来への展望】につながった。「訪問看護実習」では、学生は『利用者精神障害の心情を感じ取る』ことで《訪問看護を活用する意義》を深め、【病院から訪問看護へのつながりの実感】があったが【精神科病院イメージ化の困難】を感じていた。「学内実習」では、《事例での看護展開のジレンマと限界》を感じながらも『アセスメントの共有』や『ディスカッションに対する満足感』などの《グループワークの強み》を認識し、様々な【グループワークの長短】があった。また《臨地での体験不足による自信のなさ》から精神看護の【イメージと現実のギャップ】を感じていた。【考察】病院実習とは異なる実習でも、違った視点の学びがあると提示することで学習効果が期待されると考える。 本人担当部分：インタビュー、カテゴリー生成、結果分析、考察 発表者：山崎陸世、西出順子、高田勝子、上野栄一
7. 新型コロナウイルス感染症下でのメンタルヘルスの研究の特徴	—	令和6年3月16日	第37回日本看護研究学会 近畿・北陸地方会 学術集会	新型コロナウイルス感染症下でのメンタルヘルスの研究の特徴 を明らかにすることを目的とした。医学中央雑誌 Web 版にて、キーワード「新型コロナウイルス、メンタルヘルスを設定し、 検索した結果（2023 年 12 月 14 日）、70 件検索され、本文のある 63 件の抄録をテキストマイニングを用いて分析した。単語頻度解析では、「感染」は、「調査」「対象」「パーセント」「結果」、「新型」「コロナ」「ウイルス」と関連しており、新型コロナウイルスは当初、未知のウイルスとされており、新型コロナウイルス感染に対して多くの調査が行われていた。また、不安に関する記述が多く、不安と「COVID19」と「メンタル」「ヘルス」の関連性は高いことが示され、今後のさらなるメンタルヘルスの必要性が示唆されていた。 担当部分：結果分析、考察 発表者：上野栄一、蓮池光人、西出順子

事項			年月日	概要

教 育 研 究 業 績 書		
2026年3月31日		
氏名 山本 真樹子		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
社会医学、看護学及びその関連分野	出産体験 女性の思い 助産師のありよう	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 ・ 小レポートの活用 ・ 視聴覚教育教材の作成と利用 ・ 会陰縫合演習での視覚教材の活用 ・ 市民だよりの活用 ・ 視聴覚教育教材と模型の利用	2018年～2020 年前期授業期 間	関西大学人間健康学部・人間健康研究科の非常勤講師として担当した「医学一般I」（専門・選択科目、1年次配当、半期）において、授業1回目に学生自身がその時点で考える「健康とは」を小レポートとして課した。小レポートから学生たちの授業に期待しまた求めている内容およびプレコンセプションケアを意識した内容とすることで、学生が自身や家族を含めた周囲の健康について考え、生活変容に繋がるように講義内容を工夫した。学生からの毎回の授業後の感想及び意見と授業評価アンケートより、学生自身や家族を含めた周囲の健康や生活に意識がいくようになっていた。
	2021年6月7日	奈良学園大学（常勤）「母性看護援助論演習」（専門科目、3年次配当、半期、必修1単位）において、ある授乳場面の褥婦と助産師とのやりとりを教員が演じる視覚教材を作成し、褥婦の言動から心理・社会面の情報収集の方法、母性看護学の主要な理論を用いてどのようにアセスメントし、どのようにケアとして表現しているかを考察し、実習に繋がられるような演習とした。
	2023～2025年2 月	奈良学園大学（常勤）「助産診断・技術学演習Ⅰ」で、医師による創部縫合の無料の動画を見ながら、糸結びや縫合の練習をキットを使って行った。
	2023年～2025 年4～5月	奈良学園大学（常勤）「地域母子保健」（助産師課程科目）で、各学生の居住地の市民だよりを活用し、教科書で学習した母子保健政策が実際にどのように行われているのかを知り、助産学実習における妊産婦の受け持ちへの保健指導や助産に活用できるように授業で用いた。
	2021年10月	本校の「母性看護援助論」（専門科目、2年次配当、必修1単位）において、胎児の産道通過機序の説明を骨盤模型と新生児人形を用いて実演した後、視覚教材で確認を行い、産道の中での胎児の通過機序を視覚的に捉えられるように工夫した。（評価は、「3. 教育上の能力に関する大学等の評価」に記載）
2 作成した教科書，教材 ・ 母性看護援助論演習の画像媒体 ・ 助産師課程の会陰縫合の演習キット補助を作成	2021年6月	本学の「母性看護援助論演習」（専門科目、3年次配当、半期、必修1単位）において、ある授乳場面の褥婦と助産師とのやりとりを教員が演じる視覚教材を作成し、看護過程の演習で活用した。Classroomで共有し、繰り返し自由に活用できるようにした。
	2023年、2024 年、2025年2月	本学の助産師課程「助産診断技術学演習Ⅰ」の会陰縫合の演習で、陰部模型を固定し紐のくくり方を練習する簡易な補助道具を作成し、縫合部の演習時に使用した。

・母性看護援助論演習の経皮黄疸計測器の作成 ・母性看護援助論演習のワークブック作成	2025年6月 2025年4月	本学の「母性看護援助論演習」（専門科目、3年次配当、半期、必修1単位）において、経皮的に黄疸を計測する道具をペットボトル等で作成した。病院実習時の新生児の観察で、経皮黄疸計測器を使用することが多いことを鑑み作成し技術演習に組み込んだ。黄疸計測器を使う際の留意点（頭の支え方、計測器の使い方）を考えながら行う機会となり、実践に即した演習ができており、実習時思い出して行うことに繋がっていた。 本学の「母性看護援助論演習」（専門科目、3年次配当、半期、必修1単位）において、前年度までの学生から演習の事前学習を提示するタイミングについて意見を貰っていたこと、学生たちが計画的に技術演習の事前学習ができること、演習の見通しをつけやすくするために、技術演習ワークブックを作成した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 ・学生による授業評価アンケート結果における評価	2020年7月 2020年7月 2025年7月 2025年10月	・関西大学人間健康学部・人間健康研究科の非常勤講師として担当した「医学一般I」（専門・選択科目、1年次配当、半期）に対して2020年度に実施された学生による授業評価において、約7割の学生が、「友人や後輩に推薦したい授業内容」「総合的に判断してこの授業は意義のあるものだった」と回答していた。（回答数293/330人:88.7%） 「母性看護援助論」の学生評価は、授業への積極的な参加度3.95、説明のわかりやすさ3.80、要点の明確さ3.89、授業内容の分量の適切さ3.57、聞き取りやすさ4.05、資料のわかりやすさ3.82と、概ね、学生は授業に積極的に参加しており、授業は要点が明確で説明や資料もわかりやすく、聞き取りやすい。授業の分量は多いからどちらとも言えないという状況であった 課題の量と学習負担について、本授業で出された課題については教育目標と授業内容との整合性をふまえ、適切な量と難易度で設計したが、一方で「負担が大きい」「進め方が分かりにくい」と感じた学生がいた。複数教員による授業のため説明や対応に差が出てしまったため、今後は一貫性を持った指導ができるように取り組む必要がある。 「授業スライドの見易さ」、「わかりやすさ」について肯定的なコメントがあった一方で、「何をどうすればいいのかが分かりづらい」という意見もあった。より明確で具体的な説明文の提示や、授業内での口頭説明の工夫について、教員間で差異が出ないように取り組んでいく。 （「母性看護援助論」の中間評価まで単独で担当していたため、直接評価ともなっていた。）79名中68名（回答率86%）改善してほしいことは特になしが95.5%であった。 良かった点として、「内容は難しいが丁寧に教えてくれる」「とても分かりやすい説明で、難しいが理解しやすい」「授業資料がわかりやすい」「模型や映像を使っの説明が想像しやすく理解しやすい」「授業のペースを合わせてくれる」などがあった一方で「授業の進むスピードがはやい」という指摘があった。よかった点は継続しながら、進むスピードに留意してより学生が興味をもって理解しやすい授業に努めていく。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		

5 その他 ・助産学共用試験問題作成		2021年4月～6月 2022年6月～12月	助産師教育における実習生の質保証のための助産学共用試験問題を作成し、登録を行った。 全国助産師協会の「令和4年度助産師国家試験ブール問題公募の啓発・応募促進事業」において、協力員として一つのグループでリーダーとなり、3回のzoomによるオンラインミーティング、メール会議等を行い、厚生労働省に試験問題を登録した。	
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項		年月日	概 要	
1 資格, 免許		1998年	看護師免許(第1018456号)、助産師免許(第106495号)、保健師免許(第88011号)	
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項		2023年 2025年	新生児蘇生法「専門」コース更新 認定番号A-15-41281(2023年8月23日～2026年8月22日) 日本母体救命システム普及協会のベーシックコース過程を修了 認定番号B-25-04763(2025年12月20日～2028年12月19日)	
4 その他				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 (学術論文) 1. 妊娠糖尿病と診断された女性の体験についての一考察～出産後の振り返りから～ : :	共著	2023年3月	医療福祉情報行動科学研究Vol. 10, pp4754(2023. 3. 24)	GDMと診断された女性の体験について知り、助産師の支援方法を検討することを目的に研究を行った。女性の語りから、「GDMと診断された後の思い」「糖尿病という言葉への反応」など7つのカテゴリーが抽出された。GDMを診断される妊娠週数から、身体面の治療やケアと同様に、母親役割取得過程への影響を考えた関わりが必要であると示唆されていた。(8頁)
(その他) 1看護研究 2助産師のありようについての一考察 3 :		2017年～2018年9月 2026年3月7日	済生会茨木病院 第20回武庫川臨床教育学会研究大会	EPDSを使用する時期の検討についての研究 女性の出産体験とその意味、助産師のありようを表す3つの鍵の言葉の内、「健康と安全の保障」「受け入れる・受け入れられる関係」に焦点を当て助産師のありようについての一考察を発表した(2015年度修了した修士論文「女性の出産体験と助産師のありよう」(修の一部である)

教 育 研 究 業 績 書		
2025年 3 月 31 日		
氏名 高橋 寿奈		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
老年看護学	高齢看護学，看護教育，エイジズム，高齢者のアドバンス・ケア・プランニング	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
1) 講義と演習授業 白鳳短期大学 非常勤講師 「基礎看護概論」 「基礎看護方法論Ⅰ」 「基礎看護方法論Ⅱ」 「基礎看護方法論Ⅳ」 「基礎看護方法論Ⅴ」 ① P P Pを使用したデジタル教材の作成 ② 演習時に患者の想定がしやすいように、 ボディイメージ資料作成使用 ③ 演習時の研究課題資料の作成使用	2014年5月～ 2017年3月	「基礎看護学概論」の授業の一部を担当した。主に看護の変遷として日本の看護や関係法規の歴史変遷、世界の看護の歴史についての授業とテスト作成をした。近代看護の基礎となる事柄や今後の看護の方向性などを写真や経験、ドラマを使って、親しみやすい内容にし、学生が習得しやすいように努めた。（1年次配当、1単位、学生150名） 「基礎看護方法論Ⅰ」の授業を担当した。活動と休息・感染予防・滅菌物品の無菌操作・食と排泄・移動と移乗・効率的な動きの講義を行い、人間が健康に向かうための看護援助の在り方について指導を行った。それぞれの授業で、実際に実技で学生に体験させることにより、よりイメージしやすいように、感染の仕方のモデルや重心変化の仕方の教具の作成を行い、学生に実施させ、わかりやすく習得できるように努めた。 「基礎看護学方法論Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ」（1年次配当各1単位）の演習授業全般について実施し、フィジカアセスメント・看護イグザミネーション技術・点滴・投薬・採血・排泄管理包帯法・ポジショニング・創傷管理・電法の技術について、指導と実技テスト教官を行った。学生がイメージしやすいように研究課題を与え、その課題に沿って資料と実技を行った。学生からは「実践的でわかりやすい」や主体的に実習に臨む様子がみられた。
2) 学内研究発表会指導 白鳳短期大学非常勤講師 基礎実習Ⅱ学内発表指導	2016年2月	基礎実習Ⅱでの実習指導教員として担当学生の学内研究発表の指導を行った。 主に、日常生活援助での関わり方による対象高齢者の言動の変化についての気づきについて自信をもって発表できるように指導した。学生は「不安だったが内容が整理でき自信を持った発表できたとの評価を得た。
3) 演習授業（白鳳短期大学 老年看護学 学内授業）	2017年4月～3月	「老年看護学」学内授業、演習授業のサポートを行っている。老年期の看護展開では、学生の個別指導も行い看護展開成果物の採点を行い、実習での看護展開時に実際に使用できるように補足説明をした。
4) 実習指導（白鳳短期大学非常勤講師） 「基礎看護実習学Ⅰ」「基礎看護学実習Ⅱ」 「成人看護学Ⅰ」「成人看護学Ⅱ」 「統合看護学」 「精神看護学」 「老年看護学」	2014年5月～ 2017年3月	統合看護学実習では、要項説明と実習オリエンテーション、実習調整を行った。 「基礎看護学」では、看護の仕事の実際や病院施設の概要について疑問点などを起こさないように指導した。また学生が達成感が持てるようにそれぞれの学生が苦手とするところの克服できるように配慮しながら行った。根拠をもって看護し、患者に寄り添い、生活者として視点も忘れず、看護の先にあるものについても意識して指導した。 「成人看護学」では急性期・慢性期での成人の療養上における問題について看護性について指導した。学生が、急性期の看護展開のスピードについていけるように、事前課題を確認し不足するところの指導を行った。周手術期の指導では、疾患の理解・術後侵襲・生活や社会人としての患者の役割・精神的な不安なども指導した。 「統合看護学実習」では、要項説明と事前の実習調整も行った。タイムスケジュールを学生が出来るようにあ、学生同士でのカンファレンスを多く持ち、チームで看護を行うことを重視いた指導をした。病院の組織の在り方や他職種連携の重要性や実際についてより多くの経験が出来るように調整配慮した。どの領域の学生も目標達成できた。

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
5) 講義と演習授業 奈良学園大学 専任教員 「老年看護学援助論」3年次 必修科目 1単位 15時間 「老年看護学援助論」2年次 必修科目 1単位 15時間 「卒業研究Ⅱ」4年次 必修科目 1単位 15時間 「基礎演習Ⅱ」1年次 必修科目 1単位 15時間 「演習実技指導」 ① P P Pを使用したデジタル教材作成 ② 高齢者の介助時の注意点資料作成 ③ 演習時の研究課題作成と添削 ④ 各授業開始時に前回授業の課題総括と説明・資料作成	2018年4月～ 2023年3月	2018年から「老年看護学援助論」の基本的な高齢者への援助、活動・休息・食事・排泄などの技術全般、浮腫やについての講義と演習を担当した。演習時にはボディイメージと看護をつなぐ資料を作成し、与えた課題研究のもと授業を行った。その振り返りとして、学生自身でグループワークを行い、検討内容を板書説明し、それをさらに解説していく事で内容の理解と定着に努めた。臨地実習前には、学生を個別に基本的な技術指導を行った。 2021年からは、科目責任者としてシラバスを見直し、授業計画を作成した。基礎看護学実習の直前に終了する科目でもあり、基礎看護学実習と老年看護学援助論がつながるように意識した内容と後世にした。基本的な老年看護学における日常生活の基本活動や転倒リスク、排泄排尿障害やそれらの援助、権利擁護やリスクマネジメント、食事嚥下や口腔ケアの援助について行った。口腔ケアでは、実習時に活用できるように、必要物品や観察項目などを具体的に示せるような課題を作成し、知識の定着と狙った。外部講師との調整を行い歯科医師や衛生師による高齢者の口腔内の清潔についてや、地域包括看護・介護士による認知症サポーター養成講座の開講の支援を行った。おおむね目標達成でき、学生の授業評価の点数も平均以上であった。 「老年看護学援助論演習」では、高齢者体験や片麻痺体験を学生自身でグループごとで行い、研究演習とした。また、学生自身に体験させることにより、高齢者イメージがしやすいうに、看護に必要な内容を考えさせる機会とし、看護の視点の指導や理解、定着を図った。 令和2年からは、ほとんどの授業内容を担当し、看護展開を中心とし看護のアセスメントや計画の指導を中心の授業へ変化させた。看護展開は、学生が臨地実習で使用しているものを使用し実習時に戸惑いがないように配慮した。教員への質問もしやすいうに 授業の攻勢を変更し、机間巡回の時間を増やし、学生同士での相談や考えの広がりを持てるようにペアワークとした。学生の進捗に合わせた説明をするようにし、理解の徹底と定着を図った。 「卒業研究Ⅱ」では、卒業延期性には個別にさらに時間を作り指導を行った。 「基礎演習Ⅱ」では、基本的な大学生活での学習方法や時間・単位制について指導した。グループワークで、基本的なレポートの書き方、グループワークについて指導し、レポートはその都度添削した。また図書の有効利用。インターネットを津科tt壘情報リテラシーの方法なども学生に理解の程度に合わせて具体的な指導を行い、学生が大学での学習方法について積極的に行えるように指導した。学生はおおむね目標達成できた。
6) 老年看護学実習指導（奈良学園大学）専任教員 2019年度 領域実習・統合実習 実習要項 実習記録 実習評価表 2020～2022年度 領域実習 実習要項 実習記録 学内実習用事例： ・大腿骨頸部骨折術後 ・大腿骨頸部骨折術後リハビリ期 ・腰椎圧迫骨折保存的療法 ・腰椎圧迫骨折保存的療法と認知症 ・腰椎症と頸部腫瘍の終末期 ・脳梗塞後片麻痺後のリハビリ期 ・脳梗塞後の高次機能障害 ・脳梗塞後誤嚥性肺炎（繰り返し発症する患者） ・脳梗塞後の廃用症候群 ・軽度認知症と脛腓骨骨折の保存的療法 ・変形性膝関節症術後 ・腰椎圧迫骨折後と膝関節症リハビリ期 統合実習 実習要項 実習記録	2018年4月～ 2023年3月	事前に、実習先の全施設と実習説明内容のために訪問調整し、学生の実習目的・目標・スケジュールなど詳しい説明を行った。実習開始からは、「老年看護学Ⅰ・Ⅱ」（3年次配当 4単位）で、学生が老年看護の基本的な考え方に基づいて看護展開の方法の実際を個別に指導し、実技指導と評価指導を行った。また、緊張緩和に努め実習で対象者の個別性に合う実習内容になるように一緒に考えアドバイスし、指導した。すべての実習に同行し、精神的配慮として個別の面談を交え学内では学習などの指導も行った。 2019～2022年度では、コロナ渦で領域実習施設と病院での実習日程や内容の変更調整をすべて行った。学内実習内容でも臨地とできる限り似ている状況での実習が席るように、各担当学生1名に1事例作成し、看護展開や実技の実施ができるようにした。2022年からは実習はできる限り臨地に行けるように、コロナ感染で実習ができない時は他の病院と調整し、全学生が臨地実習で学べるようにした。学生からは、「臨地に行くことで学べる内容も多く急な変更になっても臨地実習できてよかった」との意見を直接聞くことができた。おおむね全学生が目標達成できた。 2020～2021年度の実習では、すべての内容がリモートへ変更になり、実習内容の変更をすべて行った。臨地実習の目標と齟齬が内容、動画やグループワークを効果的に使用した。学生間でのディスカッションやワークも偏らないように、適宜メンバーの変更を行い学びが最大限になるようにした。また、卒業後の仕事としての内容も意識し、様々なグルーでディスカッションすることによって、学習内容だけでなく対人能力や自己表現能力などもはぐぐまれ、能力の獲得と発揮ができるようにした。 2022年度は、臨地実習に行けるように調整し、全員臨地実習で学ぶことができた。臨地実習では、今後臨地で就労することも見据え、チーム内で協力しながら具体的な生活課題に対する援助が実施できるように指導した。概ね目標達成できた。

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
6) 老年看護学援助論（2018年：3年次配当1単位 2019年～2022年：2年次配当1単位） ①授業資料 ②演習授業資料 ③疾患理解のためのプリント作成 ④eラーニング授業と資料作成 2018年担当 担当講義：高齢者の基本的な生活援助（排泄・栄養・活動と休息・清潔）転倒転落・食事介助・嚥下困難・アクティビティケア・看護展開 演習授業：高齢者体験 片麻痺体験 夏季休暇中の実習前演習 陰部洗浄 移送移動 点滴中の更衣 片麻痺の更衣 看護展開の実践（看護計画の実技） 2019年担当 担当講義：排泄・転倒転落・廃用症候群・リスクマネジメント（災害看護・医療事故）看護展開 2020～2021年担当 講義授業：排泄・排尿障害・転倒転落・廃用症候群・発熱・浮腫・倦怠感・脱水・退院支援・権利擁護 2022年度担当 担当講義：排泄・排尿障害・転倒転落・廃用症候群・嚥下食事・退院支援・権利擁護 7)「老年看護学援助論演習」（2018年：3年次配当1単位、2019年～2022年次配当1単位） 2019年度担当 担当講義（演習）：退院支援グループワーク・セルフアセスメント・脳梗塞移動トイレ介助 2020～2021年度担当 「老年看護学援助論演習」看護展開 1～12回ゴードンの機能的健康パターンを使った脳梗塞患者の看護展開、事例、記録用紙、パワーポイントを使用した授業資料、課題のループリック評価表作成 2022～2023年度 看護展開 1～12回ゴードンの機能的健康パターンを使ったパーキンソン病患者・脳梗塞患者の事例の看護展開、関連図作成、事例、記録用紙、パワーポイントを使用した授業資料、課題のループリック評価表作成	2018年4月～ 2025年3月	2018年～2019年では、「高齢者体験」ではグループワークで行う内容についての援助の方法の編成とないようについての目標や目的についてのプリントの作成を行った。また、杖歩行の援助方法の教授では、図式の資料と注意点を記入する用紙を作成し、実際に使いながら看護者・援助者・観察者と分け、肉体的だけでなく精神的な援助を含め考えるように指導した。「転倒転落」では、事例をち使って転倒要因を考えると同時に、アセスメントスコアシートを実際につけてアセスメントの視点と実際を行った。嚥下困難では、高齢者体験の感覚器系装具を付け、感覚器系の変化について体験させた。そのうえで事例を使って、栄養状態の評価をし食事摂取するという事とその困難について考えさせアセスメントさせた。アクティビティケアでは、写真等を使ってイメージしやすいようにした。また実際の学生間でも行った。演習授業では、限りなく実践に近くできるように、グループごとでワーク形式で行った。 2020年度では、オンライン授業が中心であるが、学生が受け身にならないように、相互に意見交換やGWを使い授業参加できるように工夫した。eラーニングでは、すべ手を教授してしまわず、自分で考え調べたり、実習で考えて使えるような資料づくりを心かけた。演習授業では、学生間でのディスカッションができるように、問題提起や発問などで実際の援助の方法に多角的に考えることができるように注意した。 看護展開の授業では、コロナ渦でオンライン授業が中心であったが、学生同士相談し合いながらZOOMを使用してグループワークを行った。わからない学生には、個別に指導し理解を促した。学生からは積極的に参加する姿勢があり、自己学習をしている姿も多かった。令和4年からは、退院支援などでは実習時に必要なプレゼンテーションのスキルも養うためにパワーポイント資料での提出とした。 2023年度では、ペアワークを行い個別でも確実に看護展開できるようにし、実習でも使用できる内容の資料提供とした。老年看護学らしい、施設看護も視野に入れた事例を使用し、徹底した老年特有の高齢者の通夜夜を生かした看護の考え方を学び実践できるようにした。全学年の学生ともおおむね目標達成できた。
8) 成人老年看護学援助論 I（2023年：3年次配当1単位） ①授業資料 ②事後課題用紙 ③学習課題用紙 2023年度担当講義 手術を受ける高齢者の看護の基本・手術時の看護 2024年度担当 「手術療法時の看護」「高齢者の手術時の看護」「術前看護」「術中の看護」「術直後の看護」「亜急性期の看護・生活の再編」「関節運動器の手術を受ける人・家族の看護」「腹部の科手術を受ける人・家族の看護」「統計部の手術を受ける人・家族の看護」「循環器系疾患発症時の看護」「循環器心臓カテーテル時の看護」「ERC・肝臓疾患の看護」「婦人科系疾患の看護」	2023年4月～ 現在	2023年度からは、主に高齢者が手術を受ける場合の注意点や看護の基本について授業をおこなった。高齢者に多く、術後の影響を与える術後せん妄や認知症との違い、高齢者が医療従事者から説明をけるときに注意や環境の整え方、等、看護実践に即したレベルでイメージしやすいように授業を展開した。また、学生が分かりやすいようにロールプレイをとりいれたり、板書や発言の機会を多くもてるように実施した。事後課題で学びが定着しやすいように反復した内容の考察を行った。 2024年からは、手術時の看護や術中術後の看護や疾患別の看護について担当した。疾患についての事前学習を通して学習習慣を身につけるように設定するとともに、看護の導き方を自身で考えることができるように、考え方を重視して授業構築を行った。ペアワークやグループワークを取り入れ、板書、提出物、自分の考えの発表という形で授業するように工夫した。 2025年はこれまでの内容に加えてさらに、実際に実習へ持参し、活用できる資料として持参し活用できるようna内容にした。また自己学習でも考え方を導けるようなワーク資料を作成し事前事後課題として活用した。

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
9) 成人老年看護援助論Ⅱ（2023年：3年次配当 1単位） ①授業資料 ②事後課題用紙 ③学習課題用紙 慢性的な健康障害を持つ人の看護として、 「検査時・外来受診時・薬物療法時の高齢者の看護」「退院支援・多様な場の看護」「家族の人生最終段階の看護」「加齢変化の伴う症状と看護①」「加齢変化の伴う症状と看護②」「合併症のコントロール不良時・生活の質保証のための生活支援と看護」 2024年～学外授業：高齢者の看護①～② 学外授業要項、記録用紙作成	2023年4月～ 2025年3月	2023年度からは、複数の疾患を持つ高齢者の看護の基本的なことから、多様な場の看護と、実際の高齢者の看護に活用できる内容を中心に授業を行った。授業のなかでは、高齢者の特徴とそれが医療や看護に及ぼす影響とを中心に授業追加した。授業資料では、視覚的にイメージしやすいように、必要書類やスコアシート、クリティカルパスなどを配布し学生が実践時に混乱しないように工夫した。自身の意見や看護として何ができるのか考えやすいようにグループワークを取り入れたり、板書や記録用紙の形式だけでなく、パワーポイントで要点を絞った資料作成も行わせ、授業内容の定着を図った。 2024年からの学外授業では、介護老人保健施設や介護老人福祉施設、グループホームやケアハウスなどで学生が実際に高齢者の特徴やコミュニケーション、日常生活の援助について実践で学べるように企画、準備を実施した。
10) 成人老年看護看護実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ 実習指導病院：西奈良中央病院・八尾徳洲会総合病院・近畿大学奈良病院	2024年4月～ 現在	事前に実習指導の内容の説明会の調整を行い、初めての病院では、事前に研修に行き、スムーズに学生受け入れがしてもらえるように各病棟の構造や実習指導者との調整をし、準備を行った。 実習では、脳神経、循環器、消化器、呼吸器、運動器、腫瘍、終末期の学生担当患者の実習指導を行った。できうる限り学生の進捗に合わせて繰り返し内容を指導するとともに、必要な資料の提示をしながら実習指導を行った。また学生の学びが広がるように学生の発案に対してはできる限り実施できるように実習病院とも調整し支援した。看護が、病院だけにとどまったり、看護の対象が偏らないように、患者選定でも、学生のウイークポイントはチャレンジング可能な看護が必要な患者を設定し、ストロングポイントは十分に生かし看護できるように、実習指導者と相談しながら患者決定を行った。担当学生は目標達成することができた。
1) 老年看護学実習要項・評価表・記録用紙・学内実習用事例・学内実習用プログラム 施設概要	2018年4月～ 2024年3月	看護学科専門科目「老年看護学Ⅰ・Ⅱ」（3年次配当 4単位）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習方法と内容、実習の進め方、実習の心得、健康管理の方法などについてまとめた冊子を作製した。老年看護学実習でないと経験できない看護援助の実技面でも、確手順書を作成し観察項目などの確実な習得を目指した。 R2～4年度は、コロナ禍の非常事態宣言にて臨地実習ができず、臨地と遜色ないように一人1事例事例を準備し、看護展開と実際の看護の内容について学内実習を行った。また臨地での受け入れが可能な施設では、感染予防とできるだけ多くの学生の受け入れをしてもらうために実習先変更や日程調整を行い、実習内容を組みなおし調整した。学生は到達目標へおおむね到達できた。評価表はパフォーマンス評価が適切にできるように、ルーブリック評価へ変更した。
2) 統合看護学実習要項（老年看護学領域・成人老年看護学領域）学校奈良学園大学保健医療学部看護学科の専門科目 統合実習要項・記録用紙・学内実習プログラム 評価表の作成	2018年5月～ 現在	「統合実習」（4年次配当 1単位）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習方法とスケジュール内容、実習の進め方、実習の心得、健康管理の方法、領域実習で実習できなかった看護技術の実習の仕方についてまとめた冊子を作製した。 コロナ禍で臨地実習に行けないときは、学生が学内で実習できるようにスケジュールを調整した。 成人老年看護学での統合実習では、急性期に特化した患者の流れに合わせて様々な外来検査病棟部門で実習できるように調整した。
3) 老年看護援助論での授業教材として、パーキンソン病・排泄の機能障害（排尿・排便）についての自己学習プリントの作成 浮腫のイグザミネーションの手順、脱水・浮腫・倦怠感・脱水のeラーニング後の確認テスト作成 テスト問題作成 老年看護概論の社会保障制度eラーニング資料作成 令和2021～2022年 ゴードンの機能的健康パターンの内容についてかみ砕き、内容がわかるように平癒な言葉に直した資料の作成 口腔ケア時の看護の課題作成 定期テスト問題作成	2018年4月～ 2023年3月	学生自身が学習内容を深められるように、解剖整理から、病態生理、症状検査、看護と発展的にできるように工夫をした。また、学習してきた内容は、授業の中で発表する時間をもちお互いの学習内容について振り返りを行った。また、提出後にはすべての学習内容についてチェックし、不足している部分についてはさらに復習として授業の中で補足説明を行い理解できるようにした。 eラーニングでは、テキストを使用し学習を深められるように発問の内容をおきながらポイントを学習できるようにした。暗記を必要とする科目に関しては繰り返す学習で使えるように、自分独自の資料が作成できるようにした。 実習で作成した資料をそのまま使えるように、実習時に必要な内容を盛り込んで資料とした。領域実習で使いながらアセスメントする学生を多数確認できた。

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
4) 老年看護学実習学内での事例作成 事例：高齢者特有の疾患患者11例 シュミレーターの設定 総合病院での実習計画スケジュールの作成 「大腿骨頸部骨折後の看護」（3例）「腰椎圧迫骨折後の看護」（2例）「心不全時の看護」（3例）「COPD時の看護」「頸部腫瘍時の看護」「変形性膝関節術後の看護」	2020年8月～ 2023年3月	老難看護学実習Ⅰ・Ⅱではコロナ感染予防のために学内実習に切り替わることも多く、事例を使用し、学生へ臨地実習に近づけるようにした。シュミレーターなども使用し、異常音の聴取や心電図の読み取りなどもできるようにした。また2グループ共同での実習の場合の実習計画表を作成し、各グループで実習ができるように工夫し学びの低下を防ぐようにした。 学生からは、「実技指導もありよかった」という声や「少しでも臨地に行けて安心した」「患者さんと関わってよかった」という声が聞かれた。おおむね全学生は目標達成できた。
5) 国家試験対策講座 老年領域資料 出題傾向問題作成 解説パワーポイント資料	2022年1月～ 2025年3月	前年度までの過去問題や参考書、学生の模擬試験結果から間違いやすい問題と出題傾向の強い問題を作成し配信した。また今年度の予測問題もテキストの内容などを参考に作成した。そして、それらの解答と解説を行い、看護師国家試験へ向けて知識の再確認と定着を行った。参加した学生からはおおむね好評であった。学生の看護師国家試験の合格率は2023年度は100%、2024年度は97.3%、2025年度は95.6%であった。
6) 成人老年看護援助論Ⅰ・Ⅱ 試験問題 追再試験問題	2023年4月～ 現在	授業内容に合わせて学生の能力が発揮しやすいように、文章・記号挿入・○×などの問題形式にしたものを作成した。しかし、当学の主軸となる領域であることやそれをふまえて成人老年看護学の実習の単位数が10単位に増加したことを鑑み、学生の理解をより深める内容や、自身の考えを十分に述べるができるような内容に重点を置いた内容へ変更した。理解が促されるように自身で考える、考え方を重視した内容の問題を実施した。 学生の中には暗記科目であると勘違いしている学生もおり、希望の学生には、個別に学生と面談し、学習方法や求められている看護師像などを話し学習の意欲が増強するように試みた。 2025年度からは、援助論Ⅰの試験問題、追再試験問題のを作成した
7) 老年看護学領域の実習協議会報告書・実習報告会資料 ①実習報告書 ②インシデントアクシデント報告書 ③学生の実習出欠状況報告書 ④次年度の実習計画書	2019年1月～ 2023年3月	毎年行われる実習報告会の老年看護学領域の実習報告資料の作成を行った。旧領域の老年看護学では、学生の自己評価と教員評価のグラフを作成し、内容分析後に相違点や学びの内容についての考察を行い報告した。老年領域～現、成人老年看護学領域を作成した。
8) 成人老年看護学概論 授業認知症サポーター養成講座の企画、外部講師との調整	2024年4月～ 現在	昨今の認知症患者の理解を図るために、地域支援支援センターの職員と連携をし、講座の企画運営を行った。内容とした認知症の基本的な理解をうながす内容と実際に認知症の方を講師としてお招きし、自身の社会で偏見を受けた体験や、病状の進行についての受けとめ等を語っていただいた。資料も作成した。学生90名程度が全国キャンパ・ン・メイト連絡協議会の認知症サポーター養成講座の受講証書を受領できた。
9) 老年看護学援助論演習Ⅰ・Ⅱ 事例と演習で使用する模擬モデル6体 事後課題、成績評価表の作成	2020年4月～ 2023年3月	実習で使用する内容の看護展開や看護技術について演習として行った。 学生の看護展開について学生評価では、積極的に参加できるような授業展開にしたため、参加度は4.33に上昇していた。しかし、on-lineということもあり、わかりやすさや満足といった内容評価は平均であった。おおむね学生は目標達成できていた。
10) 成人老年看護援助論演習Ⅰ・Ⅱ 直腸切除後の患者のモデル人形作成 事例として高齢者の術後の状況や生活の再編の状況設定事例を作成	2023年4月～ 2025年3月	直腸切除術後の患者のモデル人形を作成しよりリアルな状況が想像できるようにして学生に実際の患者の状況を理解できるようにした。 生活の再構築の授業では、学生が行う指導内容の実施に対し発問や内容についてコメントし演習内容の振り返りを行うように促した。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
1) ①奈良学園大学法人広報委員会 ②奈良学園大学保健医療学部入試広報	①②2018年4月～2019年4月 ③2020年4月～2022年4月 2024年4月～ 2025年3月	①②学外広報誌作成の参画と調整、広報誌の内容の修正 オープンキャンパス参画運営と教員への周知徹底、内容や物品の調整を行った。リハビリテーション学科開設の伴う広報活動として、外部向けシンポジウム運営調整を行った。当日はオープンキャンパスとの同時開催があり、教員と学生に対し企画説明・役割や時間調整等を行い運営した。また、学外広報としての高校への派遣授業の教員への意見聴取ととりまとめを行い教員派遣の調整をした。広報活動企画報告書の作成を行った。入試面接のループリック案の作成を行った。 ③2024年度からは入学のウエルカムボードや花見会 納涼会などの発案、企画運営を実施した。また2025年度は新たなオープンキャンパスのブース企画を行い新規受験生の獲得に参画をした。

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
5 その他		
特記事項なし		
1 資格，免許		
1) 看護師免許	1990年5月	第684127号
2) 厚生労働省専任教員養成課程修了	2015年3月	
3) 次世代教育学 学士	2015年3月	
4) 看護師・保健師養成所専任教員	2015年3月	大学・短大・専門学校などでの看護師・保健師の養成教育、病院での新人教育, 現任教育などに携わる教員を認定する資格を取得した。
5) 学術修士	2017年3月	老年看護学教育で、学部学生のエイチズムについての調査を行い修士論文を執筆した。
6) 心療回想士 5 級技術位	2022年6月	内閣総理大臣認証法人第1050号特定非営利活動法人日本回想法学会認定心療回想法5級技術心療回想士
2 特許等		
該当なし		

教 育 研 究 業 績 書		
令和 8年 6月 22日		
氏名 高橋 晶		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
地域・在宅看護	在宅看護、訪問看護、再入院予防、多職種連携	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
5) 早期体験演習 基礎看護学実習Ⅰ、Ⅱにおける実践	平成26年7月～平成28年3月	奈良学園大学保健医療学部助教として、基礎看護学実習での臨地指導を行った。学内講義、演習で習得した知識、技術を実際の臨床現場で安全、安楽に対象者へ提供できるよう指導を行い、学生の対象者への看護実践を実現した。
6) 公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）における実践	平成26年7月～平成28年3月	奈良学園大学保健医療学部助教として、公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）の学内講義を行った。地域活動において重要な地域診断について、グループワーク方式にて演習を行い、地域の特徴を明らかにし、課題抽出までのプロセスについて指導を行った。
7) 広域発展看護学概論における実践	平成28年4月～平成30年3月	天理医療大学医療学部看護学科教員として、広域発展看護学概論の学内講義を担当した。地域看護活動に必要な知識、活動方法について臨床での経験を活かした講義を行った。また、地域包括ケアシステム構築における多職種連携の重要性なども追加し展開を行った。
8) 広域発展看護学実践論Ⅰにおける実践	平成28年4月～平成30年3月	天理医療大学医療学部看護学科教員として、広域発展看護学実践論Ⅰの学内講義を担当した。平成28年度は、安心して在宅療養を送るための社会資源の活用方法について、例年、社会資源については学生の弱点項目のため、事例を用いてイメージしやすいように工夫した講義を展開した。平成29年度は新カリキュラムのため、主に援助技術の方法について講義を行った。家にあるものでケア物品を用意する方法など、在宅に特徴的な技術について講義を行った。
9) 広域発展看護学実践論Ⅱにおける実践	平成28年4月～平成30年3月	天理医療大学医療学部看護学科教員として、広域発展看護学実践論Ⅱの学内講義を担当した。在宅看護に必要なセルフケア援助の視点と考え方を理解できること、療養場所の違いから在宅療養を支える看護職の役割が理解できることを目標に、在宅に特徴的なさまざまな援助技術の方法を、事例を用いて講義を行った。
10) 広域発展看護学実践論Ⅲにおける実践	平成28年4月～平成30年3月	天理医療大学医療学部看護学科教員として、広域発展看護学実践論Ⅲの学内講義を担当した。在宅看護に必要なセルフケア援助の視点と考え方を理解できること、療養場所の違いから在宅療養を支える看護職の役割が理解できることを目標に、看護過程の展開を行い、看護計画立案では、在宅に特徴的なさまざまな援助技術の方法を、事例を用いて講義を行った。
11) 広域発展看護学実習Ⅰにおける実践	平成28年4月～平成30年3月	天理医療大学医療学部看護学科教員として、地域で生活する高齢者や在宅療養者を支える医療・保健・福祉の多職種連携における看護の役割と継続看護および包括的な介護予防支援を学ぶことを目的とした広域発展看護学実習Ⅰの指導を行った。外来部門、地域医療連携室、入院案内センターでは地域と医療施設をつなぐ看護職の役割について、また、地域包括支援センター、地域包括ケア広場では、健康を維持しながら地域生活を継続するために必要な医療職と地域住民との関わりについて、学生とともに事業に参加し、場面場面において適宜指導を行い学生の学習効果が上がるよう携わった。
12) 広域発展看護学実習Ⅱにおける実践	平成28年4月～令和2年3月	天理医療大学医療学部看護学科教員として、在宅療養者への地域で生活する高齢者や在宅療養者を支える医療・保健・福祉の多職種連携における看護の役割と継続看護および包括的な介護予防支援を学ぶことを目的とした広域発展看護学実習Ⅰの指導を行った。外来部門、地域医療連携室、入院案内センターでは地域と医療施設をつなぐ看護職の役割について、また、地域包括支援センター、地域包括ケア広場では、健康を維持しながら地域生活を継続するために必要な医療職と地域住民との関わりについて、学生とともに事業に参加し、場面場面において適宜指導を行い学生の学習効果が上がるよう携わった。

13) 総合実習における実践	平成28年4月～ 令和2年3月	天理医療大学医療学部看護学科教員として、既修の知識・技術・態度を統合して実践する能力をさらに向上させること、そしてマネジメントと倫理観を持った行動を実践するための基礎的能力を養うことを目的とした、訪問看護ステーションでの2週間の実習指導を行った。少ない訪問回数での効果的な情報収集の方法や課題の抽出、看護援助計画の立案を広域発展看護学実習Ⅱで既修した知識を発揮できるよう指導を行った。また、受け持ち利用者への看護援助を行うための技術確認、援助実施後の評価と看護援助計画の追加、修正指導を的確に行うことで、少ない訪問機会を逃すことなく学生が実施できるよう指導に携わった。
14) パブリックヘルスケア論（科目責任者）における実践	平成28年4月～ 令和2年3月	天理医療大学医療学部看護学科教員として、看護師による公衆衛生看護活動の概要、活動方法の講義を行った。我が国の社会的背景から、看護職による地域支援は、今後さらに求められると考えらるる。公衆衛生看護の歴史などの基礎的知識に加え、医療機関を退院後にスムーズに地域生活を送ることができるような指導方法について、また、退院後に戻る「地域・在宅」とはどのような所か、を学生自身の生活の場である自治体が発行している広報誌を用いて、「地域とは」を感じてもらえるよう工夫を行った。
15) 看護研究方法論における実践	平成28年4月～ 令和2年3月	天理医療大学医療学部看護学科教員として、看護研究の目的と意義、研究方法および研究のプロセスを学び、看護研究計画書を作成するために必要な基礎的能力を修得することを目的に、平成28年度3名、平成29年度5名、平成30年度3名、令和元年度3名の学生に対し、興味のある事柄からリサーチクエスチョン決定、研究テーマの絞りこみをゼミナール形式で行った。
16) 看護研究演習Ⅰ、Ⅱにおける実践	平成28年4月～ 令和2年3月	天理医療大学医療学部看護学科教員として、学生の関心のある研究課題を整理することを通して実用価値及び実現可能性の高い研究テーマを設定すること、そして、設定した研究テーマに対して研究方法を検討し、研究計画の作成とプレゼンテーションを行い看護研究方法のプロセスを学ぶことを目的に平成28年度1名、平成29年度3名、平成30年度3名、令和元年度3名の学生に対し研究指導を行った。
17) 地域に生きる人々を支える看護における実践	令和2年4月～ 令和6年3月	天理医療大学医療学部看護学科講師として、1. 在宅看護の意義と基本理念について学ぶ 2. 地域看護の意義と基本理念について学ぶ 3. 地域包括ケアシステムの意義と実際を学び、その活動を評価することが出来ることを目的に、地域看護および在宅療養者への看護について、実際の場面を撮影した動画等を用いて講義を行った。学生のほとんどは、病院、施設での看護の実際を見た経験があるが、地域、在宅で行われる看護については初見であることが多いため、イメージしやすいよう工夫した授業展開を行った。
18) 地域に生きる人々を支える看護演習における実践	令和2年4月～ 令和6年3月	天理医療大学医療学部看護学科講師として、1. 日常生活の場としての地域を理解し、地域で暮らす人々の健康の維持増進に対するニーズを理解し、支援するための基礎的能力を養う2. 地域で生活しながら療養する人々とその家族が、地域において望む暮らしの継続のために必要な看護について、基礎的能力を身に付けることを目的に、主に地域看護領域を担当した。大学所在地である天理市について、コミュニティアズパートナーモデルを用いて、地域の特徴を把握し、地域課題の抽出を行った。統計学的に状況をアセスメントすることを苦手とする学生が多いため重点的に助言、指導を行い、理解できるよう努めた。
19) 在宅療養を支える看護における実践	令和2年4月～ 令和6年3月	天理医療大学医療学部看護学科講師として、在宅療養者とその家族が住みなれた地域で生活することを支えるためのケアマネジメントを理解し、療養者とその家族のQOLの向上と自立支援をめざす看護を実践する基礎的能力を養うことを目的とし、在宅看護における看護展開の概要について、療養者のライフヒストリーから望ましい状態を看護師として考えるられるよう、指導、助言を行った。
20) 在宅療養を支える看護演習（科目責任者）における実践	令和2年4月～ 令和6年3月	天理医療大学医療学部看護学科講師として、1. 在宅療養者と家族が住みなれた地域で、望む暮らしを継続することを支える看護の基礎的な知識と技術を学ぶ。 2. 事例の看護過程の展開を通して、在宅療養者と家族が地域で生活する課題をアセスメントし、地域包括ケアシステムにおける効果的な連携および援助する基礎的な能力を養うことを目的に、初回訪問看護のロールプレイや実際の訪問映像から看護を考察するという演習内容とし、学生が地域、在宅という場所での看護をできるだけ易く考えらるよう工夫を行った。

21) 課題研究演習における実践	令和2年4月～ 令和6年3月	天理医療大学医療学部看護学科講師として、学生の関心のある研究課題を整理することを通して実用価値及び実現可能性の高い研究テーマを設定すること、そして、設定した研究テーマに対して研究方法を検討し、研究計画の作成とプレゼンテーションを行い看護研究方法のプロセスを学ぶことを目的に令和2年度3名、令和3年度3名、令和4年度3名の学生に対し研究指導を行った。
22) 課題研究演習における実践	令和2年4月～ 令和6年3月	天理医療大学医療学部看護学科講師として、学生の関心のある研究課題を整理することを通して実用価値及び実現可能性の高い研究テーマを設定すること、そして、設定した研究テーマに対して研究方法を検討し、研究計画の作成とプレゼンテーションを行い看護研究方法のプロセスを学ぶことを目的に令和2年度3名、令和3年度3名、令和4年度3名の学生に対し研究指導を行った。
23) 健康支援看護論における実践	令和2年4月～ 令和6年3月	天理医療大学医療学部看護学科講師として、健康教育が行われる対象や場を理解し、個人・集団の健康増進や疾病予防のための行動変容を促す理論やモデルを活用した健康教育の企画・実施・評価等の一連のプロセスを修得できるよう指導を行った。学生が企画・実施し発表した健康教育に対する評価は、できるだけ具体的に、そして、実践可能とするための修正ができるよう助言を行った。
24) 在宅療養を支える看護実習（科目責任者）における実践	令和3年4月～ 令和6年3月	天理医療大学医療学部看護学科講師として、地域に暮らす対象の状態に応じた看護および暮らしの場で行われる医療的ケアについて対象者とその家族の理解を深め、その暮らしの実際を通して、制度、社会資源、関係機関、関係職種の機能と連携を学び、地域包括ケアシステムの中で、地域の人々が望む暮らしを継続するための看護を展開する基礎的能力を養うことを目的に、訪問看護ステーションおよび地域包括支援センター等において地域に暮らす人々の望む暮らしに近づくための支援の展開ができるよう関わった。限られた訪問回数であるため、事前に撮影した訪問看護映像等を用いて対象者理解を深め、事前に撮影した訪問看護場面を立ち会う工夫をお粉い、学
25) 看護統合実習における実践	令和3年4月～ 令和6年3月	天理医療大学医療学部看護学科講師として、既習の知識・技術・態度を統合して複数患者に対する全人的ケアを実践する能力を高めるとともに、看護職者としての使命や役割を発揮するために必要な看護活動のあり方を学ぶことを目的とした、訪問看護ステーションでの2週間の実習指導を行った。少ない訪問回数での効果的な情報収集の方法や課題の抽出、看護計画の立案を在宅療養を支える看護実習で既修した知識を発揮できるよう指導を行った。また、受け持ち療養者への看護を行うための技術確認、実施後の評価と看護計画の追加、修正指導を的確に行うことで、少ない訪問機会を逃すことなく学生が実施できるよう指導に携わった。
26) 看護実践能力の探究における実践	令和3年4月～ 令和6年3月	天理医療大学医療学部看護学科講師として、既習の知識・技術・態度を統合して、自らの役割と機能を発揮し主体的に働きかける経験を通して、他者と協働し、多様な場や健康状態にある人々の健康を支援するための看護実践能力を身に付けること目的とする演習に携わった。「臨床判断」および健康教育の実践である「まちの保健室」の2つの演習に分かれている。主に「まちの保健室」の演習を担当した。地域のニーズを把握し、そのニーズに合った健康教育の実施のための計画立案、媒体作成、実施がスムーズに進むよう、助言、指導を行った。「臨床判断」では、シミュレーション学習では、患者役、ファシリテーターを担当し、学生が体験した場面について省察できるよう関わった。
27) 地域の暮らしと看護における実践	令和3年4月～ 令和6年3月	天理医療大学医療学部看護学科講師として、人々の暮らしを理解し、地域の生活環境とその暮らしが健康に与えるを影響を学び、その人らしい暮らしの継続のための多様な看護の考察を深め、実践する基礎的な能力を養うことを目的に、入学間もない学生に対し、看護の対象は地域にくらす人々であることを理解できるよう、大学所在地の天理市内の地域探索を計画し実施した。学生は、普段何気なく通っている通学路も、意識して歩くに見えるものが異なることに気づき、また、様々な年代が生活者としてはどのような暮らしを営んでいるのか？を考え、療養者としての側面ではない対象理解を促した。
28) 地域包括医療演習における実践	令和3年4月～ 令和6年3月	天理医療大学医療学部看護学科講師として、地域完結型医療、ケアシステムにおける医療の役割を理解するとともに、将来、医療専門職として各地域において包括的ケアと関わり、牽引していくための技術・態度を習得することを目的に、看護学科と臨床検査学科合同で行っている全員参加型演習である。医師、臨床検査技師など、他職種の視点から包括的ケアを考えられるよう、グループワークではそれぞれの専門性を尊重したディスカッションが可能となるよう関わった。

29) 災害看護論における実践	令和3年4月～ 令和6年3月	天理医療大学医療学部看護学科講師として、災害が人々の健康と生活に及ぼす影響、災害の静穏期から災害直後および中・長期にわたり必要となる看護活動について学び、災害看護活動を実践できる基礎的能力を習得することを目的に、災害看護の基礎から、メディカルラシーでの判断能力習得のための実践演習をスムーズに実施できるよう関わった。
30) 地域健康教育方法論における実践	令和4年4月～ 令和6年3月	天理大学医療学部看護学科講師として、地域の人々の健康ニーズを把握するプロセスと方法を理解し、健康の保持増進、予防への健康ニーズに対する健康教育計画と評価の作成を通して、多様な場や状態にある人々への健康教育に関する基礎的能力を養うことを目標に、夏祭り会場と商店街での健康教育を実施できるよう計画立案に関わった。
31) 地域健康教育実習における実践	令和4年4月～ 令和6年3月	天理大学医療学部看護学科講師として、1. 多様な地域から集まる人々とのコミュニケーションを通して、人々の健康に対する認識や健康管理に影響をおよぼす要因を捉える基礎的能力を養う。 2. これまでに学習したの知識・技術・態度を統合して、地域で暮らす人々への健康教育の実施評価により、多様な対象の健康を支える看護を実践する基礎的能力を養うことを目標に、夏祭り会場と商店街での健康教育を実施できるよう関わった。
1) 公衆衛生看護学方法論Ⅰにおける実践	令和6年4月～ 令和6年9月	奈良学園大学保健医療学部看護学科講師として、公衆衛生看護学方法論Ⅰの学内講義を担当した。公衆衛生看護活動の対象となる個人・家族・集団の健康増進能力を高めるための支援方法・技術を学ぶ。また、公衆衛生看護活動が行われる場の多様性とそれぞれの場における保健師の役割と機能を学ぶ。さらに対象の健康意識を高め、行動変容に導く主要な方法としての家庭訪問、健康診査、健康相談、健康教育の目的、計画立案、実施、評価に関する基礎的实践能力を習得することを目的とした。講義内での健康教育演習では学生間での振り返り時間を多く確保し、ピアレビューによる実践の質の向上を目指した。
2) 地域・在宅看護学実習における実践(科目責任者)	令和6年4月～ 令和8年3月	奈良学園大学保健医療学部看護学科講師として、地域・在宅看護学実習を展開した。他家で行われる看護実習であるため、訪問時の立ち居振る舞い等のマナーに関して、実習前より詳細な指導を行った。実習中の指導では、在宅看護の特徴について焦点化し（家にある物をケア物品にする工夫など）、在宅の特徴的な看護技術についてディスカッションし、学びの深化を目指した。
3) 地域・在宅看護学概論	令和7年4月～ 令和7年9月	奈良学園大学保健医療学部看護学科講師として、地域・在宅看護学概論の地域探索を担当した。地域包括ケアシステム等を推進するために、地域で生活する人々とその家族の健康と暮らしを継続的に支援するための看護について学ぶことを目的にフィールドワーク（地域探索）を行った。人々が生活を営む地域の特性や多様性について実際に地域を探索し、看護の対象を「生活者」としての視点でアセスメントし、ニーズに応じた看護とは何かを説明できるよう、グループワーク等でも関わった。
4) 地域・在宅看護援助論演習Ⅰ	令和7年4月～ 令和7年9月	奈良学園大学保健医療学部看護学科講師として、地域・在宅看護援助論演習Ⅰを担当した。「在宅療養を必要とするあらゆる世代・健康レベルにある人々とその家族の特性を加味した上で、場の複雑性を認識しながら対象のニーズに応えるための看護援助について学ぶ。」「具体的場面を用いて、看護が提供される多様な場に応じた援助方法を習得する。」「在宅療養者とその家族のニーズについて価値観や文化、地域の特性を踏まえてアセスメントし、意思決定を支援しながらセルフケア力の発揮を促す支援について理解する。」ことを目的に、ALSの在宅療養者とその家族を事例に在宅看護の特徴をとらえられるよう、講義とグループワークを効果的に配置し、演習を行った。また、人工呼吸器供給業者をゲストスピーカーとして参加を依頼した。学生には実際に機器に触れてもらい、デモンストレーションではマスクを着着するなど、できるだけ対象に近づくことで、必要な看護が何かを考える際によりイメージしやすいように関わり、看護過程の展開をスムーズに運べるように関わった。
5) 地域・在宅看護援助論	令和7年10月～ 令和8年3月	奈良学園大学保健医療学部看護学科講師として、地域・在宅看護援助論の「在宅看護の実践：難病（ALS）を持つ療養者の看護1、2（在宅療養者を支える法制度：難病法、障害者総合支援法、介護保険法等、訪問看護の導入と調整、看護過程）」を担当した。本科目は、3年生前期の援助論演習Ⅰと関わりが深い科目である。社会資源の活用方法について苦手意識をもつ学生の特徴から、それぞれの資源が、対象者の生活を継続するためにどのように利用されているかを例を用いて説明し、学生の学びにつなげた。

2 作成した教科書，教材 なし		
3 教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 天理よろづ相談所病院 看護師 内分泌内科病棟 総合内科、腹部外科外来	平成11年9月～ 平成19年3月	糖尿病単科病棟に勤務。糖尿病血糖コントロールのために療養生活を送る患者に対し、生活習慣についての指導、アドバイスを主に行った。また、糖尿病教育入院目的の患者に対して、教育プログラムに則って指導を行ってきた。 総合内科外来勤務では、初診患者の診察介助、看護を行った。救急患者搬送の際は検査部門や手術室との連携を行い、様々な看護処置を経験した。腹部外科外来では外来手術介助など、日帰り手術看護を経験する。実習生指導では地域にとっての医療機関の役割について指導を行った。
2) 奈良県桜井保健所 非常勤保健師	平成19年6月～ 平成20年3月	精神・難病係に配属され、主に特定疾患申請手続き業務や在宅療養中の難病患者が使用する医療機器についての業者説明会参加、対象者カルテの整理などを行った。申請窓口業務では、申請者とその家族に対する健康相談、指導を経験し、地域で療養生活を送る対象者に特化した指導方法を修得した。
3) 桜井市医療センター 保健師	平成20年4月～ 平成22年3月	主に労働安全衛生法に則った、従業員健康診断や特定健康診査、特定保健指導業務に従事。特定保健指導では、動機づけ支援、積極的支援を行い、生活習慣の行動変容への指導を行った。また、地域住民の健康支援に対して、行政機関と連携を図り事業を進める中で、より効果的な事業展開のための他機関との連携方法を修得した。
4) 桜井市役所 非常勤保健師	平成22年4月～ 平成23年3月	国民健康保険被保険者に対し特定健康診査後の特定保健指導（積極的・動機づけ支援）業務を行った。個別指導の初回、継続支援において、食事・運動習慣について面接、電話、電子メールによる指導を行い、6か月後の評価では効果あり、なしのどちらについても指導方法について自己評価を行いながら、対象者の指導にあたった。
5 その他 なし		

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項		年月日	概 要	
1 資格、免許 看護師免許（第1035193号） 保健師免許（第89827号）		平成 11年 4月 平成 11年 4月		
2 特許等 なし				
3 実務の経験を有する者についての特記事項 なし				
4 その他 なし				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名 称	概 要
（著書）				
1) 高齢者のための疼痛 ケア	共	平成30年3月	三恵社	困難と言われている高齢者の疼痛管理について、高齢者入居施設に勤務する看護職者に対し、知識の普及と教育のためのテキストである。（担当：高齢者の痛みとその特徴 P.2-10）
2) 三重県看護職員等の 海外派遣研修事業報告書 （平成27年度～令和元年度）	共	令和3年3月	三重県医療保健部	英国における看護活動の実際やRFHにおける老年期、周産期の医療・看護について、5年間の海外研修事業内容の報告である。（担当：「英国からみえてきたもの」3. 地域における看護実践 P.15-16）
（学術論文）				
1) 「日本の戸籍制度と 女性役割の変遷 ―婚外 子に対する法律処置を通 して―」	共	平成11年9月	メディカ出版「ペリ ネイタルケア」 18巻9号、855-867.	日本の戸籍制度の歴史から特に婚外子への法的措置に焦点をあてて諸外国と比較し、我が国の戸籍制度が女性役割の変遷にどのような影響を与えているかについて文献検討を行った。諸外国と比較しても、婚外子（特に親権や養育権が女性）への諸手当に対する法律は、わが国では未だ充分ではなく、戸籍制度での女性役割は扶養されている存在であるが、婚外子を養育する女性には法的に擁護されることもなく、さらに社会生活においても冷遇されるという状況に明らかになった。我が国の戸籍制度のもとでの子の養育には、同じ「命」であっても嫡出子と非嫡出子（婚外子）では法的処置においても、子を養育するという役割においても差があることが明らかになった。 共著者：高橋（山中）晶、井浦真理
2) 「日常生活に占める 健康行動の優先性について―医療従事者を中心として―」 （修士論文）	単	平成23年3月	奈良女子大学大学院 1813号	就業者を対象とし、健康に関してとる行動（健康行動）について、日常生活行動よりも優先しているか否かについてアンケート調査を行った。また、就業者を医療従事者に特化し、健康に関する知識をもった医療従事者の健康行動の優先性の特徴について明らかにした。結果、就業内容など、様々な要因により、医療従事者は健康行動を日常生活行動よりも優先的に行っていないことが明らかとなった。
3) 「医療従事者における健康行動の優先性と生活習慣行動の実態」（査読付き）	共	平成23年3月	「奈良女子大学スポーツ科学研究」 13、47-56.	医療従事者と医療従事者以外の有職者を対象に健康行動の優先性の特徴を明らかにするために尺度を用いてアンケート調査を行った。健康・保健・医療に関する専門的知識を有している医療従事者であるとはいえ、他の有職者よりも健康行動の優先性が高いわけではないと示唆された。しかし、実際、望ましい生活習慣行動を行っているにもかかわらず、健康行動を優先できていないという結果も同時に示され、今後、健康行動の実施を妨げている要因を明らかにし、より健康行動を優先できる方法を探るため検討を行う必要がある。 共著者：高橋 晶、佐久間春夫

4) 「医療従事者における保健行動実施を妨げる要因」 (査読付き)	単	平成24年3月	「白鳳女子短期大学紀要」5、1-8.	健康に関する専門的知識を持ちながら、自らの保健行動がとられていない医療従事者の実態から、保健行動を妨げる要因を明らかにするために、総合病院に勤務する医療従事者に質問紙調査を行った。その結果、保健行動の実施を妨げる要因は、「自己都合」「他者優先」「優先性の低さ」「固定スタイルの習慣」に分類される結果となった。
5) 「高齢者の介護予防を目指すボランティアへの保健師の支援ーいきいきサロンボランティアの語りからの検討ー」	共	平成26年9月	「奈良学園大学紀要」1、181-189.	地域の健康づくりの担い手である保健師と協働を模索するサロンに焦点を当て、運営にかかわるボランティアの語りから、高齢者の介護予防についての保健師の支援のあり方について検討を行った。 共著者：家根明子、 <u>高橋晶</u> 、廣川聖子、ト田初子
6) 「保健行動の優先性と生活習慣行動の職種別比較ー医療従事者と非医療従事者とのアンケート調査からー」	共	平成27年3月	「奈良学園大学紀要」2、51-56.	変則的な勤務形態を特徴とする医療従事者の健康管理が急務となっている現状において、非医療従事者の健康意識、生活習慣行動について医療従事者と比較検討を行い、医療従事者の保健行動と生活習慣行動の特徴を明らかにした。 共著者： <u>高橋晶</u> 、家根明子、廣川聖子
7) 「「第1回・第2回天理医療大学まちの保健室」実践報告」 (査読付き)	共	令和4年3月	「天理医療大学紀要」10、1、45-50.	地域において住民や社会の資源と共生する中で教育・研究を進める中で、大学の役割として住民の健康増進・安全管理に寄与することを目的とし、2019年に社会連携・社会貢献委員会と安全管理委員会を中心に「第1回 天理医療大学まちの保健室」を開催した。その結果、地域住民から大学の社会貢献に対する更なる要望があり、継続して実施することとなった。2021年は感染予防を徹底し「第2回 天理医療大学まちの保健室」を実施した。医療人としてどのような場所で医療活動を行う場合においても、地域住民の健康と暮らしを支援する地域包括ケアシステムの一役を担っていくことが求められる。今後は本学の個性を活かし、どのような役割を担うことが出来るのか、柔軟な視点で模索していく必要がある。 共著者：江南宣子、奥田眞紀子、山中政子、 <u>高橋晶</u>
8) 「看護師国家試験総得点と模擬試験総得点、学習動機づけ、自己調整学習方略、学習行動との関係」 (査読付き)	共	令和5年3月	「天理医療大学紀要」11、1.	看護師国家試験総得点と模試総得点および学習動機づけ、自己調整学習方略、学習行動との関係を明らかにすることとした。 第111回看護師国家試験を受けたA大学4年生に自記式アンケート調査を実施した。計4回の模試総得点と学習動機づけ尺度14項目、自己調整学習方略尺度18項目、学習行動12項目を調査し、国家試験総得点で比較した。結果、分析対象は41名（高得点群30名、低得点群11名）。高得点群と低得点群ともに模試1回目～4回目の得点は上昇傾向にあった。高得点群と低得点群を比較した結果、学習動機づけにおいては、「希望する職業に必要だから」などの5項目で高得点群の方が有意に高く、「親がうるさいから」のみ低得点群の方が有意に高かった。自己調整学習方略においては、「何を求められているのか考えてから課題をやる」などの3項目で高得点群の方が有意に高かった。学習行動においては、「アプリや書籍で過去問題を解いた」は高得点群の方が有意に高く、11月の学習時間、動画視聴、予備校活用は低得点群の方が有意に高かった。 模試1回目から4回目の総得点は両群ともに上昇していた。また、国家試験総得点と学習動機づけ、自己調整学習方略、学習行動との関係が示された。今後は、国試合格だけを目標にするのではなく職業的価値を意識付けて学習の意義を明確に自覚させる関わりが必要と考える。 共著者：山中政子、 <u>高橋晶</u> 、森知美、前川理恵子

9)「訪問看護実践における心不全療養者に対する再入院予防の概念分析」(査読付き)	共	令和7年3月	「日本在宅ケア学会誌」28、2. 50-61.	目的：訪問看護実践における心不全療養者に対する再入院予防の定義を明らかにする。 方法：Rodgers (2000) の概念分析の手法を用い、30文献を分析した。 結果：属性は【ライフスタイルを重視した包括的アセスメント】【生活に密着した早期からの支援】【予後予測が困難な病態を想定した意思決定支援】【他職種や他機関との一体的な連携・協働による疾病管理】【ケアの継続性を保持】の5つ、先行要件は5つ、帰結は4つが抽出された。 結論：訪問看護実践における心不全療養者に対する再入院予防は、「ライフスタイルを重視した包括的アセスメントに基づく、生活に密着した早期からの支援を、予後予測が困難な病態を想定した意思決定支援と他職種や他機関との一体的な連携・協働による疾病管理を行い、ケアの継続性を保持すること」と定義した。この実践によりセルフケアレベルの向上と習慣化、療養者と家族の積極的な疾病管理につながり、人生や生活の質に反映され、在宅療養の継続に至ると示された。 共著者：高橋晶、李錦純
(その他)				
1) 第4回こころと糖尿病看護のネットセミナー事例提供	共	平成20年5月	第4回こころと糖尿病看護のネットセミナー	糖尿病療養目的で入院した、対応困難患者への看護について事例提供を行い、糖尿病看護における精神的支援について参加者とともに検討を行った。 事例提供者：高橋晶、大野奈津子
2) 日本健康心理学会(示説発表)「医療従者の保健行動の優先性とHLCとの関係」	単	平成23年9月	第24回日本健康心理学会学術大会(於：早稲田大学)	医療従事者の健康意識に着目し、健康行動の優先性尺度、HLC尺度を用いてその関連について検討することを目的とし、アンケート調査を行った。優先性の高低群とHLCとの関連では保健行動を優先させている人は、「自分自身」の内的統制だけでなく、「家族・周囲の人」「他者優先」といった外的統制による因子得点も高くなった。優先性が低いとはいえ、医療従事者において、健康を「運」に委ねているという結果から、専門的知識を有する医療従事者であっても、適切な健康行動への援助が必要であると考えられた。 発表者：高橋晶
3) 日本健康心理学会(示説発表)「女子看護短期大学生の保健行動の優先性と食習慣との関連」	単	平成26年11月	第27回日本健康心理学会学術大会(於：沖縄科学技術大学院大学)	女子看護短期大学生の保健行動の優先性が、食習慣と心身の健康度、学習態度に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。結果、女子看護短期大学生は保健行動を優先させていない、傾向が明らかとなった。 発表者：高橋晶
4) 日本老年看護学会(示説発表)「認知症カフェにスタッフとして参加した専門職の学びと課題」	共	平成27年6月	日本老年看護学会第20回学術集会(於：パシフィコ横浜)	「認知症カフェ」に焦点をあて、スタッフとして参加した専門職のミーティング内容を分析し、専門職にとつてのカフェの意義を明らかにして課題を検討することを目的とした。スタッフは、カフェへの参加を通して認知症を理解する前提となる支援の姿勢を学んでいた。また、当事者らとスタッフが「対等な生活者」という意識をスタッフ自ら徹底する姿勢の重要性を認識していた。そして、参加所の事例を通して具体的な関わり方や支援を学ぶとともに、経験から掴むことのできた接し方に関する知識を蓄積する場にしてた。 発表者：家根明子、小野塚元子、廣川聖子、高橋晶
5) 日本健康心理学会(示説発表)「生活習慣指導における学生が意識する指導ポイントについてー看護学生同士での食事指導演習後のアンケートからー」	共	平成27年9月	第28回日本健康心理学会学術大会(於：桜美林大学)	看護学生が生活習慣改善に対する指導を体験することをひとつの目的として講義中に行った食習慣の振り返りについて、学生が考える食習慣の改善点への指導ポイントについて分析を行いその特徴を明らかにすることを目的とした。結果、食事摂取の振り返りの改善点および指導コメントに関しては、どちらも【食事(品目)バランス】、【間食量・回数・種類】にポイントが置かれ振り返りが行われていた。 発表者：高橋晶、杉本多加子

6) 日本看護科学学会 (示説発表) 「Pain Management Education Content Requested by Nurses Working at Residential Facilities for Older People」	共	平成28年12月	第36回日本看護科学 学会学術集会（於： 東京国際フォーラ ム）	高齢者入居施設に勤務する看護職を対象とした疼痛教育プログラム開発の基礎資料を得るために、看護職が求める疼痛管理教育の内容について把握することを目的とした。 分析の結果、研修会で受講したい教育内容として、【疼痛管理に使用される薬剤の種類と適切な使用方法、不定愁訴への対応方法】、【客観的な疼痛評価方法】、【生活重視の施設において麻薬を使用する高齢者の看護】、【高齢者入居施設で生活する高齢者の疼痛の原因・種類・特徴】、【症状や疾患の種類に応じた疼痛管理方法】、【疼痛管理の成功事例】の7カテゴリが抽出された。 高齢者入居施設における疼痛管理の質向上のためには、鎮痛剤の適切な使用方法や高齢者の特徴に応じた疼痛管理方法に関する教育、他施設での疼痛管理の成功事例の提示などが看護職に対して必要であることが示唆された。 発表者：田中和奈、百々望、高橋晶、百瀬由美子
7) 日本保健医療福祉連 携教育学会 (示説発表) 「英国の高齢療養者を対 象とした多職種連携の実 際 ―急性期病院と地 域・在宅で行われる多職 種連携会議への参加から ―」	共	平成29年9月	第10回日本保健医療 福祉連携教育学会学 術集会（於：国際医 療福祉大学成田キャン パス）	多職種連携実践が定着している英国の高齢療養者を対象とした多職種連携（MDT）会議の実際について、英国国立ロイヤルフリーホスピタル高齢者病棟及び南カムデン地区ヘルスセンターでの研修から得られた学びは以下のとおりである。 高齢者病棟では、全入院患者を対象とし、病棟内全職種が参加するMDT会議が1日複数回行われ、患者の身体的・精神的状態、入院中のADLの様子、ケア実施時に困っていること等について各職種が専門的立場から活発に発言していた。ヘルスセンターでは、当該地区GP、老年専門医、精神科専門医、老年専門看護師等、地域で活動する医療職が参加したMDT会議が毎週1回開催され、近隣の病院や大学病院のスタッフも常時参加してケアプランの確認や困難事例の検討等が行われていた。また、看護学生も見学参加しており、MDT会議が臨床のみならず看護基礎教育の中でも重要な位置づけにあると考えられた。 今回の研修で、高齢者の安全で安心な療養生活の継続のためにMDT会議が重要な役割を担っていることが示唆された。 発表者：高橋晶、田中和奈
8) 日本看護科学学会 (示説発表) 「高齢者入居施設の看護 職を対象とした疼痛管理 研修会の有効性検討」	共	令和2年12月	第39回日本看護科学 学会学術集会（於： 石川県立音楽堂）	高齢者入居施設に勤務する看護職を対象とした疼痛管理に関する教材を用いた研修会の有効性検討を目的とした。研修会後には研修会の有効性を検討するために、無記名自記式質問紙調査を実施した。質問紙の内容は、対象者の属性、Chodosh らが作成した「高齢者のための疼痛管理質評価指標」7項目、研修内容の理解度・研修会の満足度について4段階評定で評価を問う内容で構成した。疼痛管理質評価指標の項目では、「新しい入所者に対しての入所時の疼痛のスクリーニングが全くできていない」と全員が回答していた。また、対象者全員が研修内容について「理解できた」と回答しており、研修内容に対する満足度については「満足」との回答が66.7%、「やや満足」との回答が33.3%であった。研修会受講後の感想では、【入所者の疼痛の訴えへの対応改善の必要性】の気づきが得られており、【疼痛評価の必要性の再認識】、【疼痛管理に関する知識の明確化】につながっていたことが明らかとなった。 発表者：田中和奈、高橋晶 他

9) 日本看護学会 (示説発表) 「A県内の退院支援・調整活動の推進における病院看護管理者が認識する課題」	共	令和3年11月	第52回日本看護学会 学術集会（於：WEB開催）	A県内の病院看護管理者が認識している、退院支援・調整活動の推進における課題を明らかにすることを目的に77施設の病院看護管理者を対象に「退院支援・調整活動の推進における悩みや課題」について自由に記述できる質問紙を配布し返送を依頼した。49施設（63.6%）から得た回答から、病院看護管理者が認識している退院支援・調整活動における課題として、《施設内ルールの周知と徹底》《人材の確保困難》《人材育成の推進困難》《他機関・他職種との連携・調整能力》の4つのカテゴリーが抽出された。明らかにされた4つの課題のうち、《人材育成の推進困難》は先行研究でも同様に挙げられており、取り組むべき重要課題であるといえ、それぞれの課題の解決には、病院看護管理者に課せられている、看護の対象者のニーズと看護職の知識・技術を合致するよう計画し、財政的・物質的・人的資源を組織化し、目標に向けて看護職を導き、目標の達成度を評価するという役割遂行のもと、退院支援・調整活動に関してもより積極的に関わることが必要であると示唆を得た。 発表者：高橋晶、堀畑佐知子 他
10) 日本看護科学学会学会 (示説発表) 「看護師国家試験の得点と学習行動、学習動機づけ、自己調整学習方略との関連性」	共	令和4年12月	第42回日本看護科学学会学術集会（於：WEB開催）	看護師国家試験（以下、国試）の高得点群と低得点群で学習行動、学習動機づけ、自己調整学習方略を比較し、その差異を明らかにすることを目的とし、第111回国試を受けたA大学4年生80名を対象に、自己採点による国試の総得点、学習行動12項目、学習動機づけ尺度14項目、自己調整学習方略尺度18項目をデータとした。メディックメディア（株）ネコナースの合格予報 for Schoolに参加した全数のうち上位75%に入る者を高得点群、下位25%に入る者を低得点群とし比較した。結果、研究参加者は41名で、高得点群30名、低得点群11名であった。国試の総得点平均は高得点群251.2点、低得点群227.1点であった。2群を比較した結果、学習行動のうち高得点群の方が高かった項目は、アプリ使用、書籍使用で、低得点群の方が高かった項目は、11月の学習時間、動画視聴、予備校活用であった。学習動機づけのうち高得点群の方が高かった項目は、不安だから、新しい知識を得ることが楽しいから、勉強が楽しいから、などで、低得点群の方が高かった項目は、親がうるさいからであった。自己調整学習方略のうち高得点群の方が高かった項目は、何を求められているのか考えてから課題をやる、難しい課題に取り組む前に基礎がわかっているか確認する、自分のできる範囲を考えながら勉強するであった。2群で比較した結果、アプリや書籍の使用は高得点群の方が高く、11月の学習時間や動画視聴、予備校活用は低得点群の方が高かった。高得点群の学生は低得点群よりも、不安であること、新しい知識を得ることや勉強の楽しさ、良い成績、職業に必要であることが学習動機づけになっていることが示唆された。また、高得点群の学生は低得点群よりも、何を求められているのかを把握し、課題に取り組む前に基礎的知識を確認し、自分のできる範囲に合わせて勉強していることが示唆された。 発表者：山中政子、高橋晶、森知美、前川理恵子

11) 日本看護福祉学会 （示説発表） 「特別養護老人ホームに おける在留外国人高齢者 の介護－第1報 外国人 高齢者対応時の課題－ 」	共	令和7年7月	第38回日本看護福祉 学会学術集会（於： 人間環境大学大部キャン パス）	【研究目的】住み慣れた土地を離れて老後生活することは、異文化環境への適応など困難を伴うことが多いと予測される。そこで、本研究は在留外国人高齢者が日本で介護を受ける際の課題について明らかにすることを目的とした。 【研究方法】特別養護老人ホームに勤務する在留外国人高齢者の介護経験がある介護職を対象に、「外国人高齢者への対応時にどのようなことが問題になるか」という質問内容を含む半構成的面接調査を行った。面接内容は同意を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。逐語録から在留外国人高齢者への対応時に介護職が対応に困った事柄を表現している部分を抽出し、コード化とカテゴリー化を行った。 【結果】対象者は特別養護老人ホーム1施設に介護職として勤務する男性5名、女性1名。平均年齢は42.8歳（SD=4.1）であった。介護職としての経験年数の平均は16.7年（SD=3.9）、特別養護老人ホームでの勤務年数は7.8年（SD=2.0）。介護職が対応した経験のある在留外国人高齢者はロシア国籍の女性1名であった。 分析の結果、38コードから19サブカテゴリー、7カテゴリーが生成された。在留外国人高齢者への対応で介護職に生じる困難として、【言語の壁による意思疎通困難】【言語の壁により入所者の思いが把握できない】【言語の壁と認知症の進行による対応の難しさ】という言語の壁によるコミュニケーション障害があり、そこに認知症の進行が加わることで、入所者とのコミュニケーションが一層難しくなっていた。外国人高齢者は日本の施設に入所している状況が受け入れられない思いを暴言や暴力、ケアの拒否で表出していたため【日本の施設での生活に適應できない入所者への対応の難しさ】も生じていた。外国人高齢者の風習や価値観が異なることで他の入所者とトラブルが生じるなどの【入所者の風習や価値観の違いによる対応の難しさ】や日本食に抵抗感を示す高齢者への【食文化の違いによる食事支援の難しさ】という価値観や風習の違いによって困難が生じていた。また、入所者の母国の看取りの文化や家族関係のあり方など【入所者の母国の文化に関する介護職の知識不足】を介護職は感じていた。 【考察】言葉の壁による意思疎通困難という課題には、医療通訳者や翻訳機の活用を検討する必要性が示唆された。また、介護職は外国人高齢者の母国の食べ物や風習、価値観について情報収集し、異文化理解と文化的背景への配慮が必要であると考える。 発表者：田中和奈、高橋晶、森山小統子
12) 日本看護福祉学会 （示説発表） 「特別養護老人ホームに おける在留外国人高齢者 の介護－第2報 家族へ の対応時の課題－」	共	令和7年7月	第38回日本看護福祉 学会学術集会（於： 人間環境大学大部キャン パス）	【研究目的】第2報では、特別養護老人ホームで生活する在留外国人高齢者の家族への対応時の課題について明らかにすることを目的とする。 【研究方法】介護職を対象に、「在留外国人高齢者の家族への対応時にどのようなことが問題になるか」という質問内容を含む半構成的面接調査を行った。面接内容は同意を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。逐語録から家族への対応時に介護職が対応に困った事柄を表現している部分を抽出し、コード化とカテゴリー化を行った。 【結果】対象者は男性5名、女性1名の計6名で介護職としての経験年数の平均は16.7年（SD=3.9）、特別養護老人ホームでの勤務年数は7.8年（SD=2.0）であった。分析の結果、20コードから14サブカテゴリー、6カテゴリーが生成された。在留外国人高齢者の家族への対応時に、介護職は【言語の壁によって生じる齟齬】【医療や社会保障制度に関する説明の難しさ】という家族の日本語理解の不十分さがもたらす困難が明らかとなった。入所者の嚥下障害が進行する過程では、【嚥下食に対する家族の抵抗感】が強まり、嚥下機能に見合わない食べ物を持参し入所者に食べさせようとするなど、【入所者の安全を脅かす家族の行動】がみられた。介護職は、家族と入所者へのケア方針をすり合わせるなかで、【自国の風習や価値を最優先しようとする家族と折り合いがつかない】という困難が生じていた。また、入所者の在留資格の手続きに関する情報が双方で共有されず、【在留カードの管理不足がもたらす多大な支障】という社会的な困難も生じていた。 【考察】在留外国人高齢者が入所する施設の介護職が家族へ対応する際、言語の壁や価値観の違いがもたらす困難が生じていることが明らかとなった。入所者が終末期となり、身体症状や社会資源に関するより複雑な説明に対し介護職が苦慮している状況、さらに双方で認識が食い違うことで入所者へのケアに支障が生じていることが考えられた。また、風習や価値観の違いによって、安全性やQOLに対する認識が介護職と家族間で一致せず、互いにジレンマを抱えやすい状況となると考えられた。ケア方針について家族との合意が得られない場合、入所者の療養生活に支障が生じる可能性があるため、介護職は入所者とその家族の言葉や文化の違いを理解したうえで、家族と密なコミュニケーションをとり、よりよいケア提供につなげていく必要がある。 発表者：森山小統子、田中和奈、高橋晶

- この書類は、学長（高等専門学校にあっては校長）及び基幹教員（大学院にあっては専任教員）について作成すること。
- 医科大学又は医学若しくは歯学に関する学部若しくは学部の学科の設置の認可を受けようとする場合、附属病院の長についてもこの書類を作成すること。
- 「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。

教 育 研 究 業 績 書		
令和8年3月31日		
氏名 溝口みちる		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
看護学，情報学	オストメイト、スマートストーマ	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
（1）基礎看護学の講義・演習の工夫と技術試験の試み（社会医療法人 機内会 岡波看護専門学校 1年生）	平成26年4月～平成29年1月	「生活を支援する技術Ⅱ」（環境、休息、活動）、「生活を支援する技術Ⅳ」（食事・排泄）を担当した。パワーポイントや板書だけではなく、DVDも活用し授業した。授業したことがすぐに演習できるよう、白衣を着用し、すべての授業は実習室で行った。また、事前学習をもとに、活発な意見を発言できるよう、グループワークを行った。入学後すぐの学生は、自分で書籍を調べるということが難しいため、授業時間内で図書室も利用した。そうすることで、よりグループ内の協調性が増し、演習でも自ら考えて行動できるようになった。また、授業終了後には、学生にアクションシートを記載してもらい、授業の目標と授業の成果を照らし合わせ自己の授業評価を行った。「導尿処置」の基礎看護学技術試験について、これまでチェックリストによる基礎看護学技術試験を行っていたが、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの能力も含めた学習の到達度を評価していくことが重要である。教員と学習者である学生にとって、学習の到達状況を把握するための指標となるばかりではなく、次の学習の方向性を示し、自己学習力を培う指針となるため、ルーブリック評価表を作成した。評価規準を「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技術・表現」「知識・理解」に分け、三段階の評価基準を設定した。ルーブリック評価を活用し技術試験を行った結果、世具体的な評価ができた半面、全教員での統一がいま一つであり、改善していく必要があった。
（2）能動的な授業を考えたジグソー学習の導入（社会医療法人 機内会 岡波看護専門学校 2年生）	平成26年4月～平成29年1月	座学やグループワークのみにとどまらず、学生がいかに効果的・能動的に授業を行うことができるのかを考え、「診療行為を支援する技術Ⅰ」の注射の授業で実施した。「注射」は学生にとって一番興味を示す反面、医療事故にも繋がるものと考えたためである。学生は、「皮下注射」「皮内注射」「筋肉注射」「静脈内注射」のどれか一つを担当し、他のメンバーに自分が教授したことを伝える。まず、事前課題を提示し、授業当日に役割別の専門家（チーム皮下、皮内、筋肉、静脈内それぞれの注射）に参加し、他者に教えることができるまで学び合う。その後は、学生は他のグループで教員役となり実施する。教員はそれぞれの専門家チームのアドバイザー的存在として指導する。ジグソー学習前には、教員による授業と実践を行い、根拠、留意点、ポイントを伝えている。授業評価には、30項目の授業アンケートを作成し、「責任感を感じた」「自分から進んで理解しないとこの授業は難しかった」「友達に伝えようという気持ちを持った」など、の声が多数寄せられた。
（3）統合看護学実習を意識した統合看護技術の実施（社会医療法人 機内会 岡波看護専門学校 3年生）	平成26年4月～平成29年1月	ケーススタディ、シナリオを用いた演習を行った。6名の受け持ち患者を想定し、グループで患者の優先順位を考えた行動計画の立案をさせた。その後、モデル人形を活用し、実際に上京設定したうえで、観察項目や看護技術などの演習を行った。隣接する病院看護師および1年生の学生の協力のもと、統合看護技術試験を行った。時間内に優先順位を考え、ナースコールの対応やリーダー、メンバーの役割等を確認した。また、この授業の中には、統合看護知識確認として、統合看護技術、医療安全の確認試験を行った。学生は実際にはできなかった場面が多く、看護師国家試験の受験終了後から卒業するまでの間、技術練習を自主的に行うようになった。
（4）実習調整者（社会医療法人 機内会 岡波看護専門学校）	平成28年4月～平成29年1月	実習調整者の役割である年間計画をもとに、臨地実習（基礎看護学実習、領域別実習、統合実習）における、実習施設および各担当教員との調整、実習調整会議にて司会進行等を行った。
（5）基礎演習Ⅰラーニングスキルズ（奈良学園大学 保健医療学部看護学科 1年生）	令和2年4月～令和2年8月 令和4年4月～令和6年8月	1年次生が大学の学習に慣れ、4年間の大学生活を有意義におくるための基礎を習得することを目的とし、大学での学習を進めるうえで必要となる基礎的な知識や技能、学ぶ姿勢を身につけることを目標としている。目標達成するためには、大学での学び方を身につける、文献や資料を調べることができる、分析的かつ批判的に文章を読み、意見を聞くことができる、論理的かつ多方面に思考することができるとしている。課題や積極的な授業参加ができるよう、ゼミ形式で行った。

事項	年月日	概 要
(6) 成人看護援助論Ⅰ 急性期・周手術期 (奈良学園大学 保健医療学部看護学科 2年生)	令和3年4月～ 令和4年3月31	急激な健康破綻が対象者および家族に及ぼす様々な影響を理解し、適切な看護援助ができるように学習する。急性期、リハビリ期、回復期にある患者と家族への具体的な看護方法を学ぶとともに問題解決能力を養うための学習を行う。目標は、クリティカル・周術期にある対象の生体反応や治療・回復過程の特徴を踏まえた看護を理解し、治療による身体機能、自己イメージの変化、苦痛の緩和などに対して、支援する看護を理解する。また、倫理的側面を考慮した看護を理解する。 私は、消化・吸収障害をもつ患者の看護を担当した。全身麻酔による影響や手術による侵襲を考え、消化器疾患患者さんの術後合併症を予防するための看護や回復に向けての看護を考えられるように教授した。具体的には、事例を取り上げグループワークを通して学べるようにした。特に、人工肛門造設術を受ける患者さんは、排泄経路の変更による不安が強い。十分な説明や個別性を考え、また、術後回復よりストーマ管理を行うためにも、術前から必要な看護を考えられるようにした。
(7) 成人老年看護援助論Ⅰ 生命維持の破綻から健康回復への支援 (奈良学園大学 保健医療学部看護学科 2年生)	令和6年9月～ 現在	「生命維持の破綻から健康回復への支援」を学ぶ目的は、皆さんがあらゆる発達段階・健康段階・治療の場で生命を脅かす健康問題を持つ人に遭遇したときに、一人ひとり違う人生経験や健康段階に応じて個別的看護を考案できるための基礎的能力を修得することにある。 急性・重症患者が示す人としての反応をしっかりと理解して、回復を促進するための支援、発達段階に伴う看護援助の応用方法、継続看護として地域への移行支援を含めた健康回復への療養過程と保健・医療・福祉チームの連携について理解を深めることを期待する。 私は、手術療法を受ける人・家族の看護、侵襲の大きい検査・治療を受ける人・家族の看護を担当した。術後合併症の発生機序・生体反応とその看護、術後合併症の看護や腹部手術を受ける人の看護では、事例を用いて教授しグループワークを行った。
(8) 成人看護援助論Ⅱ 慢性期・回復期・終末期 (奈良学園大学 保健医療学部看護学科 2年生)	令和2年9月～ 令和4年3月31日	生涯疾患とともに生活することを余儀なくされている対象者とその家族の看護、および終末期にある患者と家族の看護について学習する。慢性期疾患患者の看護においては、終生自己管理を必要としなければならない患者の心理状況を理解するとともに、具体的な看護方法について学ぶ。目標は、慢性的な経過をたどる主な疾患の特徴と、症状や治療が生活に与える影響と慢性的な健康障害をもつ対象とその家族が病気と付き合いながらセルフマネジメントでできるための看護を理解する。 私は膠原病を持つ患者の看護、消化・吸収障害をもつ患者の看護を担当した。ペーパーペイシェントで看護過程を展開するために、まず、罹患した患者さんの経験や思いを理解する必要がある。そのために、患者会等の患者さんの動画を事前課題として掲示した。それを踏まえ、患者さんおよびその家族に対する看護を考え、退院後の生活に必要な指導についてグループワークを行い学びを深めた。
(9) 成人老年看護援助論Ⅱ 障害適応とエンドオブライフへの支援 (奈良学園大学 保健医療学部看護学科 2年生)	令和5年9月～ 現在	生涯疾患とともに生活することを余儀なくされた障害適応期にある人とその家族の生活の再構築を支える看護の方法について学ぶ。また、人生の最終段階にある人とその家族の特徴を理解し、症状・治療にともなう苦痛に対する緩和ケアと尊厳と生活の質(QOL)を支える看護の方法を学ぶ。 慢性疾患の特徴と治療過程を学ぶ。疾病認識と自己管理・自己決定の状況から、その人らしい生活を支える看護を学ぶ。そして、障害適応に役立つ理論・概念(セルフマネジメント 自己効力感 ストレングスモデル等)を活用した看護を学ぶ。ライフサイクルの最終段階を生きる人とその家族および意思決定プロセスの特徴を理解し、その人らしい人生の最終段階の過ごし方を支える看護を学ぶ。また、症状・治療等の苦痛に対する緩和ケアを学ぶ。家族を含む尊厳ある死後のケアについて学ぶ。 私は、難病を持つ人の看護を担当した。慢性病の体験の当事者の語り(青年～成人期における潰瘍性大腸炎の治療とストーマ増設に対する体験)から、「病みの軌跡」の局面を教授し、看護支援についてグループワークを行い学びを深めた。

事項	年月日	概 要
(10) 成人看護援助論演習Ⅰ・Ⅱ (奈良学園大学 保健医療学部看護学科 3年生)	令和3年4月～ 令和4年3月31	成人期の急性期・慢性期・終末期にある対象を看護するために臨床場面で必要となる看護過程や看護技術について、演習を通して学ぶことが目標である。具体的な目標は、1. 適切な一次救命救急の手技が習得できる、2. ICUにおける術後看護の視点が理解でき、適切な看護の視点での観察が分かる、3. 周手術期における患者の看護過程の展開が分かる、4. 簡易血糖測定の意義を理解でき、その技術の習得と患者への指導を考察できる、5. 輸液ポンプ・シリンジポンプの操作方法や管理が理解できる、6. COPDを持つ大腿骨頸部骨折術患者の看護過程の展開が分かる、である。 私が担当する「COPDを持つ大腿骨頸部骨折術患者の看護過程の展開が分かる」は、COPDの基礎疾患を持ちながら大腿骨頸部骨折に対して手術を行い、退院後の生活を見すえた看護を考えられるような事例とした。複雑な事例ではあるが、実際に臨地実習では経験する事例ではあると考え、患者さんやその家族の状況や気持ちを考え、看護過程を展開できるようにした。
(11) 成人老年看護援助論演習Ⅰ・Ⅱ (奈良学園大学 保健医療学部看護学科 3年生)	令和3年4月～ 現在	援助論演習Ⅰでは、外科的侵襲に伴う急激な身体的変化や手術に伴う合併症のリスクを踏まえ、患者が示す反応を理解し安全・安心の援助を実施、評価(修正)する視点を身に付けることを期待する。また周術期が短縮される現状において、周術期経過の全体像を知り、予測性をもって看護を実践するための視点を身に付けることを期待する。 直腸がんで手術を受ける患者の事例をととして、術前看護・術中看護・術後看護の経過をふまえ、モデル人形を活用し術後の状態を想定しながら演習を計画した。 援助論演習Ⅱでは、生涯疾患とともに生活することを余儀なくされた障害適応期にある人とその家族の生活の再構築を支える看護の方法について学ぶ。また、人生の最終段階にある人とその家族の特徴を理解し、症状・治療にともなう苦痛に対する緩和ケアと尊厳と生活の質(QOL)を支える看護の方法を学ぶ。 慢性疾患の特徴と治療過程、疾病認識と自己管理・自己決定の状況から、その人らしい生活を支える看護を学ぶ。障害適応に役立つ理論・概念(セルフマネジメント・自己効力感・ストレングスモデル等)を活用した看護を学ぶ。 肺がんで化学療法を受ける患者の看護を事例展開した。情報収集・整理からアセスメント、病態関連図、全体像を統合し、看護診断を用いて看護問題を抽出までを担当した。
(12) 成人看護学実習Ⅰ・Ⅱにおける臨地での実践 (奈良学園大学 保健医療学部看護学科 3年生)	平成30年9月～ 令和6年3月31日	成人看護学の担当となり、成人看護学実習Ⅰ(急性期)および成人看護学実習Ⅱ(慢性期)の臨地実習指導を担当している。成人看護学実習Ⅰ(急性期)では、学生は周手術期も含めた、手術を受けられる患者さんを受け持ち、術前・術中・術後の看護展開を行う。全身麻酔と術式による侵襲が身体へどう影響をおよぼすのかを考え、術後の観察や状況に合わせた看護ケア、退院に向けて必要なこと等を指導した。また、成人看護学実習Ⅱ(慢性期)の実習では、障害受容の過程、行動変容、自己効力感などをキーワードに、特に患者さんの入院前の生活に目を向け、看護介入ができるようにした。
(13) 成人老年看護学実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳにおける臨地での実践 (奈良学園大学 保健医療学部看護学科 3年生)	令和6年9月～ 現在	Ⅰ：周手術期にある人および家族の特徴を包括的に捉え、対象の変化に即した看護実践能力を養う。生命維持の破綻、生体への手術侵襲による生体反応のしくみを理解し、術後合併症の発症リスクを予測して、健康回復に向けた看護について実践を通して学ぶ。 Ⅱ：回復過程にある人およびその家族を包括的に捉え、個人の特性に応じて回復への意欲を支え、より主体的な回復過程を遂げるための看護実践能力を養う。生活機能障害やリハビリテーションを必要とする人のQOLを高める看護について実践を通して学ぶ。 Ⅲ：生涯疾患や障害とともに生活することを余儀なくされた要介護状態にある人とその家族の療養と生活を支えるための看護実践能力を養う。さまざまな慢性疾患や急性増悪の予防的対応および人的・社会的資源を活用する看護について実践を通して学ぶ。 Ⅳ：人生の終末期にある人およびその家族への看護を学ぶ。尊厳をもって個の特性に応じた人生を送ることができるための終末期を支える看護を実践できる基礎的能力を養う。 私は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの実習を担当する。成人期・老年期にある人の急性期・回復期・慢性期・終末期(エンドオブライフケア)の看護過程を展開し、看護のあり方を学ばせる。
(14) 統合看護学実習(成人看護学)における臨地での実践 (奈良学園大学 保健医療学部看護学科 4年生)	平成30年5月～ 現在	成人領域の統合看護学実習の目的は、専門分野の実習をふまえ、多様な看護の場において業務に即しながら、保健医療チームの一員として多職種と連携し、チーム医療を実践するための看護実践能力を高めることである。保健医療福祉チームにおける協働と連携、メンバーシップやリーダーシップの在り方を考えたり、看護をマネジメントできる能力を身につけるように指導した。また、看護の実際と適正な評価、実施した看護から自身の看護観を明確にできるようにした。

事項	年月日	概 要
(15) 卒業研究Ⅱ	令和2年9月～現在	学生が研究テーマを決め、深く研究を進めて論文を作成することが目標である。学生2名を担当し、学生が興味のある分野でテーマを決定し、文献検討を行っている。卒業研究Ⅰをもう一度振り返りながら論文と抄録の作成までの指導を行っている。
2 作成した教科書、教材		
(1) 学生の目標達成に向けたポートフォリオの作成	平成26年4月～平成29年1月	学生が自らテーマや目標を決め、学び続ける学習法を取り入れることを考え、ポートフォリオを作成した。入学時にポートフォリオの説明を行い、ビジョンとゴールを記載させた。中間の面接時に、ゴールに向かうためにはどうしていくのかを指導した。また、2～3月には、各学年による発表の機会を設け、学生全員がプレゼンをした。学生自身がどのように成長してきたのかわかり、また、学生は自信をもって成長できたと主張できるようになった。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		特記事項なし
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
(1) 三重県立名張桔梗ヶ丘高等学校 出前講座	平成26年9月～平成28年12月	「看護学探求」の授業があり、看護に興味・関心を持っている学生に対し、授業を行った。「形態機能学に関連した基礎看護技術」を担当し、授業の後、実際に血圧測定やビニール手袋の装着・脱着の方法、体位変換等を行った。学生からは、「看護師を目指そうと決めた」「もっと勉強しないといけないと思った」などの声があった。
5 その他		特記事項なし
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許		
(1) 准看護師免許	平成10年3月	第17056号
(2) 看護師免許	平成12年3月	第1075353号
(3) 厚生労働省認定看護専任教員養成講習会終了	平成24年1月	厚生労働省認定三重県専任教員養成講習会
(4) 修士（看護学）	令和2年3月	奈良学園大学大学院 修士課程 看護学専攻
2 特許等		特記事項なし
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
(1) 日本看護技術学会第18回学術集会 企画委員	平成30年4月～令和元年3月	「過去・現在から未来へ発信する看護イノベーション」をテーマに、令和元年9月7日、8日の学術集会の開催に向けて、役割を遂行した。
(2) 日本看護研究学会第45回学術集会 実行委員	令和元年8月	「研究成果をためる つかう ひろげる ―社会に評価される看護力―」をテーマに、令和元年8月20日、21日の学術集会の役割を遂行した。
(3) 日本看護研究学会第34回近畿・北陸地方会学術集会 事務局（庶務）および企画実行委員	令和2年2月～令和3年3月	「看護の原点帰帰 情緒的価値観へのパラダイムシフト」をテーマに奈良学園大学登美ヶ丘キャンパスで実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響にて、プログラムと演題を収録した抄録集をもって、発表・大会参加のかたちとなった。

事項	年月日	概 要
(4) 第27回日本看護診断学会学術集会大会 企画委員	令和2年4月～令和3年7月	「看護過程のプロセスとしての看護診断」をテーマに、これまでの看護診断を振り返り、現状から未来へどのように看護診断を発展させればよいかについて考える機会とする。
(5) 第27回日本看護診断学会学術集会大会 特別企画交流集会Ⅲ	令和2年4月～令和3年7月	「看護診断に基づく口腔ケアに関する現状と今後の展望」のテーマで、看護基礎教育における学生、臨床における看護師の口腔ケアアセスメント力、口腔ケア実践能力の現状と課題について発表し、口腔ケアの今後の展望について、看護基礎教育の立場と臨床の立場から意見交換を行った。
(6) 日本オストミー協会 奈良県支部 若いオストメイトオンライン交流会（オストメイト協会・奈良県支部）講師	令和4年3月	オストメイトの参加者に向けて、自身の研究したオストメイトの余暇活動に関する内容を伝えた。
(7) 日本看護研究学会第50回学術集会 実行委員	令和6年8月	「発祥の地から未来を拓く看護研究」をテーマに、令和6年8月24火、25火の学術集会の役割を遂行した。
4 その他		
(1) 入試対策委員（社会医療法人 畿内会 岡波看護専門学校）	平成27年4月～平成29年1月	入学試験に関する筆記試験監督および面接試験監督を行った。判定会議に向けて、入試状況をまとめた。
(2) 広報活動（社会医療法人 畿内会 岡波看護専門学校）	平成26年4月～平成29年1月	三重県および奈良県内の高等学校を訪問し、学生募集の案内を行った。また、学校ホームページのニュース更新や広報業者との打ち合わせに参加するなど、広報活動を行った。
(3) 学校における防災・災害に関する見直しを検討	平成26年4月～平成29年1月	「災害発生時に適切な判断・行動がとれる教員の養成－防災マニュアルの再構築－」として、アクションカードを作成した。実際に、防災訓練に活用し、「責任者（指示命令）」「第一発見者（初期消火）」「応援者（避難・誘導）」を行った。結果、焦らずスムーズに学生を誘導でき、自らの役割も担うことができた。また、隣接する病院内での業務改善発表会で発表した。

教 育 研 究 業 績 書

2026年 6月 15日

氏名 瀬谷 絵莉佳 印

研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
助産学		助産師教育・産婦・実習指導	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項			
事項		年月日	概 要
1 教育方法の実践例 【学部】 〈助産学〉			
1) 助産診断技術学Ⅳ（神奈川県立保健福祉大学）		2019年4月～ 2023年9月	看護学科の4年次に助産師課程の学生2～4名（延べ17名）が履修している助産診断技術学Ⅳにおいて、全15回全ての授業と成績評価を担当した。
a：分娩介助技術演習			助産診断技術学Ⅳの演習の1つである分娩介助技術演習では、臨床での実習を具体的に想像できるように、受け持ち対象者への声掛けや指導者への報告・連絡・相談を意識して展開した。また、新型コロナウイルス感染症流行後に学内演習が再開してからは、演習室の配置を変更し、パーテーションを設置するなど感染予防対策を徹底した。N95マスク等の感染防御具の装着の他、臨床の実際の場面を想定した場面設定や音響などを用いて、学生の技術修得や実習環境への適応を促した。適宜映像を取り入れ、産婦を具体的に想像できるように支援した。また、演習を録画したものを学生と共に確認し、学生が第三者的な立場から振り返ることが出来るような環境を整えた。 新型コロナウイルス感染症の影響により、通常の臨地実習を行えていない学生に対しては、基本的な看護技術に関しても、学生が経験できる機会を設け、学生の自己学習の時間にも適宜参加した。なお、入構規制時はネット回線を用いて遠隔でデモンストレーションを実施したり、分べん介助に関する動画12本の貸し出しをする等、学生が紙面や口頭説明以外から技術を学べる機会を設けた。 毎年、技術チェックリストや胎児心拍数陣痛図の波形、臍帯の切断を要する臍帯巻絡の解除の模擬体験、人工破膜の模擬体験などを取り入れ、学生が臨場感を感じながら演習ができるように内容を更新した。
b：母親学級の企画			助産診断技術学Ⅳの演習の1つである母親学級の企画では、学生が主体的に参加者募集のためのフライヤー、指導案、逐語録、参加申し込み用のフォームの作成に取り組むことが出来るように支援した。学生の要請に応じて、授業時間の内外問わずに適宜指導した。履修学生数や新型コロナウイルス感染症による母親学級の見学の中止といった状況に合わせて、毎年授業形態や学生への支援方法を変更した。例えば、母親学級を具体的に想像できるような学生向けの講義の実施や学生の動機づけとして、母親学級の動向を調べる事前学習を課して「妊婦にお勧めしたい母親学級動画」についてのプレゼンテーションの実施を求めること等である。 新型コロナウイルス感染症の影響で対面での授業が出来なかった際には、学生にzoomのリモート制御方法などを伝授し、オンライン上でもグループで作業が進められるようにした。

c : 助産過程		助産診断技術学Ⅳの演習の1つである助産過程では、グループディスカッションのファシリテーションと学生が作成した課題への助言を中心に行った。なお、看護過程の展開経験が乏しく、助産過程の展開方法が分からない状況であった場合は、基本的な知識を伝える時間や各項目毎にアセスメントを一緒にする時間を設けた。新型コロナウイルス感染症の影響により、全面的に休講となった際には、課題をグループで取り組むことが難しい状況であった。そのため、学生が個別に取り組んだ課題に対してフィードバックをし、全員がその内容を閲覧できるようにし、学生間で学びを共有出来るようにした。
2) 助産管理論Ⅱ (神奈川県立保健福祉大学)	2019年10月～ 2024年3月	看護学科の4年次に助産師課程の学生2～4名（延べ16名）が履修している助産管理Ⅱにおいて、2回の授業を担当した。学生が母親学級を安全に運営できるよう、参加者の申し込みフォームの管理方法について指導し、学生が参加者の募集と管理が経験できるように支援した。 また、学生に参加者の関心を促す、教材の「見せ方」を伝授し、学生が母親学級の内容を洗練させられるよう工夫した。
3) 助産学実習 (神奈川県立保健福祉大学) a: 助産診断技術実習	2019年4月～ 2024年3月	看護学科の4年次に助産師課程の学生が履修している助産学実習において、助産診断技術実習では、延べ14名の学生を担当した。これまでに、3病院での実習指導を担当し、学生へのオリエンテーション、実習施設や非常勤教員との調整、学生の思考の整理、記録の指導、各種カンファレンスへの参加、学生の体調面や精神面のフォロー、成績評価を担当した。また、家庭訪問など継続事例への個別支援の他、臨地実習指導者の求めに応じて、助産技術の指導や学生が受け持つ母子への緊急対応にもあたった。 夜間や休日に学生が実習をする際には学生や臨床の状況に応じて同行するなど、24時間体制で学生の支援をした。なお、新型コロナウイルス感染症の影響で、延長実習が実施出来なかった際には、分べん介助が10回に満たない学生の代替実習を担当した。その際は、企画・運営・評価を担当した。学生が臨場感をもって分娩介助を実施できるよう、シナリオを改変し、胎児心拍数陣痛図の所見を状況に合わせて作成し、学生が胎児心拍数陣痛図の判読と産婦の主訴や行動から助産過程を展開できるようにした。
b : 健康教育実習		健康教育実習では助産学実習履修者全員を担当した。母親学級の開催に向けて、学生の指導および学生の練習場所の確保等の事務的な業務や当日の運営などを全般的に担当した。11月の後半から当日にかけては、頻回に学生からの相談に応じ、必要に応じて対面やオンラインでの指導をしてきた。なお、実際の妊婦を対象に母親学級を開催した際には、窓口教員として妊婦対応や横須賀市との調整役を担った。新型コロナウイルス感染症の影響で妊婦を対象とした母親学級が開催できなかった際には、教職員に参加を呼びかけ、学生が臨場感を持って母親学級を運営できるように支援した。
c : ハイリスク母子実習		ハイリスク母子実習では助産学実習履修者全員を担当し、施設との調整やオリエンテーション、実習引率指導など、全行程を担当している。ハイリスクな対象に関わる実習であるため、学生が机上の学習と実際の経験を繋げることが出来るよう、適時的に状況説明をするほか、学生の精神面にも配慮した。また、実習病棟が新型コロナウイルス感染症感染者対応をしている際には、学生の感染防止に注意を払い、心身ともに配慮しながら指導した。

d : 助産管理実習		助産管理実習では、毎年1～2名の学生（延べ9名）を担当し、学生のカンファレンスに参加したり、泊まり込みで実習をする学生からの相談に応じた。また、全学生に携帯させる衛生用品の準備や使用方法の説明をし、学生が安全に実習が出来るよう、支援した。
〈母性看護学〉 4) リプロダクティブ・ヘルスケアⅡ（神奈川県立保健福祉大学）		看護学科2年生，2024年度のカリキュラム改正後は3年生90名程が履修するリプロダクティブ・ヘルスケアⅡを担当した。
a : 問題に基づく学習（PBL:Problem Based Learning）	2019年11月～ 2024年1月	リプロダクティブ・ヘルスケアⅡの演習の1つである，問題に基づく学習（PBL:Problem Based Learning）では，毎年看護学科2年生7名程度からなる2～3グループの学生の3日間のチュートリアルと成績評価を担当した。2020年度以降は，3グループ同時開催であったため，オンラインを併用し，3グループの状況を同時に確認し，適時的に質問などに応じられるようにした。また，新型コロナウィルス感染症関連で欠席の学生に対しては，グループワークについていけるよう，調整方法などを具体的に提示した。全グループを同時に確認することで，公正な成績評価に繋がっており，適時的に学生からの質問に応じることが出来た。
b : 技術演習	2019年11月～ 2025年9月	看護学科2年生，2024年度のカリキュラム改正後は3年生90名程の履修生全員が新生児の沐浴，妊婦健康診査，褥婦の健康診査の看護技術を学ぶための指導をした。2021年度には，実習に即したシャワーを用いたあわあわ沐浴を導入できるように大学に掛け合い，シャワーを沐浴ブースに設置した。新型コロナウィルス感染症の影響を受け，従来通りの演習が実施出来ない際には，演習の企画から携わった。学生の体調管理，衛生物品の使用や換気，学生同士がなるべく行き来をしないような順路確保等に特に注意を払った。なお，欠席者への補講や円滑な学生指導のため，非常勤教員へのオリエンテーション，実習室の準備や片づけを担当し，他領域との調整役割も担った。
c : 妊娠期および産褥期の模擬事例を使用した健康教育演習	2024年4月～ 2025年9月	カリキュラム改正に伴い，妊娠期と産褥期のシミュレーション教育の導入に企画から携わった。看護学科の3年生が5名程度からなる18グループに分かれて，模擬事例が必要とする保健指導を考え，ロールプレイで立案した指導を発表する演習である。約180分間の連続した2回の授業の中で学生が具体的に保健指導をイメージし，計画・実施・評価できるように，装着型の物品や実際に臨床の場で使用している物品を取り入れた。学生発表会に参加した教員からは，以前のPBLに比べて学生の学習効果が高いとの評価を得た。
d : 分娩期（正常編）講義	2025年4月～ 2025年9月	看護学科の3年生90名程が受講する分娩期の正常編に関する講義と試験問題の作成を担当した。分娩は学生にとって身近な事象ではないため，視聴覚教材や模型なども用いて，学生がイメージできるような工夫をした。また，科目全体のモデル事例に当てはめ，検討する時間をつくり，学生の知識が定着する工夫をした。

5) リプロダクティブ・ヘルスケア実習（神奈川県立保健福祉大学）	2019年9月～ 2026年3月	看護学科3年生90名程が履修するリプロダクティブ・ヘルスケア実習では、毎年、全6クール50名程の学生を担当している。なお、新型コロナウイルス感染症の影響で臨地実習ができなかった2020年度は全学生の学内実習指導を担当した。
a：臨地実習		臨地実習では、総合周産期母子医療センター、地域周産期母子医療センター等4施設で実習をした50名程の学生の実習指導と成績評価を担当した。その他に、実習施設との調整や学生へのオリエンテーションや資料作成、学生の思考の整理や記録の指導、学生の体調や精神面への支援、保護者対応等を担った。なお、非常勤教員に対しては、オリエンテーション等の支援をし、学生指導に支障が生じないように配慮した。なお、新規の実習施設を単独で担当し、次年度以降の受け入れ期間の増加につなげることができた。
b：新型コロナウイルス感染症対応学内実習	2020年9月～ 2021年3月	新型コロナウイルス感染症の影響で90名程の学生の臨地実習2日分を学内実習に振り替えることになった。そのため、病棟実習で修得すべきアセスメント能力と看護実践能力を養う実習を企画運営した。実習に先立ち、周産期対応の模擬電子カルテを作成した（ただし、システム面の作成は依頼）。病棟実習で受け持つ模擬事例を作成し、模擬電子カルテ等の病棟記録からの情報収集、情報に基づくアセスメントおよびケアプランの模擬指導者への報告、実践、ケア評価の一連の学習過程を体験し、産後の母子の基本的な観察と授乳や退院支援を含むケアについて修得できるように支援した。 実習室を、実際の臨地実習に近づけるため、電子カルテのある情報収集の区画、母子の居室の区画に区切り、学生がソーシャルディスタンスを保って安全に実習ができる環境と時間管理を行った。
c：新型コロナウイルス感染症対応オンライン実習	2020年9月～ 2021年3月	新型コロナウイルス感染症の影響により、臨地実習を代替するためのオンライン実習を導入した。90名程の学生全員が視聴する動画編集やオンラインで現場の助産師と交流する機会の運営をした。学生は自宅にいながら、臨地実習の場を知ることや現場で働いている助産師から話を聞いたり、質問をする機会が得られた。
〈その他〉		
6) 統合実習（看護）（神奈川県立保健福祉大学）	2019年4月～ 2025年9月	看護学科4年生90名程が履修する統合実習では、毎年3～5名、延べ27名の学生を担当した。実習計画書の作成に関する学生へのオリエンテーション、ゼミ運営、実習施設との打ち合わせ・報告会の開催・調整、臨地実習指導、成績評価を担当した。なお、ゼミや実習前オリエンテーションは、新型コロナウイルス感染症の状況に応じて、オンラインと対面を併用した。実際の臨地での実習では、学生に看護技術を指導したり、学生に受け持ち対象者や指導助産師とのコミュニケーションの取り方や実習の場における学生の立ち位置について助言するなど、学生が安全に実習が出来るように支援した。なお、「気になる学生」として、臨床から相談を受けた際には、今後の実習について、臨床と調整したり、学生との面談の機会を設ける等個別対応をした。 新型コロナウイルス感染症の影響で臨地実習が実施出来なかった際には、オンライン形式で、学生が褥婦や助産師に対してインタビューをする機会を設け、可能な限り学生が実体験が出来るよう支援した。その際、学生が臨地実習ができる想定で立案した実習計画に沿った対象を選定し、学生が実習計画に基づいた学習が出来、実習目標が達成できるようにした。

7) 卒業研究（神奈川県立保健福祉大学）	2019年4月～ 2026年3月	看護学科4年生90名程が履修する卒業研究では、毎年3～4名、延べ25名の学生を担当し、これまでに35名の成績評価を担当した。学生へのオリエンテーション、ゼミ運営、研究計画書作成、研究計画発表会に向けた予行練習などを担当した。その中で、文献検索や文献のクリティーク、文献の引用方法、ディスカッション方法、ゼミの運営方法、研究計画書の書き方、プレゼンテーションの方法、研究計画発表会の運営方法等を指導した。前期は2週間を目途にゼミを開催し、後期はメールまたは対面で個別指導を実施した。進捗が乏しい学生に対しては、適宜メールで状況を確認し、対面にて個別指導をした。研究計画発表会の運営においては、必要に応じて対面とオンラインを併用した。
8) 問題に基づく学習（PBL：problem Based Learning）（神奈川県立保健福祉大学）	2019年5月 2022年5月	看護学科2年生90名程が履修する必修科目：問題に基づく学習（PBL：problem Based Learning）のチューターとして8名のグループを担当した。チューターズミーティングへの参加や学生評価も実施した。なお、担当したグループは各年、全体順位1、2位の評価であった。
9) 保健医療福祉論Ⅰ（神奈川県立保健福祉大学）	2022年7月	保健福祉学部1年生全200名程が履修する必修科目：保健医療福祉論Ⅰでは、2施設16名の学生を担当した。オリエンテーションや当日の学生や施設との調整、アフターセッションを担当した。新型コロナウイルス感染症の影響で臨地実習を経験できなかった学生がいた。そのため、学生間で現場の状況を共有できるように、臨地実習を経験した学生が経験したことを具体的に説明できるように支援した。本科目は4学科の学生が履修している。そのため、アフターセッションでは、学生が他領域の専門用語を理解できるよう、配慮した。
【博士前期課程】 〈助産学〉		
10) 助産実践演習1（神奈川県立保健福祉大学大学院助産実践コース）	2024年4月～ 2026年3月	保健福祉学研究科助産実践コース1年生2～4名（延べ6名）が履修している助産実践演習1において、21回（全30回）の授業と成績評価、9回の授業補助を担当した。
a：分娩介助技術演習		助産実践演習1の演習の1つである分娩介助技術演習では、大学院の科目として実施するため、学生によるプレゼンテーション等を導入した。実際の演習では、臨床現場に準じた感染予防対策と安全管理を取り入れた上で実施した。演習では臨床での実習をイメージできるように、受け持ち対象者への声掛けや指導者への報告・連絡・相談を意識して展開した。臨床の実際の場面を想定した場面設定や音響などを用いて、学生の技術修得や実習環境への適応を促す工夫をした。 学生の内5名は本学出身ではなく、本学出身者においても、卒後数年が経過していた。そのため、レディネスの確認をした上で、基本的な看護技術に関しても、学生が経験できる機会を設け、参考書等の資料の紹介や貸し出しをした。また、学生の自己学習にも可能な範囲で参加した。 なお、学部の助産師課程の学生と比較し、カリキュラムが過密であるため、自主的に練習する時間が半分以下であり、技術習得に時間を要した。そのため、学生の進捗に合わせて授業内容を変更し、確実に技術習得ができるよう配慮した。 1名の学生においては、技術試験に合格できなかった。そのため、補習と再試験の機会を設けた。

b: 助産過程演習		助産実践演習1の演習の1つである助産過程では、オリエンテーションとグループディスカッションのファシリテーション、学生が作成した課題へのコメント評価を中心に行った。なお、看護過程の展開経験が乏しく、助産過程の展開方法がイメージできない状況であったため、基本的な知識を確認しながら展開した。また、1項目ずつアセスメントを共に考える時間を設け、学生の理解度を確認しながら実施した。1つの学年では、知識の統合に時間を必要とし、学生間で教科書などの参考書からアセスメントしたり、全体像、助産診断、助産計画を立案することが困難であった。そのため、授業内の自己演習の時間をなくし、分娩の3要素などの専門用語の確認作業をともに実施する等の配慮をした。
c: 胎児心拍数陣痛図判読演習		助産実践演習1の演習の1つである胎児心拍数陣痛図判読演習では、学生が胎児心拍数陣痛図の判読ができることを目標とした演習を担当した。学生の理解度に応じて基本事例と臨床で判断に迷う事例を用いて、根拠を考えながら判読できるように工夫をした。なお、初年度は産科医による胎児心拍数陣痛図判読講座の前に演習が設定されていた。次年度以降は学生の知識の積み上げを意識し、科目責任者に相談し、授業構成を変更した。
d: 腹部超音波エコー/会陰縫合演習		助産実践演習1の演習の1つである産科医による腹部超音波エコーと会陰縫合演習の補助をした。学生の状況に応じてハンズオンで技術支援をした。学生にとっては、見学や実施機会が少ない技術であるため、デモンストレーション内容を録画し、オンデマンドでいつでも学生が確認できるように工夫した。
11) 助産診断技術特論Ⅱ（神奈川県立保健福祉大学大学院助産実践コース）	2024年4月～ 2025年9月	保健福祉学研究科助産実践コース1年生2～4名（延べ6名）が履修している助産診断技術特論Ⅱにおいて、10回（全15回）の授業補助を担当した。その中で、産褥・新生児期の助産過程演習と「褥婦と新生児の観察とケア」、「沐浴・入院中の保健指導」、「2週間健診・家庭訪問」についての指導案作成および技術演習を担当した。
12) 助産実践実習（神奈川県立保健福祉大学大学院助産実践コース）	2024年4月～ 2026年3月	保健福祉学研究科助産実践コース1年生が履修している助産学実習において、助産診断技術実習では、延べ5名の学生を担当した。初年度は日替わりで2施設を担当していたため、学生の学習の進度を意識した。学生へのオリエンテーション、実習施設や非常勤教員との調整、妊産婦との関係性の構築方法への指導、学生の思考の整理、記録の指導、各種カンファレンスへの参加、学生の体調面やメンタル面のフォローを主に担当した。なお、継続事例の家庭訪問に関しては、全ケース担当した。大学院助産実践コースに移行後、産後3～4か月頃の母子への助産ケアを実施する実習が導入された。そのため、4か月頃の母子の集いの会の企画運営に向けて、全面的に学生の指導を担った。また、臨地実習指導者の求めに応じて、助産技術の直接的な指導と産褥婦のケアにもあたった。特に指導者との連絡相談報告をはじめ、基本的な対応に課題がある学生に対しては、時間をかけて、報告やガーゼカウント、分娩室の片づけができるように共に方策を考えるなどの対応をした。なお、4名の学生の成績評価を担当した。 現在、分娩件数が減少しているため、教員同席を条件に、実習時間の延長や早期からオンコール体制を取って頂けるよう、交渉した。そのため、休日や夜間や早朝実習時にも同席するよう配慮し、24時間体制で学生のサポートをした。
a: 助産診断技術実習		

b : ハイリスク母子実習 c : 助産管理実習		ハイリスク母子実習では、延べ6名の学生全員を担当した。施設との調整やオリエンテーション、実習指導などを担当した。その中で、シャドーイングの方法など基本的なことから、学生がシャドーイングをしているスタッフが何を実施しているのかを把握できるよう、適宜説明をするなどの支援をした。また、COVID-19感染者対応をしている病棟であったため、学生の感染防止に注意を払い、メンタル面のフォローをした。
13) 助産実践演習Ⅱ（神奈川県立保健福祉大学大学院助産実践コース） a : 母子を対象としたイベント企画演習 b : 包括的性教育の動画作成演習 c : 母親学級の企画・運営演習	2025年4月～ 2025年9月	保健福祉学研究科助産実践コース2年生4名が履修している助産実践演習Ⅱにおいて、全30回、うち8回は主担当として授業を担当した。 助産実践演習Ⅱの演習の1つとして、横須賀市との共催の「すかりぶ親子祭り」に「ふれあい親子の手形アート・育児の知恵袋ボード」のワークショップを学生が出店できるよう、企画運営の支援をしている。 助産実践演習Ⅱの演習の1つとして、学生が助産師として包括的性教育、プレコンセプションケアを理解し、それを実践的に教育プログラムへ落とし込む力を養うことを目的とした教育動画の作成を支援した。なお、学生の成果をオープンキャンパスの来場者に確認していただけるよう、フライヤーを作成した。 助産実践演習Ⅱの演習の1つとして、学生が母親学級の企画・運営ができるよう支援した。学生全員が母親学級を見学した機会がなかったため、母親学級のイメージづくりから支援をした。当初、学生2名で母親学級を運営する企画となっていたため、学生全員が主体的に参加者募集のためのフライヤー、指導案、逐語録、参加申し込み用のフォームの作成に取り組むことが出来るように尽力した。また、学生が受講者目線で母親学級の内容を構成できるよう、ファシリテートした。学生の要請に応じて、授業時間の内外問わずに適宜指導するために、Teamsを活用した。
14) 助産診断技術特論Ⅰ	2024年4月	保健福祉学研究科助産実践コース1年生4名が履修した助産診断技術特論Ⅰの14回の授業において、学生に課す課題の模範解答を作成した。
2 作成した教科書、教材 1) 産婦に対する声掛けと留意点の確認シート	2019年4月～ 2026年3月	分娩介助技術演習の教材として、出産時期の内、分娩室入室から分娩後の帰室までの各時期において、産婦に対してどのような声掛けをすれば良いのか、学生が考えることが出来るように作成した。実際に演習を通して、声掛けの幅や種類を増やし、実際に実習の場面で学生が産婦に関わる際のコミュニケーションを円滑にすることに役立っている。具体的な声掛け方法だけでなく、留意点を考える欄を設けたことで、学生が声掛けの根拠や実際にケアをする際の留意点を意識することに繋がっている。毎年、内容の見直しをしている。

2) 分べん介助技術チェックシート	2019年4月～ 2026年3月	分娩介助技術演習用に分べん介助チェックシートを改良し、学生の自己学習と公平な評価のために活用している。手順等の変更に応じて適宜改変している。
3) 分娩第1期～分娩室入室までの時期のシミュレーション事例	2019年4月～ 2026年3月	分娩介助技術演習の教材として、学生が分べん介助演習をする際に実際の産婦を具体的に想像しながら実施出来るように事例を作成した。実際に実習の場で遭遇する可能性が高い状況を意識した内容である。学生の实践能力獲得の進捗に応じて、基本的な事例から応用的な事例を使い分けることが出来るようにし、実習時に遭遇する事例を意識して、適宜更新している。
4) 授業内容の学生配布資料	2019年4月～現在に至る	担当する全ての科目において、学生が授業中にメモをすることや復習をすることを目的に授業資料を作成している。資料の内容は、分娩期や分べん介助、助産師の役割、分べん第1期から4期までの助産技術に関する内容である。作成時には学生が根拠資料にたどり着くことができるように、参考文献を提示している。 現在はレジメ形式からスライド形式に形態を変更するなど改良を続けている。年々、出生数の低下や新型コロナウイルス感染症の影響等により、学生の実習機会の減少といった背景がある。そのため、実際に分べんを見学したことがない学生が増えている。このような点を配慮し、イラストから写真に変更するなど、学生の状況に応じて資料の内容を変化させている。
5) 周産期仕様の模擬電子カルテ（システム面を除く）	2020年3月～ 2023年3月	母性看護および助産師教育用電子カルテの構成を考えた。システム担当教員と約2か月にわたって、仕様を検討し、実際に運用しながら内容を改変していった。内容は、プレグノグラム、パルトグラム、助産録、産褥経過記録、新生児経過記録、産後・1ヶ月健診時記録から構成される。対象者情報を更新することで、学生は受け持ち対象の経時的な変化についての情報を収集することができる。また、学生が限られた時間の中で優先順位をつけて情報収集をし、対象者のアセスメントと計画立案をする経験を積むことが可能である。
6) 分べん介助技術の手順動画	2020年4月～ 2026年3月	分娩介助技術演習の中で学生に指導している一連の分べん介助技術を解説しながら実演した動画を作成した。分べん介助の項目ごとに確認することや一連の流れを確認することが出来るため、学生の予習や復習に役立つ。大学で使用する物品や手順の変更に合わせて改変している。新型コロナウイルス感染症の影響で入構規制があり助産学生が分娩介助実習前に実際に演習をできる期間は1週間に満たなかった。しかし、繰り返しの動画視聴により、学生は実習に臨める程度の技術修得ができた。
7) 学生の省察を支援するための気づきシート	2021年4月～ 2026年3月	分娩介助技術演習の教材として、学生が他の学生が実施している内容の見学を通して、お互いの学びに繋げることが出来るようにシートを作成した。内容は、真似したい内容、自分であれば別の方法を選択する内容、ケア実施の根拠について考えることができる内容である。このシートを元に学生がお互いにフィードバックすることで、学生同士で学びを深めることに繋がっている。シートの内容は適宜更新している。

8) 2重巻絡解除用臍帯切断教材	2022年4月～ 2026年3月	分娩介助技術演習の中で2重の臍帯巻絡の解除方法を実演するには、既製品では臍帯の長さが足りなかった。そのため、実際に臍帯を切断することも想定した臍帯を作成した。繰り返し使用できるように、改良を重ねている。
9) 臍帯巻絡の解除チェックシート	2022年4月～ 2026年3月	分娩介助技術演習の教材として臍帯巻絡の代表的な3つの解除方法についてチェックシート形式での手順書を作成した。現在はポケットサイズに改良し、学生が演習時等に身につけることができるようにした。毎年、内容の見直しをしている。
10) 演習用胎児心拍数陣痛図判読モニター	2024年4月～ 2026年3月	胎児心拍数陣痛図判読演習の教材として学生が胎児心拍数陣痛図の判読をする力を養うことができるように、胎児心拍数陣痛図の記録紙に胎児心拍や子宮収縮の状態を記載し、参考書では読みづらい内容の判読演習ができるよう工夫をしている。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
1) 助産師教育ファーストステージ研修修了	2022年6月	公益社団法人全国助産師教育協議会において、助産師教育ファーストステージ研修（8単位）を修了していることを認証された。この研修は、助産師教育に携わる教員や臨床指導者が助産実践力を基盤に助産観と教育観に裏付けられた教育力を養い、助産師教育全体の質の向上を図ることを目的としている。 教育実習の一環として、茨城県立医療大学助産学専攻科の助産診断・技術学Ⅲの授業を担当した。5日間に渡って授業に参加し、「分娩介助の原理と基本」「分娩期の診断・ケア技術」「出生直後の新生児のケア」「産褥期の保健指導」に関する学生への技術指導を担当した。また、主担当として、「臍帯巻絡の解除」に関する授業を企画・運営した。
2) 助産師教育共用試験OSCE評価者養成研修修了	2024年2月	公益社団法人全国助産師教育協議会が主催する助産師教育共用試験OSCE評価者養成研修（240分）を受講したことが証明され、全国助産師教育協議会のOSCE（Objective Structured Clinical Examination）評価者として、登録されている。全国助産師教育協議会では、助産師教育共用試験の全国的な実装を推進しており、この研修は、評価者としてのスキルを修得することを目的としている。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 妊婦褥婦に向けた沐浴・授乳指導	2021年12月～ 2022年5月	新型コロナウイルス感染症の影響により、地域の集団指導が制限された。知人を通して依頼があった妊婦や褥婦23組に対して沐浴指導と授乳指導を適宜実施した。
5 その他		
1) チューター活動（神奈川県立保健福祉大学）	2019年4月～ 2023年3月	保健福祉学部の4学科の学生のチューターとして4年間で40名ほどの学生支援をしてきた。チューター会開催の他、定期的なメール配信や情報提供を中心にその時々学生の希望に応じて活動した。2022年度は、高校生活の大半をコロナ禍の影響を受けた学生を担当した。そのため、学生が大学生活に早く馴染めるように、初回のチューター会において学内ツアーを開催した。また、進級した学生から1年次にチューターを担当していたことを理由に面談を希望された際も適宜対応した。

2) 授業運営補助（神奈川県立保健福祉大学・大学院）	2019年4月～ 2026年3月	学生の授業を円滑に進めるために状況に応じて、助産診断技術学Ⅱ・Ⅲ、性と生殖の生理と病態、助産管理論Ⅰ・Ⅱ、ウィメンズヘルスケア、助産地域母子支援特論、助産基礎特論Ⅰ、助産学特論Ⅰ、リプロダクティブ・ヘルスケアⅠ、リプロダクティブ・ヘルスケアⅡの授業運営補助を担当した。
3) 卒後フォローアップ研修（神奈川県立保健福祉大学）	2022年5月 2023年3月	2021・2022年度の看護学科の卒業生各90名程を対象とした、卒後フォローアップ研修にて、助産技術を復習する機会の提供と技術指導、薬剤の調合と投与に関する指導を2日間担当した。
【臨床での教育経験】（関東労災病院）		
1) 病棟内マニュアル/ケア物品の改訂	2009年4月～ 2014年3月 2016年4月～ 2019年3月	病棟内で統一されていなかった保健指導（各種母親学級、沐浴指導、退院指導、育児指導）のマニュアルの作成と整理を担当した。また、病棟内マニュアルの変更及び使用物品の変更を検討した。
2) 母性看護学・助産学実習の実習指導	2010年4月～ 2014年3月 2016年4月～ 2019年3月	神奈川県内、東京都内、兵庫県内の大学・短期大学・専門学校の臨地実習指導を担当した。学生と共に対象者への看護や助産に携わり、記録への助言や日々の振り返り、カンファレンスを担当した。
3) 新人助産師/看護師の实地指導者	2010年4月～ 2012年3月	産婦人科混合病棟の新人助産師/看護師の实地指導者として、7名の新人教育に携わった。教育担当者に相談しながら、新人教育の日案・週案・月案を立案した。また、臨床実践に関する実施指導・評価を行い、他の職員への新人教育の進捗を共有した。
4) 既卒助産師/看護師の教育担当者	2013年4月～ 2014年3月	産婦人科混合病棟のチームサブリーダーとして、既卒助産師/看護師の指導を担当した。週案・月案を立案し、臨床実践に関する指導・評価を行った。
5) 新人助産師/看護師の教育担当者	2016年4月～ 2018年3月	産婦人科混合病棟の教育担当者として、8名の新人教育に携わった。部署の教育方針の立案、新人研修や教育会議の企画運営を担った。また、日々の臨床実践に関する指導・評価を行った。 病院の教育担当者としては、院内およびテルモ研修センターでの病院全体の集合研修の企画運営、担当者会議での教育内容の検討等を行った。
6) デス・カンファレンス・症例検討会の開催	2018年4月～ 2019年3月	産婦人科混合病棟のチームリーダーとして、スタッフの経験が将来的に看護として活かすことを目指し、症例検討会を開催した。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許		
1) 看護師免許	2008年5月	第1470062号
2) 助産師免許	2008年5月	第122584号
3) 保健師免許	2008年5月	第159308号
4) 新生児蘇生法「専門」コース修了	2009年7月	各種疾病を有する重症新生児を取り扱う専門職を対象とし、気管挿管や薬物療法などの高度な手技もしくはその知識を含む新生児蘇生法を修得することを目的とした研修を修了した。
5) 新生児蘇生法「専門」コース最終更新	2025年7月	上記内容最終更新

6) アドバンス助産師	2020年12月	一般社団法人日本助産評価機構によって、助産師実践能力習熟段階レベルⅢの水準に達していることを認証された。
7) 実習指導者養成教育（看護）修了	2012年11月	厚生労働省の「保健師助産師看護師実習指導者講習会実施要綱」に基づき実施される240時間の研修を修了した。
2 特許等		なし。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 新型コロナウイルス感染症対策に係る保健所支援	2021年2月～ 2022年3月	「新型コロナウイルス感染症対策に係る保健所支援のための人材確保」に協力した。神奈川県庁、鎌倉保健福祉事務所、横須賀市保健所において、療養者カルテの作成、電話での在宅療養者支援、重症者に関する医師との調整、カルテ整理、集団検査準備、公文書発送手続き等に関する業務を担当した。
2) 新型コロナウイルス感染症対策に係るワクチン集団接種支援(学内)	2021年6月7月	神奈川県立保健福祉大学において実施した、集団ワクチン接種の運営に協力した。具体的には、ワクチンの投与、ワクチン接種後の体調不良者の対応に関する業務を担当した。
4 その他		
【委員会活動】（神奈川県立保健福祉大学）		
1) 設備・備品担当委員会	2019年4月～ 2021年3月、 2022年4月～ 2025年3	実習室に保有する物品のリスト整理と実習室の整備を中心に活動した。また、必要物品の購入や保有物品の点検、各実習準備室や看護共同研究室の不要物品の廃棄などの管理業務を行った。 新型コロナウイルス感染症が蔓延し休講していた時期に看護学科では、他領域に先立ち助産学実習を開始していた。そのため、臨床で行っている新型コロナウイルス感染症対応についての情報提供を行い、入構規制後の実習室の使用方法についての検討をした。入構規制により、学生による実習室の整備や清掃作業が行えない際には代行した。 2022年度は、委員長として、委員の取りまとめをした。通常業務に加え、財務課との備品廃棄の調整やカーテンメンテナンスを業者に委託することへの交渉、大型プリンターの使用マニュアルの作成をした。
2) 看護学科実習室の什器更新担当	2019年4月～ 2024年3月	実習室の什器更新の窓口を担った。物品の選定や学科内の担当教員、財務課、業者等と交渉を行った。これまでに沐浴槽、タイル、パーテーション、収容棚、会議用機の修繕や更新をした。
3) リプロダクティブ・ヘルスケア/助産学領域業務	2019年4月～ 2026年3月	領域会議の議事録作成、試験監督、試験問題の統合作業や誤字脱字チェックなどの試験問題作成補助、物品管理、会計、非常勤教員への事務対応、授業準備補助、助産学生の対応などの業務を全般的に担っている。また、領域紹介のSNS配信用の写真撮影や記事の作成をした。
4) 看護学科助教業務	2019年4月～ 2026年3月	人間総合科目の試験監督や式典の準備・運営、健康診断の学生誘導を担当した。また、助教連絡係としては、教職員と助教間の調整役を担った。

5) 学生進路支援	2019年6月～ 2026年3月	これまでに学生53名の就職または進学希望先へ提出する願書記載指導や模擬面接に応じた。なお、対応した全ての学生が希望先から内定を得ている。
6) 特別選抜・編入学試験	2019年11月～ 2026年3月	毎年、面接誘導係と会場の設営と現状復帰の役割を担っている。廊下待機係不在の際には、受験生や会場の不測の事態への対応をした。2020年度以降は、新任教員へのオリエンテーションや他学科の教員や事務局との調整をする役を担いながら運営している。
7) 卒業・修了式／入学式実行委員	2019年12月～ 2021年4月	学生への配布物の準備や事務局との連絡調整を中心に式典の運営を担当した。会場の視察や当日の動線の検討などをした。
8) 大学入学共通テスト	2020年1月～ 2026年3月	これまでに、医務室担当業務と試験室監督者を担当した。また、会場設営や復元作業も担っている。
9) 学科学生委員会	2020年4月～ 2022年3月、 2023年4月～ 2026年3月	1～4年次全ての学年のクラス担任を経験した。その中で学年別オリエンテーションの運営、学生の個別面談、相談メール対応等を実施した。希死念慮がある学生等、多くの支援が必要な学生に対して、他の教員や学生相談室と連携を図りながら対応した。 国家試験対策担当として、学生に対するオリエンテーション、模擬試験の運営補助の他、成績不振者に関しては、定期的に状況確認や学習支援などの個別対応も実施した。2022年1月からは、12月の模擬試験で「努力圏内」及び「D判定以下」の学生に対して、自己学習会場の提供と複数回の模擬試験の企画と運営、学習状況の定期的な確認と助言や指導をした。その結果、国家試験の合格率は100%であった。 学生委員として、各学年の学年別オリエンテーションや新入生交流会/卒業を祝う会の準備や運営、全学年共通オリエンテーション資料（学生生活やビジネスメールの作成方法等社会人基礎力に関する資料）の改定、健康診断の学生誘導を担当した。担任の業務量や準備の進捗に合わせて資料作成を代行した。また、委員会開催に必要な次第や議事録の作成、看護学科の教員への議事録配信の役割を担った。また、開学初となる看護学科の卒業生動向調査の実施と報告をした。
10) 大学什器プロジェクト委員	2020年11月～ 2022年3月	開学以来初めての什器更新に向けてプロジェクトチームが立ち上がり、メンバーに選出された。会議への参加、意見聴取や他大学・企業への視察、教員からの意見集約を通して、検討した。なお、メンバーには学生は所属していないため、アンケートから看護学科の学生の意見が反映されるように工夫した。
11) 看護学科親睦会係	2021年4月～ 2022年3月 2025年4月～ 2026年3月	歓迎会や送別会等のイベントの企画と運営、献花や贈り物の手配、会計を担当し、看護学科の教員間の交流の機会を設けた。
12) 学科実習委員会	2021年4月～ 2026年3月	所属領域の実習委員として連絡調整係と領域別実習要項の改定の役割を担った。委員会では、実習依頼文書係として実習計画の立案や実習依頼に向けた調整、実習病院との連絡係、実習の手引き・要項の取りまとめと発注係、実習連絡会の企画と運営係、実習用携帯の運用係、領域別実習の運営係、一般財団法人 日本看護学教育評価機構の審査受審に向けた報告書作成係を担当した。また、「神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科実習連絡会設置要綱」の作成にも携わった。
13) 看護教育評価に関するワーキンググループ	2022年12月～ 2023年3月	設備備品担当委員会の代表として活動した。実習室に関する物品管理状況や使用規定に関する資料の洗い出しを行った。

14) 看護学科広報係	2025年4月～ 2026年3月	看護学科のSNSの運用に関わる，記事の作成や依頼，SNSの管理を担当している．
【社会貢献活動】		
1) 神奈川県立保健福祉大学助産学生主催母親学級世話人	2019年4月～12月	助産学生が主催する横須賀市在住の妊婦を対象とした母親学級の企画・運営の窓口教員として支援した．参加者申し込みフォームの作成および管理，参加申し込み者への対応，横須賀市との調整役を担った．なお，現在は新型コロナウイルス感染症の影響を受け，横須賀市との協催は中止となっている．
2) 神奈川県立保健福祉大学 リプロダクティブ・ヘルスケア/助産学領域定例研究会 幹事	2019年5月～ 2020年3月	主に教職員や卒業生，近隣の周産期関連施設のスタッフ等を対象とした研究会の運営をした．広報・会計・ゲストスピーカーの補助を中心に活動した．現在は新型コロナウイルス感染症の影響を受け，活動を中止している．
3) 神奈川県立保健福祉大学オープンキャンパス運営	2019年8月～ 2026年3月	妊婦体験，赤ちゃん抱っこ体験等の小児およびリプロダクティブ・ヘルスケア領域の体験ブース，学内ツアーブースの担当として，ボランティア学生の指導や来場者対応をした．また，放映動画を作成した．2020年度には，新型コロナウイルス感染症の影響で例年通りの開催ができなかったため，実行委員としてオンラインでの開催に向けた，企画や動画作成等に取り組んだ．
4) 神奈川県立保健福祉大学大学祭運営	2019年8月～ 2026年3月	神奈川県立保健福祉大学の大学祭において，学生が運営するプチ・ナースステーション（来場者のバイタルサインズの測定，手洗い体験，妊婦体験，赤ちゃん抱っこ体験等の実施）の企画運営を支援した．
5) 横須賀市立の中学校への「いのちの学習」教育媒体貸し出し窓口	2020年1月～ 2026年3月	横須賀市立の中学校4校への「いのちの学習」に使用する，健康教育媒体の貸し出し窓口を担った．その内1校では，当日の運営補助を担った．また，毎年「いのちの学習」の様子を関係領域に報告している．
6) 神奈川県立保健福祉大学卒業生コロナ禍応援メッセージプロジェクトサポーター	2021年1月～5月	新型コロナウイルス感染症が流行する中，現場で奮闘している卒業生に向けたコロナ禍応援メッセージ動画の作成のため，動画撮影と編集を担当した．
7) ヒューマンサービス研究会 シンポジスト	2022年10月	シンポジストとして，第12回ヒューマンサービス研究会に登壇し，ヒューマンサービスの実践をテーマに口演した．なお，口演内容はヒューマンサービス研究会の会誌である「ヒューマンサービス12」の27～31頁に掲載されている．
8) 横浜市立の小学校での「いのちの授業」担当	2023年7月～ 2026年3月	小学5年生の全児童とその保護者，近隣校の養護教諭を対象とした「いのちの授業」の企画と①へのその緒と胎盤のはたらき，②赤ちゃん（胎児）が生まれてくる力とお母さんが産む力，③産声についてのお話と，赤ちゃんのお世話体験（抱っこ，おむつ替え，更衣）を担当している．
9) 第1回ヒューマンサービス学会実行委員	2023年7月～11月	第1回ヒューマンサービス学会の実行員として学術集会の企画運営をした．
10) 日本母性衛生学会市民公開講座の開催	2023年10月～ 現在に至る	日本母性衛生学会の広報渉外担当の幹事として，市民公開講座の企画と運営を担当している．
11) 第2回ヒューマンサービス学会実行委員	2024年9月～11月	第2回ヒューマンサービス学会の実行員として学術集会の企画運営をした．
12) 第3回ヒューマンサービス学会実行委員	2025年9月～11月	第3回ヒューマンサービス学会の実行員として学術集会の企画運営をした．

13) 神奈川県立保健福祉大学親睦会実行委員	2025年9月～ 2026年1月	大学全体の教職員の交流をはかることを目的とした親睦会の実行委員と担当した。		
【研究活動に関する助成金の獲得】				
1) 助産師教育における大学から大学院への教育課程の移行に伴う課題—教育課程の移行手続きに関与した教員の認識—	2019年4月～ 2020年3月	神奈川県立保健福祉大学看護学科の共同研究の助成金として、200千円を獲得した。研究代表者として、結果は第35回日本助産学会学術集会にて発表した。研究代表者：瀬谷絵莉佳 研究分担者：吉田安子、谷口千絵、村上明美		
2) 助産学生が看護師資格を有することに対する臨床指導者の認識	2020年4月～ 2021年3月	2020年度神奈川県立保健福祉大学奨励研究B助成金として344千円を獲得した。研究代表者として、結果は第62回日本母性衛生学会学術集会にて発表した。研究代表者：瀬谷絵莉佳 研究分担者：村上明美、谷口千絵		
3) 今後求められる助産学実習指導に関する研究	2022年4月～ 2023年3月	2022年度神奈川県立保健福祉大学奨励研究B助成金として531千円を獲得した。結果は博士論文としてまとめ、1編は「母性衛生」に掲載済みである。研究代表者：瀬谷絵莉佳		
4) 神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科卒業生の動向調査	2024年4月～ 2025年3月	神奈川県立保健福祉大学看護学科の共同研究の助成金として、200千円を獲得した。結果は看護学科科目調整会議で報告し、今後学会発表と報告書の作成をする予定である。研究代表者：瀬谷絵莉佳 研究分担者：高橋奈津子、高橋佐和子、佐々木杏子、森朱輝、中山直子		
5) 助産学生が分娩介助中の母子に緊急対応が必要となった状況における実習指導指針の開発	2025年4月～ 2028年3月	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）の若手研究の助成金として4810千円を獲得した。研究は進行中である。研究代表者：瀬谷絵莉佳		
6) ヒューマンサービスをミッションに掲げた神奈川県立保健福祉大学の教育が学部生の専門職としての実践力に与える影響：専門性の深化と多職種連携の視点から	2025年4月～ 2026年3月	神奈川県立保健福祉大学の令和7年度保健福祉大学学長推薦研究の助成金として499千円を獲得した。研究は進行中である。研究代表者：池田公平 研究分担者：瀬谷絵莉佳、福岡梨紗、岸川学、肥田直人		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 看護実践のための根拠がわかる母性看護技術第3版	共著	2022年 9月	瀬谷絵莉佳. (2022). 第Ⅱ章 妊娠期のアセスメントとケア 1妊娠初期の妊婦ケア 事例への看護の適応, 第Ⅱ章 妊娠期のアセスメントとケア 2妊娠中期の妊婦ケア 事例への看護の適応, 第Ⅱ章 妊娠期のアセスメントとケア 3妊娠末期の妊婦ケア 事例への看護の適応. ©北川眞理子, 谷口千絵, 蔵本直子, 田中泉香(編), 看護実践のための根拠がわかる 母性看護技術 第3版 (pp. 32-36, 72-74, 87-90). 東京：メヂカルフレンド社.	看護学生を対象とした母性看護技術に関するテキストである本書において、「第Ⅱ章 妊娠期のアセスメントとケア 1妊娠初期の妊婦ケア 事例への看護の適応」、「第Ⅱ章 妊娠期のアセスメントとケア 2妊娠中期の妊婦ケア 事例への看護の適応」、「第Ⅱ章 妊娠期のアセスメントとケア 3妊娠末期の妊婦ケア 事例への看護の適応」の執筆を担当した (pp. 32-36, 72-74, 87-90). まず、読者が身近に感じられる事例を作成した。そして、提示した事例に対して、事例に出会った際の看護師の思考や当該事例の看護問題、看護計画等を理念と照らし合わせながら考えることが出来るようにした。
(学術論文)				

1 初対面の助産師学生に受け持たれた産婦の経験：大学学士課程の分娩介助実習から	単著	2016年 3月	神奈川県立保健福祉大学大学院2015年度特別研究論文（修士） 瀬谷絵莉佳. （2016）．初対面の助産師学生に受け持たれた産婦の経験：大学学士課程の分娩介助実習から．神奈川県立保健福祉大学大学院2015年度特別研究論文（修士）	本研究は、神奈川県立保健福祉大学大学院2015年度特別研究論文（修士）として取り組んだ。 本研究では、分娩期に初対面の大学学士課程の助産学生に受け持たれた7名の産婦の経験を明らかにした。質的記述的デザインを採用し、半構造化面接を実施し、質的帰納的に分析したところ、3つのカテゴリーと11のサブカテゴリーが抽出された。 この経験では、産婦ははじめ、【自己の出産に臨みながら学生の学びに協力する】ためだけに学生に受け持たれたが、【学生から出産のケアを受ける】なかで、学生を産婦の出産の介助者の一員として認識するようになった。 産婦は学生との関わりを深めるなかで、【学生とともに特別な出産をする】ことで、産婦の出産に必要な、重要な存在として学生を価値づけていったことが明らかになった。 本人担当分：研究の着想・計画立案・データ収集・データ分析・成果発表・論文執筆
2 初対面の助産学生に受け持たれた産婦の経験	単著	2021年 7月	母性衛生 瀬谷絵莉佳. （2021）．初対面の助産学生に受け持たれた産婦の経験．母性衛生．62（2），363-371．（査読あり）	本研究では、分娩期に初対面の助産学生に受け持たれた産婦の経験を明らかにした。質的記述的デザインを採用し、分娩介助実習において初対面の助産学生に受け持たれるという経験をした7名の産婦に対して半構造化面接を実施し、質的帰納的に分析した。 その結果、3つの【カテゴリー】と8つのサブカテゴリーを抽出した。産婦は【ためらいながらも学生の学びに協力しようと決める】ことから実習が開始され、次第に【学生の行為を窺いながらも受け入れるようになる】。そして、産婦は学生との関わりを深めるなかで【学生は自分のためだけに存在する人だと認識が変わる】という経験をしていたことを明らかにした。 本人担当分：研究の着想・計画立案・データ収集・データ分析・成果発表・論文執筆
3 助産師教育課程における助産学実習の特徴 助産師以外の資格取得に関わる専門職教育と比較して	単著	2023年 4月	母性衛生 瀬谷絵莉佳. （2023）．助産師教育課程における助産学実習の特徴～助産師以外の資格取得に関わる専門職教育と比較して～．母性衛生．64（1），96-102．（査読あり）	本研究では、8つの医療系専門職の教育を比較し、助産学実習の特徴を明らかにした。学修の規定について記載されている資料を抽出し、実習指導に関することを中心に助産師教育と他の専門職教育の修業要件を比較した。 その結果、看護基礎教育修了という実習生的前提条件があること、実習単位の割合が多いこと、実習の内容と回数に規定があること、資格取得前の学生が侵襲を伴う技術を実施すること、単独で実施できることを目標とする技術があること、実習前能力の客観的評価制度がないという6つの助産学実習の特徴を明らかにした。 本人担当分：研究の着想・計画立案・データ収集・データ分析・成果発表・論文執筆

4 今後求められる助産学実習指導の在り方に関する基礎研究	単著	2024年 3月	神奈川県立保健福祉大学大学院2023年度特別研究論文（博士） 瀬谷絵莉佳. (2024). 今後求められる助産学実習指導の在り方に関する基礎研究. 神奈川県立保健福祉大学大学院2023年度特別研究論文（博士）	本研究は、神奈川県立保健福祉大学大学院2023年度特別研究論文（博士）として取り組み、次に紹介する 3 つの研究で構成した. [研究 1:助産師教育課程における助産学実習の特徴 ～助産師以外の資格取得に関わる専門職教育と比較して～]では、臨地実習を取り入れている助産師を含む 8 つの医療系専門職の教育を比較し、助産学実習の特徴を明らかにすることを目的とした.学修規定に関する資料を用いて、実習指導に関することを中心に助産師教育と他の専門職教育の修業要件を比較した. [研究 2:重症新生児仮死が予測される状況におけるチーム・ダイナミクスに対する認識の比較 ～分娩介助者が助産学生か助産師かの違いから～]では、重症新生児仮死が突然予測される状況でのチーム・ダイナミクスについて、直接分娩介助者が助産学生の場合と助産師の場合とでの医療職の認識の差を明らかにすることを目的とした.産科医、小児科医、助産師、看護師に対して、無記名質問紙調査を実施した.23 施設の 155 名から回答が得られ、直接分娩介助者が助産学生である場合と助産師である場合の認識の比較には、両項目への回答があった 135 件を分析対象とし、McNemer-Bowker 検定を用いた. [研究 3:胎児機能不全のために緊急帝王切開となる産婦を受け持つ助産学生を担当する実習指導助産師の思考]で は、胎児機能不全のために緊急帝王切開となる産婦を受け持つ助産学生を担当していることに関連して生じた実習指導助産師の思考を明らかにすることを目的とした.助産学生と共に受け持つ母子が胎児機能不全を理由に緊急帝王切開に至る際に、手術室入室まで助産学生がその場面に存在した経験がある助産師 5 名に対して、半構造化面接を実施した.分析は、構造分析とテーマ分析を組合せたナラティブ分析の手法を用いた. 【研究結果】 3 つの研究結果を以下に記す. まず、助産学実習には、看護基礎教育修了という実習生の前提条件があること、実習単位の割合が多いこと、実習の内容と回数に規定があること、資格取得前の助産学生が侵襲を伴う技術を実施すること、単独で実施できることを目標とする技術があること、実習前能力の客観的評価制度がないという 6 つの特徴があることが明らかになった. 続いて、重症新生児仮死が予測される状況下では、直接分娩介助者の違いにより、チームの特性とチームのプロセスに関する 10 項目についての認識に差が生じることが明らかになった.すなわち、直接分娩介助者が助産学生の場合は、助産師の場合に比べて、チームの特性とチームのプロセスに関するチーム力が低下すると認識されており、チーム・ダイナミクスに課題があることが明らかになった.
------------------------------	----	----------	--	--

				そして、胎児機能不全のために緊急帝王切開となる産婦を受け持つ助産学生を担当する実習指導助産師の思考は、3つのテーマと9つのサブテーマで構成されており、胎児の心拍数が低下していることに気づいた実習指導助産師は、【学生が受け持つ母子の安全を優先】し、真っ先に胎児の健康状態悪化への初期対応にあたることを考えた。次第に胎児の心拍数が少し回復し始めると、【胎児の健康状態が不安定な中での学生の居場所の提供】を、そして、学生が受け持つ産婦の分娩方針が緊急帝王切開に確定すると、【緊急帝王切開に向けて学生の思いを汲んだ実習指導】をしようと思いを巡らせていたことが明らかになった。 本人担当分：研究の着想・計画立案・データ収集・データ分析・成果発表・論文執筆
(その他) 1 初対面の助産師学生に受け持たれた産婦の経験～大学学士課程の分娩介助実習から～	共著	2017年3月	第31回日本助産学会学術集会（於 あわぎんホール） ◎瀬谷絵莉佳，村上明美，谷口千絵． （2017）．初対面の助産師学生に受け持たれた産婦の経験 大学学士課程の分娩介助実習から．日本助産学会誌．30（3），539．	本研究では、分娩期に初対面の看護師資格を持たない助産学生に受け持たれた産婦の経験を明らかにした。質的記述的デザインを採用し、分娩介助実習において初対面の助産学生に受け持たれるという経験をした7名の産婦に対して半構造化面接を実施し、質的帰納的に分析した。 その結果、3つの【カテゴリー】と11つのサブカテゴリーを抽出した。産婦ははじめ、【自己の出産に臨みながら学生の学びに協力する】ことを考え、学生に自らの出産を学びの機会として提供しようという態度であった。産婦は【学生から出産のケアを受ける】なかで、次第に学生を出産の介助者の一員として認識するようになった。しかし、学生は必要なケアを提供されないこともあった。次第に【学生とともに特別な出産をする】ようになった産婦は、遠慮なく学生にケアを要求するなど、学生を出産における重要な存在として価値づけるようになったことが明らかになった。 〔発表者〕瀬谷絵莉佳，村上明美，谷口千絵 本人担当分：研究の着想・計画立案・データ収集・データ分析・成果発表
2 助産師教育における大学から大学院への教育課程の移行に伴う課題 教育課程の移行手続きに関与した教員の認識（国内学会発表）	共著	2021年 3月	第35回日本助産学会学術集会（於 オンライン） ◎瀬谷絵莉佳，吉田安子，谷口千絵，村上明美．（2021）．助産師教育における大学から大学院への教育課程の移行に伴う課題 ―教育課程の移行手続きに関与した教員の認識―．日本助産学会誌．34（3），319 - 320．（査読あり）	本研究では、大学から大学院への助産師教育課程の移行手続きに関与した教員の視点から、当該教育課程の移行に伴う課題を明らかにした。質的記述的デザインを採用し、2007年から2018年の間に大学から大学院への助産師教育の教育課程の移行手続きに関与した4名の研究参加者に1時間程度の半構造化面接を実施し、研究参加者ごとに課題を抽出した。 その結果、助産師教育の大学から大学院への移行に伴う共通した課題は、「教員の不足」「大学のカリキュラムとの差異をつけた大学院教育の質の担保」「関係機関からの理解」「受験生の獲得」「学生の特性やレディネスの違いに対する対応」「助産関連科目の配置」に関することであることを明らかにした。 また、全てに共通ではないが「研究の到達目標の設定」「養成人数の減少」

3 助産学生が看護師資格を有することに対する臨床指導者の認識（国内学会発表）	共著	2021年 9月	第62回日本母性衛生学会学術集会（至るオンライン） ◎瀬谷絵莉佳, 村上明美, 谷口千絵. （2021）．助産学生が看護師資格を有することに対する臨床指導者の認識．母性衛生．62（3）, 314.（査読あり）	「学部受験者数への影響」「学部教育停止時期の決定」「学生募集に関する要項の決定」に関する課題が存在し、「研究の到達目標の設定」では、修士論文が課題研究かの位置づけが、カリキュラム構成で重要とされていることが明らかになった。 〔発表者〕瀬谷絵莉佳, 吉田安子, 谷口千絵, 村上明美 本人担当分：計画立案・データ収集・データ分析・成果発表 本研究では、臨床指導者が助産学実習を指導するにあたり、助産学生が看護師資格を有している／有していないことをどのように認識しているかを明らかにした。質的記述的デザインを採用し、助産学実習において看護師資格を有する学生と有していない学生の両方を指導した経験のある関東圏内の病院勤務助産師5名を対象に、1時間程度の半構造化面接を実施し、内容分析を行った。 その結果、臨床指導者は「助産学生の看護師資格の有無はどちらでも構わない」または「助産学生の看護師資格の有無についてはどちらが良いとも言えない」と認識していた。臨床指導者は助産学生が、a看護師資格を有していない、b看護師資格は有しているが臨床経験を有していない、c看護師資格を有しかつ臨床経験も有している、いずれの状況なのかに応じて、その助産学生のレディネスを指導する過程で見極めながら個別に対応していることを明らかにした。 〔発表者〕瀬谷絵莉佳, 村上明美, 谷口千絵 本人担当分：研究の着想・計画立案・データ収集・データ分析・成果発表
4 重症新生児仮死が予測される状況におけるチーム・ダイナミクスに対する認識の比較 ～分娩介助者が助産学生か助産師かの違いから～	単著	2023年10月	第37回日本助産学会学術集会（於 聖路加大学） 瀬谷絵莉佳. （2023）．重症新生児仮死が予測される状況におけるチーム・ダイナミクスに対する認識の比較 ～分娩介助者が助産学生か助産師かの違いから～．プログラム番号：010-1（査読あり）	本研究では、全国の364施設に無記名質問紙調査の実施を依頼した。対象は、産科医、小児科医、助産師、看護師とした。対象者には、児頭排産後に突然、「胎児心拍数波形のレベル分類」でレベル5を示す胎児機能不全が生じたと状況を仮定した上での回答を求めた。「全くそう思わない」から「とてもそう思う」の7件法で回答を求め、「そう思わない」、「どちらでもない」、「そう思う」の3件法に変換して分析をした。分娩介助者が学生である場合と助産師である場合の認識の比較には、両項目への回答があった135件を分析対象とし、McNemer-Bowker検定を用いた。 チームの特性とチームのプロセスに関する19項目において、分娩介助者の違いによる認識を比較した結果、10項目で有意な差を認めた。チームの特性に関しては、「チームメンバーに一体感がある（$p=.007$）」等3項目で、分娩介助者が学生の場合は「そう思う」と回答した者の割合が分娩介助者が助産師の場合より少ないことが明らかになった。

5 胎児機能不全のために緊急帝王切開となる産婦を受け持つ助産学生を担当する実習指導助産師の思考	単著	2024年10月	第65回日本母性衛生学会学術集会（至るシーガイアコンベンションセンター） <u>瀬谷絵莉佳</u>. (2024). 胎児機能不全のために緊急帝王切開となる産婦を受け持つ助産学生を担当する実習指導助産師の思考. 母性衛生. 65 (3), 166. (査読あり)	また、チームのプロセスに関しては、「全体の動きを把握しているチームメンバーがいる (p=.019)」等7項目で、分娩介助者が学生の場合は「そう思う」と回答した者の割合が分娩介助者が助産師の場合より少ないことが明らかになった. 本人担当分：研究の着想・計画立案・データ収集・データ分析・成果発表 本研究では、胎児機能不全のために緊急帝王切開となる産婦を受け持つ助産学生（以下、学生）を担当していることに関連して生じた実習指導助産師（以下、指導者）の思考を明らかにした. 助産学実習で学生と共に受け持つ母子が胎児機能不全を理由に緊急帝王切開に至る際に手術室入室まで学生がその場面にいた経験がある助産師5名に半構造化面接を実施し、ナラティブ分析をした. その結果、指導者の思考は3つの【テーマ】と9つのサブテーマで構成されていた. 胎児の心拍数低下に気づいた指導者は【学生が受け持つ母子の安全を優先】し、胎児の健康状態悪化への初期対応にあたった. 産婦への初期対応をする中で胎児の心拍数が少し回復し始めると、次第に【胎児の健康状態が不安定な中での学生の居場所の提供】を考え、学生を気に掛けるようになった. そして、産婦の分娩方針が緊急帝王切開に確定したことで【緊急帝王切開に向けて学生の思いを汲んだ実習指導】をしようとし、最後まで産婦を受け持ちたいという学生の指導にあたっていたことが明らかになった. 本人担当分：研究の着想・計画立案・データ収集・データ分析・成果発表
6 神奈川県立保健福祉大学 保健福祉学部 看護学科 卒業生の動向調査	共著	2025年11月	第3回ヒューマンサービス学会学術集会（至る神奈川県立保健福祉大学） ◎瀬谷絵莉佳, 佐々木杏子, 高橋佐和子, 中山尚子, 高橋奈津子, 森朱輝 (2025). 神奈川県立保健福祉大学 保健福祉学部 看護学科 卒業生の動向調査. 第3回ヒューマンサービス学会学術集会講演抄録集, 28 (神奈川県立保健福祉大学看護学科1～18期卒業生動向調査収録)	本研究では、看護学科卒業生全員を対象に、本学在学 本研究では、2023 年度までの神奈川県立保健福祉大学看護学科卒業生を対象に、WEB無記名自記式調査を実施し、教育への満足度、卒業後のキャリアの概要を明らかにすることを目的とした. その結果、538 人（回収率：57.4%）から回答を得た. 入学年度別の比較には、入学年度が未回答の者 51人を除き、487 人（有効回答：90.5%）を分析対象とした. 卒業後に経験した就職先としては、病院が最も多く、居住地は、73.4%が神奈川県内に居住していた. 一方で、同窓会の加入者は22.1%にとどまっていた. 卒業生の中で修士の学位を持つ者は 28 名で、博士の学位を持つ者は 7 名であった. また、認定看護師や専門看護師、公認/臨床心理士などの資格取得や被災地支援・海外支援など、卒業後に幅広く活躍していた. 本学に対する満足度は全体的にどの年代の卒業生からも高い評価が得られ、看護学科のディプロマ・ポリシー策定前の卒業生であっても、現行の DP に準じた能力をおおむね修得しているとの自己評価が得られた. 本人担当分：研究の着想・計画立案・データ収集・データ分析・成果発表

7 【助産師の腕がため されるとき!無痛分娩の リアルを知りたいQ&A21】無 痛分娩 周辺状況のリア ル 初学者・アドバンス 助産師国家試験に無痛分 娩に関連する問題が出題 されたと聞きましたが、 実際にどんな問題が出 ましたか?(解説)	共著	2026年2月	◎瀬谷絵莉佳, 山田加 奈子. (2026). 【助産師の腕がためさ れるとき!無痛分娩の リアルを知りたい Q&A21】無痛分娩 周 辺状況のリアル 初学 者・アドバンス 助産 師国家試験に無痛分娩 に関連する問題が出題 されたと聞きました が、実際にどんな問題 が出ましたか?(解 説). ペリネイタルケ ア. 45 (2), 177- 181.	助産師および助産学生を中心とした周産 期に関する雑誌の特集記事「助産師の腕が ためされるとき!無痛分娩のリアルを知りた いQ&A21」において、助産師国家試験におけ る無痛分娩に関する出題についての執筆を 担当した. 具体的には、第 108 回助産師国 家試験の無痛分娩に関する問題は、硬膜外 麻酔を受けた初産婦の事例を基に出題され たこと. 麻酔の効果範囲の評価、胎児心拍 異常、産後出血、血腫の鑑別やその対応に 関する知識が問われたことを出題問題への 解説を中心とした内容を記載した.
---	----	---------	--	---

- 1 この書類は、学長（高等専門学校にあっては校長）及び専任教員について作成すること。
- 2 医科大学又は医学若しくは歯学に関する学部若しくは学部の学科の設置の認可を受けようとする場合、附属病院の長について
もこの書類を作成すること。
- 3 「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。
- 4 「氏名」は、本人が自署すること。

教 育 研 究 業 績 書

令和 8 年 6 月 21 日

氏名 松浦 尚子

研 究 分 野	研究内容のキーワード	
基礎看護学	基礎看護技術演習，評価、学校看護師	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
(1) 国家試験対策における e ポートフォリオの導入	2015 年 4 月～現在	国家試験対策のため，e ポートフォリオを活用し，学生の目標を明確にし，モチベーションを低下させず国試に向かわせ合格に導いた。
(2) 基礎技術演習へのルーブリックの導入	2017 年 4 月～2020 年 3 月	基礎看護学方法論Ⅳ（診療の補助技術）」（2 年次配当，半期，必修科目，2 単位）において，基礎看護技術演習でルーブリック評価を導入し，学生のパフォーマンスを含む主体的学修，演習後の課題レポートの基準の明確化を行った。
(3) 人体の構造と機能の授業において書画カメラの活用	2018 年 4 月～2019 年 8 月	「人体の構造と機能Ⅰ，Ⅱ」（1 年次配当，半期，必修科目，各 2 単位）において，栄養の消化と吸収を担当し，書画カメラを活用しながら，消化器の構造と機能の理解を深める取り組みを行った。
(4) 社会福祉学の授業でのグループワークの導入	2018 年 4 月～2019 年 8 月	「社会福祉学」（1 年次配当，半期，必修科目，2 単位）において，前半は講義を行い，後半は問題提起，グループワーク，発表，解説を繰り返し展開した。このことで学生からは，社会福祉がどのように生活と結びついているのかを理解することができたと評価が得られた。
(5) 基礎技術演習での感染対策を行いながらの実施による学びの確保	2020 年 5 月～2021 年 3 月	「看護技術演習Ⅰ」（1 年次配当，半期，必修科目，2 単位）において，演習は学年を 4 分割し，感染対策を講じながらすべての演習単元を実施し，「より良い」を深めることができた。
(6) 国家試験対策の領域別の講義	2021 年 1 月～現在	奈良学園大学の国家試験の領域別の対策講習において，基礎看護学領域の過去 10 年間の国家試験問題から出題基準別に出題傾向を分析し講義を行った。
基礎看護技術Ⅰ・Ⅱ、ヘルスアセスメント看護技術の基礎Ⅰの講義・演習	2021 年 4 月～2023 年 3 月	看護技術と思考がつながるように、根拠を考えさせ、なぜその技術が必要なのか、対象者のより良いを考えた時にどのような方法が良いのか考えるような授業を実施した。
(7) 看護技術の基礎Ⅰ・Ⅱ、看護実践プロセスの基盤Ⅰの講義演習	2023 年 4 月～現在	看護技術と思考がつながるように、根拠を考えさせ、なぜその技術が必要なのか、対象者のより良いを考えた時にどのような方法が良いのか考えるような授業を実施している。
2 作成した教科書，教材 特記事項なし		
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
(1) 学生による授業評価アンケート	2019 年前期	令和元年度の学生による授業評価は，5 点満点中、4.0 を上回り平均 4.19～4.7 となっている。
4 実務の経験を有する者についての特		

(1) 奈良県立高田高等学校の学生に模擬授業	2018 年 9 月 28 日	看護師の仕事について
(2) 奈良県立五條高等学校の学生に講義	2019 年 3 月 4 日	高齢者看護について
(3) 大阪市立扇町総合高等学校の学生に模擬授業	2019 年 6 月 24 日	バイタルサインについて
(4) 大阪府立懐風館高等学校の学生に模擬授業	2019 年 7 月 17 日	看護師の仕事について
(5) 奈良県立高田高等学校でフィジカルサポート	2019 年 7 月 19 日	CPR と AED について
(6) 梅花高等学校の学生に模擬授業	2019 年 12 月 12 日	看護師の仕事と看護師になるための高校生活の過ごし方について
(7) 高田商業高校の学生に模擬授業	2021 年 11 月 26 日	自分の身体を知ろう！
(8) 東大阪市立日新高等学校で 3 年次進路探求講座の講師	2022 年 5 月 12 日	看護師に必要な知識
(9) 東大阪市立日新高等学校で 3 年次進路探求講座の講師	2023 年 5 月 11 日	「健康」って何？「コミュニケーション」って何？
5 その他		
(1) 白鳳短期大学総合人間学科看護学専攻における教育実績	2015 年 4 月～2020 年 3 月	成人看護学Ⅳ（慢性期・終末期）、成人看護学Ⅴ（看護過程）、成人看護学実習Ⅰ（急性期・周手術期）、成人看護学実習Ⅱ（慢性期）、人間学研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、卒業研究Ⅱ、看護基礎技術演習Ⅰ、基礎看護学方法論Ⅳ（診療の補助技術）、基礎看護学実習Ⅰ、基礎看護学実習Ⅱ、社会福祉学、生体機能学Ⅰ、生体機能学Ⅱの消化器、統合実習を担当した。
(2) 白鳳短期大学総合人間学科看護学専攻における教育実績	2019 年 4 月～2020 年 3 月	白鳳短期大学において国試対策のサブリーダーを担当し、学生を合格へと導いた。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許		
(1) 看護師免許	1988 年 5 月 18 日	登録番号 第 630355 号
(2) 養護教諭Ⅰ種免許状	1995 年 3 月 31 日	登録番号 平 6 養 1 第 2013 号
(3) 保健師免許	1995 年 5 月 12 日	登録番号 第 77561 号
(4) 看護師養成所専任教員資格	2015 年 3 月	
2 特許等 特記事項なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		

(1) 教務部	2015 年 4 月～2020 年 3 月	教務副リーダーとして時間割の調整・変更作業，定期試験の準備，非常勤講師との連絡調整等を行い，授業が円滑に進むよう調整を行った。
(2) 学年のリーダー・サブリーダー	2016 年 4 月～2020 年 3 月	学年のリーダー，サブリーダーを行い，学年での国試対策の企画運営，人間力を高めるための企画，運営等を行った。
(3) 領域でのリーダー	2018 年 4 月～2020 年 3 月	白鳳短期大学で領域のリーダーとして，基礎看護学領域の授業，実習の調整，実習病院への書類の作成，実習グループの構成等を行った。更に実習後の実習発表会の企画・運営を行った。
(4) 学生生活	2020 年 4 月～2024 年 3 月	学生との会話を意図的に持ちながら，学生の変化を感じ取り，必要があればメールでの相談，対面での相談を行っている。
(5) 入試広報	2021 年 4 月～2022 年 3 月	奈良学園大学で入試広報委員として，オープンキャンパスの企画・運営，学校見学の対応，学校パンフレットの構成等を行った。
(6) FD 委員会	2024 年 4 月～2026 年 3 月	
(7) 教務委員会	2026 年 4 月～現在	
4 その他 特記事項なし		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文)				
1 看護技術演習における学生評価の検討	共著	2019 年 1 月	星槎大学大学院教育学研究科 教育学専攻 修士論文	基礎看護学技術演習の評価として，パフォーマンス評価と演習レポートのルーブリック評価を導入しその有用性を検証した。（共著者：松浦尚子、佐藤智彦）
2 基礎看護技術演習における学生の主体的学修の評価に関する検討	共著	2021 年 3 月	医療福祉情報行動科学 研究 2021. Vol18 P99-114	基礎看護技術演習でルーブリック評価を導入し，学生のパフォーマンスを含む主体的学修，演習後の課題レポートの基準の明確化を行った。（共著者：松浦尚子，佐藤智彦）
3 チームビルディングを基盤とした全学合同新入生研修の試み	共著	2023 年	奈良学園大学紀要 2023. 15 巻. P225-232	共著者：服部律子 松岡克典 阿南邦彦 安東雅野訓 川端咲子 松浦尚子 荻布優子 嶋田理博 高橋寿奈 坪内善仁 辻井直幸
4 乳児と母の模擬患者を活用した乳児家庭訪問演習での学生の学び	共著	2024 年 12 月	日本医福祉情報行動科学 11 巻. P49-56	共著者：井上葉子 松浦尚子 西村和子

5 特別支援学校で医療的ケアを行っている看護師の実態と看護師に対する教員・保護者の期待する内容についての文献検討 (その他) 学会発表	共著	2026 年 9 月	医療福祉情報行動科学	特別支援学校で医療的ケアを行っている看護師の実態と看護師に対する教員・保護者の期待する内容についての文献検討を行った。共著者：松浦尚子, 中島栄之介
1 学生の主体性を引き出す有効な教育支援の検討	共著	2022 年 12 月	第 42 回日本看護科学学会	統合実習での実践を振り返り, 教員のどのような支援が学生の主体性を引き出しているかを明らかにしていった。(共著者: 松浦尚子, 西薊貞子, 小林由里)
2 「医療的ケア」が必要な子どもが、より良い学校生活を送るためには一学校看護師の役割についての文献検討ー	共著	2023 年 12 月	第 43 回日本看護科学学会	医療的ケアが必要な子どもがより良い学校生活を送るために看護師に期待されていることは教育の視点から捉えた安全で安心な医療的ケアの実施を行うことであった。その期待に応えるためには何が必要かを明らかにしていった。(共著者: 松浦尚子、中島栄之介)
3 看護専門学校の教員が抱く仕事上の困難感	共著	2024 年 8 月 20 日	第 34 回日本看護学教育学会学術集会	看護教員への支援体制を検討するための基礎資料として、教員の特性や困難感を抱く理由に着目しながら、専門学校に勤務する看護教員が抱いている仕事上の困難感の要因とそれに影響する因子を明らかにした。
4 特別支援学校における医療的ケアの法制度の変遷と看護師に期待される役割の変化	共著	2024 年 8 月 25 日	第 50 回日本看護研究学会学術集会	法制度の整備による、特別支援学校に在籍する医療的ケア児に必要な「医療的ケア」変遷と、学校看護師に期待される役割について整理した。さらに、学校看護師に期待される今後の課題について考察した。
5 基礎看護学実習 I の体験想起を活用した看護技術における学びのアウトプット	共著	2024 年 8 月 25 日	第 50 回日本看護研究学会学術集会	基礎看護学実習 I における学生の体験想起の活用は、後続の授業＜看護技術 I＞でどのように学びのアウトプットにつながるのか明らかにした。
6 汎用的能力の向上を目指す 4 年次科目「統合看護論」演習の授業設計に基づく学びの特徴	共著	2025 年 12 月 7 日	第 45 回日本看護科学学会学術集会	共著者: 小林由里, 西薊貞子, 松浦尚子, 岩本淳子

教 育 研 究 業 績 書		
2026年6月22日		
氏名 泉 抽岐		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
看護学生	看護学生・学習意欲・キャリアレディネス・COVID-19	
性感染症予防対策	包括的セクシュアリティ教育・性感染症予防教育・HIV/AIDS	
小児看護学	シュミレーション・幼児の主導性	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材 *研究協力者として共同で作成		
教育教材DVD 「本気でCONDOMING ～HIV/エイズの予防と最新治療～」	2010年	高校生を対象に、HIV/AIDSの知識やコンドーム装着等の 予防、治療について動画を撮影し教材用DVD作成
DVD「看護職として知っておきたい10のこと」	2012年	看護職を対象に、HIV/AIDSの知識や感染予防、初期対応 等の関わり方についてP.PにてDVD作成
DVD「養護教諭として知っておきたい10のこと」	2014年	養護教諭を対象に、HIV/AIDSの知識や感染予防、生徒と の関わり方についてP.PにてDVD作成
DVD「介護職として知っておきたい10のこと」	2016年	介護職を対象に、HIV/AIDSの知識や感染予防、入所者との 関わり方についてP.PにてDVD作成
かるた製作 色覚特性に配慮したセクシュアリティ教育かるた	2025年	男性を対象に、セクシュアリティや性感染症予防を含 めたおつきあいマナーの内容で、色覚特性に配慮したか るたを製作
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		
職 務 上 の 実 績 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許	1994年 5月	看護師免許
	2003年12月	大阪府看護教員養成講習会修了
	2008年 6月	社団法人日本アロマ環境協会 アロマセラピー1級
	2009年 1月	認定看護管理者制度教育課程 ファーストレベル
	2024年 7月	文部科学省後援 色彩検定2級 ・2級色彩コーディネーター資格
	2024年 7月	文部科学省後援 色彩検定UC級 ・UC(色のユニバーサルデザイン)アドバイザー資格
	2025年10月	一般社団法人日本思春期学会 性教育認定講師資格
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項	*研究協力者として共同で実践	
府立高等学校 出前講義（ファシリテータ）	2010年 ～2020年	高校生に対して性教育・おつきあいマナーの講座
介護施設 出前講座（ファシリテータ）		介護職員に対してHIV/AIDS基礎知識・感染予防の講座
HIVサポートリーダー養成研修 （企画・運営補助・ファシリテータ）		看護師に対して、セクシュアリティ・HIV/AIDSの知識や 現状・感染予防の学びをワークショップを入れながら研 修を実施（2日間）
色のユニバーサルデザイン研修	2026年1月	ユニバーサルデザインのボランティア活動をおこなう こうべ市民福祉振興協会メンバーに対して、色のユニ バーサルデザインについて研修を実施
4 その他		

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
1 2 3 :				
(学術論文)				
1. 赤ちゃん人形を「抱く・あやす」という体験から得られる学び (査読付)	共著	2019年	人と環境Vol. 12 : 1-8	中野幸子、泉拙岐 ＜要約＞ 高大連携教育の一環で医療看護コースの女子高校2年生33名対象に、赤ちゃん人形を「抱いてあやす」という体験後の学びを調査して、赤ちゃんと母子への関心度をはかることを質的に分析した。母性意識の高まりと共に、シュミレーション教育の効果が得られたことを述べた。 ＊データの収集、まとめ、表の作成。及び、考察内容の検討。
2. COVID-19 感染拡大における看護学生の学習意欲とキャリアレディネスに関する研究 (査読付)	単著	2023年	人と環境Vol. 16 : 21-33	＜要約＞ COVID-19感染拡大 が看護学生の生活様式、食生活、学習意欲、キャリアレディネスにどのように影響を及ぼしているかを調査し、実習経験が看護学生の学習意欲、キャリアレディネスに及ぼす影響を明らかにした。今後の看護の学びやキャリアレディネスの向上にむけて、課題や適切な介入方法を述べた。
3 :				
(その他)				
1. 介護保険施設における感染症予防研修：全職員への出前講座企画	共同筆頭	2015年11月	第29回日本エイズ学会 東京 学会発表。口演	◎泉拙岐、佐保美奈子、西口初江、豊島裕子、井田真由美、井内公仁子、熊谷祐子、岡本友子、白阪琢磨 ＜概要＞ 介護保険施設の全職員に対する感染予防研修を施設で実施するための研修プログラムの目的と内容、今後の展望について発表した。
2. 成人看護学急性期実習における看護技術教育の検討	共同	2016年8月	第47回日本看護学会 一看護教育。滋賀 学会発表。口演	古藤みどり、泉拙岐 ＜概要＞ 成人看護学急性期実習で実際に実施する看護技術を精選し、学内の演習につなげていく看護技術教育を検討し発表した。
3. 大阪市A地区における看護職のH I V研修の検討	共同	2016年11月	第30回日本エイズ学会 東京 学会発表。示説	佐保美奈子、安井典子、三澤朋洋、泉拙岐、西口初江、堀有優美、田中彩水、岸本晶愛、白阪琢磨 ＜概要＞ 訪問看護など地域で働く看護師、介護職を対象に、大阪市A地区でHIV研修を実施し、調査研究から内容検討と今後の課題を発表した。
4. 介護保険施設における感染症予防研修：全職員への出前研修実践報告	共同	2017年11月	第31回日本エイズ学会 大阪 学会発表。示説	井田真由美、佐保美奈子、西口初江、泉拙岐、豊島裕子、白阪琢磨 ＜概要＞ 介護保険施設の全職員に対して、感染症予防研修を実践し、調査研究から内容検討と今後の課題を発表した。
5. 幼児の主導性を引き出す関わり方	共同	2021年7月	第31回日本小児看護学会 千葉 オンライン発表。示説	中野幸子、泉拙岐 ＜概要＞ モンテッソーリ教育を理念とした保育実習施設で学んだ看護学生の振り返りを通して、学生が小児看護において主導性を引き出す関わり方や意識、学びを明らかにし発表した。
6. コロナ感染拡大下の乳幼児のマスク着用の現状 ―保育実習後の調査から―	共同	2022年7月	第31回日本小児看護学会 福岡 学会発表。示説	中野幸子、泉拙岐 ＜概要＞ 小児看護学実習の保育実習後、コロナ感染拡大下の乳幼児のマスク着用の現状と子どもの発育への影響について学生の認識を明らかにし発表した。
7. 色覚特性に配慮したセクシュアリティ教育かるたの開発	共同筆頭	2025年8月	第44回日本思春期学会 北海道 学会発表。口演	泉拙岐、佐保美奈子 ＜概要＞ 男子を対象に、色覚特性に対する技法を用いて、セクシュアリティ教育「おつきあいのマナーかるた」を開発した目的、内容及び今後の展望について発表した。

別記様式第4号（その2の1）		
(用紙 日本産業規格A4縦型)		
教 育 研 究 業 績 書		
2026年 6月19日		
氏名 森本 早紀		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
文化人類学	医療、臨床看護、実践、組織文化、ケア	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
事例を用いた学習。ロールプレイの活用を採り入れた授業設定【成人看護学講座】	2019年1月から 2020年3月まで	梅花女子大学 専門科目 急性期看護援助論 3学年（通年・必修）3単位80名 成人看護学実習1（急性期）を担当し、手術療法によって生じる生体機能の変化と生活の変化を理解し、問題解決に向けたアプローチ方法を学ぶことを目的とした。実習と関連付けられた本科目では、事例展開を通して根拠をもった看護過程の展開について学習を進めた。学生は作成した看護問題と解決策のシナリオをもとに、根拠に基づく理解をさらに深められるよう、学生の主体的な行動を引き出す目的でアドバイザーとしての配慮を行った。
ロールプレイを採り入れた看護技術演習【基礎看護学講座】	2022年4月から 現在	奈良学園大学 専門科目 基礎看護学技術演習Ⅱ 2学年（前期・必修）2 単位88名と 1 学年看護技術の基礎Ⅰ（後期・必修）2 単位94名を担当した。基礎的な看護技術を身体の構造や科学的根拠に基づいて理解し、個別具体的な患者に即したアプローチ方法を学び実践できることを目的とした。学生が座学での学びと事前学習をもとに、主体的な行動と思考を獲得することを目的に指導を行っている。
2 作成した教科書、教材		
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
新人看護師への教育指導（大阪大学医学部附属病院）	2016年4月から 2018年3月まで	新人看護師の教育支援担当として、学習支援計画を立て、個別の状況に応じた支援を行った。
記録委員（大阪大学医学部附属病院）	2018年4月から 2019年3月まで	電子カルテシステムを活用した看護の質の向上を目的に所属部署の現任教育に取り組み、実践現場における教育支援を行った
広報委員（奈良学園大学）	2022年4月から 2025年3月まで 2026年4月から 現在	奈良学園大学保健医療学部看護学科において、広報委員として学科の広報活動、支援を行った。
学生生活委員（奈良学園大学）	2025年4月から 現在	奈良学園大学保健医療学部看護学科において、2年生の学年担当アドバイザーとして学生の学修環境を整えるための支援と情報共有について検討している。
5 その他		
第10回 日本移植・再生医療看護学会学術集会運営委員	2014年11月	学会進行や関連な議論のための運営サポートを行った。
日本看護研究学会第50回学術集会 運営委員	2023年4月から 2025年3月	学会運営における会計はじめ企画準備、運営に携わった。
日本WHO協会 機関誌『目で見えるWHO』編集委員	2020年4月から 現在	機関紙『目で見えるWHO』の編集を担当し、国際保健に関する情報発信につとめている。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許		
	2013年3月27日 2013年4月8日	第1666099号 看護師 第215339号 保健師

2	特許等			
3	実務の経験を有する者についての特記事項			
4	その他			
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(学術論文)				
1「看護師の医療機器をめぐる聴覚に関わる実践の人類学的研究」	単著	2024年3月31日	年報人間科学 第45号	3人の看護師を対象にインタビュー調査を行い、得られた語りを分析した。語りから、新人看護師は様々な場所から発生する音を聞くこと自体に困難さがあり、看護師は常に不特定多数の人や場所から発生する音を認識していることを指摘した。また、音は単一では知覚されておらず、様々な情報と組み合わせて判断されることが明らかとなった。病棟の空間的な把握や看護の対象となる複合的な要素の絡まりを追求していく必要があることを示唆した。
(その他)				
1「健康ってなあに？：ヘルスとウェルビーイングの原点を探る」	単著	2021年1月	目で見えるWHO 第75号	社団法人日本WHO協会で運営されている関西グローバルヘルスの集いオンラインセミナーで行われた発表および議論についてまとめ、報告した。
2 Attuning to Noise in a Hospital Ward	単著	2025年6月	(Web媒体) Anthropology news: American Anthropological Association	臨床現場では様々な音がシグナルとなって看護師の実践に生かされる。医療機器などの音は患者の状態を察知するための重要な手がかりとなり得る。さらに、足音や物音のようなノイズとなるような音でさえ、病棟の状況を認識するためのシグナルとなりうる。看護師は病棟の中で認識する様々な音についての報告をエッセイ形式で報告した。
(学会発表)				
1「ワールドカフェ形式による双方向のオンラインイベント開催の試み」		2021年3月6日	日本国際保健医療学会 第39回西日本地方学会	オンラインセミナー開催の事例報告により、効果的な意見交換について検討を図り、闊達な議論展開となるセミナープログラムについて多くの知見を深めた。
2「看護師の聴覚をめぐる実践についての人類学的研究」		2023年3月5日	日本文化人類学会近畿地区研究懇談会2022年修士・博士論文発表会	日本の看護師が臨床現場でどのように音を聞き取り、実践を展開しているのかを明らかにし、看護の対象とするものについて検討した。大阪大学人間科学研究科に提出した修士論文をもとに発表を行った。
3「朝鮮学校における『保健室』に関する研究—設置・運営過程のコンフリクトに着目して—		2023年6月10日	異文化間教育学会第44回大会	日本の学校保健法が適応されない朝鮮学校の保健室設立と運営に関わるアクターとコンフリクトについて検討し発表した。
4「『音を聞く』という実践」		2024年6月16日	日本文化人類学会第58回研究大会	臨床現場における医療機器の音をきいて活動する看護師の実践を、インタビューデータから紐解き、分析した。
5「看護師が病棟で聞き取る音と実践の関係—病棟看護師の語りの分析から—」		2024年8月25日	日本看護研究学会第50回学術集会	看護師が病棟で聞き取っている様々な音とその音を契機に展開される実践との関係について検討した。

別記様式第4号（その2）		
（用紙 日本産業規格A4縦型）		
教 育 研 究 業 績 書 年 月 日 氏名 井上 理子 印		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
看護学	精神看護学	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1) 京都府看護専修学校 外部講師 精神看護学の講義	2011年4月～ 2019年3月	専門必須科目 2単位 2年生 「精神看護学方法論Ⅱ」 精神疾患患者の心理や対応の方法について、臨床における事例を基に、テキストには記載されていないリアリティをもって理解できるように工夫した。
2) 京都府医師会看護専門学校 専任教員 (1) 精神看護学領域担当 (2) 事例を用いた精神看護学演習 (3) オンラインによる実習 【精神看護学実習】 (4) 動画を用いた学内実習 【精神看護学実習】 (5) 臨地実習 【基礎看護学実習Ⅰ】 【基礎看護学実習Ⅱ】 【成人看護学実習Ⅰ】 【成人看護学実習Ⅱ】 【成人看護学実習Ⅲ】	2020年4月～ 2023年3月	専門必須科目 2単位 2年生 「精神看護学方法論Ⅱ」 フロイトの「自我とイド」を用いて、学生自身の日常的に起こり得る人間関係を事例としながら人間の心理について理解しやすいように工夫した。 専門必須科目 2単位 2年生 「精神看護学方法論Ⅲ」 オレム-アンダーウッド理論を基に、統合失調症患者の事例を用いて、精神科看護はマニュアル化できないことを踏まえ、主体性をもってオリジナリティに富んだ看護計画を立案できるよう工夫した。 専門必須科目 3年生 新型コロナウイルス感染症拡大のため臨地実習は中止となりオンラインでの実習を行うことになった。1グループ6人として、全員に異なる事例を渡し、臨床経験を生かして、患者の思考や特性について伝え、グループメンバー全員が6症例について学べるよう工夫した。 専門必須科目 3年生 新型コロナウイルス感染症拡大のため臨地実習は中止となり学内で実習を行うことになった。精神に障害をもつ当事者の語る動画やバーチャルハルシネーションの動画を用いて、患者の病的体験をリアルに感じ取れるよう工夫した。 専門必須科目 1年生 医療者としての自覚が芽生えるように、患者へのかかわり方、看護師としての視点の持ち方について一緒に考えられるように工夫した。 専門必須科目 2年生 学生と共に患者への看護援助を行う機会を多く作りテキスト通りにならない援助の実感を理解できるようにかかわった。また、看護過程の展開を初めて経験するため、記録だけに追われず、常に患者の状態に視点を置くことを意識できるように工夫した。 専門必須科目 2年生 学生の理解度を確認しながら、情報収集から看護計画の立案、実施、評価について、可能な限り時間をかけて看護過程の思考をもてるように工夫した。 専門必須科目 3年生 短期間で患者の状態が変化する周手術期や急性期の看護については、振り返りの時間を確保し、患者に起きている状況から必要な援助までの理解を深められるよう工夫した。 専門必須科目 3年生 神経難病や慢性的な経過を示す疾患では、一緒にベッドサイドに行くことで、身体状態だけでなく心理状態や家族への支援も含めて学べるように工夫した。

【精神看護学実習】		専門必須科目 3年生 実習先によって、学べる内容が大きく異なるため、不足する部分について、具体的な事例に基づいて説明をしながら学べるように工夫した。また、カンファレンスでは、精神科医療における身近な社会問題について考えられるよう工夫した。
【在宅看護学実習】		専門必須科目 3年生 施設内だけでなく地域で暮らす当事者の支援をするために、家族も含めたアセスメントや社会制度にも着目できるように工夫した
【統合実習】		専門必須科目 3年生 自身の臨床経験を通して、多重課題に対応しながら、就職後のリアリティショックを軽減できるように臨床現場の実践を学べるよう工夫した。
3) 奈良学園大学 保健医療学部 看護学科 (1) 看護技術の基礎Ⅰ	2023年4月～ 2025年3月	講義で生理的メカニズムや看護技術の基本的なことを教示し、技術演習では事例を用いて手順の作成から学生自身で作成してもらい、単なる技術の習得でなく思考しながら実施できるように工夫した。
(2) 看護技術の基礎Ⅱ	2023年4月～ 2025年3月	医療に関する技術であることから、講義で生理的メカニズムと留意点について教示し、臨床での様々な場面について伝えることで、現場の状況を可能な限り想像しながら実施できるよう工夫した。
(3) 卒業研究Ⅱ	2023年4月～ 2025年3月	学生の示すテーマに沿って、文献検索、分析、論文作成までに指導計画を立て、説明と実施を繰り返しながら研究について一連のプロセスを理解できるよう工夫した。
(4) 基礎看護学実習Ⅰ	2023年4月～ 2025年3月	初めて医療機関に白衣を着用しての実習であることから、医療職者を目指すうえで患者を捉える視点や社会の中で看護師の担う役割について助言することで理解できるように工夫した。
(5) 基礎看護学実習Ⅱ	2023年4月～ 2025年3月	初めて患者を受け持ち看護過程の展開を学ぶ実習であることから、学生と共に患者にかかわり、記録の指導同時に一緒に思考を整理し、看護過程のプロセスに応じた思考ができるように工夫した。
(6) 統合実習	2023年4月～ 2025年3月	学生自身の掲げたテーマに基づき、臨地実習よりも詳しく、広い視点をもって主体的に学べるように、承認をしながら可能な限り手を貸さず、自律できるように工夫した。
4) 京都翔英高等学校 看護科 (1) 精神保健	2025年4月～ 2026年3月	高校2年生という多感な時期の学生を対象にしていることもあり、精神の健康や健康を阻害する要因について、家庭や学校の問題を事例として扱い、自分事として捉えられるよう工夫している。また、主体的に取り組めるように、個人学習、グループワーク、発表の形態での授業進行を取り入れている。
2 作成した教科書、教材		
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項 長岡ヘルスケアセンター 2009年4月～2015年3月：病棟管理職 2015年4月～2020年3月：看護部管理職 (看護教育・院内感染対策)	2009年4月～ 2020年3月	【看護研究】 看護部教育委員および看護教育専門師長として、職員の研究的思考の定着と研究方法の能力向上を目的として、文献検索、研究計画書作成、実施段階、論文作成、発表スライド作成に至るまで、毎年2～3病棟の指導を行っていた。 【緊急時の対応】 患者の急変対応を確実にできることを目的とし、各病棟の研修委員会を中心に病棟で発生しそうな事例の台本を一緒に作成して、シミュレーション形式で実施。全病棟の振り返りには必ず参加し、できなかったことを前向きに捉えるように伝え、不足している点の学習の必要性について自覚してもらえるように工夫していた。

	2011年4月～ 2020年3月	【フィジカルアセスメント】 患者の身体症状の把握と異常の早期発見・早期対応ができるようになることを目的とし、バイタルサイン測定の正しい方法や正常と異常の捉え方、検査値の見方、精神科で起こり得る身体症状と対応方法（水中毒、イレウス、リフィーディング症候群など）、基本的な身体症状についての観察項目や看護について、身近な患者の事例を用いながら理解しやすいように工夫していた。 【CVPPP】 CVPPP施設認定トレーナーとして、院内で発生する暴力について、防止対策と発生時の対応ができることを目的とし、リスクアセスメントとディエスカレーションについては講義、ブレイクアウェイとチームテクニクスについては演習を交えて、実践に活用できるよう工夫していた。 【医療安全研修】 病院の管理職者として院内における医療事故を防ぐことを目的として、薬剤投与に関するインシデント、アクシデントの事例に基づいて、誰でもミスをするを前提に、チームで薬剤過誤を起こさない方法のロールプレイを取り入れて実践に活かせるように工夫していた。 【認知症対応研修】 認知症患者の急増に伴い、認知症患者に適切な対応ができる看護職者の育成を目的として、認知症の種類、症状について講義し、具体的に安心感を与えられるような声掛けの方法を演習に取り入れたり、認知症高齢者虐待についてグループワークすることで、倫理観をもって対応できる職員になってもらえるよう工夫していた。 【実習指導者研修】 看護部教育専門師長として、実習学生への指導と共に職員自身の実践している看護の振り返りと指導能力の向上を目的とし、事前に指導者から学生指導についての悩んでいることについてアンケート調査により研修テーマを決定したうえで、グループワークなども取り入れながら、指導者のメンタルケアもできるよう工夫していた。 【プリセプター研修】 看護部教育専門師長として、新人職員の指導をすることによって、プリセプター自身の指導力向上と看護師として成長することを目的とし、自分自身の新人の頃を思い出してもらいながら、共に成長することを自覚できるように工夫していた。 【看護補助者研修】 看護部教育専門師長として、看護補助者の能力向上を目的として、役割についての説明、おむつ交換や食事介助の方法についての演習、看護者への不満なども聞き取り、看護職者との円滑な関係を構築できるように、チームの一員として自覚してもらえるよう工夫していた。 【診療報酬研修】 看護部管理職者として、職員が経営的な視点をもてることを目的として、診療報酬の仕組み、看護職者にかかわる診療報酬について、実務上注意しなければならないことなどを、事例を用いて理解できるように工夫していた。 【院内感染対策研修】 院内感染対策専門師長として、職員の感染症の持ち込みやクラスター発生を未然に防止するための能力向上を目的として、正しい手指衛生の方法、個人用防護服（PPE）の着脱方法、嘔吐物の処理方法などについて、各部署のICT委員に指導し、講師を担えるようになってもらい、病棟での指導を継続できるよう工夫していた。
3) 院内感染対策専門師長としての院内講義	2015年4月～ 2020年3月	
5 その他		
京都府看護協会：研修責任者研修受講	2015年6月～ 2016年2月	看護部の教育担当責任者として、成人教育、コーチングとティーチングの違い、看護職者の教育計画、研修企画について学び、立案した計画を発表した。
大学教授による看護研究勉強会（院内）	2017年4月～ 2020年3月	聖カタリナ大学の軸丸清子教授から、看護研究の基礎（文献検索、研究計画書作成、論文作成）と質的研究（インタビュー方法、分析方法）について学び、指導の下で研究を実施した。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		

事項		年月日	概	要
1 資格, 免許 准看護師免許 看護婦免許証 CVPPP（包括的暴力防止プログラム）施設認定 トレーナー 奈良学園大学 看護学研究科 看護学専攻 修士 高等学校助教諭免許 看護		1996年3月 2001年4月 2011年2月 2023年3月 2025年4月	第15188号 第1129001号 令七高臨第六一号	
2 特許等 特記事項なし				
3 実務の経験を有する者についての特記事項 保健所、近畿厚生局の監査対応 精神保健福祉法実地指導対応 マニュアル作成 保健所との連携 実習受け入れ調整		2009年4月～ 2020年3月 2009年4月～ 2020年3月 2015年4月～ 2020年3月 2015年4月～ 2020年3月 2015年4月～ 2020年3月	看護部管理職者として、監査時に必要な資料準備、当日の対応をしていた。 職員が監査の内容と日々の業務の必要性について理解できることを目的として、日頃から看護基準や診療報酬に関する事項について説明していた。 看護部管理職者として、監査時に必要な資料準備、当日の精神科医の診察の対応をしていた。 職員が精神保健福祉法の理解と法律を遵守した医療を提供できることを目的として、主に、入院形態、行動制限、設備といった点について、根拠を伝えながら、理解しやすいように説明していた。 看護教育専門師長として、職員の看護技術の習得や統一を目的として、変更した看護技術についてのマニュアル追記修正や、新たに取り入れる看護技術についてのマニュアルを作成していた。 院内感染対策専門師長として、職員が正しい感染対策を行えるように、マニュアルの更新や新たな感染症のマニュアルを作成していた。 院内感染対策専門師長として、早期に感染拡大を防止するために、感染症（活動性結核者の発生、インフルエンザや原因不明の感染症）がクラスター化した際、毎日データ表を用いて保健所に感染者報告を行いながら、検査の実施や現場の感染対策の確認や指導を実施していた。 看護部教育専門師長として、実習学生が学びやすい環境を提供するために、看護専門学校3校、看護大学1校の実習を受け入れの日程や人数の調整を行っていた。すべての学生に対して病院オリエンテーションを実施し、実習指導者会議には参加していた。学校側からの病院に対する苦情の窓口となり、必要な場合は病棟師長の指導を行っていた。反対に、学生の問題についても、病棟から聞き取り、学校側に伝える役割を担っていた。	
4 その他				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 2 3 :				
(学術論文) 1. BSCの実践としての看護能力向上への取り組み	共著	2016年9月	日本医療バランスト・ スコアカード研究 Vol.13 No.1 September 2016 P104- 106 (査読あり)	BSCの戦略目標として、「職員基礎教育の徹底」を掲げ、看護部教育委員が、病棟への出張研修という病棟現場の教育を具体的なアクションプランとして実施。研修を継続していくなかで、有効性を実感した職員から依頼を受けるようになったことから、プランの効果について考察した。 ◎井上理子, 中北勝彦, 木下大作, 谷口光二

2. 日本の精神医療の実態とその課題に関する文献的考察 -イタリア及びイギリスの精神医療との比較を通して-	単著	2024年3月	京都女子大学大学院 発達教育学研究科博士 後期課程研究紀要	精神医療の実態を記した希少な書籍を用いて、日本の精神医療の実態を示すとともに、イタリア及びイギリスといった既に精神医療を変革させた国との比較を通して日本の精神医療の課題について考察した。 ◎井上理子
3. 精神科認定看護師の視座から捉えた精神科訪問看護師に求められる能力	単著	2024年12月	医療福祉情報行動科学研究(査読あり)	精神科認定看護師の資格を取得している希少且つ主体的に学ぶ姿勢をもつ精神科訪問看護師にインタビューを行い、地域精神医療の充実を図るうえで重要な役割を担う精神科訪問看護師に求められる能力について明らかにした。 ◎井上理子
4. 精神病院に長期入院経験のある患者と家族のライフストーリーに関する事例研究―地域生活の継続から脱施設化へ―	単著	2025年3月	京都女子大学大学院 発達教育学研究科博士 後期課程研究紀要	精神病院長期入院経験者とその家族にインタビューを行い、その語りをライフヒストリーックな存在論を基に分析し、精神病院での入院生活や地域生活の実態について明らかにし、脱施設化に向けた社会の在り方について考察した。 ◎井上理子
(発表)				
1. 認知症高齢者へのバックハグクッションを用いたBPSD改善効果の検証	共著	2018年6月	第53回 京都病院学会	認知症高齢者は、BPSDによって在宅や施設での療養が困難となっている。空間認識力の低下している認知症高齢者に背後から抱きしめるような形態のクッション（バックハグクッション）を使用し、唾液アミラーゼ活性の変化を明らかにして、BPSDへの効果を検証した。 辻 堪子, 奥田安子, ◎井上理子
2. 手指衛生に着目した「おむつ交換」の定着に向けて	共著	2019年4月	日本感染管理ベストプラクティス”Saizen”研究会 第14回セミナー	認知症高齢者の入院が急増するなか、おむつ交換を要する人も増えている。そのため、自己流で実践しているおむつ交換方法の現状を把握し、手指衛生を重要ポイントとした手順の作成と教育後の実践方法の変化について明らかにした。 明石香代子, 坂中邦彦, ◎井上理子
3. 精神科慢性期閉鎖病棟の日常生活にかかわる看護者の思いとアドボカシーの実践	共著	2019年9月	日本精神科看護協会 京都支部 研究発表会	精神科病院では、患者に対して、未だに支配・管理的な対応が続いている。そこで、精神科慢性期閉鎖病棟に勤務する看護者の語りから、患者の日常生活にかかわる看護における看護者のアドボカシーに関する思いと実践を明らかにした。 井上理子, 武井恵美, 奥田友子, 小谷洋司
4. 看護管理者が経験を通して認識している精神科看護の魅力とその伝え方に関する研究	共著	2020年6月	第50回 日本看護学会 (論文集 看護管理 50巻 P19-22)	精神科病院における看護者の確保は切実な問題となっている。看護管理者が精神科看護の魅力について経験を通してどのように知覚・認識し、後輩看護者にどのように伝えているかを明らかにした。 谷口光二, ◎井上理子, 山本由紀, 軸丸清子
5. 言葉で意志を伝えることのできない認知症高齢者の行動の意味を模索するプロセスに関する研究	共著	2020年6月	第55回 京都病院学会	認知症の進行により言葉で意志の伝えることのできない認知症高齢者の行動について、多職種で仮説を導き出し、その仮説に沿ったケアを実践しながら、行動の意味を模索するプロセスを振り返りった内容を考察した。 上田祐介, 山本智, 山根川裕子, 井上理子
6. 一般病棟で短期入所を利用する重症心身障害児への看護の実情	共著	2024年8月	第50回 日本看護研究学会	一般病棟で重症心身障害児の受け入れを行っている看護師にインタビューを実施し、受け入れが進まない現状の要因について明らかにした。 森口千夏, 井上理子, 松浦純平
7. 基礎看護学実習Ⅰの体験想起を活用した看護技術における学びのアウトプット	共著	2024年8月	第50回 日本看護研究学会	大学1年生が基礎看護学実習Ⅰの実習を想起しながら記載した基礎看護技術の演習後のレポートをデータとして実習での学びを演習に生かしているかを明らかにした。 小林由里, 西菌貞子, 松浦尚子, 井上理子, 森本早紀

8. 精神病院長期入院患者のライフストーリーに関する事例研究 —長期入院患者の脱施設化に向けて— (その他) 1 2 3 :	単著	2024年8月	第9回 基礎教育保障学会	約50年間もの長期間精神病院に入院をしている当事者にインタビューを実施し、長期入院の実態と長期入院患者の現状を明らかにし、日本の精神医療の脱施設化への課題について考察した。 <u>井上理子</u>
(注) 1 この書類は、学長（高等専門学校にあつては校長）及び専任教員について作成すること。 2 医科大学又は医学若しくは歯学に関する学部若しくは学部の学科の設置の認可を受けようとする場合、附属病院の長についてもこの書類を作成すること。 3 「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。 4 「氏名」は、本人が自署すること。				

教 育 研 究 業 績 書				
2025年 5月 12日				
氏名 浅野 千晶				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
臨床看護学/ライフサイエンス		クリティカルケア/周術期看護		
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項				
事項		年月日	概 要	
1 教育方法の実践例				
2 作成した教科書，教材				
3 教育上の能力に関する大学等の評価				
4 実務の経験を有する者についての特記事項				
看護専門学校での臨地実習		2023年4月 ～2024年3月	基礎看護学実習Ⅰ－1 基礎看護学実習Ⅰ－2 基礎看護学実習Ⅱ 成人老年看護学実習ⅠⅡⅢ 統合実習 精神看護学実習	
大学看護学科での臨地実習		2024年9月 ～2025年3月	成人老年看護学実習ⅠⅡⅢⅣ	
5 その他				
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項		年月日	概 要	
1 資格，免許 看護師免許 集中ケア認定看護師		1999年5月24日	第668474号	
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
4 その他				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 2 (学術論文) 修士論文：ICUに入室した患者がICUでの体験を認知し意味付けsプロセス (その他) 1		2016年3月	神戸市看護大学大学院	予定手術後、ICUに36時間以上入室した5名の患者を対象に、退室後、ICUでの体験について半構造的面接と不安・抑うつ測定を行った質的記述的研究。患者の語りの中でICUでの記憶の欠落や非現実的な体験が語られた。患者は非現実的な体験について自問自答したり他者に語ったりしながらその理由や意味を見出そうとしており、体験を確認し折り合いをつけるために必要なことは「語ること」「他者とのかわり」であった。

教 育 研 究 業 績 書				
令和8 年 6 月 22 日				
氏名 笹木 ひとみ				
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド		
社会医学、看護学およびその関連分野		孤独感 孤立 思春期 対人関係 自殺予防		
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項				
事項		年月日	概 要	
1 教育方法の実践例				
地域看護診断演習		令和6年	大阪市立大学看護学科の教員として地域看護診断の授業を担当した。公衆衛生看護学実習の実習地の地域診断を行い、地域の健康課題を明確にし、健康課題に対する保健事業計画を立案するプロセスについて指導を行った。	
2 作成した教科書、教材				
3 教育上の能力に関する大学等の評価				
4 実務の経験を有する者についての特記事項				
大淀町保健センターでの実習指導		平成30年 ～令和2年	大淀町保健センターにおいて、公衆衛生看護学実習の実習指導を担当した。市町村保健師の役割を学生が理解しやすいように具体を示しながら指導を行った。特に健康づくりのための禁煙対策について、学校や住民と連携した禁煙推進活動での保健師活動の一部を学生に体験する機会を設け学生の理解が深まるように工夫した。	
大学看護学科での臨地実習		令和4年 ～令和6年	大阪市立大学看護学科で公衆衛生看護学の実習指導を行った。	
大学院看護学研究科保健師課程での臨地実習		令和7年	大阪公立大学大学院看護学研究科で公衆衛生看護学の実習指導を行った。	
5 その他				
職 務 上 の 実 績 に 関 する 事 項				
事項		年月日	概 要	
1 資格、免許		平成4年5月 平成10年3月 平成10年6月 平成23年2月 平成23年10月 平成24年1月	看護師免許（第757079） 養護教諭第1種免許状（平9養1第2004号） 保健師免許（第88113号） 健康運動指導士（第21030157号） 禁煙支援士（第11389号） 思春期保健相談士	
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
奈良県市町村看護職員協議会		平成20年 ～平成21年	奈良県市町村看護職員協議会役員として、看護職員の資質向上のための研修会等の企画・運営を行った。	
日本禁煙科学会主催の第132回全国禁煙アドバイザー育成講習会において、行政でのたばこ対策の取り組みについての発表・シンポジスト		平成25年3月	大淀町保健センターでのたばこ対策の取り組みについて発表をし、シンポジウムにおいてシンポジストの役割を担った。	
4 その他				
研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
（学術論文） 家庭内受動喫煙とたばこについての意識に関する研究－奈良県大淀町の小・中学生と保護者を対象にして－		令和4年3月	大阪教育大学大学院 修士論文	大淀町の小中学生のたばこについての意識と家庭内受動喫煙の実態、さらに大淀町の小中学生の保護者の喫煙状況から、家庭内受動喫煙の実態を明らかにすることを目的に実施した。
（その他） 1. 成人式での喫煙率調査からみた小学生の喫煙防止教育の効果についての一考察	共著	令和3年9月	日本禁煙科学会 学術総会	奈良県大淀町で小学6年生及び中学1年生を対象に実施している喫煙防止教育の効果を評価する指標の一つとして、成人式で新成人の喫煙率調査を行った。小学6年生時の喫煙防止教育は、新成人の喫煙率低下に一定の役割を果たした可能性が示唆された。 発表者：笹木ひとみ、高橋裕子他4名

2. A literature review on social isolation and loneliness among child-rearing mothers in Japan		令和7年1月	The International Conference "Triple Burdens of Diseases: Nurse-Led Game Changer to Optimize Outcomes of Care" Thailand	日本における育児中の母親の孤立に関連した研究についての文献的考察を行い、その結果を国際会議でポスター発表をした。 発表者： <u>笹木ひとみ</u> 、横山美江
3. 児童生徒の孤独および社会的孤立の要因に関する文献検討		令和7年9月	日本地域看護学会	児童生徒の孤独・孤立に関連した研究について文献的考察を行い、その結果を学会にて発表をした。 発表者： <u>笹木ひとみ</u> 、横山美江、緒方靖恵

教 育 研 究 業 績 書		
2026年 6月 22日		
氏名 大谷 恵		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
臨床看護学・ジェンダー・生理心理学	LGBT・セクシュアリティ・唾液・コルチゾール・ストレス	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1) 隣地実習指導	2022年5月から 2025年6月	大手前大学にて非常勤助手、常勤助手、TAにて、成人看護学実習（慢性期）、基礎看護学実習Ⅰ（外来）、基礎看護学実習Ⅲ（看護課程の展開）、老年看護学実習、統合看護学実習（成人）を担当し、脳神経外科病棟、回復期リハビリテーション病棟、地域包括ケア病棟、がん専門病院、老人保険施設で実習指導を行ってきた。1クールあたり3～10人の学生の実習指導担当し、基礎看護学実習Ⅲではヘンダーソン、成人看護学実習ではゴードンの看護過程に基づいた指導を行い、コロナ禍においては急な病棟変更、学内実習への変更にも学生が安心して学び、学習到達目標を達成できるよう柔軟に対応し、がんや脳神経外科などの専門病棟へ実習へ行く学生にはそれに即した事前学習の要点の提示をし学習支援を行った。
2) 隣地実習指導	2025年6月から 7月	大阪成蹊大学にて老年・在宅看護実習を担当し、地域で暮らす人の看護過程を展開するうえで、その地域の持つ特性や社会資源にも目を向けられるよう実習指導を行った。
2 作成した教科書、教材 1) 講義用補助教材（一部作成）	2023年5月	慢性看護援助論Ⅱの事例に基づく看護過程の展開において、学生の学習状況に応じてフィードバックの資料を、とくに病と共に生きる患者の折り合いの視点を重視し、一部作成をした。
2) 講義用補助教材（一部作成）	2024年3月	次年度の慢性看護援助論Ⅱで使用するゴードンの看護過程における事例のアセスメントを一部作成した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1) 隣地実習指導における評価 （これまでに担当してきた隣地実習の詳細は、教員個人調書の職歴と、教育研究業績書の教育方法の実践例に記載があるため割愛）	2022年5月から 現在	2022年5月から8月にかけて非常勤として担当した成人看護学領域（慢性期）の実習指導の勤務実績が評価され、2023年1月から2月にかけては基礎看護学Ⅲ・老年看護学の非常勤実習助手を担当し、2024年度からは成人看護学領（慢性期）の助手として採用された。修士へ進学するために退職してからもこれまでの実績が評価され、不定期で成人・基礎看護学領域の実習指導、大阪成蹊大学における老年・在宅看護実習の非常勤助手を担当した。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		なし
5 その他		なし
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格、免許 普通自動車第一種運転免許 看護師免許 修士（看護学）	2005年12月 2008年4月2日 2026年3月18日	第610502937500号 第1433467号
2 特許等		記載事項なし

3 実務の経験を有する者についての特記事項 1) 西陣病院 看護師		2008年4月 から 2009年2月	内科急性期にて看護業務を担当。	
2) 長岡ヘルスケアセンター 看護師		2009年3月 から 2013年12月	認知症閉鎖病棟、精神科外来、男女混合精神慢性期病棟、認知症急性期、ストレスケア病棟にて看護業務担当。	
3) デイサービスセンターやまざと		2014年4月 から 2021年6月	看護業務全般、褥瘡ケア、在宅酸素管理、急変対応、感染管理、服薬管理、居宅訪問、介護職員に対する研修の実施（高齢者に多い疾患、脱水、認知症、皮膚トラブル、指定難病、在宅酸素、感染管理0157、インフルエンザ等、口腔ケア、場面ごとの急変対応、自動血圧計測定の手技）。	
4 その他				
1) まちの保健室ボランティア		2023年4月 から 2024年3月	大手前大学国際看護学部の学生と共に参加し、引率、現場での見守り助言を行った。	
2) 大手前大学国際看護研究所研究集録編集委員会		2023年4月 から 2024年3月	委員会の一員として著者と査読者の仲介を行った。	
3) オーストラリア・アデレード大学より看護学生を受け入れ		2024年2月	大手前大学国際看護学部のアデレード大学より看護学生受け入れプログラムにおいて、副担当として運営全体に携わり、個別プログラムにおいてはオーストラリアの学生が日本文化に親しめるよう書道を担当した。	
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
1				記載事項なし
2				
3				
:				
(学術論文)				
1. コルチゾールとケスラー心理的苦痛スケール（K6）からみたトランスジェンダーをはじめとする多様なジェンダーを生きる人々のストレス状況	単	2026年3月	修士学位論文	トランスジェンダーをはじめとする多様なジェンダーを生きる（Transgender and Gender Diverse：TGD）人々を対象に、唾液コルチゾールとケスラー心理的苦痛スケール（K6）との関連から、そのストレス状況を明らかにすることを目的とした。結果、唾液コルチゾールとK6の関連は明らかにできなかったが、性別について相談できる人の存在が、起床時コルチゾール反応（Cortisol Awakening Response：CAR）において正の相関を示す保護要因（Protective Factors）となっている可能性、加えて睡眠や喫煙について健康課題がある可能性があることが示唆された。
(その他)				
[学会発表]				
1. The learning effects of volunteering for Japanese nursing students.	共	2024年3月	Paper 27th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS)	©Megumi Otani, Keiho Ko, Junko Yamamoto, Takami Yano, Keiko Kumatani, Kozue Yamauchi, Yuka Hirose, Ryotaro Tsuchiya, Naoko Horikawa. 看護学生のボランティア活動による学修効果を明らかにした。

2. Motivations and outcomes of the participation of nursing university students in volunteering at the Local health room	共	2025年2月	Paper 28th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS)	◎Megumi Otani, Junko Yamamoto, Keiko Kumatani, Kozue Yamauchi, Yuka Hirose, Takanori Kawano, Jun Tomioka, Ryotaro Tsuchiya. 看護学生の「まちの保健室」へのボランティア活動の参加動機と成果の関連を明らかにした。
3. コルチゾールとケスラー心理的苦痛尺度 (K 6) からみたトランスジェンダーをはじめとする多様なジェンダーを生きる人々のストレス状況	単	2026年3月	口頭発表 日本GI学会第27回研究大会	トランスジェンダーをはじめとする多様なジェンダーを生きる (Transgender and Gender Diverse : TGD) 人々を対象に、唾液コルチゾールとケスラー心理的苦痛スケール (K 6) との関連から、そのストレス状況を明らかにすることを目的とした。結果、唾液コルチゾールとK 6の関連は明らかにできなかったが、性別について相談できる人の存在が、起床時コルチゾール反応 (Cortisol Awakening Response : CAR) において正の相関を示す保護要因 (Protective Factors) となっている可能性、加えて睡眠や喫煙について健康課題がある可能性があることが示唆された。
[サブリ] 1. Z 世代の学習者が主体的に学習に取り組むための戦略	共	2024年11月	大手前大学 国際看護研究 研究集録 8, 75-80	畠中易子・河野孝典・廣澤有香・大谷恵・土谷僚太郎・和田由里 2年次生を対象にした急性看護援助論Ⅰの講義において、学生の気づきを促し分かるという実感を持ち主体的な学習行動を促すため、アクティブラーニングを取り入れた教授法について一定の示唆が得られたことを報告した。
[啓発冊子] 1. 看護職のための性的マイノリティサポートブック	共	2018年9月	性と生を考える会	性と生を考える会・大谷恵・藤井ひろみ 医療・看護現場で、適切な治療やケアを提供できる事、すべての人の生活や尊厳が守られることを目的として作成。

(注)

- 1 この書類は、学長（高等専門学校にあっては校長）及び専任教員について作成すること。
- 2 医科大学又は医学若しくは歯学に関する学部若しくは学部の学科の設置の認可を受けようとする場合、附属病院の長についてもこの書類を作成すること。
- 3 「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。
- 4 「氏名」は、本人が自署すること。